
GATE 5:CLOSED GATE
ゲート
5.冥門編
自衛隊
彼の地にて、
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス


GATE 5:CLOSED GA
ゲート
5.冥門編
自衛隊
彼の地にて
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス

ゲート ―5. 冥門編―

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

主な登場人物紹介

日本

伊丹耀司（いたみ ようじ）…… 33歳。陸上自衛隊二等陸尉、特地資源状況調査担当。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は生活と趣味のための収入源と割り切っている。

黒川二曹（くろかわ にそう）…… 23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、身長190cmの美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

栗林志乃（くりばやし しの）…… 24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

古田陸士長（ふるた）…… 機関銃手。元老舗料亭の板前。独立開業の費用を貯めるために自衛隊に入隊。ゾルザル軍に潜入し、諜報活動中。

森田総理大臣（もりた）…… 辞任した本位の後を継いで総理大臣に就任する。事なかれ主義者の上に、深く物事を考えている様子が見えない。

嘉納太郎（かのうたろう）…… 日本の外務大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

菅原浩治（すがわら こうじ）…… 外務省のエリート官僚として将来を嘱望されている。官僚トップの座を狙って冷徹な野心家を演じているが、意外にも熱血漢。

梨紗（りさ）…… 伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

望月紀子（もちづき のりこ）…… 日本の住民の性格や気質を調べるために帝国によって拉致されていたが自衛隊によって救出された。

栗林菜々美（くりばやし ななみ）…… 栗林志乃の妹。テレビ局の新人アナウンサー。局のやり方や報道姿勢に疑問を抱く。

古村崎哲朗（こむらざき てつろう）…… テレビ局勤務で報道局一筋のベテラン。世の中の事象に対しては常に批判的な姿勢を貫く。

アメリカ

ディレル…… アメリカ合衆国大統領。『特地』から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

中国

薑徳愁（とう とくしゅう）…… 中華人民共和国国家主席。『特地』に移民を送り出すことによって、利権独占を狙っている。

異世界（特地）

テュカ・ルナ・マルソー …… 165歳（外見は16～17歳）。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。

レレイ・ラ・レレーナ …… 15歳。ヒト種の賢者、魔導師。老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つ。

ロゥリィ・マーキュリー …… 961歳（外見は13歳）。亜神、神エムロイの使徒。異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

ヤオ・ロゥ・デュッシ …… 315歳（外見は20代後半～30代前半）。ボンテージ鎧のよく似合う肉感的な美人ダークエルフ。

モルト・ソル・アウグスタス …… 異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

ピニャ・コ・ラーダ …… 19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。

ゾルザル・エル・カエサル …… 皇帝モルトの長子、皇女ピニャの兄。あくまでも戦争継続を主張し、政権を掌握するや講和に賛成する勢力の弾圧を図る。

ディアボ・ソル・カエサル …… 皇帝モルトの次子、皇女ピニャの兄。皇位の継承を狙っていたが、ゾルザルが政権を掌握すると帝都を脱出し『門』外の諸外国との接触を目論む。

テューレ …… 帝国に侵略された部族を守るために我が身を差し出して奴隷となったが、生き残った同族からは裏切り者とされている。ゾルザルに仕えつつも全てを恨み様々な策謀を巡らす。

シェリー・テュエリ …… 12歳とは思えぬ聡明さを備えた少女。傾きつつあった家を盛り上げるために日本からの外交官である菅原に近付き、次第に恋心を抱く。

ジゼル …… 400歳超（外見は20代前半）。亜神、冥府の神ハーディの使徒。竜人族出身。神官服はフリルたっぷりの白ゴスだが、着崩しているのでいろいろ隠せていない。

ハーディ …… 特地世界の冥府を司る女神。ベルナーゴ神殿に祀られている。銀座に『門』を開いた張本人。

01

陸上自衛隊特地派遣部隊の戦闘・輸送車両の列が長蛇となって、砂利道を進んでいく。
大型トラックの無骨なタイヤが巻き上げる土埃はもうもうと舞い上がり、アルヌスの景色はあたかも紗(うすぎぬ)を被せたように霞んでいた。
肌にじわりと浮き上がってくる汗は埃とともに黒くこびりつき、目も開けていられないほどだ。
だが、その中を進んでいく隊員達の士気は高い。
銃を握る手、前を見据える眦(まなじり)、真っ直ぐに伸びた背筋、半長靴の踵(かかと)が地を踏む時の闊達な歩調。
全てに活気が溢れて、旺盛な意欲が隊員達の五体に充ちていた。
これから挑む戦いが、おそらくは帝国との最後の激突となることを、皆が理解しているのだ。
「これで、戦争も終わる」
「これが終われば、帰れるんだよね」
「きっちりと、とどめを刺してやる」
問えば、それぞれが思い思いの動機を述べるだろう。その全てが、隊員達を戦いに駆り立て、アルヌスの丘は一つの炎となったかのごとき、熱気に包み込まれたのである。

だが、その熱気から取り残されている者がいた。
隊員達の戦意が高まれば高まるほど、彼ら、彼女らは空疎な寂寥感（せきりょうかん）に落ち込んでいく。
まばらにしか客の姿のないＰＸ（駐屯地購買部）の情景は、『門（ゲート）』が閉じられることになったら、このアルヌスの街がどうなるかを、皆に実感させていたのだ。

昼間からカウンターで酒を飲んでくだを巻いているＰＸの猫耳店員のだらしない姿に、料理長は苛立ちを露わにした。
「昼間っから酒なぞ呑みやがって！　メイア、お前暇なのか？」
「今日は非番だニャ。ゆうきゅうきゅうかを消化しないといけないニャ」
カウンターに頬をぺったりと載せた猫耳娘は、耳をぴくぴくと震わせながら答えた。
いつもならお仕着せのメイドドレスを着ている彼女も、今日は私服姿である。
それはこのアルヌスの亜人種に流行している、足を付け根までむき出しにした黒革生地のホットパンツにしっぽ穴をあけたもの。編み上げたサンダルの紐に包まれる美脚と、ふにょふにょと揺れるしっぽの曲線美を周囲に見せつけていた。
上はゆるゆるのチューブトップで、脇や襟が甘いからチラリと中身がこぼれそうである。丈が短く、締まった腰回りを衆目に曝す挑発的な出で立ちだ。
はっきり言って、眩しいほどに艶めかしい。

おかげで食堂の人口密度は、彼女の座るカウンターの周りだけが妙に高くなっていた。
作業員やら隊商護衛の傭兵連中が、彼女のしどけない姿を鑑賞しながら食事を摂ろうと集まっているのだ。
これが他の街で夜の居酒屋ならば、彼女に言い寄ったり、絡んだりする酔客が出て来るところである。だが今は昼間であり、周りに顔見知りしかいないようなこの街ならば、メイアも安心して呑める。だからこその油断が、こんな眼福を周囲の男達に許しているのだ。
だが、料理長は女の泥酔客は好まないという差別的な態度をあからさまにしていた。
「オスの酔っ払いには文句を言わないくせに、それは差別ニャ」
「違う！　こいつは区別って奴だ。女が正体を失ってると良からぬ事を考える奴が出て来てマジで困るんだよ。中途半端に知り合いってのが、かえって始末に悪い。女が徹底的に油断するからな」
料理長はそう言い放つと、隙あらば言い寄ろうと待ち構えている男共を睨みつけて威嚇した。
そしてメイアを諭すような口調へと改めた。
「なぁメイア、折角の休暇なんだ。ちっとは有意義に過ごしてみちゃあどうだ？」
「有意義ってどんなことニャ？」
「例えばだ、部屋の掃除とか洗濯とか、繕い物とかだ。ため込んでたりしないのか？　そんなことをやってりゃ一日なんてあっという間だぞ」
「そんなことは、毎日ちゃんとやってるから、溜まったりしてないニャ」

何気に働き者な娘であると分かる答えである。どうやらメイアは、やらなければならないことを翌日回しにするような性格ではないらしい。

「じゃあ、どこかに遊びに行くとか、誰かと一日おしゃべりをして楽しむとかはどうだ？　いっそのこと、これと決めた男と遊んでもいいんじゃないか？」

周囲にいる男達は、料理長の言葉に一斉に「うんうん」と肯いた。遊び相手に立候補したいのだろう。だがメイアは料理長の提案を一笑に付した。

「このアルヌスで遊びに行くってどこニャ？」

残念ながら、このアルヌスには遊興施設の類はない。ウィンドウショッピングも、売る側である彼女にとってはあまり楽しめるものではない。何しろ仕入れから陳列、棚卸しといった作業の一切を彼女が取り仕切っているのだ。どこにどんな商品があるか見るまでもなく把握している。

「それに、友達と顔を合わせていると面白くない話になってしまうニャ」

ここ最近は、アルヌスの住民が二人以上集まると、『門』を閉じることになったらどうする？という話題になるのだ。『門』が閉じられた後どうなるのか、自分達はどうなってしまうのかという不安が、人々の間に蔓延していた。

「それにあの人はこれから戦いだニャ。それなのに他の男と遊べるほど、ウチは器用になれないニャ……寂しいんだニャ」

「なんだメイア。おまえさん男がいたのか？」

「そういう仲には、まだなってないニャ。ウチが勝手にいいなぁって憧れてるだけだニャ」
「もしかしてニホンの人か？」
メイアは顔を上げてトロンと酔った視線を料理長に向けると、黙ったまま小さく肯いた。
「そ、そいつは……確かに困った話だな」
料理長もそういう話ならば仕方ないかと、ばりぼり後ろ髪を掻く。
暮らしの先行きばかりでなく、その彼氏を失ってしまうことまで思い悩んでいるのだ。極端な話、失業と失恋のダブルパンチだ。この二つが重なったダメージが大きいことは料理長とて理解できる。彼も、職と妻とを一緒に失った経験者だからだ。
「で、その相手は、お前の気持ちを知ってるのか？」
メイアは、突っ伏したまま首を左右に振った。
相手がメイアを憎からず思っているなら、こちらに居残ってくれる可能性もあるのだ。実際に残留要員の募集も始まっており、応募者もそこそこ集まっているという噂だ。例えば、旧第三偵察隊の倉田三曹や、富田二曹が残留すると公言していることは、皆もよく知る話である。
だが、彼らがこの地に残ることを選択したのは、相手との関係が上手くいっているからだ。メイアが一人で燻っていても意味はない。やはり気持ちは伝えなければ、何も始まらないのだ。
「なぁメイア、いっそのこと告ってみちゃあどうだ？　んでもってこっちに残って下さいって頼むんだよ」

だがメイアは目を涙で潤ませると、「そういうわけにはいかないニャ」と唇を尖らせた。
メイアは言った。彼をこの地に引き留めるということは、彼氏に肉親との離別を強いることになるのだと。
『門』を閉めることで懸念される問題の一つに、再開後に起きるであろう時間のズレが指摘されている。こちらでは少ししか時間がたっていなくても、日本側ではどれだけの時間が流れているか分からないというのだ。
下手をするとそれが一生の別れになってもおかしくない。それを恋しい相手に強いることが出来るほど、メイアは身勝手になれないでいた。
「だったら、お前がニホンに行くってのは？」
先日、アルヌス周辺の施政権が日本に移った後、どうなるかという説明会があった。
それによると現段階でこのアルヌスで生活している者の内、希望する者には日本国籍か、永住の許可が与えられる。このどちらを得ても日本で生活することが出来るのだ。
だが、それとてメイアには気安く出来ることではない。見知らぬ土地で暮らすのは、想像以上の困難が待ち受けているのだ。
言葉、習慣、仕事。自衛官達は最初から礼儀正しく振る舞ったから感じなかったが、ジャーナリストとか名乗る連中がやって来た時、彼女達はまざまざと思い知らされていた。
彼らは自分達に、口を利く犬猫を見るような視線を向けていたのだ。もし『門』の向こう側に住

む者の多くがそうならば、かなりの覚悟が必要だ。決心するにしても、まだ成就していない恋心だけを頼りにするのは、あまりにも心許ない。

「仕事をしていれば、変なこと考えずに済むニャ。けど今は暇ニャ。だったら呑むしかないニャ」

メイアはとろんとした瞳でビールのおかわりを要求した。そして食堂で忙しそうに立ち働いているウェイトレス達を眩しそうに眺めた。

「ここは、相変わらず忙しそうでいいニャあ」

「ああ……夜の客は減ったが、昼には影響がないからな。元々ジエイタイの人達は昼飯は自前の食堂で食うからこっちに来ることはない。ま、もうしばらくはこんな感じが続くだろう」

とは言え、『門』が閉じられれば街の存在価値は低下する。人口減少も必至だ。この食堂に来る作業員、隊商護衛の傭兵達、そして大工などの多くが姿を消す。メイア達もまた、配置転換や転勤の覚悟が要求されていた。支店の置かれている帝都や、あちこちの大きな街に移り住むこともあり得るのだ。

「メイア、上手くすれば帝都あたりの支店に移れるかも知れないぞ。こんなチンケな街に比べりゃあ大都会だ、遊ぶ場所にも事欠かない。きっと面白いぞ」

だが、メイアは首を振った。

「ここに比べたら、どんな街でも見劣りするニャ」

「ま、そうだろうな」

料理長もそれを認めた。
よっぽど歴史のある古い街でない限り、幅を利かせているのは大抵がヒト種で、亜人の肩身は狭いのだ。学都ロンデルほどに歴史があればそんなこともないが、あそこまで古い街だと、逆に古くから住んでいる連中の古参意識が鼻につく。
「ウチも食堂に配置転換してもらえばアルヌスから出て行かずに済むのかニャ？　まだ新人を雇う余裕があるみたいだし、ウチもこっちでウェイトレスとして働いていいかニャ？」
メイアの羨ましそうな色を含んだ視線は、慣れない仕事に追い回されている新人ウェイトレスへと向けられていた。
「いや。あれは、そういうのとは違う」
だが答える料理長の顔には、気まずい表情が貼り付けられていた。
新人ウェイトレスと思われた竜人女性をここで働かせているのは、よっぽど彼の意に沿わないことなのだろう。その気まずさをどのように理解したらよいのか分からないメイアは、ただ戸惑ったように首を傾げた。
「……そうなのかニャ？」
「ああ。あれは、借金のカタにただ働きさせているんだ。だから誤解するなよな」
料理長はこの話題はこれ以上続けたくないのか、きっぱり言うと口を一の字に結んだ。

「じぜるさ～ん。これ運んで～」
「は、はひぃ～」
黒ゴス神官服が、暗黒神エムロイに仕えている神官女性の衣装であることはつとに有名である。
だが、それ以上に有名なのが白ゴス神官服である。
この衣装をまとっているのが冥王ハーディに仕える神官であることを知らない者は、特地ではまずいないと考えてもいい。
それは、シスターの衣装を着ている人を見たらキリスト教系の教会か修道院の人かと思い、袈裟を着ている人を見れば仏教の人だと思い、巫女服を着ているのを見れば神道の関係の人だと我々が思うのとほぼ同じであった。
さらに、その白ゴスを着ているのが竜人女性だと聞けば、誰のことと思い当たらない者はまずいない。
そのために、食堂内のテーブルの隙間をあたふたと走り回るエプロン姿のジゼルを見た者は、まるで時が止まったかのように開いた口が塞がらなくなるのだ。
今し方、隊商の護衛任務を終えて帰ってきた狼男系亜人傭兵の二人組も、旅塵を払う前に少しばかり喉を潤そうと食堂に入った途端、あんぐりと口を開いたままの姿で固まった。
「おい、ウォルフ。こ、ここって……いつから、こすぷれ食堂になった？」
「なるほど、これがニホンにあると噂されているこすぷれ食堂か。びっくりしたぜ。さすがアルヌ

ス共同生活組合。ニホンの流行を取り入れるのが早いね。竜人族の女の子探してきて、白ゴス着せるとは、見事としか言いようがない」

目の当たりにした現実を否定できる発想にたどり着いた二人は、安堵のため息をついた。

だが、顔見知りのウェイトレスから「コスプレじゃなくて本物だから、あれ」と言われ、二人は改めて衝撃を受けることとなった。

「じゃ、じゃあ、あれって、本当にベルナーゴ神殿の？」

ウォルフは頬を引きつらせながら、カウンターで呑んでいる顔なじみのドワーフ大工の肩をつついて尋ねた。

するとドワーフは、肯定するように小さく顎をしゃくった。

「で、でもこんなことってあり得るのか？　っていうよりあって良いことなのか？　もし本物なら、あれってジゼル猊下ってことだろ？　か、か、か、神様がこんなところで働いてるなんて！」

彼らにとってそれは、テレビでよく見るアイドルを、ラーメン屋の洗い場で見つけたような気分だったかも知れない。

「別に変じゃないだろう？　ロウリィ聖下だってこの街で働いてるんだぜ」

「ロウリィ聖下はここのお偉いさんじゃないか！　ジゼル猊下がやっているのはおさんどんだぞ。あんな下働きみたいなこと、やらせていいのかよ!?」

「そうは言うがな、こうなったのにもそれなりの深〜い事情があるんだ」

ドワーフは、ビールの入ったジョッキをテーブルに置くと居住まいを正した。
「聞きたいか？」
「あ、ああ。是非」
「あらかじめ言っておくが、こいつは面白い話じゃない。どっちかって言うとこの世の悲哀って言うか、厳しい現実って奴を非常に強く思い知らされる」
傭兵二人は、ドワーフの傍らに腰を下ろすと覚悟を決めたように肯いた。
「いいだろう。なら聞かせてやる」
それは、後の世に長く語り継がれることとなる、『借金をしてはいけない。借金をしたらば亜神であっても働いて返さねばならない』という教訓話であった。

＊　＊

事の起こりを語るには、ジゼルがこのアルヌスの街にやって来たところまで時を巻き戻す必要がある。ジゼルとしては、ハーディから課された宿題を、伊丹やロゥリィ達がどうこなすのかを検分しなければならないから、このアルヌスまで来ることは当然の選択であった。だからアルヌスに向かう空飛ぶ乗り物「ヘリコプター」へと乗り込んだのである。
「あれ、アルヌスに行くんですか？」

伊丹は、何食わぬ顔をして座っている竜人女性に尋ねた。
「ああ、やっかいになるぜ」
「途中で、タンスカという場所に立ち寄りまして、味方の作戦部隊を拾って帰ります。戦闘になるかも知れませんけど、いいんですか？」
「いいっていいって。気にすんなって」
「ならいいですけど」
伊丹もまた、彼女がチヌークに乗り込むことを拒絶することはなかった。
だが、このやり取りがジゼルにささやかな誤解をさせた。伊丹が拒否しなかったからといって、それが彼女にアルヌス滞在中の世話を約束したことにはならないのだが、すっかり客として饗応（きょうおう）を受けられると思い込んでしまったのである。
伊丹が拉致犠牲者の移送やら、学者達の応対に気をとられ、ジゼルのことを考える余裕が少しもなかったことも理由になるかも知れない。アルヌス到着後、一人放置されたジゼルは顎足枕付（あごあしまくら）きの待遇を当然のものとして食堂に赴き、食欲の赴くままにあれこれと注文して飲み食いしてしまったのだ。
満腹になったジゼルは、「はい、ごちそうさん」と幸せな気分で席を立つとウェイトレスに尋ねた。
「オレのねぐらどこ？」
だが、答えの代わりに突きつけられたのは勘定書であった。

「なんだこれ？」
　ウェイトレスは、ジゼルの視線にたじろぎながらも、常日頃から指導されているように会計を明朗なものとすべく質問に対する回答を行った。
「ええと、お客様が飲み食いされた代金の請求です」
「えっ、なんだよそれ!?　イタミの野郎から何も聞いてないのか？」
　何やらトラブルが起きているらしいと聞きつけた料理長が責任者としてやって来て、ウェイトレスに代わって対応する。
「それはもしかして、組合顧問の旦那のことですか？」
「そうそう、ロウリィのお姉様達とつるんでる奴だよ」
「ならイタミの旦那のことですよね。けど、旦那からはお客様についての話は全く承っておりませんけどねえ？」
「しょうがねぇなぁ、あの野郎も忙しすぎて話をし忘れてやがる。まぁいいやさ。待っててやるからイタミって奴に連絡とってみな。そうすれば話は分かるからよ」
　ここまで自信たっぷりに笑われると、料理長も何かの手違いかと思う。
　それに、ジゼルが……と言うより亜神が自分の飲み食いの代価を支払わない例が多いということは、かつて自分の店を切り盛りしていた料理長自身も耳にしたことがあった。
　例えばハーディがレレイの身体を借りてさんざん飲み食いした時の話だが、あの時の彼女は飲食

代を自分で支払っていない。この手の支払いは全て神殿が負担するからだ。いや、実を言えば請求すらされていない場合もある。信徒の多い神殿街では、「使徒がこの店にいらして、ウチの食事を召し上がった」と言うだけで宣伝効果は抜群だからである。

ここが他の街でも、亜神たるジゼルに請求書を突きつける者はいない。どの街にも冥王ハーディを祀る小さな神殿やら祠があって、布教を担当する司祭が駐在していたり、信者の団体があるからだ。そういう街では、亜神が飲み食いや宿泊をすると請求書はそちらに回されてお布施から支払われるという仕組みが出来あがっているのである。

なので料理長も、その手の約束事があるのかと思った。そこで、組合の事務所に連絡して、伊丹に確認してもらうことにしたのである。

だが、しばらく待ってもたらされた答えはジゼルを不幸のどん底へと叩き込むものであった。

「お客さん。イタミの旦那から、そんな話は知らないって言われましたぜ」

「えぇっ!?　そんなことあり得ねぇよ！」

「でもねぇ、旦那から知らないと言われてしまえば、我々としては猊下から直接お支払いしてもらわなければなりませんが」

「じゃ、じゃぁ、この街には祠とか、信徒の団体は!?」

料理長は残念そうに首を振った。

この新興の街アルヌスには、ハーディの祠どころか司祭も存在しない。残念なことに信者すらい

ないのだ。
否、かつてはいた。だが今はいないとヤオの顔を見ながら言うべきだろう。
つまり、ジゼルには自分が飲み食いした代価となるような持ち合わせもなく、また代わって支払いを持ってくれるような存在もいないと言うことである。
「だいたい、イタミの旦那はハーディ様の信者じゃありませんぜ。そもそも炎龍の一件以来、猊下と旦那はいわば仇敵(きゅうてき)だ。なのにどうして猊下が饗応を受けられるなんて思ったんですかい？」
「ク、クナップヌイで飯を食わせてくれたから……」
伊丹はお腹をすかせていたジゼルに食事をご馳走してくれた。正直期待していなかっただけに、本気で嬉しかったのである。思わずほろりと絆(ほだ)されて、いろいろな恨みは水に流して、ちょっとくらい仲良くしてやってもいいかなと思ったくらいなのだ。だがそれは一時の気まぐれでしかなかったようである。
「その時はその時。今は今ですぜ、お客さん」
冷や汗をたらたらと流しながらジゼルは料理長に申し出た。
「あ、あのさぁ。お布施と言うことで、どうにかならねぇかなぁ？」
「それは出来ません」
料理長とウェイトレスは二人並んで微笑んだまま彼女に勘定書を突きつけた。明朗会計。笑顔が大変によろしかった。

ジゼルは不公平だと叫んだ。
「ロゥリィのお姉様だってここで食ってたじゃんかよ！　料金も請求してなかったじゃんかよ！　それって信仰による差別だぞ！」
「いいえ、違いますって」
「違わねぇよっ！　こっちが差別だと思えば、どんなことでも差別なんだよ！　改めないと謝罪と賠償を請求すっぞ！」
「差別ってのは、不合理な区別による、扱いや待遇の差のことですぜ。でも、ロゥリィ聖下がここで特別の扱いを受けることは不合理ではありません。なにしろ聖下はこの街を運営している組合代表のお一人なんですから。つまり身内なんですよ」
「え!?」
料理長の詳しい説明によって、ジゼルはようやく理解するに至った。
この食堂は、ロゥリィやレレイ、テュカが代表を務めるアルヌス協同生活組合によって経営されている。……いわばこの街そのものがアルヌス協同生活組合の持ち物なのだ。
ならば組合代表の一人であるロゥリィと、そうでないジゼルの扱いが異なるのは当然である。
これで、ジゼルの脳裏をよぎっていた「食い逃げ」という選択肢も、ばっさりと断たれた。
このアルヌスの街は、ロゥリィの神殿にも等しい。ここで食い逃げを敢行すれば後でどんな竹篦(しっぺい)返しを喰らうことになるか……。

ロウリィのハルバートによる斬撃、伊丹から叩きつけられた攻撃の土砂を巻き上げる凄まじい光景が脳裏に蘇って身体を震わせる。その記憶には、かなりの部分で誤解が混ざっているのだが、ジゼルの頭にはそのように焼きついていたのである。

しかも「おたくの亜神が食い逃げしたからぁ、損害はそっちに請求するわよぉ」などいう苦情付きの勘定書がベルナーゴに送りつけられる可能性もある。

それは考えてみると非常に恥ずかしいことであった。少なくともジゼルの権威は格段に失墜するだろう。いや、そればかりかベルナーゴ神殿までもが、恥をかいてしまう。それは大変に宜しくなかった。

「いったい何を騒いでるのぉ？　言って置くけどこのアルヌスで騒ぎを起こしたらぁ、タダじゃ済まさないわよぉ」

その時、ロウリィを筆頭に組合の幹部達が姿を現した。問い合わせが組合の事務所に届いたので様子を見に来たのだろう。

ふと、その中にレレイがいるのを見つけたジゼルは、その薄い胸にすがりついた。

長身のジゼルがレレイにすがりつく光景は何とも珍妙ではあるが、ジゼルには彼女だけが最後の命綱に見えたのだ。

「レレイ頼むっ！　お前もハーディの眷属になったんだろ!?　俺らはもう身内だよな!?　な!?」

レレイは冥神から『門』を開く技を授けられた。その意味では確かにハーディの眷属であり、ジ

ゼルと身内とも言える。レレイがそれをどう思っているかは関係なく、世間的にはそう見なされるのだ。

それを聞いた料理長は「へぇ、レレイさんがねぇ」と目を細めた。

「なるほどね……で、どうしますレレイさん？　払ってやりますか？」

だがレレイは無表情のまま首をぷるぷる横に振った。

「イヤ」

「そんなあああああっ！」

救いを求める者を崖から突き落とすような冷たい一言に、ジゼルはずりずりとへたり込んだ。

亜神となって百と数年。彼女もまた多くの敵と戦って強敵を屠って来た身である。その彼女の心身にここまでのダメージを負わせたのは、ロゥリィのハルバートや自衛隊の集中砲火を除けば、レレイのこの一言ぐらいだった。

さすがにジゼルを哀れに思ったのか、レレイは即座に付け加えた。

「貸すならよい」

「か、貸してくれるのか!?」

ぱっと元気を取り戻すジゼル。

「ただし十一の利息をつけること」

起きたり、萎びたりと忙しいことこの上ないが、またしてもジゼルはガックリとしてくたくたっ

と床に膝をついた。十一とは一般的に、十日で一割の利息が付くことを意味しているからだ。

ここが日本であれば利息制限法どころか出資法違反で捕まる暴力高利貸し的な利息である。だが債権の取り立てリスクが高く、貸し倒れの可能性の高いこの世界では、実のところこれでも良心的な部類なのである。

「くっ……」

ジゼルは歯がみした。思わずそれでもいいと認めそうになったのだ。

だが、返済するあてのない一時しのぎの借金は、雪だるま式に膨らんで、かえって酷くなるということはジゼルとて充分に承知していた。

何しろ、神殿に来た参拝者が神様にするお願いのベスト3に、「お金持ちになれますように」と「借金が完済できますように」の二つが入るのだ。ちなみにあと一つは「結婚相手が見つかりますように」である。

ベルナーゴ神殿に請求書を回してもらうのは良い。だが、その場合は完済されるまでの利息が十日で一割の割合で膨らむ。その間の滞在費、食費もかかるから、借金の元本がどれだけ膨らむか想像するだけで恐ろしい。神殿の財務担当神官からねちねちと苦情を言われ、主上ハーディからも叱られてしまいかねない。それだけは、どうしても避けなければならないのだ。

「……む、無理」

涙目のジゼルは地に膝をつけた姿勢から、どっかりとおしりを下ろすと、床に座り込んで両手両

足をじたばた振り回しながら叫んだ。

「くそぉぉぉぉぉぉ！　オレをハメやがったなあ！　こうなったら好きにしろいっ！　煮るなり焼くなりなんなりしやがれっ！　胸の肉、十一ワントを切り取りたきゃ取りやがれ！」

胸の肉十一ワントというのは、借金のカタに命を差し出すという約束をした商人の物語に出てくる、いわば特地版『ベニスの商人』の一節である。

悪徳高利貸しを罵倒する際に用いられる慣用句でもあるが、その言葉の意味は、借金のカタに俺を殺すのかと相手を詰(なじ)るものだ。手足を切られようが、胸を抉(えぐ)られようが死ぬことのない亜神がそう喚いても、それほどの迫力はない。

とは言え、スタイル抜群のジゼル猊下のこの発言は、ロゥリィとレレイの二人が常日頃からささやかに気にしている『何か』に触れた。

二対の視線は大地に磔刑(たっけい)にあったかのごとく横たわったジゼルの、ボリューム豊かな双丘に遠慮無く注がれたのだ。

その充実した張りがどれほどに素晴らしいかは、かなりの質量を有しているにも関わらず「さあ、好きにしろいっ！」と仰向けに横たわっても形状がほとんど変わらないことから理解できるだろう。

二人はそれぞれ各自の胸部を見下ろし、次いでジゼルの傍らにしゃがみこむと、その胸の質や感触を確かめるように、ふにふにと触ったりした。

「成長途上だから十一ワントもいらない。でも、そう、あと一……いや、二ワントもあればかなり

違いが、メリハリが……」
「レレイぃ、肉体の一部をツギハギする魔法とかあるぅ？」
「それは禁忌に触れる。二十年ほど前に、誘拐した娘と身体のすげ替えを行った女魔導師は、どっかの亜神に首を落とされたと聞く」
「あ……それやったの、わたしぃだったわぁ」
ゆがんだ思惑が二人の間に流れるのを見ていられなくなったのか、テュカが取りなすように言った。
「二人とも邪な考えは捨てなさいよ！　自前が一番でしょ。それに二人とも、お父さんの好みの分析結果を忘れたの？　こんな下品なのは駄目だって分かってるでしょ？」
テュカが言っているのは、当然ながら二人の言動のことで、決してジゼルの胸を下品と貶したわけではない。だが、そのように聞こえたジゼルは、心底傷ついたように呻いた。
「げ、下品って……」
「じゃあ、どうするのぉ？」
「もちろん、身体で返してもらえばいいわ」
自分の肢体をなめるようなテュカの視線に、寒気にも似た戦慄を覚えたジゼルは、思わず自分の身体を抱きしめた。
「まさか……オ、オレに、その、あの、身体で稼げって言うのかよ？　ま、まさか、ミリッタのと

ころみたいな働きをしろとか言わねぇよな？」

ミリッタは豊穣と子宝を司る女神である。

それだけなら何一つ恐れることはないのだが、問題はその神殿の女性神官が娼婦を兼ねることにあった。ミリッタの信者たる女性は、生涯に一度は神殿で娼婦として働かなくてはならないというとんでもない教義というか戒律があるのだ。

それでよくぞまあ信仰を捨てる女性が居なくならないものだと思うところであるが、子宝・安産といった、女性にとって命がけだったり真剣に悩んだりする分野でかなり現実的な御利益――新生児・乳児死亡率がコンマゼロ以下にまで下がる――がある。さらに産褥婦（さんじょくふ）の死亡率もコンマゼロ以下という、医学水準の低いこの世界では驚異的な力を持っているために、意外にも結構な数の信奉者がいるのである。

とは言え、それにはきちんと理由がある。娼婦として働く時に相手を拒絶できないというルールこそあるものの、神殿にあがるタイミングをうまく計って、婚約者にお客になってもらうという裏技があるのだ。そのため奉仕の義務を果たした翌朝にそのまま神殿で結婚式を挙げるカップルは少なくない。もちろんうまく行かずに予想だにしない展開になる例もあって戯曲化されていたりもするのだが、神官とちゃんと話を通しておけば予想外のことはまず起きない。実に話の分かる女神様なのである。

本当に特地の神様というのはいろいろで、教義も信者も多岐にわたる。ミリッタはその証左みた

いな存在なのだ。
ムリムリと首を振るジゼル。
「だって、オレ、男って分かんねえもん！　無理、ごめんなさい！　出来ません、勘弁してっ！」
ジゼルはへこへこと頭を下げ、自分が幼少期に神殿に入って外に出たことのないままに亜神化した箱入り娘であることを白状した。するとロウリィはにんまりと意地悪そうに微笑み、ジゼルの耳元で囁いた。
「大丈夫よぉ、テュカってぇ男も女もいける両刀だからぁ。神殿勤めが長かったのならそういうのに免疫有るわよねぇ」
女の園とも言える女子修道院では、同性同士の色恋沙汰の方が頻繁なのだ。雰囲気としては女子中学・高校に近いかも知れない。言動が男性的なジゼルはその意味で、確かに人気を集めていた。たちまちウェイトレス達が色めき立って、きゃーという黄色い悲鳴を上げる。
精霊種たるテュカに憧れの視線を向ける女性は、このアルヌスにもかなり潜伏している。そしてその相手がジゼルのような亜神ともなれば、天使と堕天使の組み合わせにも似た雰囲気が漂うだけに、妙に色めき立ってしまうのだ。
だがテュカは人差し指を立てると二人に「ちっちっちっ、それは間違ってるわ」と訂正した。
「正確には『お父さん』と女の子よ」
「同じじゃなぁい!?」

「大いに違うわよ。男なら誰でもいいってわけじゃないもの！　お父さんでなきゃ嫌だもの」
そんな会話が頭の上を飛び交うと、自分の運命が心配になったのかジゼルはおずおずと尋ねた。
「あの、それで身体で稼ぐってのは……」
するとテュカはジゼルにウェイトレスのエプロンを押しつけ、安心するようにと告げた。
「もちろん働いて返して貰うのよ」
散々脅かされた直後なだけに、ジゼルは「あ、それならやる！」と簡単に飛びついた。
そんな訳で、ジゼルは飲み食いした代金を支払うためにこのアルヌスの食堂で働くこととなったのである。職務として指定されたのは接客、料理運び、皿洗い、掃除等。借金もそこまで多額なわけではないから、まじめに十日も働けば完済できると思われた。
ところが彼女は毎日毎晩、賄(まかな)いとして認められる範囲を越えて呑んで食った。
美味い酒に目がないジゼルは、エールの類ではもう満足できない。高価な輸入物のブランデー、ワイン、シャンパンといった酒をついつい飲んでしまった。そのため借金がなかなか減らず、そのまま働き続けるはめになっていたのである。
ジゼルは悔しげに呟いた。
「くそう、ここの飯が美味いのが悪いんだ」
うっかり開けてしまった、クリュグとにらめっこしつつ、罵倒するのはあくまでも料理である。
それは、大好物の酒に責任を負わせることを無意識に忌避した言葉かも知れなかった。

＊　＊

「ってわけなんだ」
ドワーフは、そうやってジゼルの物語を締めた。
「なるほど……」
ウォルフ達はこれにはどんな感想を口にして良いか分からなかった。可哀想に思えなくもないけれど、自業自得なのではとも思えるからだ。
そのあたりの微妙な気分を察したのか、ドワーフは論評を控えて、「さぁ、仕事だ」と腰を上げた。
そしてテーブルには飲み食いの料金とは別にジゼルへのお賽銭らしき銅貨を一枚ペタンと置く。
「そんなところか」
「まぁ、そうだな」
ウォルフも財布から銅貨を一枚とりだすと腰を上げた。そしてドワーフに問う。
「この街で、大工仕事なんて残ってるのかい？」
すでにアルヌスの街の建物は完成していて、かつてほどに大工が働いている気配はない。
もちろん荷物の発送をする時に使う木箱、荷車の補修といった小規模の仕事はあるが、職人種族であるドワーフでなければならないような仕事でもないのだ。

だがドワーフは、まだまだ忙しいぞと答えた。
「街に居ると気がつかないかも知れんが、丘の向こう側には外から戦災難民が流れ込んで来ているんだよ。そのための長屋を拵えてくれっていうことでな、儂らが働いとる」
傭兵達はドワーフと共にそんな会話を交わしながら、自衛隊の輸送車両がひっきりなしに走る外へと出て行った。
「ありがとうございました」
丁寧な挨拶で客を送り出すジゼル。
ジョッキや食器を片付け、自分へのお布施を見つけると、両手を握り合わせてからポケットに収める。ここで働くようになってから、他人からの情けがとても身に沁みて感じられるようになったのだ。
食事時が過ぎたこともあり店内から客の姿は消えており、カウンターで突っ伏している酔っ払いの猫耳メイアだけ。
彼女については、ムリに起こして千鳥足で街を歩いて事故でも起こされては困るから寝かせておけ、と料理長に言われている。なので、ジゼルは彼女の座っている場所以外の椅子をテーブルに上げていった。
「掃除、片付け、掃除、片付け……」
昼の書き入れ時が過ぎたこの時間帯に掃除等は済ませなければならない。

ジゼルは箒と雑巾を持ってくると床の掃除を始めた。

傭兵共は粗野だし、商人達は忙しいから早く食べようとする。大工共は乱暴だ。そのせいか食べこぼし飲みこぼしを散乱させ、それを平気で踏みつけるから無茶苦茶床が汚れるのだ。

箒で掃くだけでは当然のことながら綺麗にすることが出来ない。だから床を這ってそれらを拾い集めるのだ。それがジゼルの役目であった。他のウェイトレスは、三時間ほどの休憩時間となっていて、夜の営業のためにそれぞれに英気を養っている。

「くそっ！　こんなの神官見習いの時以来だぜ」

ジゼルは四百歳を超える。それだけに神官見習いだったのは、一般の感覚からすれば随分と昔のことになる。そう、それこそ歴史的なスケールで昔のことなのだ。

幼かった頃の彼女はただの竜人で、神官見習いであった。そしてベルナーゴ神殿とは別の、ハーディに仕える神官を育てる修道院で生活をしていた。そこでは、これに似た辛い雑用で一日を終える毎日だった。

冬の早朝に、凍り付いた井戸の表面を割りながら水を汲み、その冷たい水で雑巾を絞って拭き掃除と洗濯をする。掃除がきちんと出来ていないと、先輩からねちねちと嫌味を言われ、かじかむ手は、あかぎれとひび割れ、そして擦り傷でいっぱいだった。

指の第二関節の皺が割れて、そこから出血して雑巾が赤く染まってしまうのはしょっちゅうのことであった。

その後に続いた長い下っ端神官生活も過酷だった。

他の種族なら、そろそろ引退を考える歳だからとお情けで昇進させてもらい閑職に回されるのだが、なまじ長命種で若い姿であり続けたため、最下級の神官のまま留め置かれ、自分が神殿に上がった時にはまだ産まれてさえいなかったような後輩達にも追い抜かれて、ねちねちと嫌味を言われながら顎で使われる日々を送ったのである。

ふと、辛かった日々の記憶が蘇り、気がつくと目から水滴がこぼれ床を濡らしていた。

「あ、あれ……なんだこれ。くそっ、目から水が溢れて来やがる。なんでだろ、なんでだ……うっうっ……お母ぁちゃん！」

どうやら幼かった日々のホームシックまで蘇ってしまったようである。

ついでに何百年も前に亡くなった母のことまで思い出してしまった。「立派な神官におなり」と送り出してくれた彼女の母は、大変優しい女性だったのだ。

ジゼルにハーディからの天啓が下ったのは、母が亡くなってその面影を思い出すのに苦労するようになった頃である。

どうして自分なんかがと思ったが、その理由は今も分かっていない。

亜神になれるかどうかは神殿内の位階や出自種族、血統は一切関係がなく、本人の才能と努力、そしてプラスアルファのみがものを言うとされている。実のところこのプラスアルファこそが最大の要素であり、これが何であるかは一切が不明なのだ。

「要するに『運』の善し悪しよ」

などという極端な意見を口にする者もいる。

宗教関係者の間でかわされる言葉なだけに「その者が主神に愛されたから」という理解の仕方に行き着くことが多い。後に、ジゼルが亜神になったことを知った教団の長も、長い長い下積みの生活に腐らず密かに陰徳を積んでいたのを、主神ハーディがご覧になっていたからだという解釈をしていた。

だが、ジゼル本人はそれを喜ぶことはなかった。

それよりも、自分に起こるであろう境遇の変化に不安を感じた彼女は、慣れ親しんだ日常を維持するために、亜神となったことを隠そうとしたのである。

それは、亜神となった後もそのことを十年以上に亘って隠し続けたという、エムロイ神殿の先達を真似たものであった。

だが、ジゼルはエムロイの使徒ほど要領がよくなかった。

エムロイの使徒の場合は濡れ衣を着せられ苦境に陥った神官見習いを救うために、敢然と名乗り出て不正を働いていた司教を断頭破門したという逸話が残っているが、ジゼルの場合はそれほど格好が良くなく些細なドジが原因だった。台所仕事の最中にうっかり指を切ったのが瞬く間に治っていくのを皆に見られ、それが噂という形で周囲に知れ渡ってしまったのである。

彼女の立場は激変した。

つい昨日まで、自分のことを見下してきた連中が、思った通りと言うべきか一斉に態度を変えたのである。

「貴女なら、いつしか大成すると思っていましたよ。これまで辛く当たっていたのは、全ては貴女のため。それが報われてとても嬉しく思います」

「ジゼルは、儂が育てた！」

「ジゼル猊下。何なりとお申し付け下さい。これまでのことで、いろいろと恨みに思われることもあるかと思いますが、一生懸命お仕えいたしますのでどうぞ水に流していただきたく、そのあの、ごめんなさい……」

そんな環境の激変が、自分はもう昨日までと違うのだと嫌でも実感させた。

だがこのアルヌスではそれがない。ジゼルを亜神と知りつつもなお容赦なく、請求書を突きつけ払えないと知れば働けと言うのだ。

「へっ、良い度胸してやがるぜ」

呟きつつ、ジゼルは手を休めることはない。

床を綺麗にし終えると椅子をおろし、額を流れ落ちる汗と一緒に心の汗もエプロンで拭って自分の仕事の完璧さを誇らしげに見渡すのだ。

「どうだ、綺麗になったろう？」

見ている者がいたらジゼルはそう問いかけたに違いない。

「よしっ、終わり！」
パンパンと手の埃をはらって仕事の終了を宣言すると、これでいつでもお客を迎え入れることが出来るぜと満足そうに微笑んだ。
「やっぱり、オレってこうやって身体を使って働いてるのがあってるんだよな」
するとそれを待ち構えていたようにロゥリィがやって来た。
「ジゼルの奴ぅ、ちゃんと働いているぅ？」
「今日は乳茶ねぇ」という注文に、料理長は「ええ、なかなかに働き者ですぜ」と答えるとカップを棚から取りだし支度を始めた。
ジゼルは畏まった姿でお辞儀をすると「ご案内するぜ……します」とロゥリィを食堂の奥の貴賓室へと案内した。
ロゥリィが腰を下ろしても、ジゼルは立ち去ろうとしなかった。
周りに誰もいないのを利用して、込み入った話をするつもりだと理解したロゥリィは、ジゼルに腰掛けるように告げた。
だがジゼルは座ろうとせず、立ったまま口を開いた。
「お姉様。アポクリフの件は、どうにかなるのかよ……ですか？」
ジゼルは、眷属の翼竜から、またアポクリフが広がったという報せが届いたと語った。
末席とはいえ、世界の庭師たる神に連なる身である。ジゼルも世界の終末をもたらすかも知れな

い黒い霧の動向は気にしない訳にはいかないのである。
だが、ロゥリィはジゼルほど危機感を抱いてないようであった。
「信じて待つことにしたわぁ。だからジゼルも『門』には手出し無用よぉ」と朗らかに微笑み、料理長が運んできた乳茶の表面に浮かぶ薄い膜をスプーンで掬い上げ口に含んだ。
「信じて待つって言うけどよぉ、この世界が終わっちまうかも知れないんだぜ」
「そんなこと分かってるわよぉ」
「じゃあどうして人間任せにしようなんて思えるんだよ!? 俺達が閉じるんじゃ駄目なのかよ!」
ジゼルは、そのためにこそ自分達亜神は存在するのだと言った。
例え人間共が反感を抱いても、「これは神のすることだ。それが何か?」と、切り捨ててしまえばいい。それがジゼルの主張であった。
「前のお姉様だったら今頃そのハルバートで『門』をぶちこわして、はいおしまいだったぜ。オレ一人じゃ無理かも知んないけど、お姉様と一緒なら一暴れするだけで有象無象ごと『門』を吹き飛ばしてやれるじゃんかよ。なんだって人間なんかに任せるんだよ?」
「欲に駆られて世界を破滅に追いやるかぁ、逆に危険だからといって折角の可能性まで手放してしまうかぁ、それとも理性と叡智を掻き集めて自己を管理しながらぁ、可能性を切り開いていく道を選ぶかを、人間達に自分で決めさせたいからよぉ」
「けどよお、決断をさせるって言ったって、結局は選ばれた一人か二人の判断だろう? そんなの

が人間『達』の下した決断になるのかよ？」
「ええ。例え個人の成した行為でも、わたし達ではなく人間が成したという結果が残るものぉ。それこそが人間達に自覚を促すきっかけになるわぁ」
「もしかしてターレスを気取ってたりしませんか、お姉様？」
ターレスとは、古(いにしえ)の神の名である。
火を扱うには人間という種は幼すぎる、きっと自らを傷つける、と言って古い神々は人間に火を与えようとはしなかった。だがターレスは、人間はいずれ火を扱うにふさわしい叡智を身につけるであろうと予言し、独断で人間達に火をもたらしたのである。
「彼がいなければぁ人間という種はいつまでも肉を生で食べてぇ、寒さに凍えて生きる野獣のままだったでしょうねぇ。彼は人間という種を信じたのよぉ」
「けど、その信頼は今も裏切られ続けているぜ。人間は戦に火を使って、互いを焼き殺しているじゃねぇか。火を使えるのと使いこなしているってことの間には、深い溝があるんだぜ、お姉様」
「そうねぇ。でもぉ、誰しも最初からはぁ泳げないものよぉ。溺れながら泳ぎ方を身につけるのぉ。そうやって人間は種としての成長を続けているのよぉ。一度溺れたからといって水に近づくことも見るのも嫌だと言い出すような怯懦(きょうだ)な種族にはぁ、滅びの運命しか残されないのよぉ」
「けどよぉ、人間みたいな楽(らく)したがりにあんまり期待するのもどうかって思うけどなあ。ほっときゃあすぐに手抜きをしたり、いい加減をやったり、私腹を肥やす連中だ。そんな輩に自分を律するな

んて事が出来る時が本当に来るのかねぇ？」
「ジゼルぅ。あんた産まれた時から亜神だったぁ？」
「そりゃ違うけど……」
「ハーディがぁ、レレイに『門』を穿つ術を与えた理由……考えたことあるぅ？」
「んなの、あいつへの褒美だろ？」
ハーディは飲み食いして食欲を満たすために、適当な娘を見つけて憑依した。ジゼルはそれぐらいに考えているのだ。
「それだけなわけないでしょう!?」
ロウリィは、こめかみの辺りを人差し指で叩きながら頭を使えと言った。
「くっ……そういう面倒くさいこと言われても分かんねぇよ。そもそも何をどうやって考えろっていうんだよ？」
「ならヒントをあげるわぁ。本当にやってはいけないことは最初から出来ないように出来ているってことよぉ。例えばぁ、人間は肉の眼で自分の項、後ろ頭を見ることが出来ないように作られているわぁ。何故かというと、それこそが本当の意味での禁忌だからよぉ」
「なんだそれ!?　馬鹿じゃねぇの？　誰がそんなことしたがるって言うんだ？　だいたい自分の後ろ頭なんか、鏡をうまく使えば見えないこともないぜ」
「そうねぇ。けれど肉の眼では決して直接見ることは出来ないわぁ。絶対禁忌とされていることは、

したいとも思わないしぃ、やる価値を感じることもないようにされているのよぉ。気まぐれでやろうと思い立ってもぉ、身体の構造上絶対に出来ないわぁ」

「ま、そうだよな」

「そういうことって、実はあちこちにいっぱいあるのよぉ。その深奥部にこそ世界の理があると見て研究している賢者もいるくらいよぉ」

「わけ分かんねぇ話だなぁ。つまり考えついて実際に出来ることは、それをすることが許されてるってことかよ。近親相姦も、親殺し子殺しも、しようと思えば出来るのは、それがやっても良いって許されてるからかよ！」

ジゼルの反応が、彼女の予測したものとほとんど同じだったこともあり、ロゥリィは嬉しそうに唇を弓形に描かせた。

「そうよぉ。お好きなようにどうぞぉってことになっているわぁ」

ジゼルは信じられないとばかりに目を剥いて首を振った。

「つまりだ。人間には、自分自身すら滅ぼす自由も与えられているってことなのか？」

「極端な話ぃそうなるわぁ。人間には、本来は全てのことを、自分で選択する権利が与えられているのよぉ」

「けどそれは駄目だろうよ、お姉様。禁じられてなけりゃ何をやっても良いと考えるような奴らばっかりだからこそ、オレ達がいるんじゃねぇのか？　人間ってのは自分が一番偉いって思い込むとす

ぐに傲慢に振る舞う。だから徹底的に抑え込んで、下手なことを考えるような馬鹿野郎は、ぶっ殺してやらなきゃ駄目なんだよ！」

「つまり危険なのは『門』ではなくて人間そのものってことよねぇ。危険なのはぁ『門』や剣や炎じゃなくて、人間っていう存在そのものってことになるわぁ」

「あ……」

ジゼルは、ロゥリィが何を示唆しようとしているかに気がついた。

「危険な物は遠ざける。危険な物はとりあげる。危険な物は手放す。その発想の下では、人間は何もかも手放して、最後には自らそのものを滅ぼさなければならなくなるわぁ。それをしないで済むのは、自分こそが危険な存在だと気がついていないからぁ。だからこそぉわたしぃ達がぁ人間達を抑え込む役割を担ってきたのよぉ。けど、その結果はどう？　この世界の人間は数万年の歴史を持っているけど、停滞して息が詰まって滅びそうになってる。その滅びを防ぐためにぃ、主神方はあの手この手でこの世界を滞らせまいと揺り動かしていたわぁ。ハーディがこの世界に新しい種族を呼び込んで来たのもぉ、そのためだそうよぉ。悔しいけど、向こうの世界との差を見たらそれも認めないわけにはぁいかないわぁ。しかもハーディは『門』の後始末をなんとかしてみせろって人間に押しつけて、自分は手を引いて見せた。ねぇ、ジゼルぅ、それはいったいどうしてだと思う？　人間が自ら滅びを回避することが出来るかも知れないって認めたからじゃないのぉ？」

「無理に決まってるじゃねぇか！　この飯屋で働いている奴らだって、自分の生活の為に『門』を

閉めることに反対してるんだぜ。『門』があることの方が都合のいい連中ばっかりの中で、世界のことを考えて『門』を閉じようなんて決断を下せる奴なんかいねぇよ！」
「そんなことないわよぉ。ちゃんと世界のことを考えている人間もいるわぁ」
「どこの誰だよ！」
「例えば、レレイやテュカよぉ。そしてヨウジぃねぇ」
ハーディは世界そのものという重荷を彼らに託すことで、人間という存在そのものが、一階梯、上ることが出来ると考えているのだろうとロウリィは語った。
「気でも狂ったのかお姉様!?　主上様がどうしてンなこと考えるんだよ。どうして人間なんて信じられるんだよ!?」
「あらぁ、このわたしぃが正気だったことがあると思うのぉ？　狂気を司る神の使徒なのにぃ」
言い返したい言葉もあったがそれを飲み込んでジゼルは口を噤んだ。言われてみれば確かにその通りだったからだ。
「愛は狂気の一形態よぉ。誰かを愛している者が正常なわけないでしょう」
「つまりだ、お姉様も奴らが成長するって思ってるわけだ……」
「自分達も世界の存在を担っているんだって自覚さえすればねぇ。自分で自らを管理する自律心。わたしぃは、それこそが世界を豊かにする鍵だと思っているわぁ。その一点で、わたしぃはハーディと同じ意見を持てる。今回のことはそのきっかけになるわぁ」

「なんでまたそんな危ないこと……」
「陞神が近いからかしらぁ。見ているだけで手を出したくても出せなくなるって思えば、少しは成長して欲しいって思うじゃなぁい？」
「ったくよぉ、今まで通りじゃ駄目なのかよ」
その方が楽だと首を振るジゼルを見て、ロゥリィは深々としたため息をついた。
「ハーディの不幸はぁ、自分でものを考えて、行動する使徒がいないってことよねぇ」
「悪かったなぁ馬鹿で」
「ヤオに言ったそうね、ハーディが白と言えば、黒い物ですら白だって。あれってぇ、自分は思考を放棄してますっていう宣言よねぇ？」
信仰心のありようとして間違っているとロゥリィは酷評した。
概念としてしか存在しない、幸福を約束してくれる『神』を信じるなら、その無謬性を受け容れただひたすらに信じるのが正しいが、この世界の『神』はそのような存在ではない。従って使徒となるならば、その言葉に従うだけではなく、とことん問いかけていくことも必要となるのだ。
「だからぁ、あんたはぁ使い走り以上のことが出来ないのよぉ」
「じゃあお姉様はオレに、どうしろって言うんだよ？」
「まずはぁ、自分で考える習慣をつけなさぁい。そうすればハーディの真意だって見えてくるはずよぉ。その中で、自分の成すべき夢も見えてくるわぁ」

「お姉様は、随分と主上さんのことを理解してるんだな。それでいてどうして、蛇蝎(だかつ)の如く主上さんを嫌うんだよ？」
「わたしぃは、人間の魂を人形みたいに陳列して喜ぶほど悪趣味じゃないからよぉ」
「あの趣味かぁ……」とジゼルはポリポリと頭を掻いた。「けどよぉ、当の本人が幸せならそれでいいんじゃねぇの？」
「魔薬を売り歩いている輩が似たようなこと言ったわよぉ。真実の人生はあまりにも希望がなく、苦しみに充ち満ちている。だからこそ偽りの幸福と知りつつもそれに浸りたくなるんですって。ハーディの陳列棚で味わえる幸せはそれと同じよぉ。あんな嘘の幸福に浸らされたらぁ、魂の力はどんどん衰えちゃう」
「だから主上さんが気にくわないって？」
「力のある魂をハーディが集めまくって陳列棚に並べているせいで、ろくでもない奴らばっかり増えちゃってるのよぉ！　だからこそぉ世界は活力を失っていくんじゃない!?　いつかハーディの陳列棚から人形にされた魂達を解放してやるんだからっ！」
　ハーディが外の世界から様々な種族を呼び入れるのも、自分のコレクションを増やすためではなかろうかとロゥリィは疑っていた。
「そういうエムロイだって、戦いで死んだ人間の魂を掻き集めてるじゃんか」
「ハーディのところに行ったら救われないからでしょ！」

「冥府に行くのが救われないって……そこんところに見解の相違があるよなぁ。つまりは、オレはいつかはお姉様と戦うしかないってことか？」
「いつでも相手してあげるわぁ。けれどぉその前に借金を全額返済してぇ、もう少し気品というものを身につけてからになさい。いい？」
ジゼルは舌打ちすると悔しげに頬を膨らませた。
「お姉様だって、特殊な喋り方してるじゃねぇかでございます」
なかなか直らない言葉遣いには、ジゼル自身も閉口しているようであった。
これぱかりは気性というか性分なのだからしょうがないとロゥリィも思うが、畏まる必要のある時くらいは畏まれるようになってもらわなければ、使徒全体の評価に関わるのである。
さて、どう宥め、窘め、ジゼルに発破をかけようかと考えていると、貴賓室の入り口から突然声をかけられた。
振り返ると「これ、どう思う？」と、おしゃれな服装に身を固めたテュカが、私服姿の栗林、富田の二人を引き連れて立っていたのである。

テュカは東京ガールズ・コレクションのモデルのような歩き方で貴賓室に入ってくると、くるっと一回転してからポーズを決め、ロゥリィに論評を求めた。
ロゥリィは自分のおとがいを軽く摘んだ姿で、どれどれと非常に厳しい視線を浴びせながらテュ

カの周りを一巡りする。
化粧は極力薄く。元々テュカの肌は綺麗なのでほとんど手を加える必要は無いのだが、それでもこれだけはと主張するかのように、桜貝のような繊細なピンクをリップに塗り、テュカの女性らしさを引き立たせていた。
その代わりなのか髪には充分に手間がかけられている。
蜂蜜が流れているように見える髪は、わずかな光を浴びただけでも黄金色に輝くのだが、その先端が艶めかしく媚びるようなピンク色に染められていた。
「これ、どうしたのぉ？」
まるっきり染めてしまうには勇気が必要なので、髪の端の方だけを染めて、問題があればほんの少し切るだけで元通りに出来るようにしたとテュカは語った。
「お父さんの愛読書に出てくる人物の姿を真似てみたの」
要するにコスプレである。
ロゥリィは「ふ～ん」と呟きながらさらに細部を確認していった。
指先は爪を綺麗に磨き上げ、マニキュアを施している。色は唇に合わせた真珠のように輝く淡いピンク。カジュアルなシャツは、身体にフィットして見事にテュカのスタイルを浮き立たせている。その上に紗のブラウスを纏うことで、ふんわり感がゴージャスな雰囲気を演出していた。
ボトムは普段履いているローライズはやめて、ぴったりとした革のミニ丈スカートを着用。

その下にはレースのストッキング。テュカのきゅっと引き締まった腰回りとすらりとした脚の線、特にスカートの裾から姿を現すガーターベルトが縦断する絶対領域は、眩いばかりに強調されていて非常にセクシーと言えるだろう。

これが、テュカの勝負服であった。

「うん。いいわねぇ」

ロゥリィはOKサインをテュカに出した。

「頑張ってよぉ」

どこからともなく現れたレレイも、テュカのファッションを無表情に眺め、「これを装備に追加」と彼女の耳朶に真珠に似た白い宝玉のピアスをとりつけ、テュカを鼓舞する。

「貴女が主戦力。戦果を期待する」

「うむ、なかなかだ」と、ヤオも肯いた。「これで反応しないような奴は男ではないな。これであの男も生唾を飲み込むであろう。もしかすると押し倒されてしまうかも知れないぞ」

だが、この言葉を耳にした途端、ロゥリィ、テュカ、レレイの三人は揃って視線を地面に落とした。

「それでも心配なのがぁ、あいつなのよぉ」

「時々、生身の女に興味が無いのかしらって思う時があるのよね」

「非常に心配」

予想もしていなかったそれぞれの反応に、ヤオは慌てて取り繕った。

「いや、でも、いくら何でも大丈夫なのではないか？　此の身が男ならテュカ殿に迫っているぞ」
「あんたがぁ男ならそうでしょうねぇ。でも、あんた、あいつから手を出されたことあるぅ？」
ロゥリィ、テュカ、レレイの三人は何とも形容しがたい微妙に重たい空気に包まれ、ヤオもそう言われてみればと呻いた。
「う……それは確かに。いろいろと迫ってみたことはあるが、手を握られたこともない」
翼竜にタンデムで乗った時の絡み合いが、ヤオにとっては伊丹との最接近である。
あの時の触れ合いはとても心地が良かった。お互いの距離がとても近づいたように感じられ、その後の展開もいろいろと期待していたのである。だが、それ以来、距離はさっぱり縮まらなかった。かえって疎遠になってしまったのかと思うほどだ。
普通の男なら、身体に触れることを許されたと思ったら、顔を合わせる度に下心の籠もった手を伸ばして来るとか、誘いをかけて来るとかするはずなのだ。
「だがそれは、彼が性格的に奥手だからではないのか？　時間をかけて距離を詰めていけばイタミ殿とて……」
ヤオはそう考えて、心の安定を図っていた。
だがレレイは冷たく言い放った。
「その時間はない」
「どうして？」と物分かりの悪いヤオにロゥリィは告げた。

「『門』の件があるからよぉ。そして今のままだと、ぎりぎりのところで逃げ出しかねないのよぉ彼奴はぁ！」

『門』を閉じる際に、伊丹の身柄は特地側に留め置かれることとなっている。だがそれは日本政府と取り交わした約束であって、伊丹自身の選択ではない。趣味のために仕事をしていると言い放つ男だけに、強いられたら「いやだ、俺は帰る」と言って逃げ出すおそれは充分にあった。

もちろん、だからといって手放すつもりは毛頭ない。だが伊丹が本気で逃げ出したら捕まえることが果たして可能か、ロゥリィ達にも不安が残るのである。

それに出来ることなら自分で、こちらに残るという選択をして欲しい。それが女心というものなのだ。

しかも、伊丹が向こう側を離れがたく思う理由の一つに「同人誌即売会に行けなくなるから」というものがある。彼女達にはそれが何より気にいらなかった。

「いい、二人とも。紙に描かれた女の絵なんかにぃ、負けるわけにはいかないのよぉ！」

ロゥリィの差し出した手の甲に、テュカ、レレイも自らの手を重ね、えいえいおうっ！　と気勢を上げる。そう、これは女のプライドをかけた勝負なのだ。

これに勝つためであれば、個人としての勝利や独占欲は棚に上げることが出来た。

三人がかりで、伊丹を心身共に虜（とりこ）にするぐらいのことはしなければならないのだ。一時的に誰が優位になるかは、些細な問題でしかない。最終的な勝利は、伊丹を特地に残らせてから、時間をか

けてゆっくりと手にすればいいのである。
もちろん、それは裏を返してみれば、三人がかりでないと絵に描かれた女に勝てないという危機感の現れではないかと指摘することも出来るのだが……当然のことながらそれは無粋なことである。
いずれにせよこれは、「自分は伊丹の所有物」という立場に安住してしまっているヤオには感じられない類の危機感であった。とは言えヤオにも状況は理解できたので、自分なりの提案を試みた。三人がかりではなく自分も含めた四人がかりではどうかという提案である。
「だったら、こんな手ぬるい色仕掛けではなく寝台に忍ぶと言うのはどうだろう？」
レレイの魔法で監視に立っている警務官を眠らせ、あの手この手をつかえばいいのではないかとヤオは言う。そして、そういうことなら自分が大いに役に立てるだろうとまで宣った。
だがロゥリィは「ふっ……」と鼻で笑い、認識が甘いと告げる。
「それは無理の上に無用。ついでに言うとかえって嫌がられる」
監視を眠らせたりすれば大騒ぎになるとレレイは言った。
「それにお父さんは、貴女のような遣り方で迫られるのは苦手なのよ。気がつかなかった？」
「えっ……まさか!?」
レレイは、伊丹が購入し、よく読んでいる同人誌、小説、漫画などを分析して分かる伊丹の嗜好を語った。
「彼がこちらに持ち込んだ絵草紙（漫画・同人誌）、物語の挿絵（ライトノベルのイラスト）等から、調べることの出来た二千四百七十八点を比

較検討した結果、彼の嗜好には一つの傾向があることが判明した。彼は色気で迫る女性をあまり好まない。あくまでも気持ちで迫る必要がある。そしてその方法も問題となる。気持ちを素直に伝えるよりも、気持ちとはまったく裏腹な態度で攻撃的な言動をしたり、気持ちを伝えようとするけれど、不器用なためにうまく表現できなかったりするのを好む。また好意が過度になり相手の全てを支配しようとするとか、精神的に常軌を逸してしまうような言動も好みの範囲に入るらしい。ひねていて素直とは言えない態度の持ち主が、好意を持っている相手にだけ素直というのも良い。ただしこれは短期決戦には向かない」

「ええっ、そんなっ！　嘘だ！　嘘だと言ってくれ！　それでは此の身のしてきたことは……」

「そう。かえって嫌がられていた可能性が高い」

ヤオは残酷な宣告を受けて崩れるように膝をついた。

それは裏返してみれば、自分が他者に追随できない色気の所有者であることを自負し、密かな優越感に浸っていたことを意味している。そんな傲慢さをロウリィは静かに冷笑した。

「い、色気を嫌がる男がこの世にいるなんて」

ヤオの絶望ぶりがあまりにも可哀想だったのか、テュカが慰めの言葉をかけた。

「色気を持っているのが駄目なんじゃないのよ。それを使って迫るのが駄目って事」

例えば、食堂で働いていたデリラなんかは、ヴォーリアバニー特有の大変な色気の持ち主であった。だが言動の雑さと鉄火肌がそれを薄めていたため、伊丹も気安く接していたのだ。もし、そん

な彼女がしおらしく恥ずかしさに耐えながら迫ったら、非常に効果的だっただろう。
「彼の好意を容姿のみで引き寄せようとするのは無意味。ヤオに可能性があるとするなら、色気を普段は隠しておいて、さりげなく彼のみにぶつけるのが最も効果的と思われる。けど……今更手遅れ」
「そうだったのか、そうだったのか。そうと分かっていれば、くそっ！」
ロウリィはどこか苦笑を感じさせる微笑みを浮かべ、打ち拉がれている自分の信徒を「立ち直るのに、少し時間がかかるわねぇ」と見棄て、テュカを振り返った。
「テュカぁ、貴女の選んだ戦術はぁ？」
するとテュカは「これよ」と少し大きめのバッグを抱えあげた。
「何それぇ？」
「お父さんの肌着とかタオルとかよ。そしてあたしの作ったお・弁・当♥」
この一言に、ロウリィはガツンと脳天を殴られたような表情で後ずさり、その手があったかと手を打った。
「レレイから、ヨウジがビョウインの食事ってまずいって文句を言ってたって聞いたから作ってみました。手料理って効果あるって思わない？」
「なるほどぉ、家庭的なところを出すってわけねぇ」
派手な格好をしながら、その実中身はとっても家庭的というギャップ萌えを狙う戦術である。
「それは良い手。生まれ育った環境や前妻の気質から見ても、彼は家庭的な雰囲気には慣れていな

いと思われる。手料理、着替え……甲斐甲斐しい世話の得点はとても高いはず。テュカの持つきらびやかさとの差がそれを引き立てる」

実際、伊丹が父親代わりにテュカから世話を焼かれていた時、伊丹はまんざらでもなさそうな視線をテュカへと向けていた。そんな健気さに絆されたからこそ、伊丹はテュカのために命がけの炎龍退治に立ち上がったと見ることも出来るのだ。

「料理かぁ……わたしぃはぁ、得意な分野が偏っているのよねぇ」

丸焼き系の料理は作れるが、細かく切ったり、煮炊きするのは苦手だとロゥリィは語った。

それを聞いたレレイは、ロゥリィが大きな毛長牛か猪を、丸焼きにしている光景を想像した。

「それを料理と呼称するのは抵抗を感じる」

「食べられるようにするんだからぁ料理でしょぉ！　それを言うレレイはぁどうなのよぉ！」

「出来る。得意」

だが、レレイが得意という言葉を発した途端に、突然現れた誰かが「へっ」と鼻息で笑い飛ばした。

「食事など栄養が摂取できれば良いとか言って、全然関心無かった癖によく言うわい。自分の舌に自信がないから処方箋通りにしか作れん。だから魔法の薬の調合みたいな調理法になる。しかもレパートリーが三種しかないから、毎日同じ物が出て来ることになるんじゃ」

突然、ふらりとやってきたカトー老師が二人の前で立ち止まると、レレイの料理を暴露した。

ロゥリィは、レレイが料理という名の魔法の実験をしている風景を思い浮かべた。天秤に分銅を

載せて塩などの調味料の量を計測して、煮立てる時間は砂時計を用いて計り、食材は物差しで測って正確なサイズに切断する。さらにフラスコやビーカーでもってソースを煮詰めて、スープは鉄の大鍋にコウモリの羽だとか、イモリの黒焼きといった得体の知れない物を次々と入れて、太い木の棒で妖しく煮立っている謎の物体をかき回して作るのである。

「それぇ、食べられるものになるんでしょうねぇ」

「無論。師匠で実験済み」

「確かに食えることは食える。だが、四日で飽きて十二日目で苦痛になること請け合いじゃよ。正直、儂はもうコダ村には帰りたくない。またこの娘と生活すると思うと気が重くてならん。きっとここの種類豊富で、美味い飯に慣れてしまったせいじゃな」

レレイは、ほとんどの仕事を自分達に任せて全くと言って良いほど外に出てこない癖に、こういう時に限って姿を現す師匠に向けて、空気をボール状に圧縮して思いっきり叩きつけた。

だがカトー老師は老人とは思えない軽やかな動作でひらりと躱(かわ)すと、「正確な攻撃じゃ。だがそれ故に予測しやすいのぅ」と言い放った。

「処方箋(レシピ)が足りなければ増やせばよい」

レレイは空気を集めて二個目のボールを作ろうと身構えた。

「料理の方法を学ぶのに時間を割くのはもったいない、栄養が摂れれば良いと言っていた娘が、今更よく言うわい。色気づくと女ってのはこうも変わるものなのかのぅ？」

「くっ……変わって何が悪い!?　師匠みたいな大人に言われたくない！」
再度空気のボールを投げつけるレレイ。
「む、儂にも見えるぞ。そこだ！」
カトーは魔法の杖を大きく振りかざすとそれを打ち返した。
スパーンという音とともに、空気のボールはレレイの耳元を掠めて、食堂の戸口から彼方へと飛んでいった。
「ふむ。ほうむらんという奴じゃな」
研究室に隠れていたはずなのに、何をやっていたのかと大いに疑問に思えて来る言動である。
「儂が研究室に籠もっていたじゃと!?　子供の教育やら面倒ごとは全部儂らに押しつけて、仕事やら探索やら男やらにかまけておった奴らに言われとうないわい。こっちは子供の遊び相手までせねばならんかったのじゃ。ま、おかげでニホンという国の『あにめ』やら『げーむ』やら、『すぽーつ』とやらにも触れることが出来たがな」
老師はそう言い残すと、「まだまだ修行が足りんな、ふはははは」と声高らかに笑いながら、料理長から受け取った中身の詰まった酒瓶を担いで去って行った。
後には屈辱でプルプルと身を震わせるレレイが残されていた。

一方、立ち直ったヤオは、関わればまた傷ついてしまう可能性の高い話題から自分を遠ざけよう

と、栗林と富田に声をかけた。
「珍しく私服とは、クリバヤシ殿とトミタ殿は外出か？」
「そうよ。どうしても伊丹隊長の所に富田を連れて行きたかったんで、テュカの付き添い番を代わって貰ったの」
栗林は、私服の懐に隠したＰＤＷ（個人防衛火器）ＦＮＰ90をちらりと見せると、あたかも連行するかのように引きずっている富田にその銃口を突きつけた。
「トミタ殿を、イタミ殿のところに？　それは何かの任務か？」
「ううん。こいつこの間さあ、死亡フラグを立てちゃったのよ。このままにしておくと、石に躓いただけでも死ぬかも知れないから心配でしょうがなくって。だから隊長のところに連れてってフラグをへし折ってもらおうかと思ってるの」
すると富田は迷惑そうに抗議の声を上げた。
「別に、大丈夫だって言ったろ？　だいたい死亡フラグってのが本当にあるんなら、伊丹隊長のところに行ったぐらいでなんとかなるのかよ!?」
「なるわよ！　隊長より詳しそうなのが側にいたからお伺いをたてたのよ。そしたら、その手の厄種は隊長に押しつけるのが一番なんだって。つまり一種の身代わりね」
「お、押しつける!?」
富田は、栗林の言いようを聞いて額にじわりと脂汗が浮かぶのを感じた。

「そ、それは酷くないか？　だいたいどうやったら厄を移せるって言うんだ」
　すると、ロゥリィが災厄を避けるために必要とされる儀式について簡単に説明した。
「トミタの前で、ヨウジぃに死亡ふらぐとやらを立てさせればいいのよぉ。そうすれば厄はヨウジぃに移ることになるわぁ」
　どうやら、伊丹に死亡フラグを立てさせればよいと嗾けたのは暗黒神の使徒のようである。
「た、隊長に厄を押しつけろって言うのかよ？」
「それが嫌なら、富田が婚姻届を出すって手もあるんだって。死ぬ前に結婚しちゃえば、フラグの前提が成立しないからフラグは折れたと考えても良いでしょ？」
　栗林の確かめるような視線に、ロゥリィは軽く肯いた。
「でも、ボーゼスは今イタリカだよ！　すぐに婚姻届なんか用意できねぇよ！　だいたい帝国人との国際結婚ってどう手続きするんだ？」
　言い返す富田に、栗林がおずおずと言った。
「し、しょうがないから、とりあえずはあたしが妻ってことで届け出をしましょう。言って置くけど、これはあんたの無事のために出すんであって、別にあたしがあんたと結婚したいってわけじゃないんだからね」
　栗林は自分の覧に署名捺印を済ませた婚姻届を取り出した。何故か知らないがその顔は真っ赤である。

「そ、それは駄目だろう！　俺はボーゼスと結婚したいってのに、お前との婚姻届出してどうすんだよ！」
「ちっ、駄目か」
「駄目か、じゃないっ！」
栗林は悪戯の露見した子供のように舌打ちすると、婚姻届を大事そうに畳んで懐のポケットに押し込んだ。その様子を見ると、婚姻届を破棄するつもりはなく、別の機会に使用する心づもりがあるようだ。あきらめが悪いとも言える。
「じゃあ、やっぱり隊長のところに行くしかないわね。隊長に死亡フラグを立てて貰うわよ」
死と結婚という言葉が一つの文脈で語られる意味が理解できなかったテュカ、レレイ、ヤオの三人は「何の話？」と詳しい解説を栗林に求めた。
「戦闘に突入する前に『この戦争が終わったら結婚するんだ』とか、『今度子供が産まれるんだ』とか、その手の発言をした兵士は、戦死するって言われているのよ。『ここは俺に任せて先に行け』っていうのもダメらしいわ」
ヤオは、お守りをぶら下げている胸に手を当てて「……験担ぎ、ジンクスと称されるものだな。確かにそれは大切だ」と肯いた。そして「此の身も、日々護符の強化を図っているぞ」と日頃からどんなことを心がけているかを説明した。具体的には、複数の五百円玉を用いた護符を作ったらしい。
レレイは、「もう、三日夜は済んでる。すでに結婚しているのだから、今更結婚するという発言

をさせても意味は無い」と唇を尖らせた。だが、彼女の発言は何故か皆からスルーされてしまうのである。

テュカは「お父さんに死亡ふらぐを立てさせてどうするのよ」と、少し青ざめた。そして、ロウリィの袖を引いて栗林達から少し離れると小声で問いかけた。

「ねぇねぇ、大丈夫なの？」

するとロウリィは、駄々をこねる子供を宥めるように返した。

「エムロイの使徒の立場で言うと、死亡ふらぐなんて関係ないから心配はいらないわぁ。でも物は考えようよぉ。これって絶好の機会なのぉ」

「どういうこと？」

「結婚……再婚なんてぇ、考えてもないって態度のヨウジぃに、例え嘘でも『この戦争が終わったら、結婚するんだ』って言わせることに成功したらぁ、身近にいるわたしぃ達のことを、そういう意味で意識させることになるって思わない？」

テュカは「そうかな？」と首を傾げた。

「ほんの少しでいいのよぉ。でも、その少しがきっかけとなるのよぉ」

「でも、お父さん。自分が危なくなるって分かってそんな言葉、口にするかしら」

「大丈夫よぉ。ヨウジぃは部下思いな奴だしぃ、自分は戦場に出ないでベッドで寝ているだけって思ってるからぁ、いろいろぶちぶち言いながらも、きっとこの戦争が終わったらぁ結婚するって口

にするわよぉ」

テュカは富田にチラと視線を送りつつ「……そ、そうかもね」と答えた。

「人間って、よっぽどの屑でないかぎりはぁ、例え嘘でも誰かに向けて口にした言葉には縛られるのよぉ。そしてヨウジぃは屑じゃないわぁ。だからこれはもの凄く意味のあることなのぉ。嘘から出た実（まこと）って言葉もあるでしょ？」

テュカは納得したように大きく肯いた。伊丹に嘘でも良いから今度結婚するんだと言わせることの重要性を理解できたのか、「嘘から出た実」という言葉を何度も呟いていた。

傍らで聞いていたレレイの「その論理には破綻がある。そもそも三日夜が成立しているから、結婚する宣言に意味はない。死亡フラグも発生しない」という主張は、またしても皆から無視されてしまった。

レレイは相変わらずの無表情だが、どことなく不満そうな雰囲気を体中から放っていた。

時計をチラと見た栗林が、「そろそろ行かないと」と言い出す。

「と、とにかく無事に隊長の所まではたどり着けますように！　はらいたまえっ、きよめたまえっ！」

栗林は、ロゥリィに向けてパンパンと柏手を打つと両手を合わせた。

それを見た富田も、ロゥリィに向けて「ボーゼスと結婚できますように」と呟いて柏手を打つ。

死亡フラグ、何それ？　と気にしてないそぶりを見せながらも、少しは気にしているらしい。

「そのカシワデって儀式はぁ、何度されても慣れないわねぇ」

気分はいいけれどと、ロゥリィは苦笑を見せ、二人の祈りを受け止めて掌を二人に向けた。
「戦士達が、道中の危険を察知し、避け、苦難に耐え戦い抜くことが出来ますように」

皆が去ると、レレイだけが食堂の貴賓席に残った。
かき入れ時の終わった食堂内には人気がない。しかも貴賓席は、店の奥にあり外の騒音が入り込まないため大変に静かなのだ。考え事や書類仕事、小説の執筆にはうってつけの環境である。
レレイはテーブルの上いっぱいに書類を広げると、書かれている文字の細部を見比べ、書き込んでは消し、消しては書き込むという作業を繰り返した。
こうして書物や書類に向かっているレレイの姿は、このアルヌスでよく見られるものだ。
研究室に籠もって一人で黙々と書物を読んでいるという印象の強い彼女だが、実のところ彼女は机に向かっているより、静かな野外で書物を読むことを好むからだ。
だが「ふぅ……」と小さなため息をついたり、頭を掻きむしったりする姿となると、滅多に見られるものではない。課題の解決にかなり苦心していることが分かる。
何度やっても数字の合わない電卓での計算を諦め、レレイは丸い小石を溝にならべる特地の原始的なそろばんを取り出し小石をつついと指先で弾いた。
「だいぶ、お悩みのようですね」
そんなレレイの前に、湯気をあげる香茶のカップをおく料理長。かちゃりと甲高い音も小さく抑

えて、差し出された白磁のカップは曇り一つなく、浅黄色の透き通った液体で満たされていた。
「難しい問題が山積している。その解決をしたい」
「それは、どうやって皆を納得させるか考えてらっしゃるからでしょ？　『門』を閉じるのをやめちまえば楽になりますよ」
「そういうわけにはいかない。このままでは大変なことになる」
「けどその大変なことだって今日とか明日のことじゃないんでしょ？　だったら何も今、皆が嫌がることを無理にすることはないって思うんですけどねぇ」
「その考え方は間違っている。事態の先送りは問題を大きくするだけ」
「正しいことは、今すぐにしないといけないってことですか？」
「違う。皆が嫌がっているのは『門』を閉じることではなく、『門』を閉じることで生活が変わること。ならば考えるべきは、生活を変えないで済む方法」
「そんなもの、あるんですかねぇ？」
料理長の訝しげな言葉に、レレイはカップの中身を啜りながら「素案がある」と言ってびっしりと書き込みでいっぱいの書類を彼の前にならべた。
「開拓民を募っていくつかの村を新規に造り、それぞれの村の中心地に自分達の街を造るという計画を考えている。そこに皆の働く場所を創る。その街でなら、このアルヌスと同じ生活を続けていくことも可能」

「まさか!?　もしかしてこのアルヌスみたいな街や村を、あちこちに造っちまおうって言うんですか？　俺たちの俺たちによる、俺たちのための街を!?　そんな勝手をニホンが許すって思ってるんですかい？」

「許される。このアルヌスには日本という国の『州』という自治体が置かれる予定。日本の制度では、それらの自治体政府は、日本国籍を有する者が選ぶ代表者によって運営される。この土地に住む日本国籍を持つ者とは、私達のこと。つまりこのアルヌスは、ここに住む私達のものという意味」

「ええっ!?　ニホンから代官とか総督とか領主が来て、支配するのと違うんですかい!?」

「最初は、行政長官が来る。けれどいずれは今説明した方式へと移行されていく」

「そんなのあり得っこないですぜ。絶対に無理だ。だいたい村や町なんて代物をどうやって造るってんですかい!?」

「もともと組合は、コダ村の再建計画をたてていた。それを大規模に行えばよい。お金はいくらあっても足りないけれど、上手く切り詰めればなんとかなる。住民も種族を問わず募集する。きっとあちこちから多くの種族が集まる。ドワーフ種も、セイレーン種も、エルフもキャットピープルも、ヴォーリアバニーも。様々な種族がこの地に興味を持っている。もちろんヒト種も。あとは実行するだけ。これならば『門』がなくなっても、大丈夫と皆を説得できる。困難な事業だけどやる価値はきっとある」

「……初耳ですぜ。どうしてその話をもっと早くにしなかったんですかい？」

「日本の政府との条件交渉をしていた。確かなことが言えないのに、皆をぬか喜びさせたくない」

「けど、そんなのうまく行くはずがないですぜ。だいたいそれだけ美味い話があるってのなら、腹黒い連中が入り込んで来てしっちゃかめっちゃかにされちまうでしょう？　このアルヌスだって、最初の頃はいろいろあったじゃありませんか!?　それを何カ所も一度にだなんて、思ったように行くわきゃない！」

料理長は、首を振る動作を繰り返して、あたかも自分に言い聞かせるように「うまくいくわけない」と繰り返した。

それは、いい話があると持ちかけられた儲け話を、理解できないから悪徳商法だと頭から決めつけて断ろうとする新米商人の姿に似ていた。

一般消費者が悪徳商法の被害に遭わないようにするためならば、その対応は正しい。

だが商人であるなら、舞い込んでくる儲け話を頭から拒絶して耳を貸さないようでは失格と言えよう。ましてやこれは物の売買にまつわる話でなく、自分達の将来を決める重要な提案なのだ。分からないから最初から耳を貸さないという態度をとれば、自分のことを自分で決める権利を放棄するのに等しい。それはつまり、他人に良いように操られることを意味しているからだ。

もちろん、料理長のみを責める訳にはいかない。

レレイの語った内容はあまりにもスケールのでかい話で、普通の特地人に理解できるものではないからだ。いみじくもレレイ自らが語ったように、じっくりと丁寧に話をして、相手の理解度に合

わせて説明をする努力が必要となる。
「だからこその『門』。『門』が閉じられている間に、しっかりとした土台を固めてしまえばよい。最近になって増えてきた戦災難民対策にも繋がるから、賛同を得やすい」
だがレレイはレレイで、物事を説明するのに言葉が少な過ぎるという悪癖を持っていた。しかも頭の回転の速さが悪い方に働いてすぐに話題が次のことへと飛んでしまうのだ。
「……ところで、これは何？　はじめて呑んだ」
「そ、それはナルコという香草でさあ。極北の草原でしか手に入らない珍しいものらしいです。この間、行商人が持って来ましてね、試してみて欲しいっていうんで仕入れてみました。どうです？」
「ナルコ？　聞いたことがない」
レレイは頷くと、さらに一口含んだ。
「よい味と香り」
レレイにしては珍しく、うっとりとした表情をつくった。
「気に入ってもらえたみたいでよかった。レレイさんですら知らないものがあったんですなぁ。もしご存じだったらどうしようかと冷や冷やしましたよ。実はナルコっていうのは、眠りを誘う薬草なんですよ」
途端にカップが床に転がって、レレイがテーブルの上に倒れ込む。
床や書類が、こぼれたナルコ茶に浸されて薄緑に染まっていった。

「効き目もばっちりだ」
木の床を蹴る靴音が近づき、三つの影が小さな寝息を立てるレレイを覆った。
「この娘がそうなのか？　噂で聞いただけではどんな女丈夫かと思っていたのだが、見れば年若い小娘だ。拍子抜けしたぞ」
「しかしながらメトメス殿、この娘もまた炎龍討伐の英雄の一人なのです」
パナシュは侍従に扮したディアボに向けてそう説明すると、手早くレレイの足首、両腕を縛り上げて猿ぐつわを噛ませた。
ただ力任せに縛るのではなく、血の巡りが止まらないように慎重に力の要れ具合を調整している。しかも衣服の裾が乱れないようにという配慮をするのも、パナシュが女性だからであろう。
「確かに。この土地に自分達の国を作ってしまおうとは、とんでもなく壮大な気宇の持ち主ですねえ……いや、気宇の持ち主だ」
侍従メトメスの感心したような物言いを、ディアボは鼻で笑い飛ばそうとして失敗した。彼もまた、レレイの語った言葉を妄想と笑い飛ばせない何かを感じていたからである。
『門』を失うからには日本との商売も終わる。商いの規模を小さくするしかないと、皆が悲観的になって項垂れていく中で、いっそのことこの新天地に街や村を興して、自分達の住みやすい環境を作ってしまえという大胆な構想力に圧倒されたのだ。
「こういう出会い方でなかったら、この娘に『政』について意見を語らせてみたかった」

「この歳で導師号を得た賢者です。きっと、帝国の柱石となってくれたでありましょう。今からでも遅くないと思いますが？」

今が後戻りする最後のチャンスであることを、パナシュは軽く仄めかす。だがディアボは誘惑を振り払うように言った。

「いや。我々に残された道は、最早これしかない」

「箱の方も用意は出来てますぜ」

料理長が一辺が一・五メートルほどにもなる木箱を持ち出してきた。

中にはマシュマロサイズの発泡スチロールが緩衝材として大量に詰め込まれている。

俺も手伝おうと言ってレレイに手を伸ばそうとしたディアボだったが、パナシュは殿方のお手を煩わせるには及びませんと拒否した。

「もしかして俺に、他の女を触らせたくないとか思っているんじゃないだろうな？　こんな小娘だぞ」とまんざらでもない表情となるディアボ。見透かされまいとしているパナシュをマジマジと見て苦笑し、「まぁいい、そなたがなすが良い」と手を引っ込めた。

パナシュはレレイを胎児のような姿勢に折り曲げると、壊れやすい陶器を扱うかのように箱に詰め込んだ。魔導師の杖を斜めにしてどうにか入れると、さらに上からざらざらと緩衝材を被せてレレイをその中へと埋める。

木の蓋を被せて、釘を打ち込んでいく料理長。

だがディアボは、「ちょっと待て」と料理長の作業を止めた。
「そんなにきっちりと蓋をして空気は通るのか？　娘を窒息させては元も子もないぞ」
「心配性だね侍従さん。見ての通り箱は隙間だらけだから大丈夫ですぜ」
実際、木箱の造りはとても粗く、棘が毛羽立っている。
板と板の間には一センチ近い隙間が出来ていて、料理長はその隙間を埋めないように、ぺたぺたと壊れ物、天地無用、手鉤使用禁止、水濡れ注意といったシールを貼っていった。
「そうか。分かった、蓋をするのはこちらに任せろ。他にしなければならんことをしてくれ……」
「分かりましたメトメスさん。後はお任せします。俺はその間にこっちを片付けます」
すると料理長は、金槌と釘をディアボに渡し、自分は店の一般席に向かった。
ディアボも、後のことをメトメスに任せるとパナシュとともに店長の後を追った。料理長はカウンターに突っ伏しているメイアに向けて書類を突きつけていた。
それは、ＰＸに品物を納めている会社に返品する際の書類である。送り先は、組合の取引先として許可を受けた日本企業。それだけにＰＸからの返品の際は、ゲートの検問でも木箱を開いて中身を見ることはない。組合も今やそれくらい信用されているのだ。
「ほら、返品の送り状だ。サインしろ」
顔をあげるメイア。その顔は、泣いているような笑っているような、苦しんでいるかのような複雑な表情で覆われていた。

「本当にやるニャ？」
「もう後には引けないってことは分かってるだろ？　これがうまく行きゃ『門』を閉じるのは先送りになる。お前が気にしている男とも離ればなれにならなくて済むだろ？」
「ううっ……でも、こんなことは最低の恩知らずがやることだニャ」
「何言ってるんだ？　これはレレイさんの身を守るためでもあるんだぞ。レレイさんは必ずゾルザルに狙われる。ならどっかに隠す必要があるだろう？　しかも誰にも分からないようにな」
「でも、何で荷物みたいにして、ニホンに送る必要があるのかニャ？」
　するとディアボが、メイアを誘惑するかのように囁いた。
「この地に安全な場所などないからだ。『笛吹き男（バイパー）』だったか？　あの炎龍を討ったことで名高いイタミですら、手を退かせるのにゾルザルを締め上げるしかなかったと聞くぞ。そんな奴をゾルザルがもう一度雇ったらなんとする？　きっと無事では済むまい。だが出入りが厳重に管理されている『門』の向こうならば、絶対にゾルザルの手は届かない。安全だ。違うか？」
「それはそうだけど、それだったらレレイさんとちゃんと話して……」
「それでは『門』を閉じるのを止めさせることは出来ないではないか!?」
　その通りだと料理長も追従した。
「だから俺達がやるんだ。俺たちならレレイさんを守れる。そして『門』も残る。一石二鳥だ。泥を被るのだって恩返しのウチだ。確かに良心は痛むかもしれないが、後できっと感謝される。だか

ら手伝え」
料理長の言葉にメイアは、凍り付いたように動きをとめた。
悩んでいるのだ。だが、有無を言わせない二人の説得に、おそるおそる手を伸ばし、震える手で差し出された書類にサインした。ペンを置くと、ついにやってしまったという体で、カウンターに突っ伏した。
「これでよし。では、『ちゅうごく』に連絡をするとしよう」
ディアボはそう言うと、懐から携帯電話をとりだした。
「ここを押して、これを押したら」と、よく分かっていない操作を何度か間違いながらしていく。そして「繋がったか？　まぁいい。話して見ろ」とパナシュの耳に押し当てた。
「侍従殿。さかさまです」
そう指摘されて「そんなことは分かっている」と慌てて直すディアボ。
パナシュは盛大にため息をつきつつ、携帯電話を受け取ると習い覚えた日本語で話しかけた。
「こちらディアボ殿下の代理の者だ。『玉璧』の荷造りは済ませた。繰り返す、荷造りが済んだ。約束通り、目印をつけて荷馬車に載せて発送するので受け取りの手配を頼みたい」
そんなパナシュの声を聞いていて、どうやって中国に荷を受け取らせるのかが気になった料理長はディアボに身を寄せて小声で尋ねた。
「このまま送りつけたら、宛先に連絡とは違う荷が届いて、ちょっとした騒ぎになっちまうと思う

んですけど、どうやって目的の相手に荷を受け取ってもらうんで？」
「荷が運搬中に盗賊なんかに奪われたりすることは、よく聞く話だが、向こうでは起きないか？」
料理長は「なるほど」と肯いた。
「けど、中身はナマモノなんですからね。出来る限り穏便に頼みますよ」
「分かっている。あの娘を傷つけるのは俺の本意ではないのだからな。そのようにきっと伝えさせよう」
ディアボは、メトメスが木箱を台車に載せて運んでくるとニヤリと微笑むのだった。

＊　＊

特地と日本との往来は厳重な管理下にあって、日本人だろうと特地人だろうと自由に往来できる状況ではない。とは言え、アルヌスには大量の自衛官が派遣されて滞在しているので、多くの例外が認められ人や物の流れを円滑にしていた。
例えば特地に派遣されている自衛官は、休暇をとると許可を受けて銀座へ、そして銀座からそれぞれの目的地へ散っていく。有事の真っ最中にカレンダー通りの勤務体制をとることはないので、毎日誰かが任務に就き、曜日に関係なく誰かが休暇をとる。そのため、ほぼ毎日誰かが『門』を通過しているのである。

さらに、陸上自衛隊の輸送隊は毎日ひっきりなしに往復している。

機械化された現代戦において必要となる物資の量は膨大だ。

戦闘要員一人あたりに平均で二・七キログラムの食料と九キログラムの水や燃料、弾薬、その他で九十～百キログラムを毎日必要とする。一万人が戦い続けるには一日に千トンもの物資を輸送する必要があるのだ（ちなみにその内の六〇パーセントは燃料である）。そのため毎日、大型のトラックが長蛇の列を作っていた。それは銀座という人の集まる街にとっては軽くない負担であり、交通渋滞の原因ともなっていた。

しかも最近はこれに加えて、特に許可を受けた民間物流会社のトラックが銀座の駐屯地に出入りする。隊員個人がやりとりする宅配便、あるいはアルヌス協同生活組合の店舗に並ぶ商品は、これら物流会社によって運ばれているのである。

ただし民間の業者が入ることが出来るのは、『門』を囲うように作られたドームまで。一歩たりとも『門』を越えることは出来ない。ドーム内のプラットホームにおろされた荷物は、フェンスの仕切りの中で開封されたり、各種の検査を受けた後に『門』を通り、アルヌス協同生活組合の倉庫まで運ばれるのである。

だが、逆は同じではなかった。注文とは違う品物が送られて来たり、頼んでない品物が間違って届いたりなどの手違いに対する返品に関しては、送り状のチェックを受けるだけで『門』を越え、ドーム内で民間のトラックへと積み込まれる。

『門』を通り抜けたテュカ達が、検問所で通関手続きを待っている間も、フェンス越しに見えるプラットホームでは様々なトラックが荷台を寄せて、様々な品物を降ろし、あるいは積み込み作業をしていた。

テュカの後を追いかけるようにして届けられたPXからの木箱も、小型のフォークリフトを操る運転手によって今まさにトラックへ積み込まれようとしていた。だが、箱の角をあちこちにぶつけ、倒しかけるという乱暴な作業が目を惹いて、テュカは思わず叫んだ。

「そこの貴方！　もっと慎重に運んでよ！『壊れ物』って書いてあるじゃない！」

だが、出入りするトラックの騒音の立ちこめるドーム内で、フェンス越しに叫んだところで声が届くはずもなく、運転手は乱暴な荷運びを改めない。苛立ちを堪えきれなくなったテュカは、精霊魔法を使って見えない風の道を拵えると、再度声を運転手へと届けさせた。

「もう少し慎重に運んでっ！」

その耳元で怒鳴られたような声に、さしもの運転手もビックリしたようで大仰に振り返ると声の発信源を探した。

「輸送の途中で壊れると、こっちが損を被らなきゃなんないの。だから慎重に運んで頂戴！」

運転手は戸惑った表情となった。きょときょとと周囲を見ても、自分を怒鳴った女声の主が見当たらなかったからだ。

「こっちよ、こっち」

やがて、離れたところで腰に手を当てて険しい表情で仁王立ちしているテュカの存在に気づく。
そして、まさかぁとでも言いたげな表情をする。だが視線を合わせたテュカが「そう、あたし。きちんと見てますからね。丁寧な仕事をしてね」と繰り返すと納得できたのか、運転手はぺこりと頭を下げ、了解したことを示すように片手を揚げた。
「次の二十三番の方。テュカさ〜ん、審査しますよ！」
栗林達の通行手続きが終わり、女性係官がテュカの番号と名前を呼んでいた。
もう一言、二言注意したいところだったが、もう行かなければならない。テュカは「あ、はい」と慌ててカウンターへ向かった。
そこでは制服をまとった女性自衛官から、形式的ながらいくつか質問を投げかけられた。
ここ数日病気にかかりませんでしたか？　今、熱はないですか？　荷物に日本国内で規制されるような、薬物、刀剣などを持っていないですか？　等々。
それらの全てにテュカは「いいえ」と流暢な日本語で否定し、確認書に署名する。すると係員はテュカの差し出した書類に、真っ赤なスタンプを音を立ててついた。
随行する栗林や富田らは、護衛の任務を兼ねているので質問はないし、武器の携行も認められている。警衛に関係書類を見せて敬礼して終わりであった。
「では、いってらっしゃいテュカさん」
こうして三人は銀座へと入ったのである。

特地人のテュカが、随分すんなりと通行が許可されたのは、アルヌス協同生活組合の幹部故に例外的な扱いを受けているからである。日本政府と交渉する際に必要ということもあって、森田総理から直々に特別許可証が発行されたのだ。しかも、それ以外の配慮が彼女達には与えられていたりする。例えばこれだ。

「今日も、よろしくお願いね」

テュカは、栗林達を引き連れていつものことのように、待ち構えていたワゴン車の後部座席へと乗り込んだ。

前もって連絡さえしておけば、安全確保、機密保持等々の都合といった様々な理由から、黒服を着た運転手の付く乗用車まで用意してもらえるのである。

だが運転手だけでなく、助手席にも誰かが座っていることに気付いたテュカは身を乗り出して声をかけた。

「あれ、もしかしてコマカド？」

「おはようテュカ……さん、今日はまた、随分とめかし込んだな」

助手席にいたのは駒門だった。運転席の黒服と並んで、二人の男達はテュカの姿を見ただけで魂を奪われたように頬を赤らめた。

「おはよう？　随分と時差が出てきたのね。こちらではまだそんな時間？」

「おっと失礼。今は、おはようと、こんにちはの区別のきわどい時間帯ってところだ。特地はもう

昼過ぎか？」
「そうよ。ところで今日は何か特別な日？　コマカド自身がわざわざ迎えに来てくれるなんて」
「ちょっとなぁ。銀座が少しばかり騒がしくなってるんで、俺が直接来たってわけだ」
駒門は運転手にエンジンをかけさせると、テュカに顎をしゃくり窓の外を見るように促した。
銀座駐屯地のフェンス周辺に、多くの人々が集まって車道を練り歩いている。見ると、そろいのTシャツを着ていたり、プラカードを持っていたりする。それらには……。
「日本政府は、銀座事件の外国人被災者にも補償せよ！」
「『門』を閉じずに、フロンティアを我らに開放せよ！」
「国際社会に特地を委託せよ！」
「宇宙条約を遵守せよ！」
「特地の環境を破壊するな」
「日本人は鯨やイルカを殺すな！」
といった主張が書かれていた。
もちろん、独特の書体で書かれたそれらをテュカが読めるはずがない。
「何が書いてあるの？　何かの宗教行事？」
「あれは『デモ行進』って言うんだ。民主主義の国家では、ああやって人々が集まって政府に不満を表明したり、主張したいことを皆に向けてアピールしたりすることが許されている」

見ると、警察官が「立ち止まらないで下さい」と拡声器で呼びかけながら交通整理をしている。それに従うデモ参加者も、まるで運動会の入場行進かと思うほどに秩序だった動きを見せていた。

駒門は、それを見て「ん？」と眉を寄せる。胸騒ぎにも似た違和感を覚えたのだ。どうにも不自然な香りがする。だが、「これって、暴動とかになったりしない？」とテュカに話しかけられ気が削がれてしまう。

「最近の日本じゃまず無いな。昔はいろいろな連中が、政府を攻撃すると称しながら、その実自分達と同じ弱い立場の人が所有する車をひっくり返したり、商店を営業不能に追いやって酷い損害を与えたりもしたんだが、今は滅多にない。海外だと暴動に発展したり、気に入らない国の国旗を焼いたり踏みつけたりする例もある。イギリス、ちょっと前にはフランスで暴動騒ぎがあったりしたな……」

「野蛮ねぇ。そんなゴブリンみたいな連中がいるの？」

「人間って堕ちるのは案外簡単なもんなんだ。我々だって、そうならないように注意してないと、あっという間に同じレベルになっちまうから気をつけなきゃならん」

そこまでは関心がないのか、テュカは「ふ～ん」と呟き視線を他所へ向けた。駒門も「いつものように頼む」と運転手に出発を命じた。

テュカ達を乗せた乗用車は、警官が踏切のように人の流れを止めてくれた間隙（かんげき）を縫い、銀座の駐屯地から道路へ出た。

いつもなら、そのまま車の流れにのって銀座から離れることが出来るのだが、今日はそうもいかなかった。長いデモの列のために渋滞が出来ていたからである。乗用車の後ろには、運送会社の大型トラックが数台続いてるが、その運転手達も皆うんざりしたような表情を見せていた。

ふとテュカがもらした。

「ニホンの人って、比較的同じ色合いの肌に、黒髪って印象があったんだけど、こうして見ると意外と多彩なのね」

車窓から見える群衆は、アジア系ばかりでなく白人種、黒人種がまざり国際色が豊かなのだ。もちろん圧倒的多数はアジア系である。だが、それだけに毛色の違いが目立つのだ。

「実はこのデモは、国際ＮＧＯが主体となっているんだ。主催者は一応、日本人ってことになってるんだが、ふたを開けてみたら中国、韓国、フランス、イギリス、アメリカ、ロシアなどからぞろぞろやって来てこの始末だ……だから俺まで出張る羽目になっちまったってわけだ」

「そうなんだ。ありがとう」

「いいえ、どういたしまして……だな」

デモ参加者達は様々な旗を持ち寄っていた。紅い旗。赤と白のストライプに一部青地に白い星をちりばめた旗。赤白青の三色旗など、いろいろだ。

「この色とりどりの旗は、もしかしてそれぞれ参加者の国の旗かしら？」

「そうだ。あの赤いのが中国で、これが韓国。こっちの派手な横縞と星をちりばめたのはアメリカ

合衆国、そしてフランスとイギリス。あれはロシアだな」
「でも、外国人が他国で騒ぎなんか起こして問題にならないの？」
「まぁ、法律に反しない限りは……だな。国連総会とか、国際的な会議が行われるところでは国際ＮＧＯがデモとか集会を開いたりするのは普通のことだ」
「そうなの？」
日本についての基本的な知識がまだまだ不充分なテュカには、海外から来た人間にすら示威行動を許す日本のありようは驚きでしかない。
「でも、まるで軍隊みたいに秩序だってるのね」
テュカの感想を耳にした途端、駒門は先ほどから感じていた違和感の正体を悟った。
そうだ、このデモ隊に参加している外国人達は、国際ＮＧＯを名乗っている割には不自然なまでに統制がとれているのだ。その行動も指揮官からの指図でなされているように見えなくもない。「軍隊みたい」……テュカの感想こそが、全てを言い表してるように思えるのだ。
駒門は不安感の正体に気付くと、いち早くこの場から脱出すべく運転手に命じた。
「おい、ここでＵターンして対向車線に入れ」
だが、これまで無言を貫いていた黒服が、この指示に戸惑いの表情を示した。
「ここは、Ｕターン禁止です」
「かまうもんか。今はゲストの安全が第一だ、行け！」

「でも、対向車が途切れてからでないと、事故ります。まずいですよ」
渋滞のせいもあって対向車がなかなか途切れない。ムリに割り込めば、接触事故は免れないだろう。運転手が躊躇(ためら)うのも当然であった。だが、その数秒間の逡巡が皆を騒動に巻き込む。
「え、あれっ！　ちょっと、なんか変よ。何？　何？　何が起きたの!?」
外を眺めていたテュカが叫んだ。
それまで整然と行進していたはずの国際ＮＧＯのグループの一つが、突如として列を乱し警官の制止をふりきって一斉に走り出したのである。
その一部は、停止していたトラックや乗用車の間にまであふれ、ただでさえ渋滞していた交通を一気に麻痺させる。
警察官はホイッスルを鳴らし、デモ参加者に列に戻るように声を張り上げた。
だが、あちこちで同時多発的に起こされた突発的な出来事に対処しきれず、数の勢いに圧倒されて、警官達の方がもみくちゃにされてしまった。
テュカ達の乗るワゴン車の周囲は人海で埋め尽くされ、前にも後ろにも動けなくなってしまったのである。
襲われる。そう感じた栗林と富田は反射的に銃を構えた。だが、駒門から撃つなと叫ばれて引き金から指を離す。
「ここは特地じゃないぞ。頼むから二人とも、頭を平時モードに切り換えてくれ！」

とは言え暴動とも言える騒ぎは、もの凄い勢いで拡大し、比較的冷静な富田ですら「撃たずに、どんな対処するんですか！」と怒鳴り返したほどである。デモ参加者はトラックに群がると荷台に積まれていた木箱を道路に投げ落としたり、中身を引っ張り出そうとしたりするという無法行為に手を染めているのだ。

「連中の目的は、略奪か⁉」

「いや、それはないと思う」

駒門は運転手の言葉を否定した。確かに無統制な暴動にも見えるが、彼の目にはデモ参加者達が無秩序に暴れているようには見えないのだ。

実際に、通りに面した銀座の商店やデパートなどはショーウィンドウが割られ、商品が略奪されている。銀座は高価な商品を並べている店が多いため、その被害は甚大な金額となるだろう。だが、よくよく観察すると、そういった略奪をしているのは騒動に便乗したデモ参加者の一部でしかなく、中核となっている連中は、一つの指揮系統に従って行動しているのである。その統制を受けた一団は、トラックの窓を叩き割って、中から運転手達を引きずり下ろすと、荷台に積まれた荷を引っかき回していた。

「彼奴ら、何かを探しているみたいですね」

運転席の黒服もそのことに気がついたようだ。

「そうだな……」

トラック一台の荷物をあらかた調べ終えると、一人の男が次の一台に指を向けて何かを叫んだ。それに従って男達が一斉に走り出し、瞬く間に次のトラックに群がっていく。

「あいつら、何を探してるんでしょうね？」

「分からんが、とにかくここに留まっているのは拙い」

何としても脱出しなければならない。それが駒門の判断だった。

駒門はシートの下に常備されている赤い発煙筒を手に取ると、後部座席を振り返った。

「よし、脱出するぞ。これから発煙筒を焚く。煙が車内に充満したら、一斉に外に飛び出してくれ。車から煙が吹き出せば、火がついていると思うだろうから連中も少しは離れるはずだ。そしたら、その隙を突いて一気に走りだせ。栗林と富田、テュカさんをしっかり守れよ。俺はこの腰だから追いつけんと思うから先に行け。集合場所は……そうだな、とりあえず渋谷の駅交番。そこで合流だ。いいな！」

「了解！」

栗林と富田の二人は武器を手にしているのを見られる方が危ないと考え、それぞれ鞄に押し込んだ。「準備良し」の声で駒門は発煙筒に着火する。

「あ、あれ……」

車内が煙が充満する寸前、テュカは前にいたトラックの台から木箱が下ろされているのを目撃する。それは『壊れ物』『天地無用』などと書かれたシールが張られていた。地面に叩きつけられた

ら中身が壊れちゃうと心配になったのだが、暴徒達は何故かその箱に関しては慎重に扱っていたのである。

「ちょっと、それ、どこに持って行くの！　組合の荷物よ！」

思わず声を上げるテュカだったが、刺激性の強い煙に視界を覆われ、最後まで木箱の行方を見届けることは出来なかった。

「行くぞ。いまだ！」

突然、目の前のワゴン車から白い煙があふれ出るのを見たデモ参加者達は炎上爆発するとでも思ったのか、潮が引くように車から離れていく。

そのわずかに開いた隙をついて、栗林とテュカは車から降りた。

興奮した群衆に条理は通じない。理由のない暴力が犠牲者を求めて渦巻くなかで、周りの男達は二人を標的にして汚れた手を伸ばそうとした。だが、富田がそれを振り払う。たちまちもみ合いから乱闘へと発展し富田は周囲からの無数の拳によって殴られてしまった。

だが、富田は少しも怯まない。両腕を顔の前で交差させ、栗林とテュカが進むための道を強引に切り開いていった。

後ろ側から抱きすくめようとした男を、回し蹴りで蹴倒した栗林が叫ぶ。

「行ける!?　富田!?」

「任せておけ二人とも、俺に続け！　うおおおおお！」

先頭に立った富田は群衆を押しのけるように突進する。
「そうこなくっちゃ。あんたのそういう所が見たかったのよ！」
栗林は嬉しそうに叫ぶと、テュカを守ってその大きな背中の後に続いて走りだした。

02

ゾルザル討伐の合同軍を送り出した後のイタリカは、妙に閑散としていた。
フォルマル伯爵家の領内に残されたのは伯爵家の私兵部隊と、亜人の諸部族部隊。そしてピニャの騎士団である。これこそが正統政府軍の初期の構成であり、彼らが此処に集まって来たばかりの頃は、その颯爽（さっそう）とした足取りでイタリカの街は高揚した空気に包み込まれていったのだ。
だが今や、その士気は下がるだけ下がり、だらけた気分が蔓延している。
兵士達からはやる気というものが消えていたのだ。
朝靄（あさもや）のまだ晴れないなか、城壁の上に立つ見張りが交代の儀式を執り行っているが、今の彼らを動かしているのは、旺盛な戦意ではなく、習慣という一種の惰性でしかない。斜面を勢いよく転がっていた巨石も、平地に至ればやがては勢いを失って静止する。それと同じように兵士達が従っている惰性もやがては尽きて、後に残るのはかつては軍であったという残骸だけだろう。その途中経過

をイタリカの住民達は見せつけられていたのである。
白薔薇隊隊長ヴィフィータは嘆いた。
「困っている時に限ってこれからは亜人の時代だとか、亜人の地位向上とか言って持ち上げてやがった癖に、なんだよこの掌の返し方はよぉ」
帝国正統政府を立ち上げた当初、講和派貴族達は兵力不足に悩んでいた。
援軍を求めて外国や諸侯国に使者を送っても色好い返事を得ることが出来ず、盗賊や脱走兵などのならず者達にさえも相手にされないという状況に陥っていたのだ。
そのため、彼らは苦肉の策として亜人部族に協力を求めた。帝国内での地位向上を代償にして。
具体的には諸部族の族長階級にある者を帝国貴族として伯爵や子爵に任じ、空席となった議席を埋める形でそれぞれを元老院議員に任じたのである。
それは、国の支配体制の部外者……よく言えば客人として扱ってきた亜人種を帝国の一員とみなし、帝国の行く末について共に論じ合い共に担っていくという方向に舵を切ったことを意味していた。
亜人部族もこれまでのけ者にされてきた国家運営に携われるようになると思えば、手を貸してやってもいいと思うようになる。こうして正統政府軍には、五十四種族の兵士達が、各地から集まって来たのである。
だが情勢は変わった。

外国や諸侯国からの援軍が到着して、これに比例してヒト種の傭兵が充足しはじめると、帝国正統政府の貴族達は掌を返した。

それまで亜人の族長や有力者が占めていた正統政府軍のポストを、ヒト種の将校、ヒト種の士官に与え、いざ戦争が始まると「お前達はもういいよ」とばかりに亜人部隊を置き捨てて行ってしまったのである。

もちろん、そんな恥知らずな内情を自ら曝すようなことはしない。

ピニャも「真に困っていた時に助けてくれた者にこそ、皇帝陛下の守護を任せられるのである」と左右に語り、士気の維持をはかっていた。

「いずれ、我らにこそ決戦の場が与えられる。露払いは他の者に任せて我らはその時まで英気を養っておくのだ」

こんな言葉が、空中分解すれすれの彼らをどうにかまとめ上げていたのである。

だが、次々と届く知らせは正統政府軍の破竹の勢いを伝える物ばかり。自衛隊を主力とする合同軍が苦境に陥ることなどあり得ないように見え、イタリカが危険に曝される状況など、誰にも想像できないのだ。

ピニャの言う決戦などないと気付いた亜人兵は「何しに俺達はこんなことまで来たんだ?」という拍子抜けした気分に陥った。そして、「どうせ、こんなこったろうと思ったぜ。正統政府の奴ら、俺達を体よく騙しやがったんだ」という反感めいた気持ちを抱くようになったのである。

そんな思いに駆られるのは亜人種だけではない。ピニャの騎士団の隊員達までもが、彼らに共感する態度を示していた。

彼らからすれば自分達こそが、ピニャの剣、皇帝の楯、正統政府軍の中核であった。そんな自負を抱く者達が肝心の戦いからのけ者にされていると思えば、どうしたって不満を抱かずにはいられない。ヴィフィータの漏らした言葉も、そんな隊内に広がっている皆の心境を代弁したものだった。

「その気持ちは正当な物だし、理解できますけど、それをこの場以外で口にしてはいけませんよ」

騎士団の指揮をピニャから託されているボーゼスは、柑橘(かんきつ)の実を噛(かじ)りながら友人でもある部下を窘めた。ヴィフィータクラスの高級将校が不満を公言すれば、下々の兵士達はこれ幸いと言葉だけでなく態度で反感を示すようになるからである。

もちろんヴィフィータも、「分かってるさ」と素直に頷いて口を噤んだ。

彼女とて波風を立たせたいわけではなく、自分だけがそう思っているわけではないことを確認したかっただけで、ボーゼスに「正当で、理解できる」と言って貰えれば充分だからだ。

「それに殿下は、わたくし達こそが決戦の場に立つことになるとおっしゃってます。何の根拠もなく口にされたこととは思えないし、何か考えがおありだと思うわ」

「それこそ、信じられねえ話だよ。自分でも信じてないことを他人に信じさせるなんて器用なことは俺には無理だぞ」

「けれど、わたくしには殿下が本気でそうおっしゃっているように思えるのよ。だから気を緩めな

いでちょうだい。隊内をしっかりと引き締めて」
「ちっ……分かったよ。しょうがねぇなぁ」
ヴィフィータは項の髪の生え際のあたりを人差し指でポリポリと掻くと、ボーゼスに敬礼して彼女の執務室を後にした。
これと似たようなやり取りは、イタリカに残った様々な部族でなされていた。そしてわずかに残った志のある兵は、愚直なまでに日々の任務に励んでいたのである。
そしてその努力は、ついに報われることとなった。
哨戒に出ていた六肢族とホビットの兵が、ものすごい勢いで馬を走らせ戻って来た。
「た、大変だ大変だ！　敵だ！」
ダークエルフの警備隊長はそれを聞いて鼻で笑った。
「そんなことあるわけ無いだろう!?　その辺で昼寝でもしてて、夢でも見たんじゃないのか？　敵がいるとしても、遥か東だ。どうしてこんなところに湧いて出るんだ？」
だが、六肢族兵は懸命に二対の腕を振り回して叫んだ。
「間違っていたら儂らを処罰してくれてもかまわん！　だから確かめるために兵を出してくれ！」
そこまで言われれば、無碍に扱うことも出来ない。ダークエルフの警備隊長は半信半疑ながらも、剽悍さで知られる狼系の獣人部隊を斥候として送り出した。
「まぁ、そういうわけだ。頼む」

「はいはい。隊長さんも大変だね」
そして、送り出した狼族の斥候が転げるような勢いで帰って来るのを見て、はじめて敵が接近しつつあるという事態を上司に報告したのである。
たちまちイタリカの城市は、大騒ぎとなった。
ピニャは、「やはりそうか」とだけ答えると、ボーゼスに敵の出現方向に向けて強力な幹部斥候を出させた。
兵士がもたらした報せは、敵らしき前哨部隊を見たと言うだけで、その規模や目的を推し量れるような情報ではなかったからである。そして届けられた報告は、ゾルザルの旗印を掲げる帝国軍約一万が近づいて来るというものであった。
「兄様が直々に率いておられるのだな？」
斥候任務から戻ってきたシャンディー・ガフ・マレアが跪(ひざまず)いた姿のまま答えた。
「はい殿下。ゾルザル殿下の旗印をこの目で確認いたしました！」
「数は一万か……どうやってと問うことは無意味だな。きっと兄様は最初からここを決戦場に決めていたのだ」
「殿下は、こうなることをご存じだったのですか？」
ボーゼスがおずおずと尋ねた。
「想定された事態の一つだったとだけ答えておこう。普段の兄様の言動から見ても、こうなるよう

な予感はあった。勝ち目のない守勢の戦いで、ずるずると戦力を消耗して破れるくらいなら、乾坤一擲の大勝負に出て来る可能性もあると思っていたのだ」

「ピニャ殿下ほど、ゾルザルのご気性を理解している方はいないでしょう」

「そうでもないぞ。妾からしてみればこの事態は、ある意味で意外だ」

「意外……ですか？」

「あれで兄様は臆病者でな。こんな勝負に打って出るほどの気概は、本来は持ち合わせていないはずなのだ」

「これは異な事を。それなのに、出てくると予想されていた？」

「兄様はな、自分を英雄だと思い込んでいる。いや思い込まされているとでも言うべきかな？　英雄を形だけ真似て、色を好まねばならないと思うから次々と女を漁る。だけど劣等感が強くて、貴族の女相手にはどう接すれば良いか分からない。女の目を真っ直ぐ見られないのだ。だから奴隷女を側に置く。だが奴隷女で満足していると思われるのは屈辱だ。だから無下に扱ったり、虐待したりする。それと同じで自分を勇気のある男だと思うからこそ、こういった状況では、乾坤一擲の勝負に出るものだと思い込んでいる」

「……なんだかその、もの凄く……みっともない話ですね」

「事実みっともないのだから仕方がないな。その昔、兄様は妾の寝所に忍んできたことがあった。他の女を真っ直ぐ見れないから妹の身体で自分が男であることを試してみたかったのだろう。だが

すげなくされた。妾からすれば当然の話だがな……以来、兄様は奴隷女に走り、妾には複雑な気分を抱いたまま。昔の恥を雪ぐために妾に自分は凄いんだぞと認めさせたくってしょうがないのだ。それゆえに妾を吊し上げたりもしたのだろうが……結局は恥を上塗りして、妾に情けない姿を曝す結果になってしまった」

なんという事かと皆は揃って頭を抱えた。

帝国が、そんな男の見栄のために振りまわされているのかと思うと、皆やりきれない気分になってしまったのだ。

「兄様の妹として皆に頼みがある。このことは内緒にして欲しい。恥ずかしい話だからな」

集まったピニャの部下達は、しょうがないとでも言うように「はい」と肯いた。

最早ゾルザルのことを脅威だと思うような者は、どこにもいなかった。その意味では、ピニャは勇壮な演説をすることなく、主立った者からゾルザルに対する恐れの感情を取り去ることに成功したのである。

「とは言え、お前達がこの地に残っていたことは僥倖である。妾は麾下に最高の戦力をそろえた状態であの劣等感の塊と戦うことが出来るのだからな」

イタリカに残る兵力は八千に届くかどうかでしかない。

とは言え城壁に籠もって戦うには充分な数でもあった。城市を守り、敵を防いでさえいればいずれ味方が駆けつけて来る。要するに城に籠もってじっと耐えてさえいれば良いのだ。

「だが、それではこの内乱は終わらない。終わらせることは出来ない」
ピニャは、待ち続けているボーゼスや、ヴィフィータ、ニコラシカ、ハミルトン、グレイといった子飼いの部下達、そして亜人連合部隊の指揮官ドッツエル（ダークエルフ）、メイソン（ドワーフ）、エルナン（六肢族）、コルドール（ワータイガー）らに向き直ると告げた。
「各部族代表者達をことごとく広間に集めよ。あらかじめ申し渡しておくことがある」
ボーゼスは尋ねた。
「そうおっしゃるのは、常道とは異なる策を用いられるおつもりだからですね？」
「そうだ。妾としては、城外に出て兄様を迎え撃ちたい」
これには、皆、驚いたように互いの顔を見合わせた。城に籠もっていれば犠牲は最小限で済むというのに、あえて城外で戦うことに理由を見いだすことが出来なかったからだ。
ベドワイデン地方の領主として子爵に封じられたダークエルフの族長、ドッツエルが訝しげに問いかけた。
「殿下のご命令とあらば、それがいかようなものであろうとも従いますが、お話は聞かせて頂けるのでしょうな？」
「もちろんだ。その理由を説明するために隊長格の者を集めたいのだ」
「では、直ちに皆を集めます」
シャンディー達が弾かれたように走り出した。

＊　＊

「卿らに告げる。妾はあえて城外に出て野戦にて兄様に挑もうと思っている。その理由はこの地を本当の意味での決戦場にするため。ゾルザルをこの地から逃さないためである」

皆が驚愕の沈黙に包まれている中で、グレイ・コ・アルドが尋ねた。

「どういうことですかな殿下？　小官にも分かるように是非、詳しく教えて下され」

皆が発言しづらい時に発言し、問いにくいことを面と向かって問える位置にグレイという男はいる。歴戦のグレイが発する問いは、将兵の心に添った物が多いのだ。ピニャも、彼を納得させることが、兵士達を納得させることに繋がると理解していた。

「もし、妾達が城に籠もって戦ったとしよう。そうなればゾルザル軍は、城を陥そうと遮二無二攻めかかって来るだろう。だが戦に手間取れば臆病な兄様のことだ、いつ我が軍の本隊が戻って来るかとやきもきしはじめる。そして適当なところで見切りを付け、この地から逃げ出し、別の地に根を下ろして再起しようとする。これでは内戦は終わらない。だから妾は兄様にそれをさせないために、時を忘れさせなければならないと考える。あと一踏ん張りで、この戦いに勝利できると思わせ続けなければならぬのだ。味方が駆け戻って来るその瞬間までな」

「そのための野戦ですか？　しかし、そうなると相当の犠牲が出ることが予想されますが」

「それは覚悟して貰いたい。我らは基本的に守勢で戦い続ける。皆が懸念している犠牲も数多く出るであろう。だが、兄様を逃して、内乱が長引くよりは良いはずだ。この地で決着をつけてしまった方が犠牲の数は少なくなる計算だ」

この説明の重さに皆が黙ってしまった。

確かにピニャの言う通りだろうと思われたからである。とは言えそれは犠牲を数字として捉えているから言えることだ。ここにいる隊長格の者達にとって犠牲となる兵士は、顔を知り名を呼んだことのある者達である。それを将来のために、あえて供犠にすると言われてもなかなか納得できることではないのだ。

「しかし殿下、お味方は本当に戻って来ますでしょうか？　戻って来るとして、いつ頃に？」

グレイの問いに、ピニャは分からんと笑った。

「戦闘中でもあるし、味方がどこまで進んでいるかによるから、いつ戻って来るとまでは明言できぬが、おそらくは一両日中には来ると思ってよかろう」

グレンダ地方の領有を伯爵として認められた、ドワーフの族長メイソンが、文字通り重い腰をよっこらせと上げた。

「う〜む。そういうことならば仕方あるまいな。儂が先鋒を買って出ることにしよう」

「いや。ドワーフばかりに任せてはおけんぞ。我ら六肢族とて」

「そうだ！　考えて見ればこれは帝国の隅っこに追いやられていた我らが、誇りを取り戻す絶好の

機会とも言えるぞ」

ドッツエル、エルナン、コルドール達が次々と声を上げる。さらには隊長達もその声に押されるようにして頷きはじめた。

「うむ。この機会を失っては、次の戦いでまた蔑ろにされかねん。儂らはここで誰もが認めざるを得ない程の戦果を得なければならんのだ。後の語り種となるような戦いをしてみせようぞ」

「その通り！　戦場から遠ざけられて腐っていた我らに、敵と戦う機会が与えられたのだ。これを喜ばずなんとする？」

「そうだな。遠のいたと思った手柄首が我らの前に転がってきたのだ。野戦ならゾルザルを捕らえることも出来るかも知れん」

隊長達の高まった戦意と、壮絶な戦いへの覚悟はたちまち兵士達にも伝わった。ここで怯まずに戦い抜いてこそ、部族の地位を高め、自分の家族や子供達の未来は開かれるのだという希望を胸に抱いた亜人部族の兵士達は、正面から勢いに任せて蹂躙しようと突き進んで来るゾルザル軍の鋭鋒に対して、一歩も退くことなく立ち向かったのである。

＊　＊

ゾルザル派帝国軍は、イタリカの城市を背にして布陣する正統政府軍に対して正面から戦いを挑

んだ。強固な要害を背にされては、側面や背面に回り込むことは難しく、他に攻め手がなかったからである。

槍先をそろえ楯を並べ、その後ろに身を隠しながら突き進んだ両軍の先鋒は、ただ力任せにぶつかり合うこととなった。その激突は、向かい合って走った数十台のダンプカーが正面から激突するほどの衝撃音を周囲にまき散らした。

林のように並べられていた槍はその衝撃でへし折れる。割れた楯が弾けて天空に舞い上がり、無数の木っ端があちこちに飛び散って、槍の穂先を胸に受けた兵士が、自らの血しぶきを浴びながら糸の切れた操り人形のように崩れ倒れた。

だが、兵達は一歩も退かずに向かい合い、その場に脚を留めて戦った。

隊列を少しも乱すことなく、自分の前に立つ味方の背中を支えて立ち、前の兵士が倒れるやいなや、戦斧を振り下ろし雄叫びをあげながら突き進んでいった。

ワータイガーが、大地を這うようにして敵兵の脛(すね)をなぎ払い、ゾルザル軍の隊列に亀裂を入れる。その背後からドワーフの重装兵が楯を並べて凄まじい圧力をかけ、エルフの弓兵が正確な狙いで矢の雨を降らせた。

ロキ族や、ギガスといった半裸の巨人種族が錆びかけた剣を振りまわす。

小柄なサムツァが槍を並べて、次々と小刻みに突き出す。

ゾルザル軍の兵士達は、亜人兵の意外なほどの堅い守りに、攻めあぐねることとなった。

「正面から攻めるしかないとなると、小勢が相手でも意外と手間取るものだな」
戦場の様子を眺めながら、ゾルザルはそんな感想を漏らした。
緒戦とは言え、戦況が拮抗してなかなか動かない様は、見ている側にとっては非常に忍耐を要求されるものなのだ。
「結局のところ戦いとは、相手をどうやって包囲するかです。その意味でピニャ様は、囲まれないことを目的にして、この野戦を考えられたのでしょう。籠城してしまえば備えは堅いですが、同時に逃げられなくなることも意味しますので」
抜け穴でも用意してあれば別ですがね、というヘルムの解説にゾルザルは、ふんと鼻を鳴らした。
「小癪な奴だ。こんな事なら毫象部隊を引き連れて来るべきだったか」
そうすれば正面から踏みつぶしてやれたものをと、ゾルザルは愚痴った。
だが森の深い山岳地帯を行軍するのに、そのようなものを連れて来ることは出来なかった。
「とは言えピニャの狙いが最初から退路の確保にあるならば、イタリカから逃れ出ようとする者を監視させる必要もあろうな。上手くすると大魚を得られるかも知れんぞ」
ゾルザルは、ピニャが包囲を嫌った理由を皇帝の逃げ道を確保するためと見た。ならば、見張っていれば皇帝がイタリカから逃げ出すところを捕らえられるかも知れない。
「はい。既に斥候を放って監視させております」

ヘルムはそう答えてから、「第三梯団！　前へ！」と指令した。
太鼓が叩かれ、ラッパが吹き鳴らされる。
すると今まで戦わずに控えていた方陣の千名が、前進を開始していった。
新たな戦力の参入を受けて、ピニャの軍からも一部隊がその進路を妨げるように動いていた。その数は千五百ぐらいに見えた。
「ピニャ殿下、貴女の弱点は原則に忠実で、相手より多い戦力で対応したがるところだ！」
ヘルムは矢継ぎ早に命令を放った。
「第四梯団も続けて前進せよ！」

「ニコラシカ！　ドッツエル隊とメイソン隊を前進させよ！」
ダークエルフとドワーフらを主力とする亜人混合部隊、合計千五百が前進をはじめ、突出してきたゾルザル軍の突撃を正面から受け止めた。
方形につくられた陣形がその激突によって歪みひしゃげたが、どうにか敵の前進を阻み、逆に押し返すことに成功していた。
「さらなる敵の接近を確認！」
「エルナン隊！　コルドール隊を前進させて対応せよ！」
命じながらもピニャは「くそっ」と呻いた。

ヘルムが数の利を生かし、ピニャを奔命に疲れさせようとしていることが、すぐに理解できたからだ。

ピニャが城外に並べた戦力はおよそ六千。

ゾルザル軍は一万の兵を十等分し、千人の部隊を自在に操って、波状攻撃でもって押し寄せてくる。ピニャはその都度、約千五百の数でこれを防いだ。

千対千五百。局所的に数の優位を作って敵を圧倒し、損害量を少なくすることで粘り強く戦い続けようという目論見だった。

だがこれは、敵の繰り出す部隊が三つを超えると、本隊で対応するしかなくなってしまうことを意味していた。

もちろんピニャもそのことは充分に承知していて、新たな敵の部隊の参入を防ぐため無闇に戦線を広げないようにしている。戦場を狭くしておけば、どれほど兵力があろうと戦場に参入できずに遊兵化してしまうからだ。

「ドッツエルが前に進みすぎだ！　二百歩後退させよ！」

だが、亜人の部族兵達は、少しでも手綱を緩めると、ピニャのコントロールから離れようとする。少しでも優位に立つとすぐに前進したがるのだ。

亜人は個々の戦闘力こそ優秀だが、部隊として見ると連携に難がある。

同族に対する仲間意識が強い反面、他種族への対抗意識が部隊としての統一行動を乱してしまう

のだ。そのため部隊の間で連携を欠いて、陣形の隙間が広がり、そこから敵の突入を許してしまう。
そうしてヒト種で構成される部隊につけ込まれてしまうのだ。
ゾルザルの本陣を発した四つ目の部隊が急接近してくる。
「殿下！　ゾルザル軍の第四部隊です」
「ヘルマイン隊はどうだ？」
どの隊も、間断なく攻め寄せて来る敵と戦っていて忙しい。
「まだです。敵に拘束されて動けていません」
「くそっ」
舌打ちするピニャを見ていたボーゼスが、振り返った。
「ヴィフィータ！」
「おうっ！　出番だな」
ヴィフィータがひらりと騎乗する。従卒の兵士からロングスピアを受け取ると部下に叫んだ。
「白薔薇隊！　行くぜ」
こうして騎士団の一隊が前進を始めた。
ヴィフィータは馬蹄の音を轟かせながら隊列を楔形（くさびがた）に整えさせると、戦線の隙間からこぼれるように入り込んできたゾルザル軍に対して矢のように襲いかかった。
「うりゃ！」

馬上でロングスピアを巧みに操るヴィフィータは、敵将の一人をすれ違いざまに落馬させると、そのままの勢いで敵陣へと突っ込んでいく。

彼女に続く騎兵達は、観閲行進のお手本にもなりそうな見事な隊列を維持し、歩兵達を正面から圧倒した。馬の歩調すらもぴたっと合い、馬蹄が大地を蹴る音はまるで巨大な一頭が走っているようにも聞こえたほどだ。

儀仗兵のお飾り部隊というのが、地方で戦う兵士達が騎士団に向ける評価である。だが今回、その儀仗兵故の規律と統制力が発揮されることとなった。

「よし！　お前ら、ずらかるぞ！」

ヴィフィータは状況の見極めが絶妙なまでに上手く、進退の思い切りがいい。

そして、その指揮を受けての部隊の行動もまた速かった。

敵を圧倒したかと思うと、騎士団の女性騎士達は戦果を欲張ることなく退いた。女性達ばかりの我々は腕力に劣る。一度混戦に巻き込まれると弱いと身に沁みて理解しているのだ。

突撃が馬任せである以上、騎士たる彼女達の戦い方は槍を構えての速進、速攻、そして速退がモットーだ。反撃を試みたゾルザル派の兵達が体勢を整え直して、剣を振りかざした時には、もう彼女達の姿は目の前から消えている。残された僚友の死体の間に立ったゾルザル派の兵士達は、敵の背中を悔しげに見送ることしか出来なかった。

「後ろから敵だ！」

そして呆然と立ち尽くしているところに六肢族のエルナンに率いられた一隊が戻ってくる。
剣と楯と弓を一人で操る阿修羅のような六肢族に襲撃されたゾルザルの第四梯団は、望んでいたはずの混戦に、自らが意図してなかった形で引きずり込まれていった。

敵の弱点を突くために送り出したはずの味方が、ヴィフィータ率いる騎馬隊に翻弄される様を見たゾルザルは、皮肉げな瞳を将軍に向けた。
「どうした、ヘルム。随分と手を焼いているようではないか？」
「そう簡単にはいかないと思っておりましたが。守りに徹したピニャ様が、ここまで粘り強いとは思いも寄りませんでした」
「何しろ、俺の妹だからな」
ゾルザルはそれを嬉しいことのように語った。
自慢の妹をヘルム将軍がどう攻略するかお手並み拝見といった心境なのだろう。ゾルザルには、それだけの余裕がまだあった。
「ですが、このまま兵らを苦境に置いておくわけには参りませんので、次の手を打つことにしましょう」
ヘルムは、手元に残して置いた予備戦力を送り込んで苦境に立たされた部隊を支えると、全軍に一時の後退を命じた。

もちろん簡単ではない。戦っている敵から離れ、その追撃を防ぎながら、距離を開いていくという作業は、前進する以上の困難が待ち受けているのだ。

戦線の全面崩壊を防ぐためにも、細部にまで目を配り神経を尖らせなければならない。

だが、ヘルムが率いる将兵達はそれを成し遂げていた。彼らも自衛隊相手にゲリラ戦を戦い抜いた熟練兵である。退却には慣れていた。さらに戦線の拡大を嫌がったピニャが、追撃を厳に禁じたこともまた、双方の出血が拡大しないで済んだ理由となるだろう。

こうして双方の間に距離がひらいて、激戦の合間に空白が生じる。

この時間を利用して疲れた兵は休息をとり、傷んだ武器を交換し、隊列の前後を入れ替える作業が進められていく。飲食も許可され、兵士達が携行食糧を頬張り、水をがぶ飲みする姿も見受けられた。

ゾルザルの傍らで観戦していた帝権擁護委員長（オプリーチニキ）のアブサンも、食事をむさぼりながらヘルムの戦い振りに感銘を覚えたような声を上げた。

「両軍が正面からただひたすらにぶつかり合うとは、歴史的にも類を見ない素晴らしい戦いとなりましたね、将軍。小手調べは終わったことと思われますが、この後どのように敵を追い詰めていかれるのですか？」

ヘルムは、苦々しく唇を歪めた。

正面からの殴り合いとも呼ぶべきこの戦いに、素晴らしいもへったくれもないと考えていたから

である。それだけに声をかけられた瞬間、何かの嫌味かと思った。そしてどうやら、アブサンが本気で褒めているらしいと悟ると、ヘルムはどう答えたらよいのか悩んでしまった。

これは、戦いの進め方としては愚の骨頂で、一番ばかばかしいやり方なのだと説明すれば、これを褒めたアブサンを貶すことになりかねない。なので、謙遜という態度で無智な人間の追従口から身を躱すことにした。

「いや、それほどのものではありません」

「しかし、手に汗握る戦いでしたぞ」

「そうですね。ですが、次はそうもいかないでしょう。なのでピニャ様に、亜人を用いて戦うということが、どういうことかを教えて差し上げようと思います」

どうするつもりかと問いかけるゾルザルに、ヘルムは怪異や亜人を用いた戦いは自分の方が経験が深い。それを利用するのだと答えた。

ヘルムは、再び攻撃開始を命じた。

再編成の済んだ二千から三千ほどの部隊をミュドラに預け正面から突撃させる。両軍が激突して、たちまち屍山血河が築かれていく。

「なにやら、最も工夫のない力任せの戦いになったな」

ゾルザルの感想に、ヘルムは肯いた。だがヘルムは戦いを再開させる前に、ミュドラに作戦を授けていた。それが開始されるまで黙ってみているしかない。

「どうぞ、ご覧になっていて下さい」
しばらくすると、突撃させた部隊が後退を始めた。
敵の反発に耐えきれなくなっての後退に見えたが、すぐに新手を送り込んで、間断なく新鮮な戦力の突入をさせていったために、全体の流れとしてはほぼ拮抗した戦いが展開されている。
「実は、亜人というのは血が頭に上りやすいんです。いくら注意しても、止めても、突撃してしまう馬鹿が出て来る」
ヒト種ですらそうなのだ。それを訓練で時間をかけて矯正していくのである。だが亜人の部族兵には、そのような自制は望むだけ無駄であった。
実際、ヘルムが言うように、ゾルザル派の兵が退却を始めると、それを追って陣列を飛び出す者が出て来る。部隊の指揮官達が懸命に引き留めているが、それすら振り払って前に出ようとする。その姿は後方から遠目で見ても、はっきりと分かるほどであった。
「カラスタ！　弓箭兵共に、敵の指揮官を狙わせよ」
制止する指揮官がいなくなれば、部隊はまとまった行動をとれなくなる。
たちまち烏合の衆と化した亜人の部族兵達は、次から次へと押し寄せるゾルザル軍によって進退が窮まり、まるで削られるようにその数を減らしていったのである。

＊　＊

城外での凄惨な戦闘が始まってしばらくすると、フォルマル伯爵家の城館内でも別の形での戦闘が始まった。
ゾルザルの放った密偵集団が力尽くで城館へ踏み込んで来たのだ。
迎え撃つのはフォルマル家の私兵と、戦闘メイド達。
メイド長は、配置に付いたメイドや私兵達に声をかけて回った。
「フォルマル家の盛衰は、この一戦にあると言っても過言ではありません。皇帝陛下、ミュイ様をなんとしてもお守りするのです。良いですね」
「はいっ！」
女達の小気味よい返事の直後、呼び子が吹き鳴らされる。
「報告いたします。侵入者です！　ペルシア班が追跡しています」
伝令として駆け寄って来たキャットピープルの報告に、メイド長は頷いた。
「おそらくは敵の陽動でしょう。それぞれ、混乱に巻き込まれて持ち場をおろそかにしてはいけませんよ」
「はいっ！」
頼もしい返事にメイド長は満足げに頷くと、廊下を足早に進んで皇帝の寝室へと向かった。
扉の前には、ピニャが配置した騎士団の女性士官が警備に立っている。普段ならば儀礼的な意味

の飾りでしかない存在だが、今日この時においては彼女達が皇帝を守る最後の剣となる。
「不逞の輩が押し寄せて参りました。どうぞお気を配り下さりませ」
メイド長の言葉に二人の女性士官は、胸に握り拳をあてる敬礼で答えた。
そのうちの一人はシャンディー・ガフ・マレア、そしてもう一人がスィッセス・コ・メイノ。
いろいろと問題行動を起こしたシャンディーではあるが、それもまたピニャへの忠誠心故。ピニャからの信頼はかえって重みを増して、最終防衛線たるこの持ち場をピニャから直々に「頼む」の一言で任されていた。
「お任せ下さい。命に替えましてもこの扉を守り抜いて見せます」
「うん」
ピニャはシャンディーとスィッセスの身体を順に抱きしめた。
二人に課した命令が、文字通りの死守命令になってしまうことは、ピニャとて充分に承知しているのだ。
分厚い扉が両開きに開かれると、皇帝の横たわる寝台が見える。
その傍らには内相マルクス伯爵と、皇帝お気に入りの伯爵夫人シェリーが控えている。
またフォルマル家の当主ミュイが床に広げた敷物に座り込んで人形と戯(たわむ)れていた。彼女の遊び相手はメイド服姿のメデュサ種アウレアが務めていた。
メイド長は皇帝の寝室内を見渡して異常がないことを確認してから告げた。

「皇帝陛下。ゾルザル様の兵が攻め寄せて参りました」
「うむ。あ奴も、乾坤一擲の大勝負が出来るくらいには成長したということだな。世が世なら、いずこかの蛮地を斬り従えて、一国の王となるぐらいは出来たかも知れぬのに。惜しいことだ」
ミュイが手元の人形から顔を上げて質問を発した。
「ゾルザル様は、皇帝様になることは出来ないのですか？」
「皇帝となるには、別の才覚が必要だ。帝国ほどの巨大な国家を保ち、次代に伝えていくのはあ奴には無理であろう」
ミュイは、「皇帝様になればみんなが従ってくれるのでしょう？」と首を傾げるだけだった。
「それはな……いや、ここはひとつシェリー。そなたが説明してみよ」
「あ、はい」
突然の指名にシェリーは驚いた表情をしたものの、すぐに微笑みに戻ると年下の少女に語りかけた。
「ミュイ様、人は地位に従うのではありません。その人に従わせるだけの力があるから従うのです。地位はそれを周囲に納得させるための飾りでしかありませんわ」
そして、実力もない者が高い地位に居座る組織や社会は、必ず衰退するのだ。
ここまで語って、シェリーは何故皇帝が自ら説明しないのかに気付いた。自分は優れているから皇帝なのだという、自画自賛になってしまうし、帝国が分裂して今のようなありさまになっている

のは、モルトがその地位に相応しくなかったからとも言えるからだ。
「ですけれど、我が家の者達はミュイに従ってくれます。ミュイは子供でしかないのに……」
「それは、貴女が良い子だからですよ。皆さんは、いずれミュイ様がそれだけの力をきっと身につけられると期待されているんです」
「ミュイが悪い子だったら？」
「きっと、誰も言うことを聞いてくれなくなるでしょう。見た目は従っているように見えても、見えないところで何をしているか分からないようになりますわ」
「ミ、ミュイはきっと良い子になります！　ラムもミュイを良い子に育ててね」
メイド長はミュイの前に跪くと「はい、このラムにお任せ下さいませ、お嬢様」と肯いた。
「シェリー様。ゾルザル様が皇帝様になれないのは悪い子だったからですか？　良い子に育てて貰えなかったのですか？」
ミュイの問いにシェリーは困り果てた。この話題は、どの方向から語っても言葉を選ばなくてはならないものばかりだ。
実際に、皇帝もマルクス伯も返す言葉に窮して、苦笑している。少女の遠慮のない質問は、皇帝が親たる役割をきちんとこなして来なかったと糾弾しているのだ。
そんなシェリーの困る姿を楽しんでいた皇帝が、助け船を出した。
「確かにその通り。あ奴は至らぬ子であり、そして我が子を至らぬ男に育てたのは儂だ。つまりは

儂が全ての元凶と言えるな。そう、ミュイの申すとおり儂が悪い子だったのだ。だから儂もこうして帝都からここに逃げて来なければならなくなった……」

さすがのミュイも自分の発言の意味に気付き、その原因を別の方向に求めた。

「あ、でも、ゾルザル様が悪い子になった理由が、皇帝陛下が悪い子だったからだとしますと、それは皇帝陛下のお父様やお母様が悪い子だったからで、それはそのお父様とお母様、お爺さまやお婆さまが……」

ミュイはまたしても首を傾げた。

「どこまでも遡(さかのぼ)れてしまいます」

自分をこんなにしたのは親であると言うならば、その原因はその親、さらに親とどこまでも遡れる。やがて原始の海に漂っていたという単細胞生物に行き着くことになる。「あんたのせいで、俺はこうなった」と、原生生物に向かって叫ぶことがどれほど滑稽なことであるか、考えるまでもない。もちろん特地に進化論はまだない。神話の一節によると人は泥から始まるらしいが、泥に向かって「あんたのせいだ」と叫ぶのもこれまた虚しい。この虚しさを突き抜けて神を罵ったとしても、それで出来ることはせいぜい責任転嫁だけ。

冥府の神ハーディあたりに問えば、きっとそう言う人間の愚かしい責任転嫁を引き受けることも神の役割なのよと語るかも知れない。しかし、自分のおかれた苦しい境遇を他人のせいにして非難したところで、今、状況の改善には役立たない。自分を支配する者は自分でしかなく、今の自分を

創ってきたのは過去の自分。明日の自分をよりマシにしようと願うなら、今の自分を行動させるしかないのだ。

「……ミュイ様。よい子になれるかどうかにお父様もお母様も関係有りませんよ。だって、シェリーのお父様もお母様もとっても良い人だったのに、シェリーはこんなに悪い子になってしまいましたから」

「シェリー様も悪い子なんですか？」

シェリーは、人目を恐れるかのようにきょろきょろと左右を振り返り、囁いた。

「はい。こう見えてもかなりの極悪人ですわ」

「だから、シェリー様はご家族もお家もなくなってしまったのですか？」

「はい。ですからせめてミュイ様だけは良い子になって下さいましね」

ミュイは「可哀想」とシェリーの頭を軽く撫でた。

幼い二人の会話がこうして一段落つくと、メイド長は皇帝と内務相に向き直った。

「陛下。既に影戦が始まっております。手の者が守りを固めておりますがこの館の内も戦場となりました。どうぞお気を付け下さいませ。シェリー様もご自身のお部屋にお戻り下さい。わたくしがご案内致しますので」

「わたくしはここで戦の結果を待ちたいのですが」

シェリーが皇帝を顧みると、モルトは首を振ってそれには及ばないと告げた。

「戦というのはな、家族と共にその結果を待つというのがしきたりなのだ。元老院議員達もそうしているであろう？　それにだ、お前に任務を授けたいと思っている」
　すると内相は途端に鹿爪顔で苦言を呈した。
「陛下。その役目、伯爵夫人には大任過ぎます」
「だが、ニホンとの交渉もなんとかこなしたではないか。万が一の時はかえってこの娘の方が好意と同情を買えると思わぬか？」
「確かにそうですが、帝国の威信が」
　そんな皇帝と内相の会話にシェリーは「どんな任務でございましょうか？」と問いかけた。
「おまえには前にニホンとの交渉の席に座ってもらったな。それと似た役目を任せたいのだ」
　するとクルクス伯が「陛下は在ニホン帝国大使の任をとお考えなのだ」と補足説明した。
「わ、わたくしがですか!?」
「そうだ。今すぐにここを発って、ニホンに向かって欲しい。そして万が一に備え、亡命者をニホンに迎え入れるパイプ役を担って欲しいのだ」
「……万が一？」
　マルクス伯は声を潜めて「陛下は戦いに敗れた時の事を仰せなのだ」と告げた。
「そ、そんな。陛下が今戦っている時に」
「ピニャは懸命に戦っている。だが懸命に戦ったからといって勝てると限らないのが、戦だ。そし

て敗れた後のことも考えておかねばならぬ。ここで皆の命を終わらせてしまうわけにはいかぬからのう。頼むぞシェリー」

シェリーはマルクス伯にすがるような視線を向けた。何とか言って欲しいと求める視線にマルクスは答えようとせず、「信任状はすぐに作成して届ける。今すぐ支度せよ」と告げた。

するとモルトも「うむ。退室を許す」と続ける。

「シェリー様。万が一の時はミュイ様をどうぞ、よろしくお願いいたします」

大人達から期待の視線を受けたシェリーには、もう断るという選択肢など残されていなかったのである。

03

陸上自衛隊特地方面派遣部隊第一、第二、第三戦闘団は帝国軍の防衛線を踏みにじるようにして突破すると、それぞれに定められた目標に向けて土煙を上げながら驀進(ばくしん)していた。

だが、健軍(けんぐん)団長率いる第四戦闘団の活躍は、さらに目を見張るものがあった。

本来は足枷(あしかせ)にしかならない帝国正統政府軍との共同作戦を強いられた彼だったが、「足枷に繋がる重い鉄球そのものを武器として敵に投げつける」とでも表現すべき作戦を展開して、帝国軍の拠

点を次々と陥落させ、各地に展開した帝国軍部隊を撃破していったのである。
「ハインケリ隊が、帝国軍第二集団を撃破。これより掃討戦に入ります」
「セルベル隊が、帝国軍の第三集団の中央を突破。後方に展開します！」
床二面に広がる地図の上に、サイコロの五の目にも似た形状で配置されていた巨大な赤マークが、いま、いくつもの緑のマークによって包囲されようとしている。
それは帝国の常識的な戦争を知る者からすると、「反則だよそれは」と叫びたくなる様な戦いの展開であった。
地図上に置かれた駒が刻一刻と動かされていく。正統政府軍派遣の参謀達は、その様を見せつけられ、驚きも麻痺してしまったとばかりに見入ることしか出来なかった。
「普通、戦というのは最前列から順々に戦うものだ。前衛に立つ者は背後に味方がいると信じるからこそ前方にのみ注意を払えば良く、後ろに立つ者は前衛が、敵の初撃を引き受けてくれると信じるからこそ、戦いが始まったという報せが来るまで鋭気を養うことが出来るのだ。故に、敵を後方から襲うという作戦は最大の戦果を上げることとなる」
「だがそれも、後衛を配置することで防ぐことは可能だ」
「そう。そして前衛、中軍、後衛が巧みな連携をとって戦うことを双頭の龍と呼ぶ。だが、このえりぼーんは……」
「違う。ヘリボーンだ」

「そう、それだ。そのへりぼーんは双頭の龍など虫けらの如く踏みつぶす。中軍が指揮官もろとも壊滅させられ、双頭の龍どころか烏合の衆に堕することになる」

図上に置かれていた赤い駒は、西から進攻する緑と青の連合軍に備えるためだろうか、ウェス、マレ、レッキといった要塞群を中心にして広く薄く布陣していた。

前衛をまばらに広く配していたのは、いつどこに敵が襲いかかって来るか分からないからだろう。この前衛を触覚として敵の存在をつかみ、戦闘が始まったら後方に控えさせていた中軍を前進させて戦線を支えようとしていたのだ。

だが、この戦いでは安全な後方に控えていたはずの本隊が最初の急襲を受けた。

食糧や武器の倉庫をも兼ねた三つの城塞群の内、二つが瞬く間に陥落。図示された状況では赤い海の真ん中に、緑の駒が孤立、包囲されているように見えるが、実際にこれを包囲殲滅するには高度な情報収集力と、スムーズな指揮権の継承、そして柔軟な判断力が必要となる。

敵は西から来るものと決めつけて身構えていた帝国軍の将兵には、それは不可能であった。

「帝国の戦史でも、似たような戦い方を翼竜を大量にそろえて行おうとした例がありましたが」

「確かに。だが充分な数をそろえることが出来ず、実現は果たせなかった。それに、この作戦を実行するには指揮官同士が離れていても直接会話できるほどの通信力が必要だ。ニホンの軍はその双方を実現している。見ろ、我らはこうして帷幄（いあく）にいながらにして戦場の様子が手に取るように分かるではないか。この力があるからこそ、敵中に孤立しかねない作戦にも将兵を安心して参加させら

れるのだ」

二人の参謀の眼前で、帝都に向けて兵を進めている正統政府軍の右翼方向に置かれた緑の駒が、赤い駒を打ち破る。

コツンという音を立て、赤駒が取り除かれた。

「あと少しだな……」

「ああ。レッキの要塞を抜けば、敵は袋のネズミとなるだろう」

地図の上では、膨大な数の赤い駒が、わずかな緑の駒によって、包囲されつつある。

袋状の包囲網の口を閉じるべく、竹とんぼのような記号で描かれた青い駒が、敵陣奥深くレッキ要塞に向けて突き進んでいた。

回転翼機という言葉で示されるように、ヘリコプターは竹とんぼのように回転する主ローター……巨大なプロペラによって、揚力、推進力を得て大空を舞う。

その独特な構造は固定翼機ではあり得ないような角度での上昇、急下降、力任せの急速な減速、回転するコマにも似た急激な方向転換、前進ばかりでなく、後ろ、左右への飛行すらも可能にする。

だが同時に、その独特な構造自体が弱点ともなる。

ローターを破壊されれば、空中に浮かび続けることは当然不可能で、バランスを崩して地面に激突するしかないのだ。

また尾翼部分に横向きに取り付けられたやや小型のプロペラ……尾部ローターもまた、姿勢を維持するためになくてはならない部品だ。巨大な主ローターを強力なエンジンで高速回転させているため、作用・反作用の法則に従った機体は、逆向きに回転しようとするからだ。したがってこちらを失っても、機体は遊園地のコーヒーカップのごとく自転し、これまた墜落してしまう。

帝国軍翼竜部隊が、不意を突いて空中から鎖で編んだ網を投下したのは、その意味ではヘリコプターという航空機をよく観察して、弱点を見極めた有効な戦術であった。

「回避!!」

空中に広がった投網を見た操縦士達は編隊を崩して、回避行動をとった。

それを追いかける竜騎士達。だが空中で激しく機動する物体に、重い鎖製の投網(とあみ)をうつことは容易ではない。

とは言え、十や二十も投下すれば、運の悪い一機か二機のヘリはこれにかかった。

帝国の未熟な冶金(やきん)技術で作られた鎖は、主ローターの破壊こそかなわず引きちぎられるが、飛行の安定は奪うことに成功した。

さらに尾部のローターにひっかかればその機能は完全に停止し、ヘリは空中で駒のように激しく回転し始める。

「軟着陸するぞ！　つかまれ！」

「な、何があったんだ！」

世界が激しく回転する中、操縦士が怒号を轟かせながら操縦桿を必死で支え、後部の座席にいたエルベ藩王国軍の将兵は「落ちる！」と喚いた。

「叫ぶな、舌を咬むぞ！」

ぐしゃと鋼板のひしゃげる感触と共に、尻の下から突き上げるような衝撃がきたかと思うと「降りろ！　機体が爆発するぞ！」という声に背中を突き飛ばされるようにして、兵士達は走り出す。

視野の回転が収まらないまま、酔客の千鳥足にも似た足取りで、兵士達は降りたばかりの地面を走った。

もちろんその様子は、空中からも見て取れた。

尻餅をついた機体の中から慌てふためいた乗員達が、蜘蛛の子を散らしたかのごとく逃げ惑って、墜落した機体は爆発炎上。紅蓮の炎と、黒い煙は、帝国兵達にとって久しく味わうことの出来なかった勝利の味を呼び覚ますこととなったのである。

「やったあ!!」

「くそっ！　投網が足りない」

「お前達は落ちた投網を拾い上げろ！　我々は奴らを攻撃する！　続け！」

竜騎長の指図で投網の投下を終えた翼竜部隊は、ひらりと散開すると急降下し、ヘリ部隊の頭上から襲いかかった。

竜騎長はお手本を示すかのように、高度を下げようとするＵＨ－１Ｊに向けて狙いを定め数本の

矢を放った。そして抱えていた竜槍を構えると、まっすぐに急降下突撃をはかった。

その「我に続け！　我に続け！」と叫びながらの突撃によって、彼の背後には無数の翼竜の群れが続く。

だが、露払いとして放たれた矢のほとんどはローターブレードによってはじき飛ばされていた。

「ならば、こいつはどうだ!?」

慎重に、竜槍の先端をコクピットに座るパイロットへと向ける。

落下の加速と空気の抵抗で、竜騎長の身体と彼の跨がる翼竜が小刻みに振動する。空気を切り裂く槍の先端が上下に踊りだそうとするが、渾身（こんしん）の力でそれを抑え込むと移動する敵を追って進路を微調整した。

目標のヘリが、彼の狙うパイロットの姿が、視界の中で凄まじい勢いで大きくなっていく。

「いけっ！」

だが、突き刺そうと竜槍を繰り出した瞬間、敵が急激に姿勢を変え、竜槍の柄が木っ端みじんに吹き飛んだ。高速回転するローターブレードに絡め取られへし折られてしまったのだ。そればかりか竜騎長までもが、愛竜ごとその存在を寸断されてしまう。

空中には、まるで生き物が爆散したかのような血しぶきがまき散らされた。

後に続いていた竜騎士達は、先頭に立って突撃していった竜騎長の無残な様に、急降下攻撃が危険であることを悟って、手綱を引く。周囲を旋回すると、安全な側面からの弓矢による攻撃へと切

り替えた。

「真上は駄目じゃ！　真横か、正面から攻撃せいっ！　かかれっ！」

戦慣れしたポダワン将軍の指示を受けた竜騎士達は、今度は四方八方から襲いかかった。

単純に死角に入ろうとした竜騎士達はヘリコプターの急激な方向転換や、上昇下降を織り交ぜた空中機動に追いつこうと複雑な軌道を描いて空を舞った。

こうして翼竜とヘリのドッグファイトが繰り広げられることとなった。

戦闘・攻撃ヘリによって展開されるドッグファイトは、モトクロッサーのレースに例えることが出来るかも知れない。

ヘリコプターによる空中戦は、固定翼機が見せるような華麗さには欠けるが、逆にアクロバティックでトリッキーな動きが縦横に展開されるのだ。

上下に飛び回り、くるりと向きを変えて後方から追いすがろうとしていた敵に五十口径（キャリバー50）の銃弾を浴びせかけるといった動きは、回転翼機ならではだ。パイロット達は、エンジンの爆音を轟かせながら、空気を切り、叩き、強引な機動で翼竜を引き離し、迎え撃った。

だが、帝国の翼竜部隊もこれに負けてはいない。

手綱を緩めて翼を広げ空中で静止し、あるいは羽ばたかせて上昇、下降する。

柔らかな胴体と尾を巧みに使うことで予想も出来ないような急角度で突然進路を変え、ドアガンの弾幕を華麗に躱した。

鞍から身を乗り出すような曲乗りで弾幕をくぐり抜けた竜騎士が、通り過ぎざまに中型ヘリコプターの底面に下から細長い竜槍を突き立てる。

「あたりっ！」

外板に槍が刺さった程度では、ヘリコプターがその飛行能力に影響を受けることはない。けれど敵に槍をつけることに成功したという事実は、他の竜騎士達を高揚させた。

どんな獲物にも急所というものがある。そこに当たらなければ、仕留められないし、逆に針を刺したような小さな傷であっても急所に当たれば致命傷になるのだ。槍をつけることが不可能ではないと分かったなら、今度は急所に当てることを考えればいい。

「よし！　お前達は、あの手負いの横っ腹に槍を突き立ててやれ！」

ポダワン将軍は、自分の護衛として続いていた三騎の竜騎士に、低高度をよたよたと飛行している機体へと襲いかからせた。

生き物ならば、確かに横っ腹は急所の一つであるから狙い場所としては間違っていない。だがこの敵は、横っ腹にこそ恐るべき爪を隠していた。

槍を掲げて迫った竜騎士を迎えたのは、弓箭（きゅうせん）の鋭い鏃（やじり）をそろえて弓を引き絞っていたエルベ藩王国の精兵達であった。

「射よ！　狙わずに射よ！　矢など狙って放ったところでそうそうに命中するものではないわ。まぐれ当たりを狙って矢をばらまくがいい！」

国王デュランの叱咤に応えて兵士達は次々と矢を放った。
「そこな兵！　なかなかの腕前だ。お前だけは敵をよく狙え。当てずとも良い。顔にかすらせてやれ！」
「え、は、はいっ！」
竜騎士達は、雨のごとく降り注ぐ弓箭を体中に浴びた。
翼竜の鎧を纏っているため、矢が多少ところでびくともしないが、その数本が顔に向かってくると、どうしても突撃の勢いが鈍った。

「ええいっ、何をしているかっ！　こうなったら突撃じゃ！　突っ込め、食らいつけ！」
ポダワンの叫びに、竜騎士達は奮い立って戦った。
二頭の翼竜が、目の前を横切ったＵＨ－１Ｊの一機を目標に定めて直進し、側面からその鋭い牙を剥いて襲いかかった。体当たりである。
操縦士は自分に向かって来る敵を見ると、操縦桿をむちゃくちゃに動かしてこれをよけようとした。バランスを崩した機体は、主ローターを敵に向ける。
超高速で回転するローターのしたたかな一撃をくらった鞍上の竜騎士は一瞬にしてその姿を消した。翼竜の強靱な鱗すらも叩き割られて鮮血の花火が空中に広がったが、翼竜は突如居なくなった主の意思を受け継いで、鋭い顎と爪とでヘリの胴を捕らえると外板を深く抉って、その体重を敵へ

と預けた。
「くっ、バランスがっ！　こんなところでっ！」
機体を懸命に立て直そうとする操縦士達。
後部ではエルベ藩王国の兵士が、機体に食いついた翼竜を相手に剣を振るっている。だが大地はすぐそこまで近づいていた。翼竜を巻き込んだ姿のままヘリは大地に激突、爆発炎上してしまった。

大地から赤い炎と黒い煙が立ち上るのを見た国王デュランは、大波にもてあそばれる小舟のように揺れ動く機体をなんとか宥めているパイロットに向けて叫んだ。
『帝国兵の奴らめ、気でも狂ったか！　体当たりに気をつけるがよいっ！』
「何を言っているんだ？」
右席に座る機長は、左席の副操縦士に尋ねた。
「多分、体当たりしてくるから気をつけろって言ってるんですよ！」
言葉は分からなくとも語感から副操縦士はなんとなく理解できたようである。
機長はフットペダルを蹴り、右腕でスティックを前後に激しく動かしながら左手でピッチレバーを握り「了解！」と叫ぶ。
視線を左右に激しく巡らせながら、周囲を見張る副操縦士が嘆く。
「くそっ！　いつまでこんな曲芸飛行を続けろってんだ!?」

兵員・物資輸送が主任務であったUH-1Jのパイロット達は、こうした空中戦は想定していなかった。せいぜい対地攻撃がいいところだろうと思っていたのだ。

「早く撃ち落としてくれっ！」

機長の叫びに、後方から向かってくる翼竜の竜騎士に弾丸を浴びせ、その肉体をはじけさせた隊員が応えて怒鳴った。

「やってます！　でも、周りには味方だって飛んでるんです。無闇に撃ちまくるわけにはいかんのです！」

「右から！　いや、まずい！　正面！」

副操縦士が叫ぶ。パターン化しつつあった回避運動を見破られたのか、翼竜が突如として正面に現れた。その敵愾心（てきがいしん）に満ちた瞳は、キャノピーのガラス越しにパイロットをしっかりと見据えていた。

「危ない！」

敵の投擲した槍がキャノピーを突き破って操縦席に突き刺さる……かのように思われた。

パイロットを押しのけるようにして肩越しに後ろから突き出された右腕が、竜槍の先を間一髪で握りしめたのだ。

「デュ、デュラン陛下……」

もしそのままだったら、操縦士はシートに縫い付けられていただろう。

操縦士は老人の右手から滴（したた）る血に視線を奪われて固唾（かたず）を呑んだ。いや、血ではなく、己の力量の

みで一国を従えている男の気迫というものに圧倒されたのだ。
『お前に死なれてはこの儂まで死んでしまうからな』
デュランは握りしめた長い竜槍を機内に引き入れると、ニヤリと微笑んで周囲の兵達を怒鳴りつけた。
『何、手を休めておる！　射よ、射よ、弓を引き続けよ！』
彼の背後では正統政府軍の兵士達の矢が、数騎の竜騎士に矢を浴びせかける。だが竜騎兵達は翼竜を急横転させながら、弓箭とドアガンの弾幕をかいくぐって急速に遠ざかっていく。
「くそっ！　まじヤベーぞ」
「機長！　エンジンが！」
兵員を満載している上、限界を超える機動を繰り返していたためいよいよエンジンがオーバーヒートを起こしかけていた。
「よし。こうなったら着陸させよう！」
『いや、待て！』
パイロットが機体を降下させようとしたところで、デュランは叫んで空中の一点を指さした。ひときわ立派な翼竜に跨がった禿頭の老騎士が上空を旋回しながら戦場を睥睨していた。
『きっとあれが、敵将じゃ！』
「何を叫んでるんだこの王様は！」

「もしかして、あそこに行けって言ってるんじゃないですか？」
「無理だろ!?　もう機体が保たない！」
『そこを、何とかしてみせい』
デュランは、機長の首に左腕をかけると、機体側面の開口部から鹵獲した竜槍の切っ先を敵将に向けて怒鳴った。
『そこの者！　さぞかし名の有る者と見た、一騎打ちに応ぜよ！』
「ま、まじかよ、もしかして一騎打ちしようってのか？」
機長は、逆らったら首に回された義手で絞め殺されかねない迫力に抵抗できず、機体を敵へ向けた。すると敵の竜騎士が答える。
『我は、帝国軍ゾルザル陛下が将帥ポダワン！　そこにおわすはエルベ藩王国王デュラン陛下と見た！』
『おおポダワン伯爵か!?　相手に不足なし！』
ポダワンは、一国の王から挑まれたことに喜色を浮かべると、竜槍を構えた。
『この場で陛下と槍を合わせることが出来るとは、これ以上の名誉はない！　名も誇りも知らぬような敵との戦いに儂もいい加減飽きたところじゃ！』
ポダワンはそう叫ぶと翼竜を、デュランの乗機へ向けた。
二人の男は互いをにらみ合ったまま、槍の先端を向け合って急速に近づいていった。

そしてすれ違いざまの激突。
国王と将軍の竜槍が中空でぶつかり合って激しい火花を散らす。
『右じゃ、右じゃ』
デュランに首を右にひねられた機長は「お、俺の首は、操縦桿じゃありませんっ……からっ！」と呻きながら機体を右に旋回させた。
対するポダワンは翼竜を羽ばたかせると、左に旋回して再び向かい合う会敵進路をとる。
再び近づく翼竜とＵＨ－１Ｊ。
デュランは、ポダワンの顔がはっきり見える距離まで迫ったところで突如機長の首を左にひねる。
「ひだぎゃ！」
カイロプラクティック的な効果音が機長の首から鳴り響いた。それでも機長はペダルを蹴って律儀に機体を左に急旋回させていた。
『あ奴め、体当たりをするつもりじゃった！』
デュランは、憤りとともに罵声を吐き出すと、剣を握り直してポダワンの姿を探した。だが背後に残していったはずの敵がいない。
「左！」
副操縦士の叫びに、全員が振り返る。
ポダワンは左側からヘリの機体の下をくぐる寸前に、機体側面の開口部から竜槍の先端をデュラ

ンに向けて正確に繰り出していた。
デュランは機長の首に回していた左腕の甲でもってその竜槍の先端を受け止めた。だがその勢いを殺しきれずデュランの身体は空中へと投げ出されていた。
『まだまだ！』
「陛下!!」
機体から投げ出されたデュランは、そのままの機体の下部を通過したポダワンに頭上から飛びつく。
背後から突如組み付かれたポダワンは、翼竜の背の上で拳を固めて振り返りざまにデュランの頬を殴りつけた。
『属国の藩王風情が！』
『連合諸王国軍など集められたのは、お前が、妙な提案をしたからだと聞く！　死ね！』
殴り返すデュラン。
翼竜の鞍上で、老年の男達の肉弾戦が始まった。
互いにしがみつき合っての殴り合いだ。よけることも防ぐことも出来ず、二人の顔面はたちまち腫れ上がり、折れた歯が飛び散った。
『恨むなら、モルト陛下を恨め！』
『当然、恨んでおるっ！　故あって味方しているが、いつか復讐してやるわいっ！』

殴り合いでは埒があかないと見たのか、ポダワンは腰の短剣に右手をかけた。
そうはさせまいとデュランも右腕を伸ばしてポダワンの右腕を押さえつけたが、ポダワンは両腕でデュランの腕をねじ上げた。
『くぉっ！』
さすがに片腕では両腕の力には対抗できない。右手首が悲鳴を上げて、デュランは苦痛に喚いた。
ポダワンは、勝ち誇った表情でデュランを押さえ込むと、その左腕の籠手を貫通している竜槍の先端をちらりと見る。
『儂の竜槍を、その左腕で受けたのが運の尽きじゃな……』
短剣を悠々と右腕で抜くと、白刃をきらめかせてデュランに突き刺そうとする。
だがその瞬間ポダワンは口から血を吹いた。
デュランの左腕に仕込まれていた短弓が矢を放ったのだ。
その直撃を受けたポダワンは、信じられないとばかりに自分の胸板に突き刺さった矢を見下ろしながら、翼竜の鞍から堕ちて地上へと消えていった。
肩で息するデュランは、翼竜に跨がると左腕の義手を見ながら言い放った。
『もとより、左腕なんぞとうの昔に捨てて来たわい』
翼竜達は、動きが鈍りつつあるヘリ部隊にいまだに群がりつづけていた。

だが、どこからともなく飛来した弾丸の奔流が翼竜をぼろ屑のように打ち砕き、撃墜する。
「な、なんだ!?」
『こちら空自の神子田(かみこだ)一佐とその仲間達！　助っ人にただいま参上！』
四機のファントムが、餌を狙う鷲のように次々と戦場へ降下してくる。
その獰猛(どうもう)なエンジン音は、竜騎士達の心胆を瞬く間に凍らせた。それに対して自衛官達は一気に気力を盛り返して歓声を上げた。
「味方だ！　空自のファントムだ！」
無限に続くかと思われた死の回旋ダンスも、航空自衛隊のＦ４ファントムが戦場に登場したことによって、終わりを迎えた。
わずか四機のファントムだったが、特地の空を征するその存在感は圧倒的である。
凄まじい勢いで迫り、銃弾を浴びせかけては目にもとまらない速さで離脱するその速度は、竜騎兵の手に負える存在ではない。
たちまち翼竜達は追い回され、あるいは二十ミリバルカン砲弾を全身に浴びて翼をもぎ取られ、空中で挽肉のごとき姿となって落下していった。

＊　＊

「ふぃ～、助かったぜ。よく来てくれた」と、健軍一等陸佐は汗に濡れた額を拭いながら、窓の外を見上げた。

二機ずつの編隊を二つつくったファントムが大きな弧を描いて旋回している。

振り返れば、健軍や彼の部下達は酷い有様となっていた。

上下左右に起動し続けたヘリの内部は、まるでミキサーにでもかけられたような惨状である。

外に投げ出されないだけマシといった様子で、皆、床や椅子にしがみついて息絶え絶えとなっていた。ようやく身体を起こして、放り出された者がいないか、装備を落としてないかを確認している。

『こちら神子田、敵はあらかたやっつけたぞ。大丈夫かそっちは？』

「なんとか生きてる。お礼をしなきゃならんな」

『いいってことよ。だけどどうしてもお礼したいってんなら……合コンでもひらいてくれれば受けてやってもいいぜ』

「どうしてもお礼をしたいなら受けてやっても良い」と、物言いこそは大上段であるのに、どこか懇願めいた響きに聞こえるのは耳のせいであろうか？

「合コン……だと？」

『噂は聞いてるぜ健さん。騎士団の娘っ子と親しくしてるんだって？　一人だけいい目を見てるのは狡いぜ。俺も美人や可愛いお嬢さんと仲良しになりた～い！』

神子田は昔から美人や、可愛い子に目がない。

だが、その野性味溢れるというより野獣的な言動を見ると、大抵の女性は一歩から二歩ほど退いてしまう。彼の良いところに着目しようという娘は滅多にいないのだ。

空自のパイロットという高スペックに惹かれて近づいてくる娘もいるが、いざ交際を始めてみるとその濃ゆい性格故に破局を迎えてしまう。そうでない場合も、自衛隊を辞めて旅客機のパイロットになってくれと言い出すので、長続きせず独身のままここまで来てしまったのだ。

「あ、相変わらずだな。そろそろ落ち着いたらどうだ？」

独身中年組の一雄でもある健軍は呆れたように言った。

『落ち着くためにも出会いが必要なんだ！』

「普通に出来ないのか？　ごく普通に」

『年取ったぐらいで、枯れてられるかってんだよ！　こちとら飢えてるんだ。……うるさい、頼むから黙っててくれ久里浜！』

どうやら後部座席の相棒から、何やら忠告を受けたようである。

だが神子田は『見逃してくれ。これが唯一のチャンスなんだ！　折角特地に来てこっちの美人と触れあわずに帰るなんてこと、俺には出来んのだ！　健さんに出来て俺に出来ないはずがない！もしそうなら、きっと此奴は何かの妖しい術で女の子を騙したんだ。きっとそうに違いない！』と叫んでいた。

「言っておくが俺はやましいことは何もしてないぞ。だいたい男女交際禁止の通知はまだ解除され

てないんだからな」
『何を今更！　そんなの律儀に守ってる奴なんてもういねーよ。あんな通知をいつまでも出しっ放しにしてるから、隠れて交際する連中が出て来るんだよ！　要領の良い奴だけが得するんだよ！』
なんだか抗議の声に、涙声が混ざっているように思えるのは気のせいだろうか？
「神子田一等空佐。言っておくが騎士団の娘っ子達は本当に若いぞ」
四十も半ばを過ぎて五十の声も聞こえつつある彼らからすると、娘とも言える年齢差なのだ。
『その若いお嬢さんと仲良くしている男に言われても説得力などな～いっ！　第一、年の差婚は今の流行だろっ!?　法律に触れなきゃ大いに結構！　頼むよ健さん！』
特地の特殊性なのか、それとも騎士団員達が特別なのか、彼女達は精神的に成熟した男を好む傾向がある。ヴィフィータも実を言えばそういうタイプで、同年代の男はガキにしか見えないとよくボヤいている。
『言って置くが、急いで来たもんだからそろそろ燃料がやばいんだ。だが、俺は健さんが良い返事してくれるまでここにいるつもりだぞ！』
「おい馬鹿、それって」
『そうだ。良い返事をしてくれないと、墜落しちまうぞってことだ。そうなったら健さんのせいだぞ！　さぁ、いい返事をくれ給えよ、ハリィ！　ハリィ！』
健軍は、頭を抱えた。

これは自分と後席にいる久里浜を人質にしたテロ交渉である。しかも目的が合コンとは……こんな事で戦闘機を墜落させようだなんて馬鹿のすることである。だが、そんな馬鹿を好んでやるのがこの神子田という男なのだ。

頭を抱えている久里浜の表情が見えるようだった。

「わ、分かった。ただし俺は席を設けるだけで、後のことには責任を持たんからな」

言いながらも、さてヴィフィータにどう説明しようかと健軍は悩む。

彼の語学力では、ヴィフィータとの複雑な意思疎通はまだ難しい。彼女が真っ直ぐでさっぱりした性格だからこそ、多くの言葉を必要とすることなく意思を通じ合えるのである。

だから、女の子を集めてくれないかと頼むのには大きな苦労をするだろう。要らない誤解を招くのはほぼ確実で、それを解くことにどれほどの手間がかかるのか。考えるだけでも恐ろしいのだ。

『やったぜ！　ありがとう健さん！　出会いさえお膳立てしてもらえりゃ、そっから先のことはもっちろんこっちの問題だからな。頑張るぜ！　詳しいことはまた後でな！』

神子田はそれだけを告げると、旋回をやめて飛行雲をたなびかせながら戦場の空域から去って行った。

「あ、悪魔め」

健軍は嘆息すると、パイロットに機体を着陸させるように告げる。そして進撃をこのまま続けられるかどうかの状況確認を急がせた。

「とは言え、これで一息つけたな」
「はい。団長」
眼下では投下された鎖の網にローターを絡め取られたり、翼竜に食いつかれたりして墜落したヘリの残骸から負傷者達が運び出されている。自分で歩ける者もいるようだが、犠牲は自衛官、エルベ藩王国軍兵士の双方に出ており、第四戦闘団としての作戦行動は難しいかも知れない。
着陸した機体から、降り立った健軍は、駆けつけてきた部下達を振り返った。
「損害状況はどうだ？」
「申し訳ありません。今、大まかなところを集計中です、しばしお待ち下さい」
「その大まかなところでいいんだが……数字はいいから時間的な要素だけあげてくれ」
健軍の部下は眉を片側だけ上げて応えた。
「作戦の続行そのものは可能ですが、怪我人の収容と後送にほぼ半日かかりますね」
健軍は苦い物を噛みつぶしたかのような表情となった。
「そうか、分かった。とにかく負傷者の救助と後送を急いでくれ」
「了解」
指示はなくとも、彼の部下達は救助活動を当然のこととして既に実行していた。
それを承知しているのにあえて健軍が告げたのは、作戦継続を断念したことに加え、負傷者の救出作業により多くのリソースを割かせるためであった。だがその時、幹部学校を出たばかりの若い

幕僚が血相をかえてやって来て敬礼した。
「どうした？」
「い、一佐……まずい事態になりました」
「どうした？　もしかして、ピニャ殿下が暇すぎてヒスでも起こしたか？」
「いえ。そうではなく、あの、その、あの、あの……」
情報担当の若い幕僚は、混乱しているのか状況をうまく説明できずに口籠もっていた。額ばかりか全身から汗を噴き出していて、見ていて可哀想になるほどに混乱している。健軍も苛立ちを通り越して哀れに感じたため、怒鳴りつけたい衝動を抑えゆっくりと語りかけた。
「分かった。とにかく順序立てて状況を時系列順に説明してくれ。古い順にな……」
「は、はい。分かりました。では時系列順に説明致します。まず、ゾルザル陣営に潜伏している『料理人』より、帝国軍がフォルマル伯爵領にいるという報告が入りました」
「う～む。やはりか」
この健軍の言葉に幕僚達は素っ頓狂な声を上げた。
「予想されていたのですか!?」
「あらかじめ想定していた事態の一つではある」
幕僚達が周辺の地図を広げ、健軍を中心にそれを取り囲んだ。
健軍は茶色で描かれている山岳地域を指さした。

「おそらくゾルザルは、このあたりを横断してフォルマル伯爵領へと入ったのだろう？」
地図に記された経路の長さと峻険さに最初に反応したのが、補給担当の幕僚である。
「どうして料理人は、途中で報告を送ってこなかったんでしょうか？」
「荷物か何かに潜り込んで外の状況が掴めなかったんだろ？　それなら、目的地に着くまで自分が何処にいるかなんて分かるはずない」
「しかし、偵察にひっかからなかったのは？」
「このあたりは航空写真を見ても、森が深くてよく見えない。しかも作戦の準備段階に入ると偵察行動は、敵の動きが活発な地域ばかりに集約されたからな、それ以外の地域は……ましてこのあたりは敵の動きも少なかろうと、情報収集が手薄になっていた」
「無人偵察機を導入する計画はどうなったんだ？　あれっていったいどうなってる？」
情報幕僚は自分が責められているように聞こえたのか、言い訳のように返した。
「グローバルホークはまだ配備されてませんし、運用するとしても通信衛星をはじめとしたインフラの整備が不可欠です。アフガンやパキスタン上空で無人偵察機を運用できるのは、軍事衛星を通じてリアルタイムで中継できるからでしょ？　そういったものがない特地じゃあ、持ってきても宝の持ち腐れですよ」
だからこそ、空自は旧式のＦ４ファントムを特地に持ち込んだのである。
それは単に古くて使い捨てにしても惜しくないばかりでなく、空戦、対地爆撃、偵察と様々な役

割をこなす多用途性と、情報インフラが整ってない環境下でも運用が出来るという利点を持っていたからなのだ。

健軍は情報担当の幕僚に尋ねた。

「イタリカはどうなっている？　ピニャ殿下はどんな対応をとっている？」

「は、はい！　柳田（やなぎだ）二尉の連絡では、正統政府軍は城外に出て応戦するかまえのようです」

健軍は、「よし、さすがはピニャ殿下だ。よく分かってる」と鋭く膝を叩くと叫んだ。

「今すぐにイタリカに向かうぞ！　負傷者救助と後送に必要な数を残して、残りはこれよりイタリカのゾルザルを叩くために転進する」

陸上自衛隊では、判断や行動は遅疑逡巡することなくということを口を酸っぱくして教えている。健軍の素早い判断は、そのお手本とも言えるものであった。

幕僚達も異議なく一斉に肯く。この戦いの目的がゾルザルを叩くことにあることは、誰もが理解していたからである。

『ケングン団長、どうされたのだ？　突然引き返すとは……折角ここまで進んできたのに！』

デュラン国王が竜槍を担いだ姿で、義足を引きずりながらやって来た。その周りにはエルベ藩王国の兵士達が数人ほど付き従っている。

「おい、倉田！　通訳頼む」

健軍は倉田三等陸曹を呼び寄せると、通訳を命じてデュランに敬礼した。

「陛下。ただいまこちらに届いた報告によりますと、ゾルザルは一軍を率いてイタリカを襲撃しているとのよし。我々の標的は、ひとっ飛びで手の届くところに来てくれました」
『なんだと……？』
「我々はゾルザルを狙うためにイタリカに急行します。陛下はどうされますか？」
『無論参加させてもらう！　皆も、動ける者を掻き集めよ！　急げ』
デュランは怪我の軽い者に負傷者の救出を命じると、健在な者を掻き集めてヘリコプターに乗り込むよう告げた。
たちまち、兵士達の間にこれから決戦という雰囲気が盛り上がっていく。だが困惑した情報幕僚は健軍の袖を引くと告げた。
「団長。自分はまだ説明を終えていません。もっと重要な報告が」
「なんだこれで終わりじゃないのか？　だが、確かにこれはまずい状況とは言えないからな。お前がそこまで慌てた理由ってのはいったい何なんだ？」
「はい。実は、つい先ほど『韋駄天』が発令されました」
「な、何!?　『韋駄天』だと!?　どうしてそれを先に言わない！」
さすがの健軍も怒鳴らざるをえなかった。幕僚の襟首を掴むとがくがくと盛大に振る。
「済みません。複数の情報が一気に輻輳して処理が重くなってしまい……」
若い幕僚は、自分を低スペックのパソコンに例えるかのような言い訳をした。一度にたくさんの

仕事を自分に強いるなとでも言いたいようだ。
健軍は軽い頭痛を覚えつつも、苛立ちを落ち着かせようとするかのように声の調子を落とした。
「何かの間違いじゃないのか」
だが若い幕僚は、額に流れる汗をふきながら手にしたメモに目を向けそれを読み上げる。
「いいえ。間違いではありません。状況『韋駄天』、退去準備命令で間違いありません」

状況『韋駄天』……それは特地派遣部隊が特地に踏み込む以前に政府によって作られた緊急対処マニュアルに想定された事態の一つで、『門』に何らかの異常、異変が見られたなど、日本と特地の連絡が絶たれる可能性が極めて高くなった場合に発令され、特地に派遣された全隊員は任務を放棄して、可及的速やかに特地からの退去準備をすることとなっていた。
いわば船底が破れ浸水が始まった船を救えるかどうかに手を尽くしながらも、総員退去を準備させる命令である。これに引き続いて、『脱兎』が発令されれば、総員退去、つまり特地派遣部隊の全隊員は日本に逃げ戻らなければならない。
「後少しでって時に、どうしてこんな事が！」
決して少なくない犠牲を払い、ようやくつかみかけた勝利を投げ出させる命令である。隊員達は納得できない悔しさで拳を震わせた。
「団長、あと少しです。あと少しなんですよ！」

健軍と同じヘリに乗り込んだ通訳要員の倉田が、食ってかかった。
「状況『韋駄天』の発令は、『門』に異常が発生したことを意味する。グズグズしていると特地に取り残されて帰れなくなってしまうかも知れん。すぐに、アルヌスに戻らなきゃならんのだ」
「でも『脱兎』はまだ発令されてません。なら、今すぐどうこうなるわけじゃありませんよ！　その間にイタリカに行ってゾルザルの首をとってしまえばいいんです！」
「だが、『脱兎』が発令されたらそれこそ特地は沈む船も同じだ。我々は、いつでも海に飛び込めるように救命胴衣を来て甲板に上がっている必要があるんだ。もう、船底でうろうろしている暇はないんだ！」
「じゃあイタリカはどうなるんです？　皇太女とか、彼女の部下達はどうなるんです!?　フォルマル伯爵家のみんなは、ペルシア達は、俺達が援軍に行くって信じてるから、一生懸命戦ってるんでしょう!?」
すると倉田の隣に座った陸士長が「三曹……それは言わない方が！」と注意していた。
「なんだよお前は！　他所の世界、他所の国の住人がどうなろうと知らんって言うのかよ!?」
「違いますって。団長が何も感じてないわけないって言ってるんですよ」
ヴィフィータに迫られた健軍が押し切られて、なし崩し的につき合っている状態になっていることは、隊員達の間でもそれなりに有名だ。もちろん倉田も知っており、健軍に対して特地で交際相手を見つけた仲間意識を抱いていたのだ。だからこそ裏切られた気分も強いのである。

「だったらなおのこと！　女を見捨てたりなんかしちゃ、男として駄目でしょう！　違いますか一佐!?」

健軍は、しばらく黙して倉田の言葉を浴びていた。そして重々しい態度で肯いた。

「確かに、お前の言う通りだ」

「だったら！」

「だが、例えそうだとしてもそれは俺の私事だ。お前はここに残る覚悟を決めてるのかも知れないが、他の皆はそうじゃない。俺やお前の事情の為に、他のみんなを巻き込むわけにはいかんのだ」

倉田もこれには言葉を返すことが出来なかった。

「分かりました。なら俺だけでも行きますから！　行かせて下さい！」

倉田はそう言うと、エキストラクションロープに手を伸ばした。だが、瞬く間に周りの隊員達から「馬鹿なことを言うな！」と抑え込まれてしまう。

「放せ！　俺は残留の希望を出してるんだぞ！　此処に残ってもいいんだ。俺を降ろせ！　降ろしてくれ！」

健軍は顔を背けたまま部下に「そいつを黙らせておけ」と命じると、「いいんですか?」と尋ねてくるパイロットに先を急ぐように告げた。

状況『韋駄天』を報せる通信は『特地』にて活動する自衛官全てに向けて流されていた。

それは現地の協力員と共に資源探査に向かっているチームや、敵地に潜入している工作員に対してもであった。アルヌスを離れて活動していた彼らは、その連絡を受けると直ちに引き返した。

そしてイタリカに駐在している菅原にも、退去準備の命令は届いた。

商店の倉庫の一角を宿舎として借りている彼は、朽ちかけた机の上に設置した無線機からの音声に耳を傾けていた。

背後の寝台上では旅装で身を固めたシェリーが葛籠に衣類や荷物をまとめている。既に皇帝の署名が入った信任状も届けられ、あとはイタリカを出発するだけなのだ。

「そんなに日本に行くのが怖いのかい？」

「わざと分からないふりをなさっているのですか？」

シェリーは涙で赤くなった目を菅原に向けた。

泣き顔の少女に菅原は慈愛顔で答える。シェリーの涙が自分との別れを悲しんでいるからということは分かっているのだ。それをあえて指摘するのが気恥ずかしかったに過ぎない。

「怖いかと問われるなら、怖いですわ。だってスガワラ様としばしお別れしなければならないんですもの」

「少しの……」間の事だよ、と続けようとして菅原は失敗した。

「スガワラ様？　何かあったのですか？」

シェリーはじっと菅原を見つめていた。

少女は聡い。思春期独特の感受性から相手の些細な変化もよく見抜くのだ。
外交官として訓練を積んできた菅原ですら、ごまかすのに苦労するほどだ。そのため菅原はシェリーには可能な限り隠し事や、嘘をつかないようにしていた。彼の精神的な動揺を見抜いたシェリーが、悲しそうな顔をするのが嫌だからである。
シェリーはシェリーで、自分が菅原を困らせていることを悲しむ。互いに相手のことを考えて嫌な思いをするなら、最初から嘘がない方がいいという結論なのだ。だが、さすがにこの時ばかりは事実を言えなかった。
「ちょっと出かけて来るよ」
「いま、お館に近づくのは、危険ではありませんか？」
「行き先は柳田二等陸尉のところだよ。伯爵家の館には近づかないから大丈夫」
菅原は、安心させるつもりで柳田の名前を出した。だがそれを聞いた途端、シェリーはつむじを曲げた。
「わたくし、あの方があまり好きではありませんわ」
「シェリー、そんな風に言ってはいけないよ。彼に君を託すのが心配になってくる」
「だって。あの方ったら、スガワラ様のことをからかってばっかりなんですもの」
シェリーは、菅原が柳田からシェリーとの仲を揶揄されていることを知っていた。幼すぎる自分のせいで、菅原が恥ずかしい思いをしていると思うと大変申し訳なくなるのだ。だからといって身

を引く気はないので、当然のごとくわき上がる反感は、柳田へと向かうことになる。
「彼は、若くて可愛い君と仲良く出来る僕を妬いてるんだよ」
「だからって……」
シェリーはぷぅと頬を膨らませた。そんな弾力のあるシェリーの頬を、菅原は指先でつつく。
「とにかく行ってくる。すぐもどるから、それまでに支度を済ませていて」
菅原はそう言い残すと、柳田の詰める自衛隊のイタリカ事務所へ走った。そこでは既に柳田が部下達と共に逃げ支度を始めていた。
「柳田二等陸尉！『韋駄天』ってのは確か……」
「おい、その書類はシュレッダーにかけておけ。ああ、菅原さん丁度良いところに来た。そこの鞄をとってくれ」
車椅子から立ち上がった柳田は次々と荷物をまとめていく。
もう歩くのに不自由はないくらいには回復しているのだが、こうした作業になるとどうしても、人の手を借りる必要があるようであった。菅原は手を伸ばすと鞄を柳田に放り投げた。
「『韋駄天』の発令、なんとかならないですかね？　狭間陸将に意見具申して撤回してもらうとか」
「無理を言わないでくださいよ。緊急時の対応マニュアルは閣議決定に基づいているんですから。狭間陸将とは言え勝手に出来るようなものではないんです。それがシビリアンコントロールってやつですぜ。外務省から来ているあんただってこれには従わなきゃならないはずだ」

「だけど、今我々が撤退したらここの正統政府はどうなります？　皇太女殿下達はどうなります？彼女達は自衛隊の援軍を信じているから、懸命に戦っているんでしょ？」

菅原は公私にわたって、このイタリカで様々な要人達と友誼を結んできた。それらを見棄ててここから逃げ出すことにはどうしても抵抗を感じてしまうのだ。

即答することの出来ない柳田は、すうっと息を吸うとため息と共に吐いた。

「確かに心配でしょうね。でも『韋駄天』が発令された以上援軍は来ない。みんな戦いに勝利したゾルザルの奴らに八つ裂きにされてしまうでしょう。ピニャ殿下も、ここの貴族や議員の方々も、フォルマル家の人たちも、たぶんおしまいですよ」

淡々と語る柳田に菅原は迫った。

「柳田さんはいいんですか、それで？」

「俺は自衛官ですから命令に従うだけなんですわ。俺の人生はこんな世界で終わることになってませんからね。高機動車が用意してあります。菅原さんも早く支度して下さいよ。いろいろと始末しなければならない書類だってあるんでしょ？」

「いや……僕は、私は残ろうと思ってます」

「それは自殺と同じだ」

菅原は柳田のたばことライターに手を伸ばした。そのままテーブルに身体を預けるようにして立つと、たばこに火を付けて、煙を天井に向けて吐き出し冷静に告げた。

「けどね、こっちにもいろいろと都合というものがあるんです。特地の専門家になる道を進み始めたからには、もう鞍替えは出来ませんからね。特地の国々との関係を断たれて、特地担当の外務官僚にどんな仕事があると思います？」

「そう言われれば、確かにそうだよな……」

仕事のない官僚の末路は悲惨だ。

肩叩きされて退職。そして天下った先の団体や企業で読書三昧の日々が始まる。天下り先では、仕事をしてはいけないからだ。それは仕事が生き甲斐の人間にとって、ある意味牢獄に入れられたようなものとも言える。菅原はそんな思いをするくらいなら、いっそ死んだ方がマシだと思っているのだ。

「もちろん、国益の追求という意味もありますよ。将来『門』の再開通があった時、日本人は正統政府の人々を見棄てたって言われたら、どんなに力のある外交官でも苦労すること請け合いだ。だけどここで残ってみせれば、信頼関係を一層強固な物に出来る。私の立場も強化される」

「あんたが自衛官だったら、俺はあんたを無理矢理縛ってでもつれて帰らなきゃならんところです。だがあんたは別組織の人間だ。どうこうする権限は俺にはない」

「分かってもらえてありがたい」

「あんたこそ、日本外交官の鑑（かがみ）だと思いますよ」

柳田はそんな菅原の肩をぽんと叩いて賞賛した。だがそのまま揶揄するような表情で顔を寄せる

と「でも、あんたはそれでいいとして、若い嫁さんはどうなるんです？　大使として日本に赴任するんだろう？　下手すると生き別れだ」と付け加えた。
「彼女のことは実家に頼むつもりです。手紙を書くので送り届けてやって下さい」
「嫌がられるんじゃないの？」
突然あんな年端もいかない娘が「嫁です」だなんて押しかけてきたら、実家が嫌な顔をするのではないかと柳田は危惧した。まだ幼い少女にとっても、知らない大人に囲まれて大切な時期を過ごすのは不幸でしかないはずだ。
「親父ならシェリーが帝国貴族の伯爵夫人だと知れば諸手をあげて引き受けますよ。きっとどっかのお嬢様学校にでも入れて花嫁修業させてくれます。ウチの息子の嫁は貴族の伯爵様なんだ、ウチも貴族の家系に連なる名家なんだって威張れますからね。母も、常から娘が欲しかったとか言ってる人です。こちらも手放しで喜んでくれるでしょう。心配ないですよ」
「分かった。そういうことなら、引き受けた。でも付き添わないって事、自分で言えよ」
生活費とか養育費とか学費とか諸々のことを気にかけていた柳田は、何か負けたような気がした。誰かと一緒になるとか、預かるとか言う時に、細かいことをぐちぐちと考えているようでは駄目なのかも知れない。どこかで後先考えない勢いみたいな物が大切なのだ。
部屋の片隅でじっとこちらを見ているデリラの瞳が暗い光を湛えている。シェリーを説得に戻っていく菅原を見送った柳田は、苦笑混じりの声をデリラにかけた。

「なんだその目は？　シェリーの嬢ちゃんが羨ましいのか？」
「へ、へんっだ。ニホンになんか行ったって苦労するだけさ。アタイはこっちで旦那の帰りを待つからいいんさ」
「なんだ、ついて来たくないのか？」
するとデリラはぐっと身を乗り出した。
「い、嫌だって言ってるわけじゃないよ。旦那が来いって言うなら、行かないこともないけどさ。でも、迷惑じゃないのかい？」
「気にすんな。なんとかなるさ。なんとかならなくても、それは向こうに行ってから考えりゃいいんだ。で、どうするんだ？」
デリラはそれまでの暗い表情を一変させると叫んだ。
「もちろん、行くよ！」

「……なんだって柳田さん？　もう一度、繰り返してください」
『韋駄天が発令された。ちゃんと聞き取れたか？　繰り返そうか？』
料理人としてゾルザルの近くに潜入していた古田もまた、その命令を受け取っていた。
「いえ結構です。了解です。けど、ここから脱出しろと言われても、正直困るんですが……」
古田は大きな木箱に挟まれた狭い空間に身を潜めながら、周囲に視線を巡らせた。

そこにはイタリカを背にするピニャの軍を、正面から攻め立てているゾルザル軍陣地の舞台裏があった。

軍医が顔面に矢を受けた兵士から鏃をひっこ抜こうとして真っ赤に焼けた金鏝を患者に近づけ、負傷者が全身全霊を込めて苦痛に叫んでいた。

また軍需物資を載せた荷車からは、補助兵が矢の束を次々と下ろして運んでいこうとしている。はっきり言えば敵のど真ん中なのだ。

ゾルザルの向かう先を調べるために、なまじ軍需物資の箱に潜り込んだのが運の尽きだったかも知れない。ここに到着するまで抜け出すことも出来ず、気がついたら戦場の真っ直中である。

『お前が戻ってくるまで待っていてやるから、何としても脱出してこい』

「あ、はい。了解しました」

通信を終えた古田は、通信機を袋の中に隠すと、隙を見て補助兵の列に混ざり矢の束を担ぎ上げた。ぼろぼろの貫頭衣姿だが、軍陣内で輸送や雑用を引き受ける雑役夫がそろって似た格好をしているため、かえって怪しまれずに済んでいた。

古田は補助兵の列の最後尾を歩きながら、ゾルザルの軍陣内からどうやって抜け出そうかと周囲を見渡した。

やはり、陣営の後方の方が警戒が薄そうである。だが、そちらに向かおうとして足を踏み出した途端、鋭い声に呼び止められてしまった。

「おい、そこのお前！　どこに行く！」
ヤバイ。怪しまれた！　古田は凍り付いた。全身の汗腺が開いてぶわっと大量の汗が噴き出してくる。
「こっちだ、こっちに来い」
立派な鎧で身を固めた百人隊長が、古田を手招いていた。
「り、了解しました！」
正直行きたくなかったが、黙って動かないでいるとかえって疑われると思った古田は、荷を担いだまま百人隊長に歩み寄った。
「隊長さん。何か御用ですか？」
「その矢はこっちだ。こっちに運べ。ついてこい」
「は、はい」
古田は、マントを翻して大股で歩く百人隊長の背中を小走りで追った。
「今回は酷い矢戦だ。お前達にも負担をかけることになるが、しっかり働いて見せろ。そうすれば名誉ある帝国軍の正規兵として取り立てられる機会も巡って来るだろう……」
どうやら怪しまれて声をかけられた訳ではなさそうであった。そればかりかねぎらいの言葉までかけられてしまう。
古田は新たな疑いを招かないように百人隊長の言葉に適当に合わせ、「はい。頑張ります、隊長

さん」とだけ答えた。
「うむ。良い返事だ」
この百人隊長。ただの百人隊長ではないようで、後ろに続いているとあちこちにいる兵士や警備兵、士官までもが敬礼して来る。
「ボルホス首席百人隊長！」
「なんだ副隊長!?」
振り返ると、同じような百人隊長の格好をした男が走り寄って来た。
「例の亜人共を何とかして下さい」
「何が問題なんだ？　彼奴らは殿下のご命令でやっているだけだ」
「分かっちゃいますがね、兵達にとっちゃたまらんですよ。何しろ今回の敵にはピニャ殿下の騎士団がいるんです。イチモツに血を集めた状態であんなべっぴん揃いと向かい合ったんじゃ、つい色気が出て剣先が鈍りかねません。それで逆に殺されたんじゃ馬鹿だ」
前線の兵士達は、女騎士達を生け捕りにしたがる。そのためどうしても突き出す剣や槍先が鈍る。そこを突かれてかえって手痛い目に遭っているのだ。
ボルホスは呻くように肯いた。
「どんな佳い女が出てきても、手加減するなって命令すればいい」
「ボルホス首席。それが出来ないってことくらい分かってるんでしょ？」

戦争のような命の危険に曝される状況下では、種族維持の衝動が非常に強く働いて、男は無性に女性が欲しくなる。何もしなくてもそうなのだ。待機している間、ずっと興奮させられていては、戦場で女性兵士と向き合ったら兵士が何を感じ、どう振る舞うかが目に浮かぶようだと副隊長は告げた。

ボルホスは大きくため息をつくと、しようがないといった風で今まで進んでいた方向とは別の方角に身体を向けた。

「あの……？」

「お前はここで待ってろ」

ボルホスはそう言ったが古田はその後ろに続いた。一人で残されるより、皆が見知っている人間に付き従っていた方が、誰何される心配も、疑われる恐れもないと考えたからだ。

「何故ついてくる、あそこで待っていろと言ったろ？」

「でも、あそこで突っ立ってると、別の隊長さんに何遊んでいるんだって怒られそうで」

古田の言葉に理があると認めたボルホスは「そうだな。なら、ついてこい」と告げて同行を許した。

少しばかり進むと、農家の朽ちかけた納屋がある。それが近づいてくると、中から女性の嬌声めいた悲鳴が漏れ聞こえて来た。

「なんです？」

「聞いての通りだ」

断続的に、リズミカルに響くそれを耳にした途端、古田はいたたまれない気分になった。それは親と一緒にテレビドラマを見ていて、ラブシーンが始まってしまった時のような気分に近いかも知れない。

「あの……　今、戦争の真っ最中なんですよね？」

ボルホスは忌々しそうに言い放つ。

「殿下のご命令でな。拷問ってことになっている」

「何かを聞きだそうとしているんですか？」

「違う。苦しめるためだけだ」

ボルホスは不快そうに吐き捨てると、戸口に近づいた。

「変だ。見張りがいないぞ」

戸口に立って中を覗き込む。するとボルホスは「あっ」と立ち尽くしてしまった。

そこで繰り広げられていたものが予想したものとは全く違っていたからだ。いや、予想した通りのものではあった。だが規模というか、次元というか、内容が全く異なっていたのである。

「ほらっ！　次よ！　次は誰？」

まず、拷問する側とされる側とが違っていた。なにしろ絞りかすにされて累々と横たわっているのは男達であったからだ。

倒れてぴくりとも動かない男達を、女は軽蔑の眼差しで見下ろしていた。

「何よ、もう終わりなの？」
「もう、勘弁して……くれ」
意識のある男も壁際にしゃがんで処刑の順番を待っているかのごとく、ぶるぶると震えている。
「情けない男。駄目駄目ね。でも、そんな男もわたくしの手管にかかれば……」
テューレはブルブルがたがたと震える男に、歩み寄ると妖しげな表情で耳打ちした。両の手で男に触れ、挑発し、唆すように蠢いた。舌先で、そして、全身で。すると萎びきって全く反応を示さなかった男が、たちまち蘇った。だが、男は悲痛な叫び声を上げた。
「ああ！　頼む、もうやめてくれ！　もう限界だ！」
「そうかしら。ここはそうは言ってないわよ。さあ、言いなさい。ボウロは何を企んでいるの？」
「知らない！　俺達みたいな下っ端が知るはずない！」
「嘘ね。下っ端は下っ端なりに、上が何をしているのか。何をしようとしているのか、よく見て、聞き耳を立ててそれなりに掴んでいるものよ。そうして知ったことを口にすればいいの。さぁ！」
「分かった。言うから待ってくれ……ボウロは、皇帝の血筋にハリョを入れようとしていたんだ。ハリョの娘にゾルザル様の子を産ませようとあの手この手で……その後に皇帝の一族からヒト種の跡継ぎを断ってしまえば皇統をハリョが乗っ取ることになる。ボウロはそう女達に言って、ゾルザル様に嗾けて」
「でも、実際に殿下の傍に侍ったのはわたくし。それに、ヒト種の奴隷が数人ばかりだったじゃな

い？」
「その事態は、ボウロもきっと計算外だったんだ。まさかあんたがゾルザルのお気に入りになっちまうなんて思わなかったのさ」
「だから、ボウロはわたくしに近づいて来たということなのですね？」
「そうさ。あんたはうまく利用されたってこと……あ、うっ……くっ」
男は、呼吸が出来なくなったのか胸を押さえると、白目を剥いてぐったりと倒れた。
「あら、やだ。もう終わりなの？」
答えなくなってしまった男をテューレは卑しい物でも見るかのように蔑む。吐き出す精が一滴も残っていなかったのか、男は最後に生命を放出し息絶えてしまったのである。
「しようがないのね……でも、ゾルザルに比べたらマシよ。それだけは褒めてあげる」
必要な情報を取り終え満足したのか、テューレは微笑みながら腰を上げた。
薄暗い小屋の中では、テューレが一歩進む度に鎖の擦れる音がする。手足から太い鎖が伸びているのだ。
そのテューレは門口に人の気配を感じたのか顔を上げた。
「あら、そこにいるのはボルホス首席百人隊長ではありませんこと？　貴方もわたくしを拷問しにおいでになったの？」
テューレはボルホスに狙いを定めたように鋭い視線をむけ、真正面から歩み寄った。

ボルホスはその猥らな迫力に気圧されたのか、少しばかり上体を後ろに反らす。
「いや。こういう拷問は兵に悪い影響を及ぼすので、せめて陣の外でするように言おうと思ったのだが……どうやら、終わったようだな。何よりだ」
動揺の隠しきれないボルホスの声は、どこかうわずっていた。
「そうですわね。わたくしを責め立てることが出来る男は、ここにはもういませんもの。どうでしょう？　隊長が、ゾルザル様のご命令を遂行なさっては？」
「いや。俺は戦いの前に女を近づけるのは好かない」
「堅いのね。でも、そういう男は好きよ」
「それは光栄だ。だが、今は、それどころではない」
ボルホスはテューレの肩を押し戻すと、傍らにあった斧を取り上げ彼女の手首についた鎖に押し当てハンマーで叩いた。
鎖を構成する鉄の環が数個、はじけて飛び散る。
「なんのつもりかしら？」
「説明したろう？　俺はこういう事は好かないとな。どこへなりと逃げろ」
だがテューレは、けだるそうなそぶりで「このなりで、逃げろと言われても困るのよ」と周囲を見渡した。彼女は何も着ていないのだ。
「お水を持ってらっしゃる？　喉が渇いたわ」

「水くらい自分で探せ」
「この格好で外をうろついていいのなら、そうするけれど。兵隊さんに悪影響があるんでしょ？」
テューレは自分の身体をこれ見よがしにボルホスに曝して、衣服を何とかしてくれと訴えかけた。
「おい、お前、何か着る物か、身体にまとえる物はもってないか？」
ボルホスが、振り返って自分に付き従っている補助兵に尋ねた。補給や物資の輸送に携わる補助兵なら、衣類の予備か、身を隠すのに具合の良い布のありかぐらい知っていると思ったのだ。だが、それはテューレにとんでもない効果を及ぼすこととなった。
「あ、テューレさん……ども」
古田はどういう顔をして良いか分からないといった風に、苦笑した。苦笑するしかなかったのだ。
心憎からず思っていた女性が、他の男と絡み合っているところを見てしまえば、わき上がってくる嫉妬やら、怒りや、憐憫といった様々な感情がない交ぜになってしまう。こんな時、どんな感情を表に出すかは、人それぞれだ。怒り出したり、泣き出したり、びっくりしたまま凍り付いたり……
古田の場合は、それが苦笑であった。
そしてそんな古田の顔を見たテューレは、驚愕の表情でしゃがみ込むと悲鳴を上げた。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
腕で身体を隠すと背を向け「いや、いや、お願い、見ないで！」と泣き叫んだのである。
「あっちに行って！　見ないで！　お願いよ！」

どんなふうに扱われようと屈しなかった女が、一瞬にして手弱女（たおやめ）に豹変したのを見て、ボルホスはその原因らしい古田をまじまじと見つめた。

＊　＊

「で、状況はどうなっている？」

緊急事態発生の報を受けて、首相官邸に招集された安全保障会議。

十三時きっかりに開催という連絡を受けて、息せき切って駆けつけてきた閣僚達はいったい何が起きているのかという説明を、事態対処専門委員に求めた。

情報をとりまとめた危機管理監が、これに応える。

「本日午前九時五十八分。中央区銀座四丁目交差点付近を行進していた、国際ＮＧＯ『銀座事件の外国人被害者への補償を求め、特地を開放する会』の参加者およそ三千人の内の一部が、警視庁警備部の警官を振り切って暴徒化。銀座駐屯地から出ようとしたトラックに襲いかかって積み荷を略奪し、これを検挙しようとする警官隊との乱闘騒ぎとなりました。騒動は国際ＮＧＯ全体に波及し、投石やプラカードを武器として暴れました。機動隊が放水などで対応しましたが、国際ＮＧＯは銀座駐屯地を占拠して立て籠もりました。国際ＮＧＯ側の要求は、『門』を国連常任理事国の共同管理下におくことに同意せよと言うものと、帝国側に銀座事件の外国人犠牲者の補償を約束させるこ

とで、それが無い限り動かないと言って気勢を上げています。また、我々が事態の解決に話し合いでなく強硬手段を選択した場合、『門』を破壊すると言っています」

「銀座駐屯地を占拠して気勢を上げてるだって！　素手の暴徒をどうして防げなかった!?　どうしてドーム内まで侵入を許したんだ!?」

官房長官の木檜（こぐれ）は思わず席を立って危機管理監を怒鳴りつけた。だが警察庁の次長は、まるで他人事のような冷静さで木檜の問いに答えた。

「未確認ではありますが、暴徒の一部に自動小銃やロケット弾、爆発物などで武装している集団があったという報告も入ってます」

「なんだって!?　いったいぜんたいどこからそんなものを」

夏目（なつめ）は国家公安委員長の無知さ加減に呆れたような口ぶりで説明した。

「日本の海岸線は長く、小型船舶でならどこからでも近づけます。その気になれば武器を持ち込むことは可能です。どうやって北朝鮮は拉致犠牲者を連れ出したと思いますか？　阪神淡路大震災の時に、某団体所属の建物跡から、自動小銃やら迫撃砲なんかが見付かったのは有名な話でしょう。聞いてませんか？」

「初耳だぞ。しかしそういうことなら機動隊が対処できなかったのも仕方がないだろう。だが自衛隊は違うはずだ。陸自はいったい何をしていたんだ！」

木檜は矛先を警察から自衛隊へと転じ、統合幕僚長を指さした。

「暴徒の全員が武装していたわけではありません。当初は非武装の民間人が相手だと思われました。そのための発砲は控えざるを得ませんでした。そしてその間に人海戦術で押しきられてしまったというのが実情です」

「なんだそれは!?　何のために銃を持たせていると思ってるんだ。暴徒なんか撃ち殺してしまえばよかっただろう!?」

危機管理に疎いことは個人の資質であるから聞き流すことが出来るが、責任を現場に転嫁するような物言いだけは聞き捨てならず、夏目は木檜をたしなめた。

「無理を仰ってはいけません。暴徒と、騒乱に巻き込まれた民間人が救いを求めてきたのと区別もつけられない状況で、誰彼構わず撃てるわけないでしょう？　下手に撃てば、それこそ民間人を虐殺したと批難されること請け合いです。そうなる前に素早く撤退してくれたことを、褒めたいくらいです」

警察、海上保安庁の代表者も同意見なのか揃って肯いた。

自分達も同じような状況に曝されれば、似たような判断を下すからだ。

奇襲を受けて対処不能の事態になったら、どこかに線を引いてそこまで退く。事態がその線を越えるのをとにかく防いで膠着状態を作り、その間に情報収集して敵情を把握する。その後、反撃を開始。それが奇襲を受けた際の対処の基本と言える。

「だが、そのおかげでこんな状況になってしまった。夏目君、これは君の責任とも言えるぞ」

「はい。防衛大臣としての責任から逃れるつもりはありません。ですが常日頃から、領海侵犯して違法操業した漁船の拿捕も銃撃も出来ないほど現場の手足を縛っておいて、こういう時だけ毅然とした対応を求めるのは無茶な話だということは認めて頂きたい」

「違法操業の取り締まりと、これとは違うだろう！」

「後難を恐れて事なかれ主義に陥っていたという意味では同じです。彼らにしっかりとした対応をして欲しかったのなら、普段から、様々な局面で危険にさらされている自衛官、海保の職員にも必要とあらば撃ってよし、後のことは政府が引き受けるといった態度をとっているべきでした」

「今は、有事の真っ最中だろう!?」

「『門』の向こう側とこちら側とでは対応マニュアルが別になっているのです。こちら側でも相手が武装していたら『撃ってよし』と命じてありますが、逆に言えば相手の武装が確認できない限り武力行使は出来ないんです。そして陸自の隊員は非殺傷型の武装なんて所持してません。一人や二人ならまだしも、群衆相手に拳で戦えとでも言うんですか!?」

ここまで言われると、さすがの木檜も自分の言っていることが、どれほど実態からかけ離れているか気付いたようである。

「い、いや、そうまでは言ってはないが」

「では、そのような無茶はおっしゃらないで頂きたい。ところで駐屯地内にいた職員や隊員達はどうしてますか？　無事ですか？」

夏目の確認するような視線に、統合幕僚長が肯いた。
「え、はい。ほとんどが特地側に逃げ込んで無事です。それと暴動に巻き込まれそうになって駐屯地に助けを求めてきた観光客十数名がいましたので、それらも保護したという報告が来ています。ドームの鉄扉を閉じ損なったのも実はその女性達を保護するためだったということです」
「で、その『観光客十数名』は大丈夫なんですか？」
「はい、怪我はないようです。ただその連絡の最中に特地派遣部隊との連絡が途絶えてしまったので、詳しい身元等の確認は出来ないままです」
「連絡が途絶えたというのはどういう意味？」
「どうやら回線ケーブルが切断されたようです。十時三十五分に光ファイバーを含めて全ての通信手段が使えなくなりました」
「どうして連中はそんな真似を!?」
警察庁次長は答えた。
「今回の騒ぎは単なる国際ＮＧＯの暴走とは考えない方がよいかと思われます。一部ではありますがその行動は異様なまでに組織立っていて、統制がとれていました。制服こそまとっていないがまるで軍隊のようだという現場からの報告も入っています。おそらくは最初から周到に計画されたものだったのでしょう」
「つまりはだ、連中は最初から特地に派遣している二万と六千五百人の自衛官を、人質にとる魂胆

でこんな騒ぎを起こしたという訳かね？」
「そう見るのが妥当です」
嘉納と夏目が互いの顔を見合って唸った。
「拙いことになりました」
「ああ拙い」
「何が拙いんですか？」
嘉納の隣にいる財務大臣の日野が、身を寄せてきた。
統合幕僚長が説明の為に言葉を継ぐ。
「実は特地派遣部隊のマニュアルでは『門』に異常がおきたり、日本との連絡が途切れたりすると、不測の事態に備えて、隊員達に引き揚げの準備命令が出されることになっているんです。現在の状況はそれにあたります」
閣僚達は一斉に立ち上がった。
「特地派遣部隊に引き揚げ準備命令って、今は作戦の大詰め段階だったんじゃないのか!?」
「ええ、ですから拙いと……」
外務大臣の嘉納は手にした資料に添付された写真を叩いた。
「状況を整理しよう。銀座駐屯地は暴徒達によって占拠されている。そうだな？」
「はい。略奪や投石こそ止んでいますが、駐屯地の周りは今、座り込みのせいで近づけない状態です」

「そして『門』からこちら側は連中に占拠されている。ただし、隊員が問答無用で銃をぶっ放す『門』の向こう側にまでは立ち入ってない。そうだな？」

危機管理監は嘉納に向き直ると、確認事項の一つ一つに肯いていった。

「暴徒の正体は分かるか？」

これには警察庁の次長が答えた。

「公安の報告によれば、デモ参加者の大多数が中国人です。次いで韓国です。他に多い順にロシア、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、オランダ等が混ざっているようです。構成は、職業的な国際ＮＧＯ団体のスタッフ、留学生、観光旅行の名目で入国してきた面々と……なんだこりゃ、どうして反捕鯨グループなんてのが入ってるんだ？」

それを聞いて木檜が嘆息する。

「公安委員会は、どうして銀座での外国人デモなんて許可したんだ？」

「代表は日本人でしたし、主張が銀座事件で出た外国人被害者への補償を求めるというものだったからです。銀座事件では外国人にも犠牲者が出ていたのは確かです。ですからその意味でも海外からのＮＧＯなどが参加するのも当然だと考えていたのです」

「それに、中国人観光客が参加したって言うのか？」

「他にも労働者、留学生ですね。それとは別にここ数日、観光ツアーなどと称して中国人グループが入国しておりまして、その構成が、厳つい体格をした男性ばかりで、しかも代表者の指揮で統一

された行動をしていたそうです。それが今回の騒ぎの中心かと思われます」
「もしかして人民解放軍ってことないか!?　中国政府の反応は？」
「現在、森田総理が大使を呼び寄せて問いただしているところです」
「連中の要求は、『門』を国連安全保障理事会の下に置くことだったな。さもなきゃ『門』をぶっ壊すか……実際、『門』はそう簡単に壊せるものなのか？」
「ええと、勢いのついたトラックに突っ込まれたら角度のよっては拙いかも知れません」
『門』は石を積み木のように積み上げただけのものである。鉄筋も入ってないため、ダンプを何回か激突させれば破壊できるだろうと危機管理監は告げた。
「特地派遣部隊は異世界の漂流者となるってわけか」
「中国ではなく、国連に管理させろって要求があざといですね」
木檜の言葉に夏目が嘆息する。
「結局は同じ事ですが、国連を看板にしただけで、自国の利益を目的とした行為ではなく日本の権益独占を防ぐのが目的だと主張できます。これにアメリカをはじめとした各国が参加しているとなると、めちゃくちゃやっかいですね」
「現実を見れば一目瞭然だろう？　デモにそれらの国の人間が参加している。木檜さんの言うように、何らかの申し合わせが連中の間にあったと考える方が適当だ」
閣僚達は外務省の役人達が配った書類を捲り素早く目を走らせた。それには、事態に関係してい

ると思われる各国政府の姿勢がどのようなものであるかが記されていた。
「中国に対して積極的協力の姿勢をとっているのが韓国とロシア。力尽くで日本から『門』を取り上げろっていうのがその主張だな。これに対して、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカあたりは日本が賛成するなら国際機関をつくって『門』を共同管理することに賛成しても良いってところか。あの国が反捕鯨団体なんか送り込んできたのはそのせいだな」
「つきあいで参加しただけだというメッセージですかね？」
「欧米は、『門』を閉じることに賛成してくれたはずだぞ」
話が違うぞと喚く木檜に、夏目が説明した。
「自国の権益追求に無関心な国はありません。そういった国が他国からの説明だけを鵜呑みにするはずがなかったんです。それでもこちらの提案を受け容れたのは、これまで我が国に隙がなかったからでしかありません。中国の動きによって、我々の側に少しでも隙が出来るなら、そこを衝いて来るのも当然と言えるでしょう。ここで我々が少しでも間違った対応をすれば、後々で大変なことになります」
「そう、問題はそこだ。俺はもう、『門』は破壊されても構わないんじゃないかと考えてる。どうだ？『門』がなくなっちまえば、連中は要求の対象を失って暴動も騒乱も収まるぜ」
すると閣僚達は一斉に色めき立った。
「乱暴だぞ、嘉納さん！　約三万人の自衛官と装備をどうするつもりだ！」

「装備についちゃあ、更新予定の中古品ばかり集めて送ったんだ。失ったところでさして痛くねえだろう？　ついでに言えば『門』は閉じることにしてたんだ。想定外を言えば、現地に残す隊員が三万にもなっちまうことだが……これだって、別に彼らを永久に失うってわけじゃない。帰ってくるのに手間がかかるが、宇宙探検にでも出したと思えばいい。しかもいずれ戻って来れるのはガチだ。何しろレレイ嬢から協力の約束を取り付けているんだからな」

嘉納の言葉が皆に行き渡ると、安全保障会議の面々から嘉納の冷徹すぎる意見に対する表情の険しさが少しずつとれていった。事態の困難さに動転してた彼らも、状況の推移によっては、嘉納の提案も真剣に検討しなければならないことに気がついたのだ。

国家の危機管理は、例えるなら人食い細菌に侵された患者の外科手術に似る。

擦り傷のような小さな傷口から侵入した人食い細菌は毎分ミリという驚異的な速度で広まっていき、人間の手足を容赦なく壊死、溶解させていく。その脅威から患者の命を守るためには、医師はまだ健康と思われる部位であっても、大胆に切除してしまわなければならない。

言うなれば、危機管理は何をどれだけ犠牲にするかという残酷な決断で成り立っている。

これを素早く判断することで、はじめて全体を守ることが出来る。最初から全てを守ろうと遅疑逡巡していると逆に全てが救えなくなってしまうのだ。

その結果として患者からは「どうして、ただの擦り傷がこんな事に!?」という罵声を浴びることになるが、それをしなければ患者が死んでしまうだけに、素早く状況を判断し、決心し、断固たる

態度で行動しなければならない。切り捨てられる側にとっては、たまったものではないだろうが、優しい政治などこの世には存在しない。政治とは元来、そういうものなのだ。

領土、国民、資金や威信。それと実力行使をともなう場合は自衛官や警察・海上保安官の命。これらは本来どれも失ってはならないものだ。だが、それでも何かを捨てなければならない状況なら、優先順位をつけて、何を残し、何を捨てるべきかを選ばなくてはならないのである。もちろんそれらを選択する時の価値観、優先順位は、状況や組織の存在目的によって異なってくる。

例えば国に所属する戦闘組織なら、戦力の維持や国家の安全こそが何よりも優先されることになるし、それが人道的な活動を旨とする機関であれば、人命が優先されるべきだろう。

自衛隊は国家に所属する戦闘組織である。従って隊員個々の生命の優先順位は、相対的に低くなる。でなければ、そもそも敵との命の奪い合いを隊員達にさせられるはずがないのだ。

それでも隊員の命を第一に考えて行動しているように見えるならば、それはその状況下で、秤のもう片方に載せられたものが、隊員の命よりも軽いと考えられているからに過ぎない。もし国家の安全や国益が天秤の片方に載せられたら、隊員の生命は必要な犠牲、許容できる損害という扱いをされて、容赦なく切り捨てられる。そもそも自衛官とは、それを覚悟して隊員となった者達だからである。

嘉納の提案は、特地に派遣した隊員達を中・長期的に『特地』に孤立させることを容認するもの

である。嘉納は今の状況下では、これを許容し得る損害と見なしたのだ。

それは『門』の閉鎖と、特地で得た新領土の確保をどうやって成し遂げるかを検討している段階では、慮外視されていたものだ。それをすることは、隊員と家族との隔絶を意味していたからだ。だが、いずれ戻れるという前提があるならば、今の危機的状態では三万の家族を分断させるという選択も必要とあらばしなければならない。

もちろん国としても隊としても、彼らが帰って来るまで総力をあげて残された家族を支援する。生活支援、精神的な支援等々は当然だ。それでも足りずに、きっと多くの不幸がまき散らされるだろう。だが、一国の首都が外国の軍に占領されるという事態だけは回避しなければならない。そのためなら断固として行わなければならないのだ。

当面の間にせよ『門』がなくなってしまえば、『特地』という餌に釣られて集まった諸外国の結束も吹き飛ぶだろう。

閣僚達も嘉納の示唆に事態の落としどころを見つけたのか、それぞれの担当する部局の立場で損得勘定を始めていた。財務省なら予算、官房長官の木檜ならどうマスコミに対応するかだ。

「いいえ、そうもいかなくなりました」

だが、嘉納の提案を否定する声が会議室に響いた。

中国大使との会談を終えた森田が、疲れきった表情で安全保障会議の会議室へと入ってきたのだ。

森田がその席に着くのを待って嘉納は問いかけた。

「森田さん、いったい何があった？」
「中国側からレレイ嬢の身柄にまつわる示唆がありました。彼女は、中国側に確保された可能性があります」
「なんだって!!」
彼女がいなければ、三万の隊員は戻ってこられない。隊員達の命は奪われるのに等しくなり、それは許容することの難しい損害となる。
嘉納の提案に光明を見た直後なだけに、安全保障会議の面々の表情は蒼然となった。

04

銀座駐屯地が中国人武装勢力によって占拠されたという報告が入ると、首相の森田は、安全保障会議を招集すると同時に中国大使を呼び寄せて釈明を求めた。
「銀座で起きている出来事について、説明をいただきたい」
森田にしては珍しく強い口調で発された問いかけに、彼の憤りが表れていると言える。だが普段怒り慣れていない彼が感情任せに発した言葉は、外交戦の嚆矢（こうし）と見るには力みすぎて、いささか鋭さに欠けていた。

大使の楊は、困惑したような表情で森田の怒りを柳に風と受け流した。
「突然の呼び出しに、いったいどんなご用件が待ち構えているのかと気を揉んでいたのですが、銀座の件と言われましてもよく分かりません。いったい何を問題視なさっているのでしょうか？」
とぼけているのは明白で、森田は怒りの感情を抑えきれなくなりそうだった。どうにか堪えると、なるべく落ち着いた口調になるように言葉を継いだ。
「しらばっくれないで欲しいですね。銀座で起きている出来事を知らないとでも？」
「国際ＮＧＯがデモをしていることは耳にしています。我が国民も多数参加しているようですが、別に我が国民だけでなく、アメリカやフランス、ロシア、韓国といった国の団体も参加していると聞きます。どうして私だけが呼び出されて、そのような強い口調で詰問されなければならないのでしょうか？」
森田は大使の前に赤い旗で埋め尽くされた写真の束を放り出した。
「見なさい、大部分は中国人じゃないですか!?　しかも規制に従わずに騒ぎを起こしている。警察官にも負傷者が多数出ています。これは、デモではありません。最早騒乱です！」
「この程度の騒ぎは我が国ではそう珍しいことではありません。それに、総理がどうしてそのご立腹を私どもに向けるのかが理解できません」
「他国で、自国民に暴動めいた騒ぎを起こさせておいて、なんという言いぐさですか！」
「誤解があるようなのであらかじめ申し上げておきますが、この件と、我が政府とは一切無関係で

す。暴動を起こしている国際ＮＧＯに我が国の国民が所属していることは遺憾だと思いますが、日本は民主国家のはず。外国籍とは言え、自由な市民の意見表明には耳を傾けるべきだと思いますよ」

「では、中国政府はこの度の暴動とは無関係だとおっしゃるのですね？」

「もちろんです。それとも首相閣下には、ＮＧＯの定義から説明しなければなりませんか？」

「言っておきますが、暴徒の一部に、自動小銃やロケット弾で武装している者がいたという報告も入っています」

「今、なんと仰いました？　私の日本語の聞き取りがおかしかったのかな？　もう一度繰り返して頂けますか？」

「ではもう一度申し上げましょう。ただいま、『門』のある銀座駐屯地を占拠している暴徒達の中には、自動小銃などで武装している者もいたという報告が上がっているんです。彼らは我が国に対して不逞な要求をしています。それが適えられなければ『門』を破壊し、特地に派遣されている自衛隊員三万人を、異世界の漂流者にすると言っているんです」

だが楊大使は訝しげに問い返してきた。

「それは本当ですか？」

「本当かとは、どういうことですか⁉」

「つまり、その国際ＮＧＯが武装しているという話です。ありもしない犯罪をでっち上げて、自由な市民の意見表明を力ずくで圧殺する理由にしようとしているのではないですか？」

「い、言うに事欠いて何ですかそれは!?」
「だってそうでしょう？　武器を持った暴徒が存在するという事実は報道されていますか？」
「駐屯地内はデモ参加者に占拠されていて、誰も近づけない状態です。報道陣が近づけないのに、報道されるはずがありません」
「では、何をもってあなたの言葉を信じれば良いのですか？　日本の民衆や、海外の民衆はあなた方の言葉をどうやって信じれば良いのです？　報道されない事実は無いも同然。誰も信じないでしょう。我が国の責を糾す前に、客観的な証拠を提示して頂きたい」
「くっ……」
「仮にですよ、森田総理のお言葉通り武装した者が混ざっているとして……」
「いるんです！」
楊はやれやれといった表情で、森田を宥めるように言った。
「仮に貴方の言が正しいとして、国際ＮＧＯの要求は一体なんですか？」
「『門』の管理権を国連に譲渡せよというものです」
「つまり、国際社会が貴国に要求しているものと同じということですか？」
「そうですね。そうなります」
「日本政府としては、その武装した暴徒をどうされるおつもりですか？」
「我が国は、テロに屈することはありません。テロリストと交渉はしません」

「つまり日本政府は、至極まっとうな要求をする自由な民衆をテロリストなどとレッテルを貼って、力でもって鎮圧して『門』の閉鎖を強行しようというつもりなのですね？」
「日本政府はすでに決定を下しました。変更はありません」
「しかし、それをする為には、まず自由な民衆を排除し、その武装勢力とやらも排除して、特地に派遣した部隊を引き揚げさせた上で、『門』を閉じなければならない。これは大変な手間となるでしょう？」
「大変でも何でもありません。それが必要なことなら行うまでです」
「ですが、わずかでも失敗や間違いがあれば、特地に派遣されている自衛官二万六千人は、もう戻って来ることは出来ない。違いますか？」
森田は、楊大使が特地に派遣されている自衛官の数を正確に語ったことに気がついた。閣僚達ですら約三万人と大雑把に数えている者が多いのに、どうしてそんな数を把握することが出来たのかが気になった。
「あなた方に心配して貰う必要はありません」
「本当に良いのですか？　我が国の要求を受け容れて頂けるならば、この問題も平和的に解決することが可能になるかも知れない」
「それが中国政府の要求ですか？」
「いいえ、これは私個人からのささやかな提案です。どうでしょう？　『門』を閉鎖するのを取り

やめて、特地に我が国から毎年五十万人の移民を受け容れて頂きたい」
「ご、五十万人!?　何を馬鹿な。そんな人数の移民を送り込めば、特地の情勢はあっという間に不安定になってしまう。それとも特地の領土を切り取って、第二の中国でも作るつもりですか？」
「そう言うつもりはありませんが、そうなる可能性はないとも申せません。ただ、その分こちら側は安定して平和になることは請け合いますよ」
「詳しく説明して頂けますか？」
「我が国の人口を思い返して下さい。十三億人です。膨大な数です。この十三億は我が国にとって武器でありますが、同時に危険因子でもあります。国家の使命とは、端的に言えば地球上に住まう他国民全てを皆殺しにしてでも自国民を養い続けることです。十三億の胃袋を満たし、十三億人に希望を抱かせる。十三億人の反感を宥めるためなら、我が政府は例え横紙破り、極悪人と批判され、他国から憎悪されても資源と食糧を掻き集め続けるでしょう」
「随分と身勝手で、迷惑な話ですね」
「もちろん十三億をこれ以上にしないための方策はとってきました。その一つが一人っ子政策です。ですが、これによって我が国の将来は暗澹たるものです。労働人口と、社会から養われる人口のバランスがおかしくなったら、どんなことが起こるか、すでに高齢社会となった日本の首相たる貴方なら分かるはずです」
楊大使は、声に力を込めて語った。

「この人口の重荷を減らすことが出来さえすれば、我が国も国際社会の一員として、もう少し紳士的に振る舞うことが出来るのです。そのためにも是非とも日本の協力が欲しい。特地への移民を受け容れて頂きたい。もし、これを適えて頂ければ、我が国は感謝の念と長く続く平和でもって日本の誠意に応えるでしょう」

言っていることの是非はともかく、中国大使が落ち着いた語り口であったため、森田も激していた感情を落ち着かせ一息入れることが出来た。

「そのためには、まず、偏った反日教育を止めるところから始めていただきたいですね。貴国の子供達は、我が国が長年にわたって貴国を援助してきたことすら知らないままに、我が国を日本鬼子と罵っているんです」

「我が国には反日教育はありません」

「お話になりませんね」

森田は会議がありますのでと腰を上げようとする。だが大使は、森田を引き留めた。

「どの国にも、さまざまな主義主張を抱く集団がいて、中間に立つ者は苦労します。右から見れば真ん中は左に見え、左に立つ者からは真ん中に立つ者は右に見えて双方から攻撃されるのです。歴史教育はその中でも最たる物で、極右に属する者にとっても、極左に立つ者にとっても敏感な問題と言えるでしょう。貴方が反日教育と称しているものは、我が国においては既に普通で、当たり前の一般常識、人格教育となっているのです。これに手を加えて改めようとすることは、外国の圧力

に屈したと見られかねない。政府に対する批判が強くなって、国内が不安定になりかねません」
「それが明らかに間違っている内容だとしてもですか？」
「他国の例で申し訳ありませんが、アメリカでは科学的に明らかに間違っている聖書の人類創世物語を、進化論の代わりに子供達に教育しろと騒いでいる党派があります。そういった者にとっては、真実などどうでもいいのです。自分の信じている聖書の教えだけが大切なのですから。この問題は最早それと同じ次元なのです」
「とは言え、我が国はしてもいないことをしたと罵られることを我慢する理由はありません。まず反日教育の改善を要求します」
「とても難しい問題です。とても今返事をすることは出来ません。どうでしょう？　そうした問題は将来の課題にすることとして、未来志向で友好を求めていくというわけには参りませんか？」
「未来志向という言葉も都合の良い形で使われ過ぎたかも知れませんね。我が国は、これまでも未来志向で友好的にやってきましたし、これからもやっていくつもりです。いつだってそうですよ。だからこそ貴国が突如として尖閣諸島を自国の領土だと言い始めた時も、事を荒げないようにして来たのです。なのに、あなた方は常に我々の努力を裏切る。それでも我が国は我慢して、様々な場面で譲って来たんです」
楊大使もこれには、何か言いたいことがあるのか憮然とした表情となった。だがそれらを飲み込んで、求めることだけを言葉にした。

「ならばこそ、特地を我が国に開放することも受け容れることが出来るはずです。貴方はいつでも譲って来たとおっしゃるが、そうして来たのは我が国との友好に利益があると見たからではありませんか？　ならば今回も譲ることが出来るはずです。そうすれば我が国と貴国の間には平和による繁栄という利益がもたらされるでしょう。日本企業の多くは、我が国に工場を置いて、我が国を重要な市場と位置づけています。それらの企業活動が円滑に進むためにも、我が国に滞在する日本人の安全を確保するためにも、友好こそが大切です。そのためにも貴国はここで譲歩するべきなのです。もし、それが出来ないのなら、貴国との緊張をはらんだ偽りの平和も、あっという間に崩れてしまうでしょう。貴方はこの国の代表として、それで良いと言われるのですか？」

「私は、そうならないように願っています」

「願っているだけでは不可能です。不断の努力が必要です。我が国は、日本政府に対して努力を要求します。二万六千人の自衛官を漂流させたくなければ、我が国の命令を聞き入れなさい」

「命令を聞き入れろとは何様のつもりですか!?　無礼な！」

「いいえ、この際ですからはっきりと言わせて頂きます。自由な民衆は国連安全保障理事会の管理を求めているようですが、それでは我が国の利益は少な過ぎます。我が国は、特地の共同開発協定を結ぶよう要求します」

「お断りします」

「もし、『門』が失われても二万六千人の自衛官は帰ってこられるという確信がどこかにあっての

強気の態度なら、少しばかり考え直した方がよいでしょう。『門』を扱える娘……たしかレレイとか言いましたか？　その子がいなければどうにもならないのですよ」

そう言って楊大使は総理の前に包みを取り出した。中からはレレイの杖が出てくる。

森田もレレイとは何度か面談している。彼女の杖には見覚えがあった。

「こ、これは！　どうやってこれを!?」

「魔法の杖だという話ですから、魔法の力でと申し上げておきましょう。いずれにせよ日本国政府は、我が国の命令に応えるしかないのです。日本の置かれた立場も、これで理解できましたね？」

「それがどうした!!　やりたきゃやればいい！」

森田は怒りにまかせてそう叫びたかった。

だが二万六千人という数の重さが、彼にそれを許さない。

楊大使の勝ち誇ったような表情を見た森田は、やり場のない憤りに全身が震えるのを感じていた。

＊　＊

――アメリカ合衆国　ホワイトハウス――

任期満了間近な大統領のディレルは、日本の首相からかかってきた電話をどうあしらうか苦心し

ていた。その内容が、同盟国を見棄てるのかとアメリカの対応を詰るものだったからである。
「そんなことはない。我が国が日本を見棄てるなど、決してあり得ない」
『ならば、どうして『門』や特地の件では、中国に与するような態度をとっておられるのでしょうか？　反捕鯨団体を送ってよこされた意味はそれなりに理解できますが……』
「最初に言っておくよ。我が国にとって日本列島は、太平洋へとあふれ出てこようとしている中国の膨張を抑え込む絶対防衛線だ。我が国と日本列島の安全保障は既に一体化しているんだ。だから、我が国が日本列島を見棄てることは決してあり得ない。例え日本政府がもう結構と言っても、我が国は日本列島から手を退くことはない。これは、マハナが次期大統領となっても引き継がれる方針だ。だから安心したまえ」
『安心して良いのか悪いのか分からないようなお言葉ですね』
森田は、ディレル大統領が手を退かないと言った対象が、日本政府や日本人ではなく日本列島であることを記憶に留めた。
「それが東シナ海、南シナ海の現実なんだ。我が国と中国との間で、上手くバランスをとって繁栄を謳歌するのが、君の父親の代からの日本の基本方針だったようだが、どうやら中国に肩入れし過ぎてとんでもない化け物が育ってしまったようだね。隣国が強くなることを援助する者は馬鹿を見るという良い教訓だよ、これは」
『後悔が先に立たないのは承知しています。ですが、これまでのアメリカの振る舞いにも問題があっ

たのです。貴国は何か不都合なことがあると、態度を改めるより先に、我が国を槍玉に挙げて問題を解決しようとして来ました。我が国は貴国の横暴に対抗するためにも、近隣諸国に力をつけて貰わなくてはならなかったんです』

「その結果がこれだ……いや、その話はやめよう。ここはそういう話をする場ではないのだからね。我々の先達がどんなつもりで近代史を築いてきたかはまた別の機会にしよう。今話題にすべきは我々の育てた化け物が、予想以上の大きさになってしまったということだ。今や、上手くバランスをとるなんて言っている場合じゃない。今や日米は一体となって、中国にあたらなければアジアの安定は維持できないのだからね」

『ならば、どうして今回は中国に与するような態度をとられるのですか？』

「『門』や特地の件は、我が国にとっては安全保障よりも経済問題の側面が強いからだ。我が国も『特地』からなるべく多くの利益を得たい。そのために日本と個別に交渉しているより、国連の常任理事国による管理が相応しいと考えたに過ぎないのだ」

『しかし『門』を閉じなければならない理由は、嘉納外務大臣が説明したはずですが』

「だがそれらの情報は、全て君たちのフィルターを通して提供されたものだ。そのことを大変にもどかしく思うのだよ。君達の重要な判断に関与するための調査は独自に行いたいと考えている。だからこそ、日本政府には今回の申し入れをしたわけだ」

『我々の重要な判断……とは？』

「ゲートのことだよモリタ。異世界に道を開く技術を、君達が独占していることに我慢が出来ないんだ。それが人智を超えた存在が所有するものだということは分かる。だが例えそうであっても、我々が関与できないことは許せないのだ」

『だから特地を自分で管理したいと？』

「安全保障理事会による管理だ。真実を知るには全てをつまびらかにしてしまうのが一番だからね。だからこそ、今回に限っては他国と足並みをそろえて君達にいささか強めに要望することにしたのだ。『門』を閉じられてからでは、それこそ君達の独占を認めてしまうことになってしまう。そんな状態でマハナに大統領職を引き継いだりしたら、先代は何をして来たのかと批難されてしまう」

『しかし、やり方がいささか乱暴ではありませんか!?』

「誤解しないで欲しいのだが、銀座で起きている騒動と我が国とは関係がないよ。私が話しているのは、我が国の外交交渉上の方針についてなのだからね」

『どうして各国首脳達は、そろいもそろって同じようなことをおっしゃるのか』

「それが事実だからだよ。真実とは誰が語っても似たようなものとなる」

『そんな説明まで、揃って同じ言葉を口にされるとは思いも寄りませんでした。驚きです。まるで口裏を合わせているかのようですな』

「ボキャブラリーの多彩さを競うつもりはないが、少しばかり悲しく思うよ」

『何についてですか？』

「君が、私の所に最初に電話をくれなかったことだ。そうすれば他の首脳が私を真似したのだと言えるのに……」
『こちらの都合で後回しになっただけです。銀座のことは関係ないとおっしゃるなら、きっと暴徒の一部が我が政府に『特地』に派遣した隊員を異世界に漂流させるぞと脅していることも、ご存じでないとおっしゃるのでしょうね？』
「いや、そんなこと全く知らないな。本当に初耳だ。いったい何が起きているのかね？　皆を説得するのに助けが必要なら手を貸すぞ」
『いいえ、結構です。この件については、他所の国の力を借りるより楊大使と話し合った方がマシでしょうから』
「ならば、そうしたまえ。ただし『門』をどうするかの選択は慎重にするよう勧めるよ。様々な国が意見を同じくするというのは、それだけの意味があってしているのだということを忘れないようにするんだ」
『ええ、そうしますとも。では大統領、良い一日を』
大統領の執務室に置かれたソファーに腰掛け、ボスが日本の総理と電話するのを見守っていた大統領補佐官は、受話器を置いたディレルが不機嫌そうに眉根を寄せたことを敏感に見て取った。
「何かありましたか？」
「ＮＧＯを焚きつけて、キャンプギンザを包囲するデモに参加させるところまではよくやってくれ

た。君の働きに感謝しているよ。しかしなんでまた反捕鯨団体を？」
「急なことだったものですから、日本に対して抗議行動を起こすような活動をしている団体が他に見つけられなかったんです。しかし事態は面白い方向に動いてます。こんなことなら、もう少し工作員の数を増やしておくべきでした」
「事態は、当初予定していたものと大きくかけ離れたものとなっているね」
「外からは圧力。内部では座り込みと、じわじわと選択肢を縛っていく予定だったのですが、チャイナ側は何か水面下で工作を行っているようです」
「チャイナ政府は、我々と約束した以上の要求を日本政府に対してしているようだよ」
当然大統領補佐官も電話の内容は聞いていたのだが、ディレルは、森田総理が楊大使と相談した方がマシだと口にしたことから推測できる状況を説明した。
「その交渉で窮したからこそ、モリタは電話をかけてきたのでしょう」
「自分から我々に合従策を呼びかけておきながら、自分だけ抜け駆けて連衡しようとする。いかにも奴ららしいやり方だ」
「ですがこの事態は、ゲートを開く技術を入手している日本政府なら、さしたる問題ではないはずですが？」
ホワイトハウスでは、嘉納が下した決断は最初から当然のことと考えられていた。だからこそ今回のアクションは日本を追い詰めることにはならないと考えて、中国の呼びかけに応じたとも言え

るのである。
「チャイナは、日本を窮地に追い込む切り札を得ていると考えるべきだな」
「はい。しかしそうなりますと、チャイナと日本の間をとりもって、仲介料を得るという方法は使えなくなってしまいますね」
「そうだな。我々はこのままではチャイナ政府から、当て馬に利用されただけで終わってしまうおそれもある」
「ついでに日米の関係に不信感という楔を打ち込むことに手を貸してしまったことになります」
「少し、功を焦り過ぎたかな？」
「では、今からでも日本に手を貸して挽回しますか？　先ほどの電話も助けてくれというモリタからの意思表示と見ることも出来ます」
「いや、それははっきりとした依頼があるまで何もするべきではない。今はまず、チャイナが手に入れた切り札が何かを確認するべきだ。君はこれからそれを全力で探るのだ。それこそが我が国が確保すべき物だからね。私がこのホワイトハウスの主でいることが出来るのもあとわずかだ。祖国のために、最低限のものを確保して、次に席を譲りたい」
「はい、ボス。今すぐに」
首相補佐官はそう肯くと椅子から腰を上げた。ディレル大統領は「そのようによろしく頼む」と告げて補佐官の背中を見送った。

＊　＊

「大統領の反応はどうでしたか、総理？」

森田が受話器を置くと官房長官の木檜は待ちきれないとばかりに声をかけた。

森田は、忙しない木檜に抗議するような視線を向けてから、執務室片隅でソファーに腰掛けている嘉納と夏目の方へと目を向ける。

二人は、森田が考えを整理する時間を与えるためか、じっと待ち続けている。わずかな時間だったが、その沈黙の間に森田は素早く要点をまとめた。

「アメリカと中国の連携は、実のところそれほど上手く行っていないのかも知れません」

「そりゃ、そうだろう。この二国の連携なんて事態は、ヒトラーとスターリンが手を組むようなものだ。一時の利益で協調路線をとることはあり得ても、何時までも続くもんじゃねえぜ。見当違いな反捕鯨団体を送り込んで来たことからもそれは分かっている」

「最初は、中国の乱暴な要求に怒った私が、中国に全面降伏するくらいなら安全保障理事会による共同管理を受け容れた方がマシだと考えるように誘導する戦術だと思ったのですが……ホワイトハウスの反応はそれに則したものではありませんでした。これは、もしかすると中国の抜け駆けなのかも知れません」

「そうか。だとすると……」
嘉納はニヤリと微笑むと、唇の形をぐいっと歪めた。
「連中はレレイ嬢の身柄をまだ確保してないと見るべきだな」
「まさか!?　どうしてそんなことが言えるんですか？」
木檜は訳が分からないとばかりに声を上げたが、夏目は大きく肯いて嘉納の意見に賛同した。
「それはあり得ますね。そもそも彼女を手に入れたなら、中国は銀座の『門』にこだわる必要はないんですから」
「夏目さんもそう思うだろ？　連中が彼女の身柄を抑えているなら、こんな騒ぎを起こさずに黙って北京に連れ帰って、どこにでも好きなところに『門』を開けばいいんだ。それをしないでこんな騒ぎを起こすのは何故か？　彼女の身柄を手に入れてないからだ」
「なるほど」
閣僚達は嘉納の推理に肯いた。
「もちろん身柄を抑えたからって、彼女が快く協力するとも思えんし、中国がここまで乱暴なやり方をする理由だって、別の目的があるのかも知れない。だがそんな状況は、俺には思いつかねぇんだよ」
お言葉ですが……と、森田はずり落ちかけた眼鏡を直しながら言った。
「私はそうは思いません。レレイさんが中国の手に落ちている可能性は低くないと思います」

「何故だ？」
「楊大使が見せつけてくれた杖が本物だったからです。木目が以前見た物と同じでした」
「木目？　あんた、良くそんなものを覚えてるな？」
「ええ。ゴルフクラブのヘッドにするのに良さそうな木材だなって思って観察してたので間違いありません」
　嘉納は思わず失笑したが、森田は自分の観察眼を誇った。
「そんなに良い木だったんですか、総理？」「ええ、パーシモンよりも良さそうでしたよ」という、場の緊迫感にそぐわないやり取りが首相と官房長官の間でとりかわされる。
「だがそれこそ、どうやってだ!?　中国はどんな方法で彼女の身柄を抑えた!?　『門』の厳重な警備を抜けて、どうやって特地に侵入して、彼女を拉致して来たんだ!?」
　レレイの身柄はまだ中国側の手に渡っていないと考える夏目は、状況の判断はあくまでも慎重にすべきだという意見をつけた。
「中国側が彼女の杖をどうやって入手したかを問うことはあまり意味がありません。その方法をこちらが思いつかないからといって、それが不可能なことだとは限らないのですから。もちろん嘉納大臣がおっしゃるように、彼女の身柄は中国側の手にない可能性もあります。ですが、そう決めつけてしまうのはやはり危険です。中国側が、我々をミスリードさせるためにわざとそのような動きを見せているとも言えるわけですからね」

だが、と嘉納は返した。

「情報が無いからって何もせずに時間を費やしちまうのは、もっとまずいことだろう？　情報が完璧に手元に揃うなんて、騒動が終わってからだって無理なんだからよ」

少ない情報の中で、仮定に仮定を重ねていくことは確かに危険である。前提となる状況の解釈がわずかに変わっただけで、物事の見え方は裏返ってしまう可能性があるからだ。だからこそ、精度の高い情報を常日頃から蓄積する努力を怠ってはならないのである。

だが、例えそうであったとしても、危急の際に必要とする全ての情報が揃うことはあり得ない。危機的状況では、不充分で不正確な情報が氾濫する。それでも決断をしなければならないのが為政者なのだ。

充分な情報が揃ってから判断を下すのならば、それこそ小学生にでも出来る。不充分な情報しかなくても重要な決断を下す勇気を持ち、なおかつ下した判断が正しいということが、為政者に求められる絶対的な素養なのである。

最高責任者の分際で情報を得るために騒動の真っ最中に事件の現場に足を運ぶとか、情報が揃うまで何も決断しないというのは一番してはならないことなのだ。

「とは言え、それでももう少し情報が欲しいです。こうなると特地との連絡が絶たれているのが残念でなりません」

危機管理監は、まず分かっていることを整理しましょうと状況の整理を始めた。

「とにかく総理のおっしゃる通り、レレイ嬢の杖が中国側の手の内にあったのであれば、その状況は大きく分けて三つに解釈できます。杖の偽物を作った。杖しか手に入ってない。彼女の身柄が連中の手の内にあるの三つです。ただし、どの状況でも中国側が、杖の存在を我々に提示した理由は一つに絞られます。それは我々の決断を遅らせるということです。中国が、何かの時間を稼ごうとしているのです」

「こちらに、そう思わせようとしている可能性もあります」

夏目の言葉に危機管理監は「それもそうですね」と肯いた。

「とは言え、時間稼ぎの目的とはなんでしょうか？　各国の介入？　軍でも派遣しようとしているのか？　いえ、『門』の向こう側に手を突っ込もうとしていると考えるべきでしょう」

「特地の派遣部隊と連絡をとる方法はないのか？」

「見通しが利くなら手旗信号とか、灯火によるモールス、大音響という方法もあるんでしょうが、『門』はドームで覆っちゃいましたから、現状では誰かを使いに送り込むくらいしか方法は思いつきません」

森田総理は統合幕僚長に、「何千人もの群衆の目を盗んで『門』を越える方法は……」と尋ね、首を振られて「無理ですか」と肩を落とした。

だがその時、外務省の役人が血相を変えて飛びこんできた。

「どうしました？」

「中国で、撮影禁止地区を撮影したという理由で日本の商社マンが四人逮捕されました。さらに日本向け輸出品の通関手続きを一切停止したという報告です」

さらに、海保の職員が飛びこんでくる。

「尖閣諸島に中国海軍の艦隊が近づいています！　このままですとあと数時間で領海内に入ります！」

財務大臣にもメモが届く。財務大臣はその内容を読み上げた。

「財務省からです。大量の円買い注文が出て、円相場がものすごい勢いで上昇しています。おそらくは中国のファンドによる為替操作です！　輸出企業の為替損は数兆円規模にまで膨らむ恐れがあります！」

「在中国の日本大使館前に大規模なデモ隊が。大量の投石、火炎ペットボトルの投擲で、大使館機能が麻痺しています。さらに上海では、日本料理店が襲われてます！」

「金融機関のＡＴＭ通信回線が、ハッキングを受けて機能停止。送金機能が麻痺しています！」

「ＪＲのダイヤ管理コンピューターが機能停止！　電車がことごとく停止しました！」

「そ、そこまでやりますか、彼奴らは⁉」

これを聞いた森田は血相を変え、腰を抜かしたように椅子から床へとずり落ちてしまった。

＊　＊

全てに当てはまるわけではないという前提をつけて良いならば……そう、血液型性格診断くらいの信憑性ではあるが、医者や看護師などの医療従事者は、担当する診療科目でその性格をある程度判別できる。

典型例としてあげるのに相応しいのは、整形外科だろう。

整形外科の医師の仕事は、大工仕事に似ている。出っ張っていれば削り、壊れていたら繋ぐというのがその治療戦術だからである。

「何科の先生ですか？」と尋ねて「整形外科です」という答えを得たら、その整形外科医の思考や性格は大工職人的なものだと思えばいい。

整形外科の病棟で働く看護師にしてもそうだ。労働災害、交通事故、スポーツ障害、その他の事故等を原因とする怪我を負った患者達によって、その病床の多くは占められる。

患者達の多くは内臓機能が健全で、日々体力気力精力を生産して、大いに持て余している。にもかかわらず日がな一日ずっとおとなしくしていることを強いられる患者が聞き分け良いはずもなく、彼ら彼女らと日常的に接する看護師達は大いに悩まされることになったりするのだ。

必然的にこうした病棟で働き続けることが出来るのは、多少のことではへこたれず、患者を叱り飛ばすことが平気で出来るさっぱりとした性格の持ち主となる。元々そのような性格なら天職だろうが、そうでないなら、そのような性格に変わるか別の科へと移っていくしかないのだ。

同様のことは小児科や精神科、産婦人科、内科、救急外来、手術室という職場にも言えて、その職場に長くいればいるほど、その科独特の気風というか性格傾向が作られることとなる。

環境とは、かくもその人物に深い影響を与えるのである。

その意味では、例え短期間であっても『特地』の戦場という環境に身を置くこともまた、人格に大きな影響を与える要素である。ましてや伊丹耀司という個性豊かな男の部下であったという経験は、それぞれの隊員に良くも悪くも多大な影響をもたらしていた。

同僚からはクロちゃんなどと呼ばれる、黒川茉莉（くろかわまり）もまたその一人である。

黒川は見た。多くの人間が戦場で死ぬのを。多くの人間が苦しみ、悶える様を。帝都の悪所では様々な種族の人間が、欲と愚かしさに負けて、あるいは自分の努力の及ばないものに翻弄されて苦しんでいた。

そこで、彼女は悟ってしまったのである。

「人生とは息抜きの合間にやるもの」「楽しんだ者が勝ち」「気負った方が損をする。気に病むだけ無駄」という伊丹の生き様こそが真理かも知れないと。

気を懸けていたテュカの問題に、自分の浅知恵より伊丹の無謀さの方が効果があったという敗北感も影響しているだろう。

どんな風に生きたって死ぬ時は死ぬし、生きる時は生きられる。ならば遠慮なんかするだけ無駄で、思うままに生きたって人生どうにかなっちゃうということを、彼女は心の底で学んでしまった

のである。

――自衛隊中央病院――

この病院に、何故か黒川は白衣を着て立っていた。

特地に派遣されている彼女が、どうしてここにいるかについては後述する。だが昔取った杵柄(きねづか)である。黒川はすぐに必要な事項を確認して、かつてのように要領よく仕事をこなしていった。

彼女の働きは、ベテランの看護師達をして、臨時などと言わず何時までもここで勤めて欲しいと言わせるほどであった。

だがそのベテラン達も、黒川がその内で磨き上げた本質を露呈し始めると、自らの発言が果たして正しかったのかと大いに悩むこととなった。

食止め（食事をしてはいけませんと医者から指示されること）を受けている患者が買い食いをしているのを目敏く見つけた黒川は、その背後から音もなく忍び寄ると、かぶりつこうとしていたあんパンを素早く没収して容赦なく言い放った。

「明日は検査だから、食べては駄目という通達を受けているはずですわ。なのに一晩も我慢できないなんて、貴官は犬畜生以下なのでしょうか？　そのおつむの中にあるのは辺縁系(へんえんけい)ばかりで、大脳

皮質はないのでしょうか？　もしかすると血管が狭窄してて前頭葉に栄養が充分に行き渡っていないのかも知れませんね。よろしいでしょう、貴官がご自身を犬畜生以下で本能を抑制できない存在であるということを、その行動で証明なさったからには、わたくしも貴官の扱いを考え直すことにいたしますわ。病院という場ではどのように振る舞うべきか、条件反射になるまでその身に刻み込んで差し上げます。そうですね、まずは買い食い出来ないようにベッドに縛り付けるというのはいかがでしょう。いえ、ご安心下さい。水分摂取や排泄には困らないよう、生理食塩水を点滴しておむつを装着してさしあげますので。ついでに衛生保持のために剃毛を施してさしあげましょう。え、おむつは嫌ですか？　困りました。ならばその情けない皮を被ったしなびた代物の先っぽから、バルーンカテーテルを膀胱まで突き通して差し上げることにいたします。これまで突き刺すことばかりに用いて来た代物ですが、今度はそれにぶっとい管を差し込まれるのです。さぞかし倒錯した気分を味わうことが出来るでしょう。いかがですか？」

心の弱っている患者だったら、そのまま再起不能になりかねないほどの容赦のない言葉の弾幕である。何の騒ぎかと集まってきた他の看護師達も、黒川の言葉を聞いてムンクの『叫び』の絵の如き表情となってしまった。

黒川の猛威はそれにとどまらない。

特地の戦闘で負傷し後送されてきた隊員が、看護師の臀部を撫でるという不埒な行動に及んだ時、打腱槌（硬質ゴム製）を脳天に振り下ろし「殴ったね！　看護師なのに患者を殴ったね！」という

上司からの叱責に対して「いいえ、これは頭を叩かれると両手で押さえるという反射が起きるかどうかという検査をしただけです」としれっとした顔で返したのである。

医療行為は患者の身体をメスで切ったり、針で刺したり、叩いたりという加害行為を伴う。これを医学的侵襲と言い、治療を行う上では必要な行為として容認されている。黒川は自らの行為をそれであると主張したのである。

「そ、そんな反射検査、聞いたことありませんよ」

「ご存じ有りませんか？　オクトパシー反射と言いまして、八本あるタコの足の中で、手の役割をしているのはどれかを調べるのに、頭を叩いてみればよいという落語のオチからつくられた検査なんです。これで陽性の反応が出ますと、患者はもれなく痛覚に対して正常であるという検査結果がめでたく出ることとなりますわ」

「あなた、ふざけてるんですか？」

「いいえ、至極まじめですわ。これが特地ならその場で銃殺にしてますもの。ここでなら強制わいせつ罪で警察に突き出すところです。でも、それよりはマシでしょう？　うふふふふ」

過酷な戦場体験によって、心を煩ったのかと思わせる不気味さを黒川は周囲に放っていた。

こんな黒川の振る舞いは、看護師達の話題をたちまち独占することとなった。

「今度来た黒川さんって、ちょっと凄くない!?」

「ほんと、過激だよね。あれで部長もよく怒らないよね」

「あれはいくらなんでも拙いでしょう」
「うん、さすがに部長も怒ったらしいよ。けど、あの人って全然へこたれないんだよね」
「あの超然とした態度、ちょっといいなって思っちゃったりして？」
「あなたもそう思う!?　私も少しだけ、見ててスカッとしちゃった」
医療現場は、いろいろな意味で不満の鬱積しやすい職場だ。それだけに黒川の容赦の無い言動は、多くの彼女たちと、そしてわずかにいる彼らに清涼感をもたらしたのである。
さて、そもそも特地に派遣されているはずの黒川が、何故中央病院で看護師をしているのかである。その深い事情についても説明が必要だろう。
ここに来る前、クナップヌイからアルヌスに帰還したばかりだった黒川は、『新難民』への対応を仕事としていた。
新難民とは旧コダ村の住民とは別に、アルヌスに保護されている帝国側のゲリラ活動によって住まいや家族を失って収容された者達である。
いろんな意味でもう難民とは言えないコダ村の住民達と彼らは一緒に扱えないため、アルヌスの街外れに別の仮設住宅が用意された。その対応は、経験者でもある旧第三偵察隊員に振られることが多かったのだ。
ところがある日、黒川は偵察隊本部の檜垣（ひがき）三等陸佐に呼び出され自衛隊中央病院に行けと命じられた。

「どういうことですか？」
「詳しい説明は、向こうであるそうだ」　黒川は命令を受けると戦闘服から制服に着替えて自衛隊中央病院へと赴いた。
そこで彼女を迎えたのが院長と、看護部長である。
「これを見て下さい」
見せられた書類はカルテである。だがそれには「防衛機密」というスタンプがぺたぺたと捺されているだけで、住所、生年月日、年齢、病名といった必要事項が、何も書かれていなかった。
「それが、今回君に来て貰った理由です」
黒川はカルテに記された氏名を読み上げた。それが唯一といって良いほどの情報である。
「伊丹耀司」
「そう。ここで経過観察することになった患者です。ですが見ての通り何も書かれてません。君は見ず知らずの患者を氏名だけで対応できますか？」
「無理ですわ。そんなことを言う上司がいたら『おつむの具合は大丈夫でしょうか？　一度脳ドックで調べて貰うことをお勧めします』と、申し上げることでしょう」
黒川の容赦のなさが表れた発言に院長と看護部長は一瞬たじろいだが、まだ許容範囲だったのかそのまま言葉を続けた。
「我々もそうです。とは言え、ここも自衛隊に所属する医療施設ですから、そういう無茶な要求が

あるのも仕方がないと思っています」
「はぁ……思ってしまうのですか？」
「誤解しないで下さい。我々だって文句は言ったんだ。これじゃあ何も出来ないと。正直言って困りますと。そうしたら情報開示は出来ないけど、この患者をよく知るスタッフを送るから、それを使いなさいって言って来たんです。それで派遣されてきたのが君なんです」
「なるほど。確かに伊丹耀司二等陸尉は、わたくしの上司でしたから、その人となりなど、ある程度は存じております。けれどその程度のことをもって、『よく知る人材』にカテゴライズされるのには大いなる反感を抱かざるを得ませんわ」
「ですが、それでも我々よりはマシです。正直我々では、彼の看護というか管理というか監督というか、扱いはもう不可能でお手上げなんです。助けて下さい、この通り」
管理職二人が揃って頭を下げた。
「どういうことですか？」
「彼の体内には、異世界の謎の生物が寄生している可能性があるので、隔離して観察するようにというお達しなんです。分かります？　謎の寄生生物なんですよ！」
黒川は、院長の正気を疑うように訝しげな視線を向けた。
「私は充分に正気です。いや、正気のつもりですが、ちょっと自分でも疑いたくなります。現実感に欠けてますからね。とは言え特地に行ってきた君なら、こちらではあり得ないような生き物の一

匹や二匹、向こうで見たのではありませんか？」
黒川は、特地甲種害獣の猛々しい姿を思い出して肯いた。
「ええ、確かにそうですわね」
「だとしたら、謎の寄生生物がいたっておかしくないってことですよね。ま、果たして本当に彼の体内にいるかどうか分かりませんけどね」
いくら上からのお達しとは言えやはり院長自身も、命令の突飛さについて行けないと、その心情を吐露した。
さすがに黒川も気の毒になったのか同情するような表情を返す。
「とりあえず、彼がここにいる間だけという条件で病棟勤務をお願いします。いいですね」
とまぁ、こんな事情で、伊丹の管理は黒川に託されることとなったのである。

さて、問題の伊丹であるが、彼の入院態度は良いとはとても言えなかった。
とは言え、それも仕方の無いことである。何しろ伊丹には自分が患者だという認識がないのだから。具合も悪くないし、怪我で痛い思いをしているわけでもない。
そのため彼は、まず最初に与えられた個室を漫画や小説、薄っぺらいノートにも似た印刷物でいっぱいにした。
これは通常の神経を有する看護師にとってはいささか我慢ならないことである。病床の周りは

すっきりと清潔に、整頓されていることを彼女達は理想としているからだ。
それを我慢していたのは、病気でもないのに隔離された伊丹に対する同情心からでしかない。
だがそんな心遣いを受けていることも分からない伊丹は、病室を抜け出しては行動の許された範囲内を隅から隅まで隈無くうろつき回った。
本人曰く「自衛官となって十年。嫌々であっても規則正しい生活をして、訓練という形で体を動かす日々を送ってきたため、体を動かさないでいることの方が苦痛を感じる体にされてしまった。これもきっと国家の陰謀に違いない」と言うのだ。
国家の陰謀云々の戯言はさておいて、これまた退屈するなら隔離病棟内をうろつき回るのも仕方がないと看護師達は思ったのである。
ところが、それで調子に乗ったのか、伊丹は看護師詰め所の前で、突如胸を押さえると苦しそうに「ぐわっ、くそっ、来やがった！」と悶えた。
これには看護職員達は大いに冷や汗を流した。本当に、宇宙的寄生生物が患者の腹部を突き破ってこの世に現れるかと思ってしまったのだ。サイレンは鳴らされる、警務官は廊下を走り回って患者と追突しそうになる、リネン室の洗濯物はひっくり返ると、病院中が大騒ぎとなった
ところがそれは伊丹の冗談であった。それを知った看護師達は憤慨し、理解した。伊丹という男には遠慮など全くいらないのだと。そして様々な管理方法が検討されて、二十四時間体制で完全武装した警務官をつけられたり、いざという時のために火炎放射器を装備した隊員が控えることに

なったのである。
　そして、その新待遇の説明をしたのが黒川だった。
「よぉクロちゃん。やっぱり白衣が似合うよな」
「隊長、とても元気そうで何よりですわ」
「ま、病気でも何でもないからな」
「とは言え、ここは病院ですわ。出来れば病室に引きこもっていて下さると助かりますわ」
「ええっ、退屈だよ～。せめて廊下を歩き回るくらいいいじゃん」
「それで、看護ステーションの前で転げ回って悶えたんですか？」
「そ、それは……暗い雰囲気の病棟を明るく盛り上げるために……」
「病棟の中が盛り上がっている必要などありません！　申し上げておきますが、今度馬鹿な真似をしやがったら、隊長には滅菌処置が施されることとなっています。いささか残念だとは思いますが、医療従事者としては未知の病原体や寄生生物にはそれこそが正しいと信じますわ。アルコールでは手ぬるいでしょうし、ホルマリンに漬け込むのはいささか手間がかかります。ならば火炎放射器でウェルダンという方法が一番ですわ。焼却は滅菌の方法としては最良とされています。高圧蒸気滅菌にすら耐え抜く芽胞ですら、焼却処分の前には無力だからです。つまり汚物は消毒だぁ～ということですわ。こんな方法を予告しなければならないのは、大変に不本意なのですが、隊長もわたくしも、国民の負託を受けた自衛官です。無辜の国民を未知の寄生獣、エイリアンといった存在から

守るため、これもまた致し方ないと思いますわ。伊丹二等陸尉にも自衛官として、異世界の寄生生物から国民を守るという崇高な任務を理解して頂きたいと思います。分かりましたか？　聴神経から信号は中枢に伝達されましたか？　大脳皮質に刻み込まれましたか？　おけー？」

何に使うつもりか巨大な注射器にも似た浣腸用のポンプを手にして、スコスコと脅すようにその筒先を自分に向ける黒川の不気味さに、さすがの伊丹も、こくこくと肯かざるを得なかった。

「ならば、結構です。隊長もご自身の立場をよく弁えて行動して下さいね」

「クロちゃ……いや、黒川。お前さん、性格がちょっとばかり過激化してない？」

何に対する遠慮か、伊丹は表現をいささか控えめにした。

「いいえ。そう見えるとすれば、きっと隊長のせいかと」

「けどさ、クナップヌイに行った時も、そこまで滑舌なめらかじゃなかったと思うぞ」

伊丹の言葉に黒川も思うところがあるのか、こくりと肯いてそれを認めた。

「きっと久しぶりの病棟勤務に舞い上がっているのかも知れませんわね。看護師という職を離れたのも不本意なことが理由でしたし、どこかに嬉しいという気持ちがあるのかも知れませんわ」

「お前の親御さんが、今のお前を見たら何て言うかな」

伊丹は黒川の母親から「娘を返して！　あの心優しかった娘が、こんなになってしまったのは貴方たちのせいだわ！　娘を返して～！」と詰られる光景を想像した。

「実を申しますとわたくしの母は既に亡くなりました。父は、海上自衛隊で潜水艦の艦長をしてお

りますからなかなか帰ってきませんし。今頃、きっと防秘の海底をうろついているはずですわ」
それは初耳だと伊丹は目を丸くした。
「か、海自さんですかっ!?」
「ええ。特地では全く活躍の余地が無いと陰口を叩かれている海上自衛隊です。思わず、『どんな気持ち？　ねぇ、どんな気持ち？』と周囲を回りながらはやし立ててあげたい気分ですわ」
「で、でも、海上自衛隊って普段からいろいろと脚光を浴びてるだろ？　東シナ海じゃ、ほぼ毎日臨戦態勢だって言うし、マンガの『沈黙』とか、小説の『亡国』とか結構描かれてるし、特地で活躍できないくらいどうってことないじゃん！」
「そうは言いますが、やはり活躍が陸に偏っているというのは、少しばかりバランスを欠くと思うのです。いずれ特地の海に父の指揮する潜水艦が沈む時が来るのを夢見ることにしましょう。世界情勢や編集者の機嫌によっては、そういう話になる可能性も今後起こりえるのですから」
「し、沈むってく、く、黒川さん？　さらっと酷いことを言ってません？」
「潜水艦ですから、沈むのは当然ですわ」
「でも、やっぱり潜るというか、就航するって表現もあるし」
「そうですね。確かに配慮を欠いた表現でしたわね」
「分かってくれて嬉しいよ」
「そのかわり、隊長も病棟ではよい子でいて下さいね。単調な病棟の生活で隊長が退屈なさってい

るのは理解できますので、ロゥリィ達にも来て貰うように頼んでおきますから」
「えっ！　ロゥリィ達!?」
伊丹は、それはちょっと待てと手を伸ばした。
「あ、いや、それは」
「嫌なのですか？」
いやいやと首を振る伊丹。嫌ではないから、嫌とは言えなかった。
だが嬉しくもなかったのである。彼女達が来るようになれば、ここに隔離されたことで得られた解放感も手放さなければならなくなるからだ。
伊丹は、そう遠くない内にある種の決断を強いられるという予感を抱いていた。せめてここにいる間はそれを忘れたかったのである。だが、それは口が裂けても言葉にすることは出来ない。黒川は彼女達と通じているから発言内容はすぐに伝わって自らを窮地に追い込むことになってしまう。
「いいえ。お心遣いに感謝します」
こうして伊丹は、複数の美少女と美女の見舞いを受けながら病室で比較的おとなしく過ごすようになったのである。
看護師の間で流れている噂によると、面会者のゴスロリ美少女といかがわしい振る舞いをして警務官に捕らえられたり、取り調べられたりしたようである。だが自分達看護師の手を煩わさない限りは、それももう許容範囲とみなされていた。

そしてこの日も、看護師として病室の様子をチェックしにきた黒川の顔を見た伊丹は、同人誌のページを捲りながら話しかけた。
「退屈だよ～、運動不足だよ～」
「では自衛隊体操でもなさったらどうですか？」
「自衛隊体操って、何だかとっても格好悪いよね？」
自衛隊体操……それはラジオ体操第一と第二をまぜこぜにした上で、運動強度を二～三倍増にしたようなものだ。自衛官ならば例外なく全員が新隊員の時に叩き込まれる。
残念なことだが、伊丹が言うようにそれはあまり格好の良いものではないのだ。
「どうして日本人の考える体操って、ビリーズブートキャンプ的な格好良さがないんだろう」
黒川は伊丹の愚痴に反応した。
「隊長、少しは前頭葉を使ってはいかがですか？　そんなにスタイリッシュな体操をしたいのなら、自分で創作なされば良いんです。もしかしたら練馬の体育学校から注目されて次世代の自衛隊体操として採用されるかも知れませんわ。そうしたらこれまでの自衛隊体操にうんざりしていた隊員達は、隊長の体操を伊丹体操と呼んで大いにもてはやすことでしょう。もしかしたらＤＶＤ三枚組で一万円を、テレビショッピングで三回分割払いとして大々的に発売されて、世界的にはやるかもしれません。あちこちでセミナーが開かれて、イタミ隊長はきっと引っ張りだこになるでしょう。ぐっじょぶ」

黒川は伊丹にサムズアップした拳を突きつけた。
「いや、考えろって言われてもどうしたらいいか」
「新発明に困ったらまずは換骨奪胎、本家取りから始めろと言います。ならば自衛隊体操をビリーズブートキャンプのリズムでやってみることをお勧めしますって言うか、とっとと踊りなさい！」
「は、はいっ!?」
伊丹は弾かれるようにベッドから降り立った。
「踊れって……自衛隊体操を？　なんでまた急に？」
「隊長が激しい運動で疲れ果ててくれれば、おとなしくなって後が楽になるのではないかと期待しているからですわ。きっと今宵の当直日誌は静かで何もない夜でしたと記すことが出来るでしょう。では、その場駆け足から、はじめ！」
言われるままに伊丹はブートキャンプのような速いリズムで自衛隊体操を試みた。そして、即座に挫折した。
リズムに身体がついて行けず、統制運動のあたりで筋肉が引き連れを起こしてしまったのだ。
「いちちちち」
黒川は、腰を押さえてうずくまる伊丹を残念そうな視線で見下ろした。
「慣れない運動で、筋繊維の一部が断裂したかもしれませんわ。疼痛刺激により筋緊張が誘発され、その筋緊張が断裂した部位を刺激してさらに疼痛が増大するという悪循環が起きています。麻

酔医を呼んで痛み止めの注射でもしてもらいますか？　いやいやそれでは面白くありませんわ。ここは全身、余すところなく皮膚という皮膚に湿布を貼るという方法が良いかも知れません。私は一度、温感湿布と、涼感湿布を交互に貼ったら患者がどう感じるかを実験してみたかったのです。いえ、安心して下さい。期限切れのシップが薬局の薬剤庫で不良在庫となっています。それを処分するだけなので国民の財産を無駄にしたと言われることはないでしょう。廃棄の手間がかからなくなるのできっと感謝されます。そして隊長からシップを剥がす時の私は、とっても楽しくなれるでしょう。じわじわと剥がすのがよいですか？　それとも一気に剥がすのが好きですか？」

「ど、どっちも嫌だ！」

伊丹は、イヤイヤと首を振りながら病室の床を後ずさった。だが、黒川はシップ薬の入った銀色の包みを片手にずいっと迫り、伊丹は壁際へと追い詰められることとなった。

「隊長、これは必要な治療ですわ」

「嘘だっ！　明らかに過剰医療だ」

「過剰医療だなんて。サービスですわ」

「お、お前やっぱり性格変わってるよ！　ちょっと毒舌だけど、おしとやかだった黒川はどこに行ってしまったんだ!?」

「いいえ。私は元からこのような性格だったのですわ。これまではいろいろと遠慮していたに過ぎないのです。ですが隊長のおかげで引っ込み思案だったわたくしも今ではこんなに元気です」

伊丹はいつの間にか組み伏せられていた。
パジャマのズボンが、ぐいぐいっと引き下ろされていく。
引き下ろされまいと抵抗する伊丹は叫んだ。
「嫌だっ、だ、誰か！　お巡りさあん助けて！」
部屋の片隅にいる警務官に救いを求める伊丹。だが、警務官のＡ一等陸曹は我関せずとばかりに、伊丹が脱がされるのを冷笑するだけであった。
だがその時、「やっほー、来たわよっ」という特地語の挨拶も高らかに突然扉が開かれた。
しばらく時が凍り付く。
「……これってどういう状況？」
開放された病室の戸口には、目を丸くして金色のさらさらとした髪を掻き上げた姿勢で硬直しているテュカと、その肩越しに病室を覗き込んでいる駒門とその部下一名。そして顔面に青あざを拵えている富田と、それに寄り添うようにして支えている栗林の姿があった。

05

皆の前では、さすがに黒川も伊丹に魔の手を伸ばすことが出来ないのか、病室の壁際まで引き下

がった。
「よく来てくれた。よく来てくれたよ、みんな」
伊丹は半分ほどずり下ろされていたパジャマのズボンをたくし上げると、テュカ達を、あたかも救いの女神のように迎え入れたのである。
そこで伊丹はテュカの装いがいつもと違うことに気づいた。
「テュカ……どうしちゃったのその格好？　コスプレか？」
「えへへ、かわいいでしょう？」
テュカは伊丹の前でくるりと一回転した。
「あ、ああ、見違えた。可愛いけど、なにより格好いいぞ」
「そりゃお父さ……ヨウジに会うんだもの。おめかししたのよ」
伊丹は「そうなの、嬉しいなぁ」と後ろ頭をかりかりと掻いた。
「はい、これ」
「ん、何これ？」
見るとテュカから渡された袋の中には、入院生活を送る上での必要な衣類などが入っていた。
伊丹は別に寝込んでいるわけではないから、洗濯くらいは自分で出来るし、実際していたのであるが、それをこうして誰かが持って来てくれる、誰かが気に留めていてくれるという状況には、じわっと心温まる物を感じた。

「お弁当も入ってるわよ。ヨウジの好きな物でそろえてあるから……」
ウィンクするテュカ。
伊丹が小さな弁当箱の蓋を少しばかり開けてみると、そこには工夫の限りが凝らされた品々がちりばめられていた。いわゆるキャラ弁という奴である。ケチャップで字を書いたりハートが描かれたりは、基本である。
さすがに周囲に開帳するのは恥ずかしかったので、伊丹は素早く蓋を閉じた。
「あ、ありがとうテュカ。すっげえ嬉しい！」
「それと、汚れ物があったら出して。持って帰って洗濯しておくから」
「いや、さすがにそれはいいよ。悪いから」
「何を今更遠慮してるの？　一緒に暮らした仲じゃない。洗濯ぐらい任せてよね」
この発言は、既成事実を楯に伊丹との距離を縮める意図を持って発されたものだ。だがそれは、伊丹とテュカの事情を知らない駒門やその部下、警務官Aといった法律や規律に煩い人間を少しばかりぎょっとさせた。
特に、警務官Aなどは「またぞろ、こんな若い娘を毒牙にかけやがって……」とでも言いたげな表情をしている。Aはロゥリィに伊丹とのいちゃいちゃシーンを見せつけられ、仲間を呼んで来て伊丹を捕らえ厳しい尋問をした男でもある。
その批判的な冷視線に、突き刺すような痛感を喚起された伊丹は、弁解するように言った。

「あ、この娘、百六十五歳ね。女子高生じゃないから」
誰からも問われもしないのに自分の年齢を暴露されたテュカは伊丹に「どうしたの？　なあに？」と訝しげな視線を向ける。
長命種であるエルフは、感覚がヒト種と違うこともあって年齢に拘るということはない。だが、それでも年齢という個人情報を、伊丹が他人に向けて言い訳めいた口調で口にしなければならない事情は気になるのだ。
「実は、前にロゥリィが来た時に、青少年保護健全何とか条例違反の疑いをかけられちゃって、おまわりさんからそりゃあもうすっごく叱られちゃったんだよ。疑いはすぐに晴れたけど、その後は自衛官なんだから世間体ってものに気を遣えってこれまた訓告されちゃって……」
伊丹は、過酷な取り調べを受けた後に、大いに怒られたと語った。
「青少年健全……何とか条例？」
テュカの問いに、黒川が答えた。
「この国では年端もいかない少女に淫らな真似をすると捕まるのですわ。ロゥリィくらいの外見ですと、きっと強制わいせつ罪での取り調べを受けたかも知れませんわね」
「変な法律ね。その法律を作った誰かは、幼い者は恋愛をしないって思っていたのかしら」
「そんなことはありませんよ。ただ若い時分はのぼせやすいものですし、騙されやすいのも確かでしょう？　だから大人の側に枷をかける必要があると考えたのですわ」

「ヒト種って、のぼせ上がらないように人格教育することより、禁じることを選ぶのね……変なの。経験を積まないままに解禁の歳に達したら、いっきにのぼせ上がっちゃうわよ」

エルフの社会では、そういったものは子供の手の届かないところに置くのではなく、コントロールできるようにする教育方針らしい。規制するよりは、その経験を子供の心を養うための題材として使っていくと言う。

「まあ、一律に年齢で規制するのも変だが、どこで線を引くかは難しい問題だし、取り締まる側にとっても基準がないと困るから結局は年齢で決めるしかないってのが現実なんだ」

駒門は警察関係者らしく、現実的な立場に則した解説を行った。

テュカはぽんと手を打った。

「とにかく、年端もいかない少女じゃないってことなら、大丈夫なのね」

「そう言ってしまえばそういうことになりますけど……」

論理的にはそういうことになるので、黒川としても頷かざるを得ない。が、「大丈夫なのね」と言いながら伊丹の腕を抱くようにしてぶら下がったテュカの様子を見て心配になったのか、釘を刺すように告げた。

「だからといってここで妙なことを始めないでくださいね。言っておきますけど、ここは病院なんですからね」

「大丈夫よ、お父さんと一緒に寝るだけだから」

これには伊丹が激しく反応した。
「ちょ、ちょっと待て！　今、いったい何の話をしている？」
「あたしが、今夜はここに泊まるって話よ。……ダメ？」
テュカは両手を顔の前で合わせると上目遣いに伊丹を見上げた。その潤んだ碧眼の輝きは伊丹をたじろがせた。
「ど、どうしてそういう話になる⁉」
「そうですわ。昔の病院ならいざ知らず、今の病院は家族であっても泊まり込みを認めていません。そういう事を勝手に決められては困ります」
すると、何があったのか黒スーツの袖の取れかかっている駒門が、何かを激しく叩いたのか微妙に曲がった杖をつきながら前に出た。
「実はだな……」
伊丹と黒川は、ようやく銀座で発生した騒乱を知った。詳しく知ろうとテレビをつけて初めて、都心の電車が止まり、銀行の回線がパンクしていることを知った。
だが、銀座のデモについては、駒門が言うようには報じられていなかった。銀座事件の被害者には外国人もいる。日本は帝国から賠償をもぎとったが、そこに外国人への補償分は含まれておらず、遺族達は泣き寝入りするしかない。そのため、なんとしてくれという主張をしているのだと、テレビ局は同情的に報じていたのである。

それだけに、伊丹はそのデモが暴徒化したという話を信じることは出来ない。外国人がわざわざ日本までやって来て、そんな騒動を起こしてなんの得があるんだと思ってしまったのである。

「信じろよ！」

駒門は叫んだ。

「お前だって、北京オリンピックの時の長野で何があったか知らないわけじゃないんだろ！」

聖火リレーの中継点となった長野は、中国の国旗で真っ赤に染められた。

日本に来ている中国人留学生や労働者が組織的に動員され、日本人は脇に追いやられた。チベットの国旗を持つ者は、巨大な中国国旗がたなびく間に挟まれ、周囲から見えないように隠された上で、袋だたきの暴行を受けるという事態が起きたのだ。ちなみにこれは国会で質問すらされた事実であるなのに何故か報道されていない。

「だけどさあ……」

テレビに映っているデモは大変に平和的で、行儀も良く、大型トラックが襲われたり、略奪騒ぎが起きているとはとても思えないのだ。

「ちっ、マスコミの奴らめ」

駒門と富田の二人は盛大に舌打ちした。真実を報道している局はないかと栗林はリモコンを伊丹から奪い取るとチャンネルをあちこちに変える。だが、どこにも彼らの見聞きしたことを裏打ちするような映像は報じられていなかった。

「でも、コマカドが言っているのは本当のことよ。あっちこっちで追い回されて生きた心地もしなかったのよ。富田が道を開いてくれてなんとか抜け出してきたんだから」

富田とて好きで青あざを拵えたわけではあるまい。伊丹もテュカの言い様を信じた。

「けど、まさかマスコミがねぇ……」

「ま、ここまで酷いのは俺も初めてだ。一人か二人、関係者をひっぱって取り調べなきゃならんかもな……」

下手すると藪をつついて蛇を出すことになりかねないと駒門は呟くと部下と共に腰を上げた。

伊丹は、「分かったよ」と肯いた。

「要するに今の銀座は危なくてテュカをつれていくわけにはいかないから、今夜はここで預かれってことだな？」

「話が通じたようで幸いだ。俺は今言った件もあるから本庁に戻らにゃならん。これからどこかに宿泊場所を探すのも面倒くさい上にやっかいだ。ここなら警備体制は万全だろ？」

駒門は伊丹のベッドの脇に立っている散弾銃を手にした警務官にちらりと目を向けた。

警務官Aもそれに応えて軽い黙礼を返す。

だが、同席していた黒川は冷静な口調で異議を唱えた。

「何を、勝手な事を勝手に決めているのですか？　もしかしてご自分を、世界の中心でアイを叫ぶ男とでも思っているのでしょうか？　それとも天動説のプトレマイオスですか？　自分を中心に世

界が回っている等という勘違いをしているなら、それが間違いであることを指摘させていただきますわ。いくら間違いだと言い含めても訂正が出来ないようであれば、頭部ＣＴにでもかけて、中身がちゃんと詰まっているか確める必要がありますね。もし中身が入ってそういう戯けたことをぬかすのなら、機能がおかしくなっているので、電気ショック療法でリセットしましょう。もし中身すっからかんだったら、代わりに糠味噌でも詰めこんであげましょう。そうすればちっとはマシになるでしょう。良いですか、言っておきますよ。病院には病院の規則というものがあって、そういうことは勝手に決められては困るのです。何が言いたいかというと、つまりはそういう妄言は少なくとも管理者の許可を取ってしろってことです」

伊丹と駒門は、黒川の放つ言葉の破壊力に圧倒された。

栗林は「く、くろ……猫被るの止めたんだ!?」と目を剥いて、テュカは「うわっ、クロカワが凄い」とどういう理由かは知らないが、頬をうっすらと染めた。

「こ、こういう時は、どうすればいいんだ、伊丹？」

「そんなこと言われても、俺にも分かんないんですけど」

すると栗林が説明した。

「駒門さん。クロは、管理者の許可をとれって言ってるんですよ」

「なるほど、確かに正論だな。管理者っていうとこの場合は院長ってことでいいのか？」

すると黒川は肯いた。

「はい、それがよろしいかと」
駒門は、やれやれと嘆息した。

06

栗林菜々美（ななみ）は、怒号と投石の乱舞する銀座にあって、頭を低く下げて放水や投石から身を躱しながら乗り捨てられた乗用車の陰へと逃げ込むと、この日、何度目かになる「信じられない！」という悲鳴をあげていた。
カメラマンと共に騒乱状態に陥った銀座の様子を取材し、一生懸命マイクに語りかけたと言うのに、何故か地上波も衛星放送のニュースも、そんな騒動は端から存在していないとでも言うかのようなものになっていたからである。
「ちょっと、どうして!?　いったい、どうなっているのよ!?」
菜々美は、携帯電話を取り出すと電話口に出た報道局のスタッフ相手に叫んだ。
だが返って来る言葉は、菜々美を絶望させるものであった。
『どうやら報道局長から、銀座のことは流すな、触れるな、臭わすなってお達しが出てるらしい。留（とめ）さんが、そんなのあり得ないって食いついてるんだけど……』

「こうして目の前で起きている事件を報じなくて何のためのニュースよ！」
楯を構えた機動隊員は、強く出ることが出来ずに警戒線を敷いて暴徒がそれより溢れてこないようにしている。暴徒達はそれを見てますます調子に乗って、石や火炎瓶を投げて我が物顔で銀座を埋め尽くしているのだ。
「あたしのしていることって無駄なの!?　だったら帰るわよ」
『んなことない、とにかく収められるだけの映像を掻き集めてくれ。今は日の目を見なくても必ず流せる時が来るから！』
「今、報じなくて何の意味があるのよ！」
菜々美は携帯電話をポケットに押し込みながら、古村崎（こむらざき）の言葉を思い返していた。
報道されている情報とは常に、事実をすべて伝えているわけではない。取材という行為そのものが、本来不可分である出来事を、情報という形で整理、取捨選択する作業だからである。
ニュースとは必ず誰かにとって都合が良いように加工されているものなのだ。とは言えそれは、時間的な限りがあるなかで報道という役割を果たす上で必要であるからされる行為であった。なのに今は、その加工作業が別の目的のために行われている。そればかりか、誰かにとって都合が悪いとなるとニュースとして取り上げられることすらないのである。
菜々美は同じように車の陰に隠れて取材している、顔見知りの他局スタッフに問いかけた。
「報道の役割って何ですか！」

「なんだ菜々美！　なんで今此処でそんなことを聞くんだ!?」
答えたのは、古村崎であった。
彼もまた銀座で騒動が起きていると聞いて駆けつけた報道関係者の一人であった。
「こうして、命がけで集めた絵が使われないかも知れないんですよ。古村崎さん、気持ちが萎えたりしないんですか？」
「そんなのはもう馴れた。自分の撮った絵を使って欲しけりゃ使って貰えるように、空気を読んで絵を撮ればいい！」
「でも、そんなの間違ってます！」
菜々美は、込み上げてくる不快感に奥歯をならした。
「おい、あれだ、あの機動隊員に連行されていく外国人の撮影をしろ」
古村崎はカメラマンに、機動隊員に捕らえられて連行されていく暴徒の姿を撮影するように言った。機動隊員は気が立っているのか捕らえた暴徒の扱いがいささか乱暴であった。それは警察が過剰な暴力を行使しているように見える、警察の横暴を見ている者に印象づけるのにちょうどよい映像となるのだ。
「くっ、ならあたしは……砂川君、あれを撮って」
栗林菜々美はカメラマンを叱咤するように、孤立した機動隊員が外国人暴徒によって袋だたきにされている光景を撮れと叫んだ。こればかりを選んで報じれば、暴動の凶暴さを印象づけるだろう。

そうなれば、視聴者は機動隊が制圧に乗り出すのは当然と考えるようになる。
「よし、俺達は銀座駐屯地に座り込んでいる外国人のコメントをとるぞ」
古村崎は、比較的おとなしくしている欧米系外国人の座り込みの様子を撮影すべく腰を上げ、菜々美は、それに対して反対側を向いた。
「騒ぎに巻き込まれている観光客や買い物客のコメントをとるわよ」
するとカメラマンは言った。
「菜々美ちゃん、まずいよ。絶対に使って貰えない絵ばっかりだよ！」
「わたしはね、マスコミにはもっと果たすべき役割があるって信じてるのよ。報道にはちゃんとしたルールがあるはずなの！　公共の電波を扱っている自覚があるのなら、お金になりさえすれば、仕事になれば何をしてもいいって考えにはならないはずなのよ！」
だがカメラマンの砂川は、菜々美に頭を冷やせと言った。
「菜々美ちゃん自身が、古村崎さんへの反感から、取材対象を偏らせているよ！　本当に真実を流したいなら、どっちの映像もちゃんと集めなきゃ！」
「あっ……」
菜々美は頭を殴られたような衝撃を受けた。

＊　＊

首相官邸を出た嘉納は、外務省差し回しの乗用車を断ると「夏目さん、話がある」と防衛省の大臣車に乗り込んだ。

「どうしたんです。外務省に帰らないんですか」

硬い表情の夏目は、どこか嘉納を突き放すような口調で言った。だが嘉納はそのまま夏目を後部座席の奥に移らせてその隣にどっかりと座る。

「参ったぜ」

「参っているわけにはいきませんよ。これからどうするんです？」

「俺も、森田があそこまで腰抜けとは思わなかったんだ」

責任の重圧に耐えきれなくなった森田は、『門』の管理を国連の安全保障理事会に預けるとまで言い始めたのである。

もちろん、閣僚達は声をそろえて止めた。特に強い口調で森田の前に立ちはだかったのが防衛大臣の夏目である。

「国連の安全保障理事会に預けてしまったら、我が国の国益はどうなるんですか!?」

「最低限は確保できますよ。それに安全保障理事会に託してしまえば、その後のことは我々が責任を負わなくても良いというメリットもあります」

「それで特地の問題を手放すことが出来たとして、中国との問題はどうするんです!?　このまま中

国が退いてくれるとでも思ってるんですか？　こっちの弱腰を見透かして、尖閣諸島に艦艇を常駐させるとか漁船の拿捕、さらには強行上陸をはかって来ますよ。いいんですか！」

「よいはず有りません。けど、ここで無理を押して突っ張って人質にされた日本人商社マンはどうなるんです。日本人を見棄てたって言われますよ。タダでさえ支持率が落ちてるっていうのに、そうなれば今度の選挙もダメです。惨敗です」

「しっかりして下さい総理！　そうなったら人質にされたことを堂々と批難すればいいんです！　相手の言いなりになってどうするんですか！」

「ならレアアースの通関手続きはどうするんです？　急激な円高であちこちの企業が悲鳴を上げて泣きついて来てますよ。尖閣諸島だって、戦闘になったらきっと多くの犠牲が出ます。それで勝てるんならまだいいですが、負けたらどうするんです!?」

「戦闘になれば多大な犠牲が出る可能性は確かにあります。ですが、我が国から領土を奪い取ろうとするなら、多大な犠牲を払う必要があるってことを分からせてやらなきゃダメなんです。そうでなくて、どうやってこの後、日本は独立と自尊心を保っていけばいいんですか!?　先の大戦寸前のフィンランドを見習って下さい。ソ連は、簡単に占領できると思って手を出しました。ですが、百万人もの犠牲を出すはめになりました。ソ連は勝つことは出来ましたが、フィンランドを侮れないって思い知ったんです。だからこそあの国は、難しい位置にあるにもかかわらず、バルト三国のような目に遭わずに独立を保ったんです」

「そうは言いますけどね、そんな決断は私には出来ませんよ」
「国際社会は、小中学校の教室と同じです。いいですか？　国連という名の教師は理想主義の無能者揃いです。そのせいで教室の中は力と数の論理が支配してます。そんなところで周りから舐められた子供はどうなると思います？　周りから虐められて毟られて、その上皆から笑いものとなって、誰にも助けて貰えないんです。虐められたくなければ、手を出してきた相手に必死になって噛みついて、こいつを怒らせたらヤバイって思わせるしかないんです。国家は愛されたり、親しまれたりするだけじゃいけません。国民や国益を守るには、どこかで恐れられてなければダメなんです！」
だが、森田は眼鏡のズレを直して、ふふんと鼻息で応えた。
「そういう暴力の論理は、私は好きにはなれません。いじめなんか話し合いで解決できますよ」
「無能な教師や、当事者体験のない専門家が口にしそうな台詞ですね。好きや嫌いでどうやってこの国を守っていくんですか!?」
「やはり、ここはアメリカの手を借りましょう。特地の管理や『門』の問題は、もう安全保障理事会にゆだねると宣言します。その代わり中国に手を退かせるよう工作を頼み込んで、尖閣諸島も安保条約の対象だと宣言して貰えればきっと牽制できますよ」
「止めてください。お願いですからそれだけは止めてください。自国を自分で守る意思を持たない国を助けてくれる国なんてこの世にあるはずないじゃないですか!!」
「夏目防衛大臣。これは内閣の首班としての私の意思ですよ。それに反対されるようなら、貴方を

解任するしかありませんがいいんですか？」
「総理、短慮は待って下さい！」
夏目が縋るよう説得を続けたが、森田はもう意地でも動かないという態度を見せていた。
「私には自分のことはよく分かってます！　私は冷静に日本のことを案じて判断しています」
すると嘉納が宥めるように言った。
「森田総理。ちょっと待ってくれ。それは最終手段として、外務省の方でもなんとかならんか試してみる。だから……」
「分かりました。ええ、明日くらいまでは待ちますよ。でもね、それまでになんとかならなければ私は、今申し上げた方針で問題の解決を図ることにしますよ。いいですね？　それがこの閣議の決定です」
森田は「分かりましたね」と夏目に念を押した。

＊　＊

永田町の官庁街を抜けていく大臣車の中で、夏目は灯りの消えない窓を見上げながら深々と嘆息した。人間というものは怒りを通り越すと虚脱しか感じないようになるのかも知れない。
「どうして我が国は、あんな人間が総理になれるのでしょうか？」

「我が国では、無難にそつなく仕事をこなし、上司に気に入られることが、組織の中でのし上がっていく方法だからだ。派閥の領袖の役割は、利害関係の調整だしな。そのせいで物事を無難にこなそうとする事なかれ主義の人間ばかりが残っていくことになる。だから指導者に向かない人間が居残っちまうんだ」

「私は、暴力主義者なんでしょうか？」

「俺はそうは思わないぞ。一見すると、森田の考え方は人命や、平和を第一に考えているように見えるが、結果としてより多くの人間を苦しめることに繋がっているからだ。ここと決めたところを守るために血を流すことを厭わない態度を示すことは、結果として流す血の量を減らすことに繋がるんだ。世の中ってのは皮肉なことに中途半端な平和主義者こそが、悲劇の原因となるって事は少なくない。ナチがヨーロッパで猛威を振るっていても、米英は手をこまねいて見ていた。そのせいで戦争が拡大し、多くの血が流された。もし米英が早い内に本腰を入れてヒトラーを抑え込んでいれば、犠牲はもっと少なくて済んだろうよ」

「私もそう思います。歴史に『……たら』『……れば』というのは危険だとは思いますけどね」

「そして現代の問題は、中国だ」

「ええ。中国はすでに我が国に対して『超限戦』を挑んできています」

「なんだそれは？」

嘉納も初耳の言葉らしく、詳しい説明を求めた。

「中国軍人民解放軍空軍大佐の喬良と、王湘穂の唱えた考えで、社会の全領域を戦場と位置づける新しい戦争の概念です。これによって戦争の手段は軍事だけでなくあらゆる分野に広がります。世論を意のままに操るメディア戦、為替相場を利用して相手国経済に打撃を与える金融戦、資源を独占する資源戦、相手に正当性の意識を疑わせる心理戦、コンピューターのウィルステロ……」

「なるほど……上手くやるもんだと思っていたが、はっきりと体系づけられた戦争の一形態という意識で挑んで来ているってことか。統一された指揮の下で方針に基づいて戦略をたて、様々な戦術を展開していく」

「そうです。しかも毛沢東思想に基づいて、戦いの遂行は相手の資金と武器を使えというやり方をしてますから、防戦に回った我が国は、まずは敵に利用された味方との戦いをしなければなりません。我が国は、身内を相手に消耗戦を強いられることになってしまっているんです」

「まいったな」

嘉納は、天を仰いだ。

「特地を安全保障理事会にゆだねさせようと言うのもその一環でしょう。我が国を様々な次元で弱らせようとしているんです」

「だが、森田にはそれが分かってない。あいつはもう、何もかも投げ出すつもりだ」

夏目と嘉納は互いに黙り込んだ。

しばらく夜景を眺めていた夏目は、ぼそっと言った。

「嘉納さんはレレイ嬢がまだ特地にいるって信じますか？」
「ああ。何の根拠もない話だが、漫画的な表現で言えば、霊魂（ゴースト）がそう囁くんだ」
嘉納はそう言うといかにも自信ありげに自分の頭を指先でとんとんと叩いた。
「その漫画なら、嘉納さんのお勧めでしたね。読みましたよ。士郎正宗（しろうまさむね）氏の作でしたっけ」
「そうだ」
元ネタを知られていたのが恥ずかしいのか、悪戯がバレた子供のように首を竦める嘉納。
「嘉納さん。あのような閣議決定がなされた以上、私に出来ることはありません。残念ながら私はこういう時に動かせるような、個人的な手札の持ち合わせがありませんから。でも嘉納さんは違いますよね」
「俺か？　そんなもんあるわけねぇだろう？　俺はまっとうな政治家だぞ。くそっ、G型トラクターの購入広告でも出せってのか？」
「いやいや、伝説の暗殺者なんかに依頼しなくても、特地派遣部隊への連絡、レレイ嬢の救出という重要な任務を果たしてくれそうな人材が、貴方の個人的な友人にいるはずですよ」
「彼奴のことを言ってるんなら、それはどっちかって言うと防衛大臣のあんたの領分だって言えるんじゃないのか？　特殊作戦群……使えるんだろう？」
「ですが総理にバレてしまいます。いくら頭の中がお花畑の総理でも、私の動向くらいは監視させてるはずですから」

嘉納は舌打ちしつつ、夏目の言い分を認めた。
「確かにあいつなら動いてくれるだろう。しかも具合の良いことに取引用に身柄をこちらで抑えてある。よし、わかった、俺が奴をけしかける役目を引き受けよう。その代わりあんたにも後始末の手伝いはしてもらうぞ。あいつが後で酷い目に遭わないように、形式だけは整えてやらなきゃならんからな。俺達が負うべき責任まで押しつけちゃ可哀想だ」
「どうするんですか？」
「まず、特地派遣部隊に訓令を書いてくれ。防衛大臣の署名捺印入りのな。なぁに、閣議に逆らうことにはならんから心配するな。森田は明日になったら特地を常任理事国に預けると言ったが、少なくとも今日の段階では、今までの方針を踏襲したもので問題ないってことだからな」
嘉納は夏目に白紙を差し出した。
夏目はそれを手にとると、万年筆を取り出して文面を考えはじめる。
「国益確保のために、必要と考えられるあらゆる処置を許可するって内容にすればいい」
「でも、その後はどうするんです？」
「明日の朝には森田を首相の椅子から引きずり下ろしてやればいいんだ。今夜中に全閣僚を説得して一斉に辞表を出す。森田も全ての大臣職を兼務することは出来ん。これであいつに引導を渡してやる」
あまりにも簡単に言われたため、夏目はその意味を理解するのに数瞬の間を必要とした。

この状況で総理を引き下ろせば、それを主導した者が代役を務めることになるだろう。だがこの時期に総理になって良いことは一つもない。

「ちょ、ちょっと待って下さい、選挙まであと少ししかないっていうのに、貴方が首相になろうって言うんですか！」

夏目の表情は、親友に自殺の決意を明かされたかのように強ばった。

「彼奴のままにしておくよりましだ。例え選挙管理内閣と言われようとも、日本にとってそれが必要ならその一瞬の為に全力を尽くす。それが政治家ってもんじゃねぇのか？」

「でも、これまでの苦労が！　政治生命がふっとびますよ！」

「あいつら制服組は命をかけてるんだ。俺達も、それに匹敵するものを差し出してこそ、フェアってもんだろ。政治生命なんてのが、命と同じ重さだとは思わないがな」

嘉納はそう宣言すると「こいつが俺達政治家の戦争だ。俺は一気に行くぞ夏目」と目をぎらりと輝かせた。

＊　＊

ゾルザル率いる帝国軍と、ピニャ率いる帝国正統政府軍によるイタリカ城外会戦は、開始から半日を経過していながら膠着状態となっていた。

既に陽が沈んで久しいため、戦いは松明と月の光を頼りにした夜戦となっている。
互いに決定的な隙を見出すことが出来ずに、繰り出した戦力を正面からぶつけ合う。
疲労、消耗した部隊を後退させ、予備の戦力を投入して戦線を支える。そんな作業を忍耐強く繰り返す持久戦が続いていたのだ。
だがそれは、元々戦力の劣るピニャにとって、底のない蟻地獄へ自ら飛び込んで藻掻くのに等しかった。
「ドッツエル隊！　もう保ちません！」
「メイソン隊が、一時後退の許可を求めています！」
伝令の馬がやって来る度に、悲鳴にも似た報せが告げられた。
ピニャは、綻びそうになる戦線を懸命に維持しようとしていた。
だが損害が加速度的に増大していくと戦線に投入できる予備戦力の確保も難しい。こうなると最前線で戦う兵士達はますます疲弊して、戦意の旺盛な敵に圧倒され、被害がさらに拡大するという悪循環が起きてしまう。
「ちくしょうめ！」
松明の明かりの下で、従卒の少女達に二の腕に包帯を巻かせていたヴィフィータは、ピニャが苛立ちを堪えているのを見ていられなくなったのか、口汚いののしり言葉で世話をしてくれる少女達の眉をひそめさせた。

「ヴィフィータ様。お言葉が、野卑な殿方みたいです」
「分かった分かった。この戦いが終わって、生き残ってたら行儀作法にもうちょっと気を配ることにするぜ」
いくら男勝りな気性とは言え、粗野なところまで男を真似ては品位が疑われると従卒の少女達は窘めた。だが彼女の場合はこれが不思議と似合ってしまうのもまた確かなのだ。
「ボーゼス。俺がもう一度行って来る！　ちっとはマシな状況にして来るから、その間に戦力を再編して戦線を立て直してくれ」
地に突き刺してあったロングスピアを引き抜いたヴィフィータは、その尖った先端を空中で一閃させて泥を払った。
「待ちなさい。貴女はもう、これで六度目よ！」
「七度目だろうと八度目だろうと、戦える限りは戦わないとな。こっちは頑張ってたぞ、なのに遅いじゃないかって俺の男に文句の一つも垂れてやりたいからな」
満身創痍のヴィフィータは、馬の首を巡らせると配下の女性騎士達を見渡した。
「この期に及んで、嫌だという奴はいないよな」
手傷を負っていない者など一人もいない。だが全員が隊長の問いにそろって頷いた。皆、様々な戦いを経て来た歴戦の戦士達なのだ。
「棚の上に飾っておきたくなるような兵隊人形が良い感じでボロッちくなってる。みんな良い面構

えですっげぇ頼もしいぜ。いっちょ、男共に活を入れに行くとしようぜ！　女に惚れられたきゃ、ここぞというところで気張って見せろってな！　お前達も、いい男を見つけたら躊躇わずに唾をつけておけよ！　身分だなんだって気にしてたら、どっちかが先におっ死んで手遅れになっちまうんだからな！　恋の花は咲かせてこそ女ってもんだ、そうだろう!?」

ヴィフィータは「んじゃ、行くぜ！」と馬の腹を蹴ると一気に駆け出した。

白薔薇の隊旗がひらめいて、皆もその後に続いて夜の闇の向こうへと消えていく。その背中を見送って思うことがあったのか、ボーゼスもまた背後を振り返った。

「わたくしも、参りますわ」

「ボーゼス様！　そのお身体では」

従卒の少女たちが一斉に止めにかかった。だがボーゼスは首を振った。

「皆が懸命になって戦ってるのに、身体を庇って後ろにずうっと籠もってましたなんてお腹の子にどうして言えますか！　わたくしとトミタの子がこの程度のことでどうにかなるはずありません！」

ボーゼスの凛とした眼差しを正面から浴びせられた従卒の少女達は、怯んだように後ずさった。

「では、黄薔薇隊も参りますよ。わたくしに続きなさい！」

ボーゼス隊までもが前進をはじめた。そして剣をかざしながら混沌渦巻く戦場へと突き進んでいったのである。

ピニャの周りを飾っていた花達がどんどんその数を減らしていく。
その寂寥感を誘う光景の中で、ピニャは自らが直接統率する赤薔薇隊のみを背後にじっと戦場の方角を睨み続けていた。
「ハミルトン！」
手綱を握り、馬の鞍に立ち上がって、はるか彼方を仰ぎ見るハミルトンがいる。だが夜の闇の中では目を凝らしてみても見えるものはそう多くない。
「まだです」
「違う！　もう、遠くを見るのはやめよ、今は前を見るべき時だ」
その言葉にハミルトンは、すとっと身体を落とすようにして鞍に座った。
座った時の衝撃は馬が引き受ける。ハミルトンは驚かせて済まないとばかりに馬の頬を軽く撫でると、ピニャの傍らへ向かうべく手綱を引いた。
「ハミルトン……第二線に控える兵らに交代で休息をとらせよ。それと食糧もだ。隊列を維持したまま食事をさせる」
「は、はいっ！」
伝令の騎兵が陣列の前を、「奇数番の者、座臥して休息をとれ！　望むなら仰臥も許可する。これより食事を配る！」と触れながら駆け抜けていった。
味方の兵が血を流している数百メートル後方で、兵士達が櫛の歯が欠けるように座り込んだ。そ

して食糧が水と共に配布されて、兵らは立ったまま、あるいは座り込んだり寝そべったりしながら食って飲み、来るべき戦いのために空腹を満たしていたのである。

「さすがはピニャ殿下。容易に崩れませんね。まさかここまで粘り強く戦うとは……」

ゾルザル軍の作戦指揮をする将軍ヘルムは、ピニャの陣営の手堅さを見て、驚嘆というよりは最早呆れたとでも言うような声を上げた。ピニャを単なる皇女、騎士団の創設者としてではなく、偉大な敵手として尊敬に価すると認めたのだ。

ヘルムも、彼の知るあらゆる揺さぶりの手段を講じたのである。

強力な突撃力を誇る亜人部隊を突入させ、小さなほころびを穿ち、それを拡大しようと兵を繰り出し、主力を前進させるふりを見せて敵の動揺を誘い、撤退するように見せかけては敵の備えを崩そうとした。

だが、それでもピニャは守勢の構えをしっかりと堅め、鈍いくらいに動じなかったのだ。

逆に後退するドッツエル、メイソン隊を見て、勝敗を決定づける好機と見たのか軽率に敵本陣への襲撃を敢行し、ヴィフィータとボーゼス率いる騎兵の挟撃を受けて蹴散らされてしまう味方の不甲斐なさには、嘆きの声すら上げたくなった。

カラスタが、取りなすように言う。

「味方を嘆くよりも、こちらの打つ手打つ手の先を見て的確に叩いてくる殿下を称えるべきでしょ

うな。まさか、懐刀のボーゼスまで繰り出して来るとは思いも寄りませんでした」
帝国の皇女として宮廷にいたピニャとは思えない、とヘルムの幕僚達は口をそろえた。
「いったい何が殿下をここまで成長させたのでしょうか？」
もちろん、これまでに遭遇した多くの困難が彼女を成長させたのだ。だが、途中経過を知らない彼らにとっては、ピニャの成長は別人と見間違えそうなほどの激変に見えたのである。
「我々とて多くの苦汁をなめて来た身だ。戦いの経験で、我らを超える者はない！」
「数の上でも我々は優勢です。小細工などせずに、このまま戦い続けても勝ちは決まってます」
ミュドラやカラスタの言葉どおり、時間の経過と共に累積していく損害数は、ピニャの側に多く、このまま戦闘を続けていけば、残存戦力がゼロとなるのはピニャの方が先であることは確実。だからこそ、ピニャの成長ぶりを褒め称える余裕もあるのだ。
だが、三将軍の会話を聞いていたゾルザルは、落ち着かないのか爪を噛みながら言い放った。
「あまり楽観視されていても困るぞ。問題は時間なのだからな」
三将軍はゾルザルに恭しく頭を下げると、その懸念には及ばないと告げた。
「ピニャ殿下が不利を承知で、城外を戦場に選ばれた理由は火を見るよりも明らか。援軍が来るまで自らを餌にして我らをこの地に引き留めておこうとしておられるのです」
「分かっているならいい。我が兵らが命を賭して稼いでくれた貴重な時間だ、決して無駄にしてくれるなよ。ボウロ……お前もだぞ」

すると影に隠れるように地に伏せていたボウロも、「我がハリョの総力を結集して攻めかかっております。そう時を置かずに良い報せを殿下に申し上げることが出来るかと存じまする」と地に額を擦りつけた。

フォルマル家城館の内外では、戦闘メイド達が次々と襲ってくる敵に苦戦を強いられていた。送り込まれてきた敵の数が、『影戦』の常識を越えたものだったからである。

七人の警備兵らに混ざって、城館正面玄関の守りを担当していたペルシア達は、目の前に現れた敵の数に驚いた。

「ニャ？　二十人!?」

これが敵の全てで、これを片付ければ戦いは終わると言うならば、問題ない。だが城館のあちこち……五カ所以上で吹き鳴らされる呼び子が、この敵が敵の一部でしかないことを報せていた。

これとほぼ同数の敵が、それぞれの場所に現れたとするなら、合わせて百を超える敵の襲撃を受けていることになってしまうのだ。

「さすが帝国ね。こんな数の密偵を抱えているなんて……」

マミーナは敵の持つ力を素直に賞賛した。

最近になって経済的に余裕の出来たフォルマル家とて、影戦をこなすことの出来る戦闘メイドの数は五十を超えない。

もちろん伯爵家の領内に住処を与えられている亜人の諸部族から訓練中の若者や、予備戦力を根こそぎ掻き集めれば、百人なら集めることも可能だろう。だがそれは、戦力の継続的な確保を慮外視した文字通りの全戦力なのだ。

例えるなら実戦部隊だけでなく訓練学校の教官から訓練生までも戦闘に投入したと言える。これを失ってしまえば、戦力の再建はかなり長期にわたって不可能な状態に陥ってしまう。

なのにゾルザル派軍は百を超える数を投入して来た。

これまでの影戦で与えて来た損害だって少なくないのにこの規模である。ゾルザルの影戦を担うハリョと呼ばれる正体不明の集団は想像以上に巨大な組織なのかも知れない。

圧倒的多数の敵を相手にする以上は、決死の覚悟を決める必要がある。守りきれずに突破されるとしても、敵の戦力を出来る限り削ぎ落としておかねばならないのだ。そのためにはまず、乱戦に持ち込む。

「マミーナ！」

「分かってるよ。ノルマは一人で二人。最低でも三人で六人は削れって言うんだろ？」

そのかわり、自分達は全滅するだろう。その可能性は著しく高い。

「クラタさん。ごめんニャ」

最近交際を始めた男に、二度と会えない不義理をわびる。

こんなことなら、もっともっともっともっと早いうちにつきあい始め、いっぱい遊んでおけば良

かったと思った。ヒト種の男が、真剣にキャットピープルの雌に求愛するなんてあり得ない、と臆病になっていたのが失敗だったかも知れない。

戦いが始まった。

あっという間に彼我の距離が詰まって無数の手裏剣（ダーク）が飛び交い、それを躱しながらすれ違い様に短剣で斬りつける。

鋭い爪が体をかすめ、メイド服の数カ所が切り裂かれて肌が露わとなるが、一人を倒し、さらに二人目に挑もうと振りかえる。だが、ペルシアの目に映ったのは、戦おうとせず、そのまま城館に突入しようとする敵であった。

槍を手にしていた一般の警備兵達は一人の敵に手を焼いて、他の敵にはぽろぽろとすり抜けられていた。

「ニャにっ!?」

敵は交戦しようとせず、城館の深奥部に向かってひたむきに突き進んでいったのである。

ペルシアは呼び子を吹き鳴らして支援を要請すると、城館前を警備兵達に任せて追跡を始めた。

やがて呼び子につられ、城館内に配されていた数人の戦闘メイド達が集まってくる。

「追跡班はウチに続くニャ！　残りは正面玄関を固めるニャ！」

ペルシアは小さくなっていこうとしている敵の背中を追った。すると敵も、若い二人の戦闘員を

残した。まさかたったの二人でペルシア達に勝てるとは思ってはいまい。とすれば、足止め要員であろう。

「やっかいだニャ」

足止めに残された敵は、ペルシアから見ても若く幼い獣人の雄である。

年の頃で十四、五歳だろうか？　犬系かそれとも猫系か？　様々に混血しているようで基礎となる種族が分かりにくい。それが必死の形相で立ち向かって来た。

それは、まるで生きて帰ることを考えていないかのような、無茶苦茶な攻撃であった。

「なんて馬鹿な奴らニャ！」

その剣筋は幼く未熟で、しかも力が強くない。大胆に動いているため、まわりのメイド達は手を焼いているが、ペルシア程ともなると、食らい付いてくる敵の動きが見える。その切っ先を余裕で躱し、武器を持つ腕を断ち、急所を剣刃で貫いた。

それでも若い獣人はペルシアにしがみついて来た。敵わなくとも、命絶えるまでのわずかな間であっても、ペルシアの足止めをしようとしているのだろう。

ペルシアが力尽くでそれを振り払うと、今度はメイド服の裾に噛みついて、しがみついた。そしてその裾を食いしばった姿で息絶えたのである。

「ちっ」

思わぬ足手まといに、ペルシアは舌打ちして短剣を抜いた。

そして敵に切り裂かれて、衣服としての機能を果たしていないスカートの布地に突き立てると、その大部分を切り捨てた。

ペルシアは、猫科肉食獣特有のしなやかな脚を露わにしながら、再び敵の後を追う。

だが、後ろを走るマミーナが揶揄まじりの警告を発した。

「わわわ、ペルシア。それはちょっとエロい、エロいよ！」

全力疾走するペルシアの、スカートの中身がほとんど丸見えになってるのだ。

ペルシアの脚はレース地のストッキングにガーター、そして普段は隠されて見えない数本のダークをさしたホルスターなどで覆われていた。さらに、これだけは忘れてはならない。細長い『しっぽ』も付け根近くまで丸見えである。

「しょ、しょうがないニャ！」

羞恥心で赤くなったペルシアは慌ててお尻のあたりに手を回してスカートを抑えた。そのため敵を追う速度が、わずかながら下がってしまう。

だがマミーナはさらに言葉を重ねた。

「メイド長に見つかったらうるさいよ、きっと」

メイド長は汗をかくことすら「見苦しい」とお小言を言うのだ。こんな服装の乱れを見られたら、きっと一日二日の叱責では済まないだろう。

ペルシアは、さらに困ったような表情でぐいっと裾を引き下げた。だが一度短く切ってしまった

布地は伸びることはない。
「ううっ」
そんなペルシアの姿を可哀想に思ったのか、マミーナは言った。
「で、でも、きっとクラタに見せたら喜ぶよ」
マミーナは、最近ペルシアが交際を始めたヒト種の男の名前を持ち出した。
だが、ペルシアは「それはないニャ」と返した。
猫科動物特有の勘で、ペルシアは倉田が慎ましやかな女性を好むことを見抜いていた。そもそも倉田は、裾の長いメイド服を来たペルシアに惚れて近寄って来たのである。
「こんなところ見られたら、逆に嫌われてしまうニャ」
そんなことを意識させられたペルシアの足取りは、ますます遅くなってしまった。
幼い敵が必死で挑んだ足止め作戦は、このような形で達せられたのである。

＊　＊

駒門から病院長の許可を得たという連絡が来ると、黒川もテュカ達が伊丹の病室に泊まることを認めた。とは言え、テュカが伊丹と同衾（どうきん）することは風紀が乱れるとして、断固として許さず、ベッドはテュカと栗林に振り分け、伊丹と富田の二人については、資材倉庫から引っ張り出してきたマッ

トレスを使えと命じた。
「えええええっ！　隊長の使ってたベッドに寝るのぉ……」
ところがこの割り振りに不平の声を上げたのが、栗林である。
一般的に女性というものは、男性と比較して我が身を預ける寝台の選定に敏感だ。清潔であることは当然で、精神的な要素にしか過ぎない誰が使っていたかにまで、大いなるこだわりを見せるのである。
神経がワイヤーで出来ていると周囲から思われている栗林志乃も、そこは同じのようである。
「地面に平気で寝っ転がれる癖に、変な奴」
伊丹の揶揄するような言葉を浴びた栗林は、毛を逆立てたどら猫のようにシャーッと唸る。
「野営の時とベッドで休むのとでは、気持ちのモード設定が違うんです！」
だが黒川は、そんな栗林に憮然とした表情で言い放った。
「何を、贅沢なことを言っているのですか!?　隊長とテュカを一緒にして、貴女と富田を一緒にしろとでも言うのですか？　病院は連れ込み旅館でも、ホテルでもないのですよ。シーツを替えて差し上げますから、それで我慢なさい！」
「はぁい」
黒川はブチブチ言いながらも、てきぱきと糊の利いたシーツをセッティングしていった。まるで買って来たばかりの五百枚入りＰＰＣ用紙の包装のごとく、角の尖った綺麗なベッドメイクが瞬く

間になされた。
その傍らでは、枕カバーの交換を終えた栗林が、枕をその巨大な胸に抱きしめながら、そしてテュカが、黒川の仕事が終わるのを今か今かと待っている。
やがて黒川が仕事を終えて、あとは枕を置くだけとなった瞬間、テュカが「やったー！　一番乗りっ！」と歓声を上げながら突撃して、掛け布団の下へと潜り込んだ。
布団の中で何をじたばたしているのかと思えば、ストッキングやら、下着やら、ブラウスやらがぽいぽいっと放り出されて来る。
突然のことにたじろいだ栗林だったが、事態を把握すると慌てて叱責した。
「ちょ、ちょっとテュカ！　何やってるのよ！」
「もちろん寝る支度よ。決まってるじゃない!!」
掛け布団から顔だけを出して、ケロっとした顔で返すテュカ。わずかに見える布団の隙間からうなじや肩の輝くようなラインが、産まれたままの姿で露わとなっていた。
「で、でででで、でもっ！　何だってまっぱになってるのよ！」
「寝るなら当たり前のことでしょ!?」
栗林は、放り出された衣類や下着を男共の目にさらさないように掻き集めた。
「あ、あ、あ、当たり前って！　何が当たり前なのよっ！」
だが、エルフ娘は本当に訳が分からないらしい。シーツにくるまって寝ることが出来る環境にあ

るならば、衣服を脱いで眠るのは当然のことだと不思議そうに語った。
「いつもこうなんだけど……何か問題なの？」
「ここには隊長も富田も、それに警務官もいるし！　ちょっと無防備過ぎっ！」
だがテュカは、それがどうしたの？　と首を傾げた。
彼女は栗林が何故そこまで焦っているのか、本当に分かっていない様子なのだ。それどころか栗林が服を着たまま寝台に入ろうとしているのを見て、「お昼寝でもないのに、変なの」と呟く始末である。
「そんなことより早く寝ましょうよ。今日は一日中追いかけ回されて疲れちゃったわ」
テュカは、栗林の手を握ると寝台へと引きずり込んだ。
「ち、ちょっ、テュカ！　……待ってって、あれ、もしかしてこれって貞操の危機!?」
「何を言ってるの!?　女の子同士が一緒に寝るだけなのに、どうしてそういう話になるの？」
「だってテュカの手が、あん、そこ触わんなって！」
「うふっ、志乃の胸って大きいわね！　掌に全然おさまらないし、弾力もすごい」
じたばたと暴れる二人を前に、富田は困惑を抑えきれないといった表情となっていた。
「た、隊長……この二人、何してるんでしょうね」
「想像するな。興奮して眠れなくなるぞ」
「けど、止めなくていいんですかね？」

「大丈夫。ほっといたって不埒な事にまで至ったりしないよ。黙って静かにしてればそれで落ち着くんだ。テュカは寝付きがめちゃくちゃ良いからな」

伊丹が言うように、栗林が抵抗を諦めるとがさごそと喧しかったベッドの上が、途端に静かになった。寝る体勢が整うや、エルフ娘は瞬く間に寝入ってしまったからである。

「ほ、ホントに寝ちゃいました」

静かにしていると、くぅ～という寝息まで聞こえて来る。

「さ、寝るぞ」

伊丹も布団を被る。

黒川は、富田に青あざを冷やすためのアイスノンを手渡して言った。

「では、みなさん、おとなしくしててくださいね。少しでも騒ぐようなら、お口を縫合して差し上げますので。ついでに瞼もきっちりと縫合して、良い夢を見やすくして差し上げてもよいのですが、ご希望の方は？」

「いえ、結構です。遠慮します。お構いなく」

「ならば、自前で静かになさって下さいね。わたくしの希望は静寂なる夜。平和なる夜勤であったと明日の日勤者に申し送ることです。それを邪魔して下さるようでしたら、きっと面白い体験をさせてあげます。そうですね、十八番ゲージの注射針で針治療というのはいかがでしょう？　きっと肩こり、腰痛、神経痛、その他に大変な効果が得られると思いますわ」

黒川はそう念を押すと十八番ゲージってこれくらいと、その太さを誇示するように見せつけた。
そして伊丹達の瞳が恐怖の色に染まるのを確認してから、ナースシューズがPタイルを擦る音をさせながら看護室へと去って行ったのである。
その後の静寂は、修学旅行で見回りの教師が去って行った後にどこか似ている。薄暗い室内では誰かの身じろぐ衣擦れの音すらもやたらと大きく聞こえるのだ。
そんな沈黙を破って、栗林が囁き声で悲鳴を上げた。
「たいちょ～、テュカって……」
「結構、甘えん坊だろ？　女もいける両刀って噂もあるし自分でもそう公言してるけど、実際のところはそんなもんだ。抱き枕にされるだけだから安心して寝てろ」
「分かりました。クロに抱き枕にされるだけだから心配するなって言っておきます。けど、隊長は何だってそのことを知ってるんです？」
「……いや、まぁ、いろいろとな」
「そういえば、テュカが変になってた時、隊長ってテュカと一緒に寝起きしてましたよね。テュカが誰かを抱き枕にする習慣を知ってた。そしてテュカは裸で寝ることにも驚いた様子がない……まさか」
「し、し、しょうが無いだろ！」
「隊長、まさかと思うけど、やっちゃったりしてませんよね」

「してるわけないだろ!?　俺はお父さんだって思われてたんだぞ、そんな関係になってたまるかい！」

「本当ですか？　あの時のテュカだったら押し通せば受け容れちゃったんじゃないんですか？　だいたい裸のテュカにしがみつかれて、よくぞまあ我慢できましたね。こうして間近に見ると、テュカってめちゃめちゃ綺麗ですよ。肌はすべすべで、弛んでるところなんか少しもないし、髪はさらさらだし、羨ましくなるくらいスタイルは綺麗に均整が取れてて。それがこんな風にぴったりと……いま、私がどういう状況になっているか分かります？　テュカにぎゅってしがみつかれてるだけじゃなくて、脚なんか腿で挟み込むように絡まってるんですよ……」

おかげで寝返りすら出来ないと栗林はボヤいた。

「俺の時と、同じだな」

「やっぱし」

するとそれまで黙って聞いていた富田が「質問」と声を上げた。

「そんな状態で、どうやったら我慢できるのか、そこのところの秘訣なんかを……」

今では有名無実となっているが、特地派遣部隊の隊員達には特地の女性との交際を禁じる命令が出ている。それを真っ先に破ったのが富田なのだ。富田こそ我慢できない男の代表格だと言えるだろう。

伊丹は、ことさら偉ぶって答えた。

「そうだな。相手の信頼に応えようとする気持ちが、強固な意志を形作るんだ。朝まで耐え抜くのは確かに大変だが、我慢し通すことに成功すれば、きっとこれ以上ない自信を得ることが出来るだろう」

「とは言いながら、ちょっとくらいは何かしたんじゃないんですか？　隊長」

「してない、してない」

今になってみれば、それで良かったのだと伊丹は思った。

変に手を出していたらわだかまりが出来て、今のような気の置けない関係は維持できなかっただろう。

「尊敬に値するとは思いますけど、なんだか逆に心配になって来る話ですね。隊長、生身の女性に興味有ります？」

オタクだから、きっと絵に描かれた女にしか興奮しないんだと栗林は揶揄した。

「言って置くが、離婚したとは言え俺は妻帯者だったんだぞ！　一応、実戦証明済みの身の上だ。俺は図上演習だけの男ではない」

「何の実戦経験だか？　離婚の原因が、あの元奥さんにコスプレをさせまくったとかだったら笑えますよ」

「違うって！」

「じゃあどうしてテュカに手を出さなかったんです？」

「確かに、お互いがそういう気持ちになれたらそういう事をしたっていいって思うぞ。けれど、あの時のテュカはそういう気持ちで俺にしがみついたんじゃない。そこらにいる女が本命の男に振り返ってもらえないのが寂しくて他の男にしがみつくのとは訳が違うんだ。代償ですらないんだ。なら、それにつけ込んじゃダメなんだよ。下手をするとテュカの心の中で、親父さんとそういうことをやっちまったって記憶になりかねなかったんだからな」

　すると栗林は寝返りを打って伊丹に顔を向けた。

「じゃぁ隊長は、素っ裸のテュカに抱きつかれて悶々としなかったと？　女を感じなかった？」

「何を失敬なことを！　今日の格好なんて無茶苦茶格好良かったし、すげぇ女を感じてるぞ。顔見た瞬間から、悶々としてた！」

「な、何を、変態チックなことで威張ってるんですか!?」

「着ている服がコスプレなエロ衣装ならもっと萌えるってことですね。分かります」

　富田が混ぜっ返すが、伊丹は普段着でも充分であると返した。

　栗林は、そういう変態的な話はもう聞きたくないとばかりにまとめに入った。

「とにかく！　そういう事はテュカに面と向かって言ってあげて下さい。裸でひっついても超然とした態度を取られたら、テュカだってそりゃ心配になって来ると思いますからね」

「心配になるのか？」

「そりゃそうでしょう!?　好きな相手に隙だらけのところを見せたのに手を出されなければ、なん

で、どうして、もしかして自分に魅力がないのか、もしかして関心がないのかって、悶々とするのが女心ってものなんですから」
「心配する必要なんてないんだがなぁ」
「女は男が自分に向ける視線を結構気にするもんなんですよ。自分を女として見ているか、それとも違うのかって……」
「なるほどねぇ」
「とにかく、ちゃんとテュカと向かい合ってあげて下さいよ。前の時は違ったかも知れませんけど、今のテュカはちゃんと真剣に隊長を見てるんですからね」
どうして栗林が、そんなことを言うのだろうかと思いつつも伊丹は「分かった、分かったよ」と繰り返した。
だが話はここで終わらない……突如として携帯電話のバイブレーションコールが響いた。
まず、栗林と富田がごそごそと起き出して自らの携帯電話を確かめた。そして自分への着信でないことを確認すると、伊丹へと視線を向けた。
「え、俺なの？」
「多分、そうですよ」
「あ、そう……誰だよもう」
床からでは手を伸ばしても届かないので、伊丹は起き出すと床頭台の上に置かれた携帯電話を不

満そうに取り上げた。だが液晶に太郎閣下の文字を発見して「えっ」と電話を落としかける。慌てて受信ボタンを押して、耳に押し当てた。

「もしもし伊丹です。どうしたんですか、こんな時間に？　ええ、寝てましたよ。まぁ、一生分くらいは寝ましたから大丈夫ですけど。はい、ええ、えっ！　もう一度言って貰えますか!?　えっ、まさかあ、冗談でしょう!?　ほ、本当ですか!?　でもどうしてそんなことが!?　分かりました。とにかく早急にそうします。はい、はい」

通話が終わったのか、伊丹はしばらくの間電話を眺めていた。

そして何カ所かのボタンを押して、再び耳に押し当てる。

「伊丹二尉。病院内での携帯電話の使用は……」

警告する警務官Ａに伊丹は掌で待てと告げ、再度ボタンを押す。

そして耳に当て、相手が出るのを待った。

だが、三十秒ほどしても会話をはじめず、そのまま通話すること無くパチンと携帯電話を畳んだ。

伊丹はそのまま自分を注視する警務官に向かって「へへへ」と微笑みかける。

「な、なんでしょう？」

気味が悪くなったのか、警務官Ａは散弾銃の筒先を伊丹に向けた。

「う〜ん……どうしたもんかいな」

伊丹が首を傾げながら天井を仰ぎ見た。病室には、監視用のカメラがついている。作動している

ことを示す赤色ダイオードが輝いていた。
「どうしたんです？」
さすがに変に思ったのか、栗林が伊丹に声をかけた。
「……」
しばらく考え込んでいる風であった伊丹は突如として振り返ると、「おい、テュカ」と既に眠っているはずのエルフ娘に声をかけた。
「あ、なあに？」
するとテュカの反応は眠っていたとは思えないほどに早かった。呼びかけられるとすぐに顔を上げたのだ。
「ちょっとおいで」
「うん、ちょっと待ってて……今、服を」
テュカは布団の下から栗林がそろえておいてくれた服へと手を伸ばした。だが伊丹はその手を握ると、そのまま強引に引っ張って抱きすくめた。
「そのままでいいよ、どうせ脱がすんだから」
「えっ！　えっ!?」
伊丹は、テュカをシーツでくるんだまま「よっこらせ」と抱き上げた。
「ちょちょっと隊長!?」と驚きを表す変なポーズで凍り付く栗林。

伊丹に抱き上げられて、「うわっうわっうわっ」と人語にならない声を上げるテュカ。
「やっぱり、たぬき寝入りしてたな？」
「わ、分かってた!?」
「昔から耳だけはいいんだ。そして俺はお前が本当に眠っている時の寝息を知っている。くぅ～ではなく、すぅすぅだ」
「た、隊長、いきなり何をするんですか!?」
「伊丹二尉。貴官は何をするつもりだ!?」
栗林や富田が叫び、基本的に定位置から動かないはずの警務官Aも伊丹の突然の行動に顔色を変えて前へと進み出た。
だが伊丹は三人を無視してテュカに告げる。
「俺の気持ちが心配だったら、どうして直接尋ねない？」
「は、恥ずかしくって。だから、その、あたしのことをどう思ってるか、気持ちをそれとなく確かめて欲しいなって、志乃に頼んだの」
「そんなの分かってるだろ？」
「分かるわけない！　はっきり言ってくれないと分かるわけないでしょ！」
「しょうがない奴だなあ。じゃあ分かるようにしてやるよ……」
伊丹はそう言うとテュカをベッドに横たえて、覆い被さるようにのし掛かった。

「お、おい、何をするつもりだ！」
警務官の問いかけに、伊丹はようやく答えた。
「いや、テュカといやらしいことしようかなって思い立ちまして……よかったら三人とも出てってくれない？」
「そんなこと出来るか！　き、き、貴官から寸刻も離れずに監視することが、じ、自分の任務だ」
「そんなこと言っちゃって、実は見たいんでしょ？　見るつもりですよね、ムッツリスケベっぽい顔つきしてるし」
「失礼なこと言うな！　貴官がここで変なことを始めなければいいだけだ！」
「だってさ……どうするテュカ？　やめとく？　それとも見られながらでもいい？」
伊丹は薄明かりの中でテュカの顔を覗き込んだ。テュカは自分に向けられる視線をこそばゆいものであるかのようにもじもじと視線をそらし、耳朶と頬を真っ赤に染めながらぼそっと囁いた。
「ヨウジの望むようにして……」
そして伊丹の首元に顔を埋めた。
「じゃ、遠慮無く」
その姿を見ていよいよ本気だと見たのか、栗林と富田は数倍する敵の奇襲を受けたかの如く病室から逃げていった。
だが、警務官Aだけはその場に踏みとどまっている。

「だ、ダメだ。本官には任務が……。伊丹二等陸尉、まだ間に合う。思い直せ！」
「いや、ムリです。寄生生物を身体に飼ってるかも知れないんで、明日の分からない身の上だし。それを考えたら見られてるぐらいじゃ止められないんですよ」
「こ、こ、こ、公然わいせつ罪だぞ！」
「病室って一応私的な空間ですよね。なのに公然わいせつって……いくらなんでも無理がありません？」
「だ、だ、だが、本官がここにいる!?　それにテュカ君だったな、君はそれでいいのか!?」
するとテュカは嬉しそうに答えた。
「好きな男に求められたら、女は何時だって発情しちゃうものよ」
二人とも熱い口づけをかわし、舌の絡まる姿をこれでもかという感じで警務官Ａに見せつける。
ベッドにテュカを押し倒して覆い被さって、そのまろやかな胸をもみしだく。テュカは伊丹の振る舞いに一瞬驚いた表情をしたものの、小さく微笑んで全面的に肯定するかのように小さく肯いた。
伊丹は周囲に聞こえるように囁いた。
「いくぞ、テュカ」
伊丹の背に回した手に、指先に力を込めながら、とろけるような表情のテュカは「うん来て」と肯く。だが、警務官から顔を背けると「やっぱり駄目。待って」と前言を翻し警務官Ａに請うような視線を向けた。

「お願い。初めてなのに、人に見られているなんて嫌。見ないで！　お願い！」
「くっ！」
靴音を鳴らして逃げるように病室を飛び出していく警務官A。テュカの「初めてなの、お願い」発言の衝撃が、彼の任務に対する使命感をわずかばかり上回ったようであった。
バタンと激しい音で閉じられたドアの音を聞くと伊丹は、テュカに覆い被さった姿のまま深々とため息をついた。
「はぁ、行ってくれたか。前も使った手口だし、効くかどうか不安だったけど、よかた～」
「うん。やっと二人きりになれたね……来て」
「えっ？」
「えっ!?」
「いや、ごめん……違うんだ。そういうつもりじゃなくて」
「違うって何が!?　何が、そういうつもりじゃないの!?　それに前に使った手口って何？　誰と何をしたって言うのよ!?」
「いやいやいやいや、違わないけど違うんだ。とにかく聞いてくれテュカ。『門』が大変なことになってるって太郎閣下から……」
「誤魔化さないでよ。いったい誰と何をしたって言うの!?」
「だからレレイが捕まったかもしれないって」

「何よ！　レレイとしちゃったの!?」
あたしを差し置いて、いつの間にとテュカは伊丹の胸板をドンドンと拳で叩いた。
「違〜う！　とにかく落ち着けって！　ここを脱出するからまず服を着てくれ」
しばらく伊丹の目をじっと睨んでいたテュカだが、「……ん、分かった」と聞き分け良くベッドから飛び降りて、服に袖を通しはじめた。
裸体をまるっきり隠そうとしないのを見た伊丹は、慌てて天井に設置されたカメラにタオルを掛ける。
「でも、これでやり過ごせたなんて思わないでよね。説明はちゃんとしてもらうんだから！」
伊丹はテュカの追及に「わ、分かってるって」と投げやりに答えた。
「あと、ちゃんと続きもしてよね。あんな風に、ぬか喜びさせてぇ」
何故か知らないがテュカの背中は、プンプンと怒っているオーラを四方八方に放射していた。
「そういうことなんだが、二人とも……いや三人とも手伝ってくれるか？」
すると戸口の隙間から、三つ頭がにょきっと伸びてきた。
一番上が黒川、真ん中が富田、一番下が栗林だ。三人とも「どうする？」と互いに顔を見合ってから答えた。
「なんだかよく分からないけど、レレイの為なら手伝いますよ」と栗林。
「右に同じくです」と富田。

「仕方有りませんわね。下に同じくですわ」と黒川。
「誰が下だよ」
「もちろん、お二人ですわ。他に誰かおいでですか？」
「いや……」
本当に上から目線の女だよな、という見上げながらの富田の呟きは意外に大きく響いた。

「おおおおっ！」
警備の詰め所ではどよめきの声が上がった。
机の上に並べられた液晶モニターの中で突如始まったアダルトビデオ紛いの映像に、刑務官達は生唾を飲み込みながら身を乗り出していた。
高感度カメラは薄暗い室内でもかなり明るく映し出すことが可能で、室内の様子ははっきりと映されている。
白黒画像なのが残念だが、かえってのぞき見的な興奮を男達は味わうこととなった。
「お、おいっ！　この娘って高校生くらいじゃないのか？」
「あの野郎、またまた犯罪行為を！」
検挙だ検挙だと男達は騒ぐ。伊丹の病室に向かおうとする者もあった。だが、比較的落ち着いていた一人が「やめておけ」と皆を制した。

「この娘の耳を見ろ。エルフだからきっと見かけ通りの歳じゃないぞ」

以前伊丹を誤認逮捕したことへの反省から、彼らもそれなりに情報を集めている。ロゥリィ、テュカ、レレイは国会で答弁したこともあって、公になっている情報だけでも基本的なプロフィールを得ることは可能だ。

「黒ゴスのロゥリィって娘は九百歳過ぎだ。で、このテュカって娘は百六十歳を過ぎてるってことだ。レレイって娘なら十六歳だから、臭い飯を食わせてやれるんだがな……」

本当かよと男達の間でどよめきがあがった。

「これで百歳過ぎなんて嘘だろ？　すげぇ、綺麗じゃないか！」

「人類基準で見るなよ。この娘はそういう種族なんだ。こっちの年齢に換算するなら十分の一くらいだ」

「だったら十六歳……充分に未成年だろっ！」

「く、悔しいなあ、こんな娘とお知り合いになる機会があるってなら、俺も特地に派遣されたい」

カメラはその目的から部屋の全体を映すように設置されている。そのためベッドも遠景画面として映るだけなのだ。だが警務官達はどうにか、ズームさせることは出来ないのかといろいろと操作しようとした。

だがいよいよ始まると思ったところで、モニターに映っていた伊丹はカメラの存在を今更思い出したように振り返り、手近なところにあったタオルをレンズの前に掛けてしまう。

真っ黒になった画像に男達は一斉に不満そうな声を上げた。
「く、くそっ！　良いところだったのに！」
警務官達がそんなことを言いあっていると、伊丹の病室で立ち番をしてなければならないAが足音も高らかに詰め所に戻って来る。
パイプ椅子にどっかりと座り込んだ姿に誰もが一斉に驚きの視線を向けた。その中には幾分か同情の色が含まれていたが総じて批難の色が強い。お前が任務を放棄して帰ってきてしまうから、彼奴は良い思いをしているのだという羨望から発するものである。
「おい、まずくないか？」
「彼女に懇願されてな。初めてだからお願いとか言われたら、席を外さないわけにはいかんだろう！」
荒々しい息で、憤り混じりに返す警務官A。その言葉に全員が「なにっ！　初めてだと!?」と目を剥いた。
「しかもあの男も、寄生生物を身体に飼ってるかも知れん。もし奴の腹を食い破って出てくるようなら、俺達は奴もろとも撃ち殺さなきゃならん。そう考えたら、彼女の時や場所を選んでいられない必死の想いも理解できるってもんだ。違うか!?」
警務科の隊員達は自らに与えられた任務から、伊丹の境遇を思い返した。
彼らに報されている情報では、伊丹には明日があるか分からない。退院できたらとか、後でという約束はアテにならない。毎日が本当の意味で一期一会な状態なのだ。重ねて言うが、彼らにはそ

のような情報しか与えられてなかったのである。
「いつ永遠の別れになるか分からないとなれば……か」
今生の別れかも知れないのなら、仕方ないと見逃すのが武士の情けというものだ。そう男達は語り合った。
「だがよ、服務規程違反だぞ」
「小隊長！」
戸口には制服を隙なく着込んだ壮年の幹部が立っていた。
「監視対象の部屋で異常があったという報告を聞いて来たんだが……何やらややこしいことになってるみたいだな」
「はい。ですが……」
「分かっている。だがそれとこれとは話が別だ。こうしている今もあいつに異常事態が起きないとも限らないのだからな」
「では、監視のために病室に戻れと？　今からですか？」
警務隊員達の間で緊張が走った。何も映らないモニターの向こうに、今から踏み込むのはあまりにも無粋だと誰もが思ったからである。
だが続いた小隊長の言葉が皆を安堵させた。
「そうだな、では二時間後……そう、二時間後に規定の配備位置にお前達がいるかを確認するぞ。

なのでお前は『今すぐ』監視に戻るんだ、いいな」
「は、はいっ！」
今すぐ戻れと言いつつも、配置に就いているかどうかの確認は二時間後というのが微妙な指示である。警務官達はこれを粋な計らいと見たのだ。
警務官Aは命令通りすぐさま控え室を出た。だが、わざと遠回りを選んだ。
無意味に廊下を後戻りしたり、玄関を出たり、無意味に歩き回ったのである。もちろん伊丹のいる病室にたどり着くまでに、二時間かかるようにであった。

身辺に張り付いて離れない警務官Aを追い出すことに成功した伊丹は、黒川に汚物入れを用意させるとテュカと共にそれに潜り込んだ。一応、頭の上に何枚かのシーツを被せ、さらにフタをする。
この状態で感染症病棟から運び出すように黒川に頼み込んだ。
「仕方がないですわね。でもお手伝いはこれだけですからね」
病棟前で立ち番をしている警務官のBは、黒川が姿を見せると軽い調子で声をかけてきた。
「こんな時間に掃除かい？」
「患者さんには深夜も早朝もありませんから。……特に不潔な物はすぐに処理してしまいませんと」
不潔を強調されたこともあってか、警務官Bは汚物入れの中を覗き込むようなことはしなかった。
そしてその脇を富田と栗林が通り抜けて行く。

「あ、ご苦労さま」
「二人ともこんな時間なのにどこに行くんだ？」
「あはは、あたし達にはちょっと目に毒なんで、ファミレスでも行って時間を潰してきます」
もともと監視対象ではない栗林と富田達は外に出ることは禁じられてない。警務官Bが気にとめたのも夜のこんな遅くにという理由であった。だが二人が外に逃げ出る理由は大変に理解できたため、二人とも同情の視線で見送られながら病棟を出たのである。
一方、伊丹達はエレベータを使って病院の最上階へと向かった。
「わたくしがお手伝いできるのはここまでですので、後は隊長にお任せ致します。レレイに何があったのかよく分かりませんけれど、後ほどきちんとした説明と報酬を要求致しますので、どうぞご覚悟をしておいてくださいね」
「わ、分かったよ」
ここで黒川と分かれた伊丹は、テュカと共に屋上の端へと走った。
病院の多くには火災等の緊急時脱出用の脱出袋や降下具……減速機のついたロープ等が用意されている。伊丹はこれを利用して病院から抜け出そうと考えていたのだ。
伊丹は収納庫からクレーンアームを引き出すと、その先端から伸びるベルト環にテュカを腰掛けさせ、自分もそれに足をかけると屋上の縁からロープへと身をゆだねた。
キリキリという音と共に、二人の身体はゆっくりと下がっていく。

だが、伊丹が降りようとしている地上には、何故か警務官のAが姿を現していた。
「やばい！」
散弾銃を手にしたその男は、手持ちぶさたを紛らわすかのように所在なさげに病院の建物外をうろうろしている。
緊急時脱出用のロープに中途で停止する機能などない。このままでは問答無用で警務官の前に二人で降り立つことになってしまう。
「くそっ、なんだって、あいつがこんな所に」
AはAなりに気を使ってこんなところで暇つぶしをしているのだが、今の伊丹とテュカにとっては迷惑以外の何者でもない。しかも重力は、無情にも伊丹を大地へと招き寄せる。
「くっ！」
「ん？」
警務官Aは、突然の気配に振り返った。
油断なく散弾銃の銃口を向けて、物音の正体を確かめようと目を凝らす。
「……なんだ、猫か」
そこにいたのは、野良猫であった。虎縞の雄猫だ。
大抵の病院には給食の残飯を狙った野良猫が、半分飼い猫のようにして暮らしていることが多い。環境衛生的にもご近所的にも、良いことではないのは明らかなのだが、患者や職員が心の潤いにと

餌を与えることもあって、なかなかいなくならないのである。
ドラ猫は、自分に向けられた必殺の銃口に胡散臭い物でも見るかのような視線を向け「みゃ」と鳴いた。
一人と一匹が静かに対峙し、緊張感があたりを満たしていく。
Aは猫に向けて、突然「だーん、しゃこん、だーん、しゃこん、だーん、しゃこん」と口で発砲、装弾の効果音をあてて、猫相手にシャドー銃撃戦を始めた。
「なんだ、そりゃ?」と胡散臭そうな視線を向けていた猫も、突然の事態に困惑しているのか、ひくっとした表情で凍り付いている。
「通常弾が通じないだと!? こうなったら最後の武器だ。特殊カドミウムフレシェット弾だ!」
そう言って新たな弾丸を装填するフリをするA。実に楽しそうである。
相手にしてられねぇやと思ったのか、猫は、背中を向けるとそそくさと去って行く。
Aはその背中を追うように銃口を向けて、「だーん、しゃこん、だーん、しゃこん」と効果音をあてながら銃口を跳ね上げる。きっとこの動作は、発砲時の反動を意味しているのだろう。
誰も見てないと思って安心しているのか、Aは「ふん、これで許してやろう」と誇らしげだ。
そのお茶目な振る舞いを頭上から見下ろしながら、吹き出しそうになるのを堪える伊丹とテュカ。
精神科病棟の窓枠に外からしがみついて、どうにかAの頭上に降下することを防いだものの、足下でAがうろうろしている限りこのまま窓枠にしがみついているしかない。

一方、窓の内側……病室の中では、眠れぬ夜を過ごしている患者の一人が、窓の向こうの美しい金髪エルフ娘に魅入られたような視線を向けていた。

見とれているのか、それとも夢心地なのかボーとした表情だ。夢と幻覚の区別がつかないのかも知れない。

視線のあったテュカはウィンクをして、静かにと人差し指を立ててその指の背にキスをした。

すると患者は何かに納得したように、そう、もの凄く納得したように肯いてベッドに横たわった。

ちなみに「空が落ちて来そうだ。恐ろしい」と訴えて入院していたこの患者は後に「妖精を見た。彼女は俺に口づけして、大丈夫だ、見守っててやるから安心してゆっくり休めって言ったんだ」と語り、それからほどなくして社会復帰し、自信に溢れる生活を送ることになるのである。

「どうしたもんかな。あいつなんだってこんなところに」

重ねて言うが、Aは伊丹達に気を遣って病棟の裏で時間を潰しているのだ。

だがその振る舞いが野良猫に散弾銃を向けて脅かしたり、花壇の前にしゃがみ込んでいたりではいささか威厳というか、体裁というか、色々なものが残念である。同時になんだかなぁという、やたらほのぼのとした気持ちも沸き上がってくるのだが、そう思えるのはきっと第三者だけだろう。

「……」

「……」

「参ったなぁ」

「ちょっと窮屈ね」
窓枠に外からしがみつくのは、姿勢的にも腕力的にもかなり疲れる行為なのだ。
「あれをどうにかすればいい？」
「なんとかなるか？」
「う～ん、試してみるわ」
テュカは、人差し指をぐるぐると回しながら、精霊に囁きかける。そして、「えいっ」と指先を警務官Aに向けた。
すると、鋭い風が吹いてAの制帽を吹き飛ばす。
ころころと地面を転がり、建物の向こう側へと消えていく制帽を追って、Aも走っていった。
「よし」
ぱっと窓枠を蹴ってテュカと共に地面に降りる伊丹。すばやくテュカを安全ベルトから解き放つと、その手を引いてAが消えたのとは逆の方に走ったのである。

伊丹達は病院から抜けだすと待ち構えてた栗林達と再合流した。
タクシーを捕まえて乗り込むと、伊丹は嘉納から伝えられた埼玉県と東京都の境にあたる河川敷のゴルフ場の名を告げる。
「で、いったいどうしたって言うの？」

そろそろ事情を説明しろとテュカ達が言う。事情も聞かずにここまで協力してくれる信頼感にはすばらしい物があるが、それは詰問を先送りしてくれただけのことであり、ずうっと何も聞かないままでいてくれるという意味ではなかったのだ。

伊丹は説明の順番を考えながら、まず結論から告げた。

「太郎閣下の話だと、森田総理が中国の外交官から、レレイの杖を見せられたそうだ」

「それってどういうこと？」

「事態はいくつか想定される。杖だけ盗まれた。杖の複製を作った……」

「そんなことなら、こんなに慌てて病院を抜け出す必要はないと思うけど」

「その通りだ。最後の一つの可能性が、レレイが捕らえられているってことだ」

テュカが、ひっと小さな悲鳴を上げた。

だが栗林が当然考える疑問を口にした。

「でも隊長、あたし達がアルヌスを出る前は、レレイはちゃんと居ましたよ。どうやってどうやってあの子を中国が捕まえるなんてことが出来るんですか!?」

「閣下もそれを問題視している。今、特地は連絡が断たれていて、事実の確かめようがないんだ。だから最悪を想定して動く必要がある。そのためには一度アルヌスに戻らなきゃならん」

「でも、もしレレイが捕まってその身柄が中国にあるって言うなら、どうやって助けるんですか？」

「そうなっていたら、俺個人でどうにか出来る範囲を超える。だが閣下は、そうなってないと考え

ているそうだ。レレイの身柄は特地にまだある可能性が高い」
「どうしてそんなことを言えるんですか？」
「そうでなきゃ、連中の強引すぎる行動を説明できないからだ」

07

「と、言うわけで、お前にはデモ隊に占拠されている銀座駐屯地に行って、特地派遣部隊の狭間陸将にこれを届けて貰いたい」
嘉納は、飾り気のない仕草で、約束の時間に約束の場所へと現れた伊丹に書類の入った封筒を示した。場所は埼玉県の河川敷にあるとあるゴルフ場である。
現職大臣の前ということもあって、富田と栗林は私服ながら直立不動の姿勢をとって並んでいる。列外にはテュカ、そして伊丹がいる。
嘉納の秘書官の野路（のじ）は、乗用車のヘッドライトで、緑の芝生の上に駐機している一機のヘリコプターを照らした。
その傍らでは、オレンジ色の繋ぎを着た整備要員が、小型トラックに積まれたドラム缶からホースを伸ばしてヘリに給油作業をしている。

伊丹は書類を受け取りつつ、心の底から沸き上がる疑念を問いただした。
「レレイの件は？」
「それについては俺の立場から何とも言えん。お前が思ったようにすればいい」
狡いやり方である。命令してない。伊丹が勝手に行動したという言い訳が出来るようになっているのだ。だが、伊丹としてもこれに文句を言うつもりはない。何も言われなくても助けに行く決心は固まっていたからだ。
嘉納は続ける。
「紹介しよう。こいつは間所航空のパイロットの河合だ。元海自の二等海尉でな、俺の個人的な伝手でなんとか無理を聞いてもらえそうなパイロットは、こいつだけなんだ」
地図を片手に、飛行経路を確認していたパイロットは、紹介を受けると伊丹に手を伸ばした。
「よろしく伊丹二等陸尉。銀座上空、高度一万三千フィートまでご案内しますので、大船に乗ったつもりでいて下さい」
伊丹もつられてその手を取って握手し返したものの、話に出た不穏な数字が引っかかり声を上げた。
「えっ!?　高度一万三千フィートって何？」
「作戦をご説明します、伊丹二等陸尉。これをご覧下さい」
すると野路が前に出て来た。

秘密の作戦という雰囲気に興奮しているのか、嘉納の秘書は奇妙なまでに張り切っていた。乗用車のボンネットに大きな紙を広げ懐中電灯で照らす。

何かと思って見れば、それは銀座駐屯地のドームの設計図であった。

「防衛省から大臣が個人的な伝手で入手して下さった資料です。国家機密の漏洩にあたることをお含み置き下さい。それでこのドームなんですが、天頂部に実はマンホールの蓋のようなハッチが作られています。ここに降りることが出来れば、周囲を取り巻いている暴徒に邪魔されずに内部に入ることが出来るはずです。しかも具合の良いことにちょうどこの真下が『門』です。ザイルを用意しましたので、内部に侵入したらこれを使って『門』の前に降りて下さい」

野路は、ボンネットに登山用の真っ赤な四十メートルザイルと、八の字鐶、カラビナの束をドスンと置いた。

それに加えて、銃身を水平に二本連ねた中折れ式の散弾銃をごろっと転がした。銃身を短く切るという違法な改造が施してあり、大型の機関拳銃に近いサイズになっている。弾も箱ごとどんと置いた。

「残念ながら私では武器がどうにもなりません。仕方ないので、大臣が個人的に所有されている散弾銃を盗んで参りました。保管用のロッカーごと盗まれたと盗難届を出しますので、決してお持ち帰りにならないようお願いします」

自分のした違法行為をいけしゃあしゃあと語る大臣秘書に、伊丹は「なんだかなぁ」と呆れた。

「これだけでは火力不足かなと気に病んでたんですが、富田、栗林の両氏が自前で武器をお持ちだったのが幸いです」

富田と栗林はそれぞれに手にしたＰＤＷを見せつけた。

それから、と野路は大きな箱を取り出す。

「ご注文のアーチェリーです。でもこんな強弓、テュカ嬢は引けるんですか？」

「あら、弓は腕じゃなくて背筋で引くものよ」

テュカは受け取ると瞬く間に組み立てて、矢をつがえると弦をくいっと弾いて見せた。

「Acute-hno unjhy Oslash-dfi jopo-auml　yuml-uya whqolgn!」

呪文と共に放たれた矢は、追い風の加速を受けて、ティーグランドからパー4と設定されているミドルホールのグリーンにあるピンの小旗の中央を貫いて止まった。

「おおっ！　この距離をホールインワンとは！　さすがです。お見それしました」

だが伊丹は、話の前提条件が理解できないと異議を唱えた。

「ちょ、ちょっと待って下さい。今さっき、パラシュートで降りろとか言いませんでした？」

「はい。伊丹二尉と、富田二曹のお二人が空挺の資格をお持ちだから出来る作戦です。お二人ともスカイダイビングもプロ並みとか。軍用のパラシュートがどうしても手に入りませんでした。なのでスカイダイビング用のパラシュートを二組用意しています。これで我慢して下さい。急いだので色はもうカラフルな奴しか手に入りませんでした」

そう言いながら、パラシュートの詰まったコンテナ（背負い袋）をトランクから引っ張り出した野路は、その一つを伊丹に、そしてもう一つを富田に押しつけた。

「富田はスカイダイビングするの？」

「インストラクターの資格をお持ちだそうです」

富田は「そうなんですよ」と、慣れた手つきで早速コンテナから伸びたハーネスを身に纏い始めた。

「高度一万三千フィートから、自由降下？　しかも夜間に!?　タンデムで!?」

そんなの出来るはずがないと言おうとする伊丹の機先を制し、嘉納が安心したように告げた。

「お前が落下傘降下のプロでよかったぜ！　この方法がダメだってことになりゃ、もう手の施しようがなかったからな」

慌てて、ちょっと待ってくれと伊丹は嘉納に迫った。

嘉納の言っているそれは欺瞞情報であって、伊丹自身にはそんな能力は欠片すらなかったからである。伊丹はパラシュートのプロどころか、降下長と副降下長の二人がかりで蹴落とされてやっとこさ空に飛び出した、言うなれば臆病者なのだ。

このことは、過去にも何度か説明したことがあったはずである。だが、この緊急事態によってどうやら太郎閣下の頭からはそのことがすっぽりと抜けているようであった。

だが、「ラッキー！」とハーネスに手を伸ばすテュカに手を引っ張られたため訂正の機会を逸してしまう。この娘、霞ケ浦で体験ジャンプをして以来、やみつきになってしまったようだ。

「ヨウジ！　はやく着けよう、着けようよ」
伊丹はテュカの身体に、ハーネスを装着しながら言った。
「ぎ、銀座なら空からじゃなくても、マンホールとか地下鉄の作業坑とか、噂に名高い東京の隠し地下通路とか、進入路はいろいろとあるんじゃないですか？　無理に降下なんかしなくても」
「そんな物ねぇんだよ。いろいろ噂のある地下壕だの地下通路なんてのは、皇居と永田町とかあっちの方の代物でな、銀座辺りまではカバーしてない」
「あ、いや……でも」
野路が、他の侵入方法は既に検討した、他の選択肢はないのだからつべこべ言うなとばかりに続けた。
「いいですか？　先ほども言いましたが、ご用意したパラシュートはカラフルで大変によく目立ちます。なので警察に話をつけました。降下の時間に合わせて銀座の送電を一時的に停止します。そうすれば街は完全に暗闇になって見えなくなるでしょう。ほぼ同時に機動隊が放水してデモ隊の引っこ抜きをはじめて陽動をかけます。敵の注意はそこに引きつけられるはず。伊丹二等陸尉はその隙を突いて『門』に降下して下さい。いいですね」
さあ、時間がありません、早く装備をつけて下さいと、秘書官の野路に急かされた伊丹は、とにかく自分もパラシュートを背負った。栗林の装備は富田が丁寧に取り付けている。ハーネスの装着法は空挺傘と同じなので伊丹が困ることはなかった。

だがテュカは、伊丹の動作にキレのなさを感じたのか直裁に尋ねた。
「もしかして行きたくない？」
すると伊丹はテュカにだけ聞こえるように答えた。
「期待を裏切るみたいで悪いけど、お前の時だって俺は嫌で嫌で仕方なかったんだ。無茶苦茶恐かったんだぞ」
「なのに頑張ってくれたのね!?　嬉しい！」
ところがテュカは、伊丹の首にしがみついた。どうやら彼女の耳には、お前のために炎龍の恐怖を乗り越えたのだと聞こえたようである。
「高いところから飛び降りるのと、炎龍、どっちが恐い？」
「お、同じくらい。だいたい、俺はスカイダイビングの資格なんて持ってないんだぞ。これって航空法違反だよ。スカイダイビングの協会が聞いたら、きっと文句を言って来るぜ」
だが他に選択肢がない以上、ぶっつけ本番でもやるしかないのだ。
「大丈夫よ。きっとヨウジは乗り越えられるわ」
「そう言って貰えると勇気が出るよ」
「大丈夫。『ぱらしゅうと』さえちゃんと開いてくれたら、降りる場所は操ってあげられるから。前に体験させて貰った時に風の精霊とすっごく仲良くなれたのよ」
スカイダイビング用のスーツ、そしておでこにゴーグル代わりの暗視鏡をつけたテュカは、降下

の風圧で邪魔にならないよう、髪を三つ編みにしていく。
「夜の空中散歩なんて、わくわくしちゃう。そのまま落ちちゃっても、まぁヨウジとだったら……うん、いいかもね」
貴方とだったら死んでも良いと告白するテュカの口ぶりは、大変に楽しそうであった。

離陸したヘリは加速しつつ前進し、ゴルフ場を抜ける辺りで機首を上に向け強引に高度を上げた。急激な上昇に大きく揺すられてジェットコースターに乗っているような感覚を味わう。
瞬く間に市街地が視界の下に流れていく。街灯、窓の明かり、自動車のライトなどが、さながら流星のようであった。
富田が、栗林のハーネスをまさぐって緩みがないかを調べている。パラシュートが開いて全体重をハーネスに預けた時、ホンの少し緩みがあっても恐怖を感じることになるからだ。
「富田、お前が仕切ってくれ。タンデムなんてしたことないから、こっちの点検も頼む」
「俺が降下長ですか？　分かりました。みんな、よく聞いてくれ。これからハーネスを接続するから栗林は俺の膝に乗れ」
「テュカは、俺の膝の上だ」
「えっ！　ここで病院での続きをするの!?」
「馬鹿、んなことするか、ハーネスを繋ぐだけだ」

「知ってる」
うふふとからかうように笑うテュカの頭を、伊丹は軽くこづいた。
「いた〜い」
「接続と点検を済ませたら、河合さんの十分前の合図でヘリのステップに足をかけて座ります。隊長もテュカと俺の隣に腰掛けてください。で、河合さんのGOサインで飛び降ります。隊長は、ドローグシュートを忘れないようにして下さいよ」
富田は、伊丹のコンテナ右下に挟み込んである小型の落下傘を指さした。
「『三降下』目で投げるんだったっけ？」
富田はそうだと肯くと、そろそろ準備しましょうと、栗林の両脇に腕を回して軽々と自分の膝の上に座らせ、ハーネスの接続を始めた。
「隊長、大丈夫ですか？　顔が引きつってますよ」
栗林は緊張した面持ちでゴーグルの装着具合を確かめている。指先が震えているのは、きっと寒いからではないだろう。
伊丹も、慌てて顔をゴーグルで隠した。
「これでも元特殊作戦群だぞ。スカイダイビングなんてのは超がつくベテランなんだ」
「嘘ですよね？」と疑わしそうな視線の栗林。
「本当だよ。実は、本当は超Sクラスなのに、面倒くさいからそれを隠してオタクを演じてたって

奴だ。何かあったら助けてやるから安心して飛べ」
「何それ!?　無茶苦茶中二病！」
「格好良いだろう？」
やったこともないのによく言う男である。伊丹の知識は、周りが経験者ばかりなので日常的に飛び交う会話を聞き覚えたり、自主練を見て得た「門前の小僧」知識なのだ。
だが栗林はそれで安心できたのか、「そっか、そうなんだ」と何度も何度も肯いていた。
「栗ボー、自由落下中に富田の手にしがみつくなよ。ハーネスをぎゅっと握ってろ。それと気圧の急激な変化で耳が無茶苦茶痛くなるからな、耳抜きは出来るか？」
栗林は緊張を感じさせる態度で「は、はい」と素直に肯いた。伊丹をベテランと信じたのだろう。
伊丹は、富田の手首にある高度計を指さして告げた。十二までの数字が描かれているが、その針はもう振り切っていて、数字があるとすれば十三と書き込むべきところにその先端を向けている。
「富田、俺は早めに開傘してゆっくり降下するから、俺が見えなくても焦らなくて良いいぞ」
「了解！」
「伊丹二等陸尉！　降下十分前」
パイロットの声が耳に入ると、伊丹は乏しい勇気を身体に満たすため大きく息を吸った。

＊　＊

劉は小さく咳払いするとメガホンを口元に引き寄せ、目の前にそびえる巨大な『門』に向けた。
「我々は、特地を日本の独占から解放するために行動を起こした国際ＮＧＯです。自衛隊の諸君は、速やかに、我々の特地への立ち入りを認めてください！」
『門』の中央に七四式戦車を置き、その周囲に人垣を作って、特地には一歩も踏み入らせまいという構えを見せる自衛隊側の回答は、劉が予想した通りのものであった。
「特地は、日本国政府の管理地である。我々は政府の許可を得ていない者の立ち入りは認めない」
「特地をあたかも日本の領土であるかごとく言う君達の意見には全く賛同できません。特地には、日本国政府も批准している宇宙条約が適用され、どんな国も領有することが禁じられているからです」
「そういった主張は政府に対して行って頂きたい。そもそも我々は、特地を宇宙条約の対象とは考えていない。何故なら宇宙条約の対象は無主の天体・宇宙空間だからである。だが特地やアルヌスは、帝国の施政権下にあった。従って宇宙条約の対象外である。そして我が国の領有権は、帝国との講和条約締結によって認められている」
「国際社会は、帝国を国家として承認していません。それを受け、我々もまた特地を無主の宇宙天体であると考えます。この論法は、かつて北条首相も使用したもので、これによって特地は、宇宙条約が適用されるものとなります！」

「銀座事件勃発時と現在とでは状況は違っている。我が国は講和条約を取り交わすにあたって、帝国を国家として承認している。これによって、宇宙条約は適用されなくなった」
「帝国を国家として承認したのは日本政府だけで、国際社会が認めたわけではありません。我々が、様々な国から集まっている現実を君達は見るべきです」
「だからそういう要求は、日本政府に対して行いなさい。君達がどのような理屈を述べようとも、我々自衛隊はあくまでも政府の命令で動く。政府の許可を持たない君達を通すことはありえない」
「君達がそのような頑な態度をとる限り、我々の選択肢はそう多くありません。日本による不法な特地強占を防ぐため、『門』を破壊します。それでもよいのですか？」
　すると、劉の後ろに並ぶ二台の大型トラックが、エンジンを空ぶかしして、ドーム内を騒音と黒い排気で満たそうとした。『門』を守る自衛官達も銃をいつでも発砲できるように構えて殺気を放ち、戦車はその砲口をトラックへと向ける。一触即発の空気が互いの間を流れた。
　劉は、メガホンを口元からはなすと、独り呟いた。
「なんて粗野な仕事なんだ。わたしにはもっと知的な仕事こそが相応しいのに」
　日本人は平和ぼけしていると聞いていたが、さすがに自衛隊関係者は違うようである。劉もこれ以上の交渉は無駄だと理解した。だが今は、無益な交渉であっても続けることが、重要な作戦を成功させるために必要なことなのだ。要は時間稼ぎである。
「諸君らにしばしの時間を与える。その間に、どうするか考えておきなさい」

劉は目の前の自衛官に恩着せがましく告げると、デモ隊の最前列から引き下がった。彼の後を埋めるように、後方にいた部下達が出てきて自衛官達と向かい合う。まるで不良の喧嘩のごときにらみ合いとなった。

最前列から下がってみると、軍事部門のトップである呉連袍（ごれんぽう）少校が、苛立ちも露わに辺りにいる者を怒鳴り散らしている。劉は呉少校に何を怒っているのかと問いかけた。

「いえ、どうして携帯電話の通信回線まで切らせてしまったのかと。おかげでディアボと連絡が取れなくなってしまったので」

呉に差し出された携帯電話を耳に当てると、「おかけになった電話番号は、現在電波の届かないところにいるか、電源を……」という機械音声が聞こえた。

「この始末です」

ケーブルを切断した兵士は言い返した。

「そんなこと言ったって、ケーブルのどれが特地の携帯電話用回線かまで分かりませんよ！　とにかく俺達は日本政府と、特地の連絡を絶てという命令に従っただけです」

呉少校は、怒りにまかせて目の前の大型トラックのタイヤを蹴った。

「くそっ！　日本政府と特地の部隊との連絡を絶つつもりだったのに、我々とディアボの連絡まで絶ってどうしろって言うんだ！」

感情にまかせて声を荒らげる指揮官に、兵士達の呆れたような視線が注がれた。このままでは士

気に影響すると見た劉は、呉を宥めた。
「少校、気を鎮めたまえ。作戦の急な変更を指示したのは私だ。変更後の対応について齟齬が起きたのなら、それは私の責任だろう」
「いえ、劉局長のせいではありません。元はと言えば、箱に『玉璧』を入れなかったディアボのせいです！」
予定ではこの作戦はディアボが発送してきた箱を載せたトラックを騒ぎの中で絡め取り、箱に詰められているはずの『玉璧』を確保して終わるはずだった。あとは、このデモの本来の目的に従って各国と共同で銀座駐屯地を取り囲み、外交圧力をかけながら、デモとマスコミを誘導し、『門』の管理を国連に委譲させるというのが当初の計画だったのである。
ところが、いざ蓋を開けてみれば、箱の中には杖しか入ってなかった。
慌ててディアボに連絡をとって見れば、帰って来た返事は『玉璧が欲しくば、俺を皇帝にしろ。そのための軍をよこす約束はどうなった？　それとの引き替えでなければ、お前達の欲しい物は渡さないぞ』と言って来る始末である。
「日本政府に『門』を閉じられてしまえば、殿下の為に軍を送り込みたくても、出来なくなってしまいます。そのためには彼女の、『玉璧』の身柄を我々が抑えておく必要があるのです」
『そんなものはブラフで充分だろう？　そのために彼女の杖を送った。上手く使って『玉璧』はお前達の手の内にあるぞと、思わせてやればいい』

「そんな、虚仮威しが通用する相手ではありませんよ」
『だとすれば、最初からこの話は無理だったということになる』
「殿下……殿下は本当に『玉璽』を手元においておられるのですか？」
『もちろんだ。お前達の武器と装備を持った一万の軍隊を連れてこい。そうしたら交換してやる』
この時、劉には選択肢が二つしかなかった。
このまま『玉璽』が手に入りませんでしたと、すごすご引き揚げるか、ディアボから『玉璽』を受け取るために、こちらから特地へと乗り込むかである。劉は極めて短い時間で、自らの運命を決する決断を強いられたのである。
「特地に乗り込むといっても……」
劉は、デモ隊を前にして迷った。
デモ隊と言いつつも、彼の前にいるのは各国から集まった国際ＮＧＯだけではない。動員をかけて集めた日本にいる留学生や、労働者、そして観光を名目に渡航してきた共産党機関員、さらに彼の指揮下には特殊武装工作員の部隊もある。
この特殊工作部隊こそが駒門に軍隊と勘違いされたのであるが、実は人民解放軍ではない。軍とは別に党情報局が編成した秘密工作組織の軍事部門であった。
海外での謀略活動をするため、構成員はトルコ系やモンゴル系、朝鮮、あるいは白人種と様々な人種、民族を集めて、その素性が分からないようにしてある。その中にはもちろん日系人の姿もあっ

た。しかもそれぞれが中国以外……例えばトルコやパキスタン、ロシア、モンゴル、日本、そして台湾といった国々のパスポートを所持し、使う言葉も中国語ではなく、少数民族の言語か英語を使用するという徹底ぶりなのだ。当然、工作員の個々の能力についても優秀の一言に尽きる。彼らをうまく使えば……。

劉は、決断した。

この秘密工作部隊から、女性工作員ばかりを選ぶと急造のチームを編成した。

「これより我々は、当初計画した物よりももう少し過激な争乱を起こす。君達は、その騒動に巻き込まれた観光客を装って、あの駐屯地にいる自衛官達に助けを求めなさい。我々もまた少し遅れて駐屯地の内部まで乱入する。我々が数に任せてドームまで殺到すれば、君達はきっと特地で保護されることになるだろう」

十二人いる女性工作員の中で、一番年齢の若い鈴芳華（りんほうか）が首を傾げて尋ねた。

「ご命令とあらば。しかし、局長達は大丈夫なのです？　手ぶらでは奴らに撃たれませんか？」

「日本人は、発砲するのに躊躇する傾向がある。特に武装していない相手に力を振るうのは批難されると考えている。しかもこの場には様々な国の人間が集まっているから、虐殺だなんだと各国から批難されるような事態に発展するかも知れないと思えば、思い切った手は打てまい」

「特地に入った我々の任務は？」

「もちろん『玉璧』の確保だ。何としても『玉璧』を我々の下に連れ帰りなさい。特地に入ったら

まずはディアボ殿下を探して接触すること。そして『玉璧』の引き渡しを求めること」
「ディアボが抵抗したら？」
「どのような手段を用いてもかまわない。『玉璧』さえ手に入るなら、ディアボを殺しても構わない。それが君達の任務だ。理解できたかね？」
そして、劉達は国際ＮＧＯや、デモに参加している様々な国々の留学生や労働者をあおり立てて銀座駐屯地内へと乱入し、『門』を間に挟んで、完全武装した陸自の隊員達とにらみ合ったのである。
呉少校は、役に立たない携帯電話を懐にしまうと劉局長を振り返った。
「私は軍大学で、成功する作戦には簡潔さが大切であることを学びました。他にも他人任せや、運任せの要素が極めて少ないこと。そして各ユニットに課せられた役割が単純で、分かりやすいこと。強力な支援戦力があるといったことが重要です。しかしそういう点から見ても、この作戦は無茶な面ばかりが大きく見えます」
目標の『玉璧』の確保は、現地のディアボの機嫌に左右され、それを連れて帰れるかどうかは、観光客に偽装させた女性工作員達に任せなければならない。自衛隊や日本と交渉するにしても、単にこの銀座駐屯地を占拠するだけでは、日本に譲歩させることは難しい。
呉の言葉が耳に痛かったのか、劉は自嘲した。
「確かに、君の目には全てが行き当たりばったりの出たとこ勝負に見えるだろう。だが、充分な勝算に基づいている。心配の必要はない」

「でも、見ての通り我々のおかれている状況は非常に芳しくないと思いますが」
「そんなことはない。我々はここにいる戦力だけで、自衛隊と対峙しているわけではない。社会のありとあらゆる分野で日本政府を攻撃し圧倒することが可能だ。例えば、レアアースの禁輸を行えば、日本の経済は重大な影響を受ける。政府は首相官邸に爆弾の直撃を受けたに等しいほどの衝撃を受けるだろう。さらに、我が国は、いつでも日本商社の労働者を、死刑になる可能性がある罪状で逮捕拘禁することが可能だ。その上、日本は円高で苦しんでいる。ここで大規模な円買いの操作を行ったら、日本の輸出産業は致命的な打撃を被るだろう。テレビのマスコミの流す情報によって、政府の支持率はいつでも急落させることが可能だ。国民の意識も自在に操れる。インターネットのインフラはハッキング攻撃で容易に破壊可能。その損害は計り知れないものとなるだろう。我々は、そうした非軍事的な援護射撃をいつでも要請できる状況にあるのだ。心配する必要はない」
「そんなことが、本当に効果あるのか、なんだかあやふやな感じです」
「目に見える武器、実際の人命や施設を破壊する力を相手にする軍事部門の君にとっては、当然だろう。だからこそ今回の計画遂行では、非軍事部門の私が指揮を執ることになったのだ。私ならば、君たち軍事部門を含めて、社会の全ての領域における攻撃手段を有効に活用し、今回の作戦を成功に導くことが出来るからね」
　すると背後からやってきた伝令が、劉に呼びかけた。
「劉局長……各国のＮＧＯ代表が、尋ねたいことがあると来ています。予定にない行動を訝しがっ

てます。必要以上に騒ぎを大きくしたことについては、厳重に抗議したいということです。あとマスコミ対策について、少しばかりご相談申し上げたいことが……」

「日本のマスコミは既に掌握済みだ。本部に連絡し、関連機関のシンパに鼻薬を嗅がすよう伝えなさい。そうしておけば今日明日ぐらいは沈黙を続けさせられる。日本政府を揺さぶるために、本国に第二段階の支援攻撃を要請しておくように。ただ、各国のＮＧＯとの調整は私がやるしかないな。……呉少校、しばらくのあいだここは君に任せるので頼んだぞ」

呉は、疲れ果てたように「了解」と敬礼した。

銀座で発生した騒乱から逃れて、救いを求める風を装って特地への潜入を果たした十二人の女性工作員達は、案内してくれる男女の自衛官の後に続いた。

「こちらで、銀座が落ち着くまでお待ち下さい」

案内されたのは建物の四階の小部屋だった。

中には二段ベッドがすし詰めに近い形で六個並べられている。騒動が落ち着くまでのしばらくは、ここで待機しろというのだろう。

観光客を装っていたのが効いてるのか、特に警戒されている様子もない。

ドアの前には立ち番が二人ほど残っているが、彼女達の感覚ではそれは通常の対応である。

ちょっと戸を開けて外の様子を覗いてみると「どうしましたか？」と、お人好しなところを見せ

てくれる。鈴は、一生懸命意思の疎通をはかろうとしている外国人観光客を演じるため、わざとたどたどしい日本語で語りかけた。

「アノ、オトイレ……イッチャダメデスカ？」

「いえいえ、どうぞ」

トイレに行くのは自由で、昼になると昼食を部屋まで運んでくれ、特に警戒を受けているとは感じられなかった。ただ、廊下に見えない境界線が引かれているようで、そこに近づこうとするとやんわりと、しかし断固とした口調でそこから先には行ってはいけないという制止を受けることに気づいた。

「コッカラ先ハ駄目？　折角、特地ニ来タンダモノ、外ヲ歩イテミタイワ」

「申し訳ありません。貴女方は緊急避難という形で保護されただけで、特地への立ち入りが許可されたわけではないのです。なので動き回れるのは、この建物の制限された範囲だけなんです。どうぞご了承下さい」

可愛い笑顔で頼んでみても駄目だという。仕方なく鈴は部屋に戻った。

「外の様子は？」

窓の外を眺めている同僚に尋ねると、返事は芳しい物ではなかった。

「かなり動きが活発ね。あちこち車が走りまわっていて、隊員達も忙しそうにしている」

「自衛隊は今、帝国側との最終決戦をしている真っ最中だったな。きっとその為だろう」

「いや、『門』の銀座側を占拠した我々を実力で排除するための準備かも知れない」

実を言えば、この喧噪は、『門』の銀座側を占拠されたために発令された『韋駄天』……撤退準備命令によってアルヌスの留守居部隊が行っている退去の支度であった。

『脱兎』が発令された時のために、遺棄していく燃料や弾薬等を穴などに埋めたり、爆破できるように起爆装置を設置したり、さらには持って帰る武器や、残していく荷物を選別する作業を行っているのだ。

「くそっ……いよいよ、お前とのお別れだぜ」

空自地区の格納庫では神子田が、愛機のファントムに頬ずりしながら、一升瓶の中身を車輪に浴びせている。まさかこんなに早く、しかもこんな形で愛機に別れを告げることになろうとはと、久里浜と二人で男泣きに泣いていたのだ。

背後に並ぶC1輸送機のパイロット達も似た心境なのか、コクピットの清掃をしたり、それぞれの方法で別れを告げている。そして格納庫の扉が大きな音と共に閉じられた。

神子田と久里浜にも、整備班長の怒鳴り声が浴びせられた。

「おい久里浜！　もう行くぞ、神子田をひっぺがせ！」

「整備班長。もうちょっと待ってやって下さい。あいつにとっちゃ女房と別れるようなもんなんですから」

「しょうがねぇなぁ、なら先に行くぞ！」

「分かってます、感謝します、恩に着ます」
航空自衛隊の隊員達は、それぞれに荷物を抱えると空自地区からアルヌスの駐屯地へと向かった。
ドームの周辺は、『脱兎』が発令されたら速やかに『門』を渡るため、荷物を満載にした車両や、完全装備で身を固めた隊員達で埋め尽くされようとしていたのである。
だがそうとは知らない工作員部隊の彼女達には、この動きが総出撃の準備に見えたのである。
「完全武装の兵士達にこんなにうろうろされては、身動きがとれないな」
「しかたない、日が落ちてあたりが暗くなるまで待とう」
女性工作員達は、それぞれにおしゃべりをしたり本を読んだりして時間を潰している風を装いながら、日が暮れるのを待った。
時々「何か困っていませんか？」と気安い調子を装った幹部自衛官が点検にやって来るが、女性ばかりということもあってノック無しにドアを開けるとか、不意に中を覗き込む不調法はない。そのため彼女達は緊張感とは無縁に時を過ごすことが出来たのである。
やがて日が暮れ夕食を終えた頃にあたりは暗くなる。だが、それで周囲から人気がなくなり静かになるということはなかった。
それどころか、遠くから悲鳴を含んだ騒ぎが聞こえてきた。発砲音や爆発音まで聞こえる。それは、明らかに戦闘の気配であった。
「どうした？」

皆で窓に顔を寄せて外の気配を窺うと、麓の街で大きな火柱が上がっている。どうやら火事が発生しているようであった。

「どうします？」

鈴は窓から外の様子見てをあたりを行き交う自衛官の注意が外に向かっていることに気づいた。

「今なら混乱に乗じて外に出られるわ。建物の配置も資料の通り。窓から外に抜け出して、徒歩でアルヌスに向かいましょう」

眼鏡の女が、問題点を挙げた。

「問題はディアボとどうやって接触するかだな。顔を知らないから探しようがない。しかも、その王子様とやらは身を隠しているのだろう？」

「ディアボには、日本語を使える通訳の女性がついていることが分かっている。パナシュとか言う名だ。その女はこの世界の貴族だ。おそらくはどこにいても目立つだろう」

「誰かに尋ねれば居場所はすぐに分かるってことだな」

潜入や脱出は彼女達の得意するところである。特に打ち合わせの必要もなく、瞬く間にシーツを連ね、ロープにするなどの手はずを整えていった。

女達はこの部屋から半数の六人を送り出し、半分は残ってアリバイ作りをすることとなった。一度に全員がいなくなれば気づかれてしまうからだ。鈴芳華は、自分の寝台に丸めた毛布を入れて、自分が眠っている体裁を整えると、窓を静かに開けて、窓枠に手をかけてゆっくりと外に出た。

専門的な訓練を受けている彼女達にとって、ロープ代わりのシーツを伝って地上に降りるのはさしたる苦労ではない。隊舎の陰に降り立った六人は、騒動の渦中となっているアルヌスの麓へと静かに向かった。

＊　＊

『韋駄天』の発令は、アルヌスの住民達にも深刻な影響を与えていた。
数を減らしていたものの、それでもわずかにいた自衛官の買い物客が、この報せが届くと同時にぱったりと姿を消してしまったからである。
「どうしたんだい？　慌てて」
顔見知りの自衛官が脇目もふらずに走っていくのを見つけた料理長は呼び止めた。
「いつでも退去できるように準備しろっていう命令が出たんだ」
「あんたは、こっちに残るって言ってなかったか？」
「『韋駄天』の命令が出たら、一人残らずの退去ってことになる」
料理長は、「こんちくしょうめっ！」と椅子を蹴飛ばした。
「全員って何だそりゃ！　何人かこっちに居残るって話じゃなかったのかよ!?」
「『門』のあたりで何かゴタゴタが起きているらしい。それでらしいぜ」

この不完全な説明は、組合の従業員達にいよいよ来るべきものが来たという不安を抱かせることとなった。そしてその不安は、瞬く間にアルヌス全域へと広がったのである。

問題は、この不安がアルヌスの住民ばかりでなく、新難民にも伝播したことである。

以前にも触れたが、新難民とはコダ村からの避難民達ではない。ゾルザル派の行った焦土戦術の結果生まれた戦災孤児や被災者のことだ。家や家族を失った子供や、老人、怪我人などがこのアルヌスでは多数保護されていた。

殺戮による恐怖の記憶も生々しい彼らにとって、庇護者たる自衛隊を失うことはゾルザル派による悪夢の再来を意味する。彼らは見捨てられるのだと恐怖に怯えた。

「どうしよう？」

「なんとか俺達も連れてってくれって頼まないと……」

「無理に決まってるさ、あたい達まで連れて行ってくれるわきゃないだろ？」

「そんな無責任なことが許されるのかい!?　最後まで面倒を見る義務ってものがあるんじゃないのかい？」

「御領主ですら俺達を助けちゃくれなかったってのに、異国の軍隊が俺達に施しをしてくれるわきゃないだろ？　そんな義務なんてもんありゃしないんだ。少しの間、住む場所を与えて貰えただけでも、よかったって思わなきゃ」

「ずいぶんと物分かりのいいことだね？　だけど、あたいは飢えたくないし、死にたくも無いんだ

よ。怖いのももうごめんなんだ。物分かりよくして不自由な思いをするくらいなら、面倒な奴って思われても意地汚く生きた方がマシなんだよ！」

避難民達は顔を見合わせると不安を口々に語り、意見をぶつけ合った。

そして、とにかく自分達をここに置き去りにしないでくれ。逃げ出すなら一緒に連れて行ってくれと頼むと言うことで、一致していった。

だが、皆の集まる会堂の片隅では、周囲の視線を気にしながら、皆とは少しばかり方向性の異なった会話を交わしている者もいた。

「警戒が、手薄になったぞ」

「皆が不安がっている。騒ぎを起こすには丁度良い頃合いだ」

背後で為されていた会話が耳に入った子供はその響きの違和感に、何を話しているのだろうと首を傾げた。だが、それがまさか自分達の安全を脅かそうとする相談だとは思いもよらず、そのままやり過ごしてしまったのである。

ハーピーのテュワルもまた、皆が集まって話し合う会堂の片隅にいた。

彼女は、不安の渦巻く周囲の雰囲気に流されず、超然とした面持ちで座っている。超然と言っても無関心だったわけではない。単に皆が抱くような不安を感じることが出来なかっただけなのだ。ここに連れて来られてから、どうにも現実感というものに乏しい日々を送っている。もしかすると感情というものが枯渇してしまったのかも知れないと考えていた。

帝都の悪所生活から足を洗った彼女は、再出発を期して、夫と共に荒れ地を開墾する生活をしていた。開拓村の生活は決して楽なものではなかった。慣れない力仕事に彼女も彼女の夫もくたびれはてる毎日だった。けれどそれ以上に充実していて楽しかった。明日は今よりきっと良くなる。そんな希望があったからだ。

だが、それは突如として奪われてしまった。そして目を覚ましたら、いつの間にかここアルヌスの自衛隊の診療施設にいたのだ。どうして？　なぜ？　間を埋めるのが容易でないほどの唐突さに戸惑う。何があったのかと思い出そうとするものの、過去の出来事の全てから現実感も、鮮烈さも綺麗さっぱり失われていた。いったいどの辺りが夢で、どの辺りから現なのか区別が出来ないのだ。もしかすると、帝都を出たあたりからの全てが自分の妄想というか、夢だったのではないかとすら思える。今日も悪所の街角に立って、客の袖をひく一日を始めなければならなかったかなと考えてしまうくらいだった。

だが、いっそその方が良いのかも知れない。そうすれば馬鹿な夢を見ちゃったなぁと、全てを諦めることが出来るからだ。

仰ぎ見れば見慣れない会堂の天井が広がっている。壁際にはこれまで使ったことがないような上等な布団や枕が畳まれ、積み上げられていた。

ゴム草履とか呼ばれるつっかけを履いてぺたりぺたりと歩き出で、水場にいって顔を洗う。そして鏡に映った自分の顔を覗き込みながら思った。

自分は今、どんな感情を味わっているのだろうか、と。悲しんでいるのだろうか、と。

実を言えば、「やっぱりこうなったか」という思いもあるのだ。自分みたいな存在が、あの腐った悪所から抜け出そうなんて思ったりするからこんな目に遭うのだ。自分みたいな存在は、悪所にいるのが相応しかったのだ。

だが、自分を呼ぶ声によって現実へと引き戻される。

「テュワル。これから上の奴らの所に行って、一緒に連れてってくれって掛け合ってくるからさ、その間この子達の面倒みててくれないか？」

振り返ってみると、そこには孤児の群れを引き連れた女性が立っていた。確かトゥハッタという名前だったか。見たところ様々な種族が混血した女性のようで出身がはっきりしない。

「わたしが子供の面倒を？」

「そう。あんた暇そうだし、いいだろ？」

避難民の中にも、他人の面倒をみるような元気がある者もいる。

いや、そうすることで自分の苦しみから目を逸らそうとしているのかも知れない。人は守る者があると強くなれる。強くなるために守る対象を求めることもある。

「いいよね？　じゃ頼んだわよ」

良いと答えてないのに、いつの間にかテュワルが子供達の面倒を見ることになっていた。

困ったような表情で子供達を見渡すテュワル。本当のことを言えば、彼女は子供が苦手だったの

だ。泣かれでもしたら、どうあやして良いか見当もつかない。
自分が幼い頃はどうだったっけと思い返してみても、これといった記憶がない。泣いたって誰も相手にしてくれなかったし、誰も助けてはくれないと悟ったからこそ、泣くのを止めただけなのだ。
これが男なら、泣き止ませたり、奮い立たせるのも簡単なのに。
転んで膝小僧でもすりむいたのか、泣きじゃくる男の子を見てついついそんなことを考えてしまった。娼婦として磨き上げた手管を使えば、男の機嫌なんて思うがままなのだ。例えば……。
「って、何を馬鹿なことを考えているの？」
再び、ぶんぶんっと頭を振って意識を現実に引き戻す。
「君達には、ちょっっっっっとばかり早いわよねえ」
ちょっとどころでなく、かなり早い、早すぎる。
他人に聞かれたらどんな顔をして良いのか分からなくなるようなことを呟いたテュワルは、泣きわめく子供を壊れ物のように扱いながら、おそるおそる膝の上に乗せた。
どうにも泣き方がおかしい。どこか変なのだ。
「どうしたの？　何をしているの？」
ふと見ると、子供達の何人かが突然苦しみ出した。床で七転八倒して唸っている。
「何よこれ、何が起きたの!?」
心配した幼児達が転げる子の顔を覗き込んで「ぽんぽん痛いの？」と声をかけている。

病気、怪我？　何か悪いものでも食べた？

動転したテュワルは、膝の子供をうっかり取り落としてしまった。だが彼女の膝から転がり落ちた子供までもが、服を引き裂いて巨大化を始めた。

「こ、これって、もしかしてダー!?」

『ダー』とは、ヒト種あるいは亜人の幼児に擬態して街や集落に入り込み、保護してくれた亜人やヒト種を獲物として喰らう怪異だ。どれほどあどけなく可愛く見えても、それは怪物が擬態した姿でしかない。つまりは本当の意味での子供ではないのだ。

あちこちで悲鳴が上がった。

「化け物だ！」

「もう駄目だ！　誰も助けちゃくれないぞ」

「助けてくれ！」

「逃げろ！　喰われちまう！」

音のしない竹笛を吹いている者が、叫び声を上げ、人々の感情に恐怖をあおり立てる。建物に放たれた炎が、人々から平常心を奪い去った。

怪異化したダーは、目を血走らせて、鋭い爪も露わにしてあたりにある全てに片っ端から襲いかかって、牙をたてる。テュワルの目の前で子供達が、次々と鋭い爪と牙にかけられていった。

「逃げて！」

子供達に逃げるよう叫ぶテュワル。彼女に出来ることはそれしかなかった。
だがダーは、逃げ損なった子供を捕らえる。ゴリゴリと頭蓋骨を噛み砕く。その手足をむしって口の中に放り込んでいった。
「ひっ……ひっ……」
返り血を浴びて後ずさるテュワル。
ダーの瞳がテュワルへと向けられる。男達の声は、女性や子供達の悲鳴にとって代わられ、難民キャンプのあちこちに伝播していく。こうしてまずは被災者達が、怪異テロの最初の標的となってしまったのである。

あちこちで同時に火災が発生した夜の仮設長屋の間を、怪異が徘徊する。
その数は一頭や二頭では到底収まらない。人々が逃げていった先にダーの姿があり、その怪異の咆哮と鋭い爪から逃れようと、パニック状態となった人々は右に左にと後先考えずに走り回った。
「難民キャンプに敵の襲撃!?　火災も発生！」
「違う、子供が怪異に化けたんだ！　皆が襲われてる！」
「この手口はゾルザル軍だぞ、くそっ！」
悲痛な叫びを耳にした、自衛官達は、銃を手にして一斉に立ち上がった。だが、『韋駄天』の命令を受けている彼らはアルヌスの駐屯地を出ることを硬く禁じられていた。

「何故ですか!?」
部下に詰め寄られた幹部達は隊員達に自重を促した。
「じゃあ、避難民達を見捨てろって言うんですか！」
「お前達が、帰れなくなってしまう危険を冒すわけにはいかないんだ！」
偵察隊本部の檜垣三等陸佐も、押し寄せてきた部下達の苛烈な突き上げに、額に脂汗を流しながら「駄目だ、これは命令だ」と繰り返すことしか出来なかったのである。
「他の部隊の連中は無理でも、我々だけならっ！」
「こんな人数でどうしろって言うんだ！」
偵察本部に所属する第一～第六の各偵察隊は、第三偵察隊を除いてほとんどがゾルザル派殲滅の為に行動している各戦闘団の隷下へと配されていた。今檜垣の指揮下にあるのは、第三偵察隊だけなのだ。しかも伊丹が隊長職からはずされて、古田、黒川、倉田、栗林、富田らが不在なため、残っているのは桑原陸曹長以下六人。それで全員である。
出動させろと迫る桑原を前に、檜垣は両手で渋面をこするようにして汗をぬぐう。
「だめだ。許可できない」
「ですが、民間人をあのまんまにしておくことなんて出来ないでしょう」
「だがこれは規則なのだ。『韋駄天』が発令されたら、退去準備して待機。それが命令だ」
「そんな命令！」

従う必要がないとばかりに、東陸士長が叫んだ。
だが檜垣の傍らに立つ運用訓練幹部が窘める。
「馬鹿者！　命令を無視して、組織が成り立つと思っているのか？」
「確かにそうでしょうけど我々も人間です。苦境に陥っている人たちを見捨てて、どうして国民に愛される自衛隊なんて言えるんですか!?　我々は国民に愛される自衛隊だったんじゃないですか!?」
「なんだその、中身のすっからかんな標語みたいな言葉は!?」
「伊丹隊長の言葉です」
檜垣は「混ぜっ返すな」と机を叩いた。
「お前達の言いたいことはよく分かる。だが俺にはお前達に行けとは言えない。万が一『脱兎』が発令されたら、間髪入れずに『門』を渡らなきゃならないんだからな。少しでも『門』の近くにいなければならないのに、離れてどうする。下手をすればこっちに取り残されて二度と帰れなくなるかも知れないんだぞ」
だが桑原が鉄帽の縁を軽く押し上げると言った。
「大丈夫です、何とかなりますよ。レレイ君が道を開いてくれますから」
「なんだそれは？」
今度は檜垣の方が問い返した。レレイに『門』を開ける力があるという話は、防衛機密の扱いを

受けている。そのため檜垣はそのことを知らなかった。逆に階級の低い彼の部下の方が詳しい事情を知っているという、おかしな状態が出来あがっていたのである。

檜垣は桑原からの説明に納得したが、それでもダメだと首を横に振った。

「それにしたって、うまく行くという保証はないだろう？　希望的観測だけを頼りに、お前達を危険にさらすわけにはいかんのだ」

レレイが、既に何度かの実験を成功させているという情報は第三偵察隊の面々ですら知らない。とは言え残留希望者を募ったりと、『門』の再開通が可能であることを前提とした準備が次々と行われていたことを考えると、かなり期待できると考えていた。そのため第三偵察隊の男達は叫んだ。

「我々なら大丈夫ですって。任せて置いて下さい！」

「仁科、お前は女房がいたはずだろ？」

「このまんま女子供を見捨てて逃げ帰って、どうやって嫁の顔を見ろって言うんですか！　俺の嫁は気が強い奴でしてね、あんたなんか嫌いって言われて離婚されちまいますよ」

「俺達は背中丸めて生きていくのは嫌なんですよ！」

「お前達……」

檜垣はまぶしいものでも見るように、部下達を見渡した。

「どうしてもご許可頂けないとおっしゃるんなら、せめて見て見ぬふりをして下さいませんか？　責任は自分が負います。でなきゃ孫におじいちゃんはみんなを守るために戦ったんだぞって、自慢

話できませんからね？」

それが桑原陸曹長の言葉であった。だが檜垣は机に視線を落としたまま、声を震わせて言った。

「駄目だ。それだけは断じて許すことは出来ない」

「三佐！」

「なぜならばだ！　責任をとる者がいるとすればそれは私だからである！」

傍らでずっと黙っていた運用訓練幹部が訝しげに尋ねた。

「檜垣三佐？」

「責任を負わなければならない者がいるとすればそれは私である。諸君は私の部下であり、諸君の行動は全て私の指揮の下で為されなければならない」

「三佐？」

再度尋ねる運用訓練幹部に、檜垣は立ち上がると顔を真っ直ぐに向けた。

「今こそが、そうなのかも知れん。私にとっては、おそらくは今がその時なのだ！」

「？」

「『韋駄天』が発令されたら、特地派遣部隊の全ては、全ての部署、戦闘を放棄して退去の準備をして『脱兎』の発令か『韋駄天』の解除を待たなければならないことになっている。だが、私は私の責任において命令する。これより第三偵察隊の指揮は、この檜垣が執る！」

「はっ！」

桑原の返事と共に、仁科、笹川、戸津、東、勝本が姿勢をただした。檜垣は、居並ぶ精鋭達を見渡して頼もしそうに肯く。

「良い面構えだ、お前達。みんなを助けに行くぞ！」

檜垣三佐に指揮された第三偵察隊の面々は、勇んで高機動車に乗り込んだ。

その中の一人、戸津陸士長は黙り込んだまま立てた小銃に縋るように掴まって頭をたれている。

巨大化して怪異になる幼児の存在は、既に分かっていたはず。なのに自分はその対処に積極的でなかったと悔やんでいるのだ。

「くそっ……あれ一匹だけじゃなかったなんて！　どうして意見具申しなかったんだろ!?」

桑原陸曹長は、戸津に後悔をやめるよう言った。

「お前はそんな高級の頭脳の持ち主か？　未来予知が出来るとは驚きだ。出来もしないことを出来なかったと言って悩んでるんじゃねぇよ！　あの時、子供に化ける怪物がいることを知ったのはお前だけじゃねえんだぞ。なのに誰も思い当たらなかった。それはしょうがないことだ」

「でも、子供達の検査をするとか、いろいろ調べることだって出来たはずですよ、おやっさん！」

「どうやって!?　何を目印に見分ける？　この特地じゃ検査の結果に異常があるのが当たり前で、その異常が何を意味してるかなんて分からないんだぞ！　化物が、ラテックス製の仮面で変装しているのとはわけが違うんだ！」

「だけど……」
「調べたって、どうせ見分けられなかったさ！」
桑原の言葉に、進行方向にキャリバー50を向けて構えている勝本も同意した。
「戸津、済んだことを気に病むより、今はどうやって犠牲者を救うかを考えろ」
「お前達、弾を込めろ！　着剣もしておけよ。勝本、自分の判断で撃ってよし！」
檜垣三佐の指示で、隊員達が六四小銃に銃剣をつけていく。勝本は車載機銃キャリバーの槓桿を引くと薬室に弾丸を装填した。
桑原は運転席の仁科一曹に告げた。
「急げ！」
そんな檜垣に戸津は、おずおずと尋ねた。
「ところで子供はどうしますか？　化物になるかも知れない子供も助けるんですか？」
目の前の存在が敵か味方か分からないという状況は恐怖そのものである。敵である可能性のある限りは全てが警戒の対象と言えた。この場合は子供がそれに相当しており、近づかないのが一番なのだ。
「何、当たり前のことを言ってるんだ貴様は!?」
だが檜垣三佐は、子供も助けろと告げた。
「駆けつけた段階で、怪異化してなければ、子供だろうと誰だろうと救出の対象だ」

「目の前で怪異化したらどうするんですか？」
「武器使用要領としては、姿が大きくなるまで待て、だ。子供とは言えないくらいに大きくなった時点で、私が怪異認定する。そしたら躊躇わずに射殺しろ。子供殺しの批判を受けるとしても、それは私だ。だからお前達は命令されるまで決して子供に銃口を向けるなよ」
「り、了解」
怪異認定する前は銃口を向けるなと言われて焦ったように頷く東と戸津。仁科一曹が運転席から振り返って話しかけて来た。
「知っているかお前達。変身ヒーローが変身ポーズをとっている最中に攻撃するのは番組的には反則なんだ！　そのことをよく憶えておけ！」
「わ、分かりました」
高機動車は土煙を巻き上げながら、アルヌスの新難民地区へと入った。すると早速、ヘッドライトに獲物を探して徘徊している怪異の群れの姿が浮かび上がる。
追われて逃げ惑っている人々の姿を発見した仁科は、怪異との間に割ってはいるように高機動車をつっこませた。
間一髪のタイミングで怪異の爪が高機動車のボンネットに食い込む。ダーは動きをとめようにも間に合わず、激しい音を立てて激突した。
「っ撃てぇ！」

桑原と東が銃口を並べて小銃弾を浴びせかけた。
この大型肉食怪異は、象や犀などの大型動物と同じように、一発や二発の弾をくらったぐらいでは堪えない。血飛沫をまき散らし、後ずさりするものの、すぐには倒れてくれなかった。
「撃て撃て撃て！」
だが、歴戦の男達にとってそのような敵は初めてではない。
なによりもこの怪異は栗林が肉弾戦で倒した敵なのだ。ならば銃を使えるこの状況で、緑の人たる自分達が負けていられるはずがない。いかなる敵であろうと経験と訓練を積み上げた自分達は対処することが出来る。それが彼らの信念であった。
銃撃音に招かれたように、あちこちから怪異が姿を現し近づいてくる。
だが、桑原と東が弾倉を交換する間に、入れ替わるようにして戸津と笹川が銃撃を引き継ぎ、弾雨を間断なく浴びせる。
銃口を並べた集中砲火にはさすがの怪異も耐えきれず、膝をついて倒れた。
「よし、次だ」
怪異達は一頭、また一頭と処理されていった。
遠方から近づいて来る怪異の群れには、重機関銃を担当する勝本が、金床をハンマーで連打するような音をさせながら倒していく。
「おいおいおい、こりゃいったい何頭紛れ込んでたんだ？」

大口径の弾丸には、さしもの怪異も腕や身体の一部を引きちぎられて吹き飛ぶ。だが、怪異の数が多すぎだ。

「よし、逃げるぞ！」

「早く乗れ、こっちだ。急げ！」

檜垣が決断を下す間に桑原は追われていた避難民の手をひいて高機動車へと押し込んだ。

「大丈夫か？　意識はあるか？　名前は？」

「ト……トウハッタ。そっちはトイスタ」

「よし、大丈夫だな。出せ、仁科！」

「了解！」

檜垣三佐の指示を受けて、アクセルを床まで踏み込む仁科。

高機動車はそのバンパーで、襲いかかって来た怪異達を弾き飛ばし、そのタイヤで踏みつける。

そして追いすがろうとした怪異達をたちまち引き離した。

「ふぃ……どうにか助けられましたね」

笹川の安心したような声に、檜垣三佐は気を抜くなと警告した。

「怪物は、まだあちこちにいるんだぞ。この人達を降ろしたら、また行くんだからな！」

「大丈夫です。俺達の手にかかればあんな脳みそのない化物、ちょろいっすよ」

運用訓練幹部は呆れたように、笹川の態度を窘めた。

「その油断こそが危ない。気を緩めるなっ……ぐっ」
「三佐！　運幹！」
戸津の悲鳴が上がった。
檜垣三佐や、運用訓練幹部が、今助けたはずの難民の男女に刺されたのだ。
男は檜垣三佐を刺したあと、音のしない竹笛を吹き鳴らした。
「おまえら、何しやがる！」
怒鳴ると同時に戸津は運幹にナイフを突き立てていた女を銃床で殴り倒し、そのまま返す動作で檜垣三佐を刺した男めがけて銃床を叩きつけた。
「死ねっ、死ねっ！」
一度のみならず繰り返し叩きつける。桑原は車内で暴れる戸津を押さえつけるのに手を焼いた。
「戸津！　落ち着け。もう死んでるぞ！」
「そんなの分かりませんよ、おやっさん。こいつも、化物の擬態かも知れないじゃないですか！」
戸津に殴られて倒れていた女が、呻きながら懐から袋を取り出し、高機動車の車内に液体をまき散らす。勝本や戸津はそれをもろに浴びてしまった。
「臭ぇ！　なんだこれ」
「蟲獣の体液さ。これでダーは狂ったようにお前達を付け狙う。これで、お前達は死ぬんだ！」
トゥハッタはそう叫ぶと、甲高い笑い声を残して、高機動車の荷台から転げるようにして飛び降

りた。
地面に激突して横たわる女に、東は銃口を向け弾丸を浴びせる。
「待て、撃つな！　撃ち方止め！」
「おやっさん、何があったんです!?」
運転中で振り返れない仁科は、前方を注視したまま叫くように尋ねた。
「二人が刺された！　仁科、行き先を病院に！」
「了解っ！」
アルヌスの診療施設目指してハンドルを切る仁科だが、突如として高機動車の前に怪異達が立ちふさがってきた。まるで何かに呼び寄せられたかのようなタイミングであった。
怪異達はその剛腕をもって建設途上の仮設住宅の建材を、道を塞ぐように引き倒した。
勝本がキャリバーの弾丸を浴びせたが、目の前に投げ出される丸太や角材に高機動車は乗り上げてしまう。
踊るように跳ねる車体。コントロールを失った車体は急激に傾く。そんな車体の前方に、ふらふらとよろめきながら歩いているテュワルが迫る。
「危ない！」
叫ぶ仁科がハンドルを大きく切る。
「畜生めが！」

高機動車はバランスを失って横転、仮設長屋の一角に突っ込んであっけなく停止した。
「なんてこった！」
「怪我はないか？」
横転してしまったために、転がるようにして運転席から這い出た仁科は、「ここは、仮設住宅だな」と事故に民間人を巻き込んでないかの確認をしつつ、車内の部下達に呼びかけた。
「仁科一曹！　動けません」
「勝本三曹が投げ出されました！」
すると東陸士長の焦ったような声が返って来た。
仁科は、車体から飛び降りると後部までまわりこみ、折り重なって動こうにも動けないでいる部下達を引っ張り起こした。
だが、背後で鳴り響く拳銃の音に慌てて振り返る。すると外に投げ出されていた勝本が、群がって来る怪異に拳銃を向けて弾丸を浴びせていた。倒れているテュワルを庇うためか、逃げ出すことも出来ないのだ。
「くそ！　なんで怪異が群がって来るんだ!?」
「仁科一曹、きっとこいつらあの女がつけた臭いに引き寄せられてくるんだ！」
「勝本！　今行くぞ、待ってろ！」
慌てて車内に転がっていた銃に手を伸ばす仁科。

だが、そうしている間にも勝本の拳銃は弾が尽きてしまう。
目の前に迫った怪異の群れに、勝本は「喰われてたまるかよ」と叫ぶと、両手に手榴弾を握り「ピンッ」とレバーを飛ばした。
「仁科さん、後をたのんます！」
叫びながら怪異達の足下に手榴弾を転がした勝本は、背後のテュワルに覆い被さった。

＊　＊

「ブレイブン隊とクワティンコ隊は、街の通りを固めろ！」
非常事態の発生を察知したヤオは、ボンテージ鎧に身を固めると、指揮杖代わりにサーベルを振り、隊商護衛の傭兵達を要所に配置して防衛態勢を構築するよう指示した。
出身部族を炎龍に襲われた経験のある彼女は、緊急時の状況把握と迅速な対応の必要性を骨身に浸みて理解している。そのため誰よりも早くに行動を起こすことが出来た。このような状況となっては特別な軍才は必要ない。明瞭な指示だけが全てを救うのだ。
安定した収入を与えてくれる職場を失いたくない傭兵達は、装備に身を固めると、たちまち楯を並べて防衛態勢を強化していった。
「ヤオ！　勝手に動いてまずくないんですか!?」

アルヌスの治安は自衛隊の管理下にある。
そんな場所で傭兵を部隊化して勝手に動かすのはあとあと問題にならないのかと、年齢、軍歴、人柄の円熟度で傭兵達から一目置かれているハントは言った。
「ニホンの軍は今、アテに出来ない。彼らは彼らで大きな命令を受けていて、全てそれに基づいた行動になっている」
「そうなんですか？」
ヤオは自分が助けてくれと頼んで縋っても、動いてくれなかった彼らのことを思い返していた。ニホン人は個々に接している限り、悪い奴らではないが、これが組織となると途端に酷く融通の利かない石頭になってしまう。それはもう仕方のないことなのだ。
「アルヌスは此の身達の街だ、此の身達が守る。それではダメか？」
「分かりました。でも聖下はどうしたんですか!?」
ハントは組合幹部の中でも、最も有力な指揮者の姿を求めた。ロゥリィさえいれば、一抹の不安すら覚えることなく戦えるのだ。
「聖下は今、レレイ殿を探しておられる」
「レレイさんを？　いなくなったんですか？」
「昼過ぎから姿が見えない。最初は、どこかに籠もって仕事をしているかと思っていたのだが、晩飯時にも姿を現さなかった。前に狙われたこともあって、聖下が随分と心配なされてな。直々に探

しておいでだ」
「だから、今はあんたが此処の指揮を執っていると？」
「代わってくれるなら、いつでも御身に代わるぞ、奴隷の身の上には重すぎる役目だ」
「いや、俺なんかが指揮しようとすれば、どうしてお前がって言い出す奴がでてきますからね、荒くれの有象無象を束ねるには、あんたの方が具合がいい。組合の幹部に一番近しいし、奴隷とは言え持ち主はイタミ卿だ。誰も文句は言いませんよ。で、どうします？」
「とにかく防備を固め非戦闘員の保護収容だ。誘導の指揮はハント、君が執ってくれ」
「分かりやした」
ハントはヤオに、胸に拳をあてる帝国式の敬礼をして了解の意を示した。
「それと街の者は食堂に集まるように指示してほしい。一人残らず一カ所にまとめておいた方が守りやすいと此の身は考えている。どう思う？」
「街の者には貴族のお嬢様も含まれますかね？」
アルヌスには語学研修のために貴族の姫君とそのメイド達が滞在している。
その多くがピニャのいるイタリカへ行ってしまったが、まだ日本の動向を調査報告するためと称して、パナシュが残っているのだ。そんな彼女に、傭兵である自分が集まれと命令口調で告げるのは、いかにも敷居が高いとハントは返した。
だが、ヤオは逡巡しなかった。

「此の身は、一人残らずと御身に告げた。もし動いてくれないようなら、これは我が主、イタミのご指示であると告げればよい。彼女もその名を聞けば動くであろう」
「本当にイタミ卿のご指示なんですか？」
「もちろん嘘だ。だがこういう時に名前を使うくらいの方便は許されるであろう。あの方なら結果をきちんと出せば、文句を言うこともあるまい」
「了解っ！」
こうして、カトー老師をはじめとするコダ村の子供達や年寄り達、そして組合の従業員達が食堂へと集められた。もちろんその中にはメイアや料理長、そしてジゼルの姿もあった。
「むさ苦しくなってますが、こちらにどうぞ」
やがて、傭兵達に案内されるように、パナシュと彼女のメイド、それとディアボとメトメスらも食堂に姿を現した。
「ヤオ！　みんなを集めてどうすんだ！　さすがにこんな人数、一度に店に収まりきれねぇぞ」
テーブルを隅に寄せて椅子だけ並べたが、それでも店内はすし詰め状態である。料理長がウェイトレスを指揮しながらも「少しは考えろ」とヤオに苦情を言った。
「椅子のない者は床に座らせるか、立たせておけ。年寄り、子供、立たせておくのに差し障りのある方については、貴賓室の椅子をひっぱりだして来い。それでも収まらない分は、隣や道ばたでいい。とにかく、街の者をこのまわりに集めるんだ」

「いったい、何があったんだ!?」
情報がきちんと行き渡っていないのか、皆から状況の説明を求める声があがり、ヤオが答えた。
「簡潔に言おう。街ではいまダーと思われる怪異共が暴れている。新難民が襲われた」
「ダーが！　そんな化物がどうしてここに!?」
「状況からして、戦災難民の子供に紛れこんでいたんだろう。皆に集まって貰ったのはダーから守るためだ。組合で雇っている傭兵を掻き集めても、街全体を守るには不足するからな、戦力はここに集中させておきたいのだ」
「くそ、ゾルザルの奴め！」
ディアボは、唾を吐くように言った。
だが、そんなディアボに料理長は慕うような視線を向けた。
「侍従さん、やっぱりあんたの言う通りになった」
「分かっている。だが今ここで話すなよ料理長。皆を悪戯に混乱させるだけだぞ」
「ああ、分かってる。すまなかった」
料理長は素直に謝った。だがこんな状況下で、意味深な会話をされて聞き流せる者はいない。皆の視線が料理長とディアボへ注がれ、無言で詳しい説明を求めた。
「あんた誰だ？　みかけない顔だが」
「う、うむ。私は、ディアボ殿下に仕えている者だ。帝国がゾルザルの奴に牛耳られてしまったた

めに、殿下はこちらに滞在しているパナシュ殿のところに身を寄せていたのだ。勝手に滞在していたのは済まないと思うが、状況が状況故に寛恕願いたい」

「へぇ……つまりは帝国の皇子殿下ってことですかい？」

メトメスが「さよう」と典雅に肯いた。

「このようなところに逃げ隠れしなければならなくなってしまったことを、情けなく思う」

こうしてディアボやメトメスの素性は、皆が理解するものとなった。しかしそれが済めば、こんどはそんな大層な身分の人間が、料理長とどんな話をしたのかが気になるところである。

料理長は皆からの無言の圧力に耐えかね、白状するように告げた。

「この方は、ゾルザルがこの街にこんなことをして来るんじゃないかって予告してたんだ」

仕方なさそうに、ディアボも認めた。

「そうだ。殿下は不肖の兄君についてよくご存じだ。故に、あの方ならこうしたことをやってもおかしくないと予測されていたのだ。とは言えその方法が、まさかこのような人倫に悖る手段とは、さすがに思ってもなかったことだがな」

＊　＊

二個の手榴弾の炸裂は、怪異を巻き込んで倒すだろうと思われた。だがそれは、手榴弾を投じた

勝本も爆発に巻き込まれることを意味していた。それでも怪異に生きながら引きちぎられ、ガツガツと喰われて死ぬよりはマシという決死の思いだったのだ。

もちろん、そんな自殺にテュワルを巻き込むわけにはいかない。だから勝本は自ら楯として彼女の身を庇ったのである。

しかしながら、結果として怪異を倒すことは彼には出来なかった。

「きらいっ!!　自分から命を捨てていくようなぁ戦い方はぁ、だいっ嫌いよぉ！」

勝本の投じた手榴弾が爆発する前に、黒い暴風がダー達の首を狩り落としてしまったからである。首を失った巨体は手榴弾に覆い被さって倒れ、爆風と破片の過半を受け止めた。さらに地を割るように叩きつけられた巨大なハルバートが、勝本達の楯となったのである。

口を尖らせたロゥリィは、大樹を根ごと大地から引き抜くようにしてハルバートを担ぎあげると、呆然としている勝本を指さして睨みつけた。

「最後の最後までぇ、生き残るために戦いなさいっ！　ヨウジぃの部下なら、上役をちゃんと見習いなさぁいっ！　ヨウジぃなら絶対に最期まで足掻くわぁ」

どこか必死さを感じさせるその声には、見知った存在がいとも簡単に自分の命に見切りをつけてしまうことが、嫌で嫌で堪らないという思いが込められていた。

戦士とか、勇者とか、闘士とか、猛将とか、名将とかこの世界にだって……いや、この世界だからこそロゥリィが好みそうな男はいくらでもいるだろうに、どうしてあんな男がいいのかねぇとい

う思いを勝本は常日頃から抱いていた。だが、ロゥリィの憤る姿を見ると、彼女がそういう戦いに生きる男を求めていないことに気付くのだ。

戦いに生きる者は戦いに死ぬ。おそらく勝本が咄嗟に選んだような死に方をした者を彼女は大勢見てきたのだろう。だが伊丹は違う。戦いに生きていないが故に、戦いの果てに倒れることなど決して望まない。死ぬ瞬間まで足掻くだろう。その理由が例え趣味のためであろうとも……。それが故にこの娘は惚れたに違いない。

勝本は、苦笑しながら言い訳をした。

「あ、いや、でも、咄嗟にこれしか思いつかなくって……」

「黙りなさいっ！　もちろん心意気は認めるわぁ。だけどぉ自分の命を塵芥（ちりあくた）みたいに投げ捨てられたらぁ、助けられた側は一生涯の傷になるのよぉ！」

ロゥリィはそう言って勝本が覆い被さって守ろうとしたテュワルを指さした。

自己犠牲は確かに素晴らしい行為ではあるが、それでも玉砕は自己陶酔の敗北死。死への逃避で、自殺に過ぎないのだとロゥリィは断罪した。

「いい？　例え無様でもぉ格好悪くてもいいからぁ、ぎりぎりの瞬間まで諦めずに生き残ろうとしなさぁい。爆発する武器が手元にあったなら、それを握りしめた右腕をダーの口に突っ込みなさい！　そうすれば右腕を食い千切られても、命だけは助かるでしょう!?　わたしぃは潔い男って大っ嫌いなのぉ！　分かったぁ!?」

ロゥリィは、戦う者にはしぶとくあって欲しいと語った。ぎりぎりまで生き残ろうとするからこそ、奇跡をたぐり寄せることが出来るのだと。

「例え戦いの中で倒れたとしても、それが自殺だと魂は拾ってあげられないのよぉ。ハーディのところに行くしかないのぉ。だからお願いぃ」

激怒する漆黒の相貌に懇願されると勝本も、「は、はい……」と申し訳なさそうに頭を下げるしかなかった。

＊　＊

「Sinn oenn huumrra!?」

アルヌスの街中で物陰に隠れていたのに、突然背後から声をかけられたことに、鈴芳華はぎくりと背筋を硬くした。

これは工作員として教育を受けた者にとってかなり屈辱的な出来事である。

特地の人間を未開発地域の人種、つまり劣っている連中と見下していた彼女は、自衛隊ならまだしも、現地人に捕まるとは考えても見なかったのだ。

鈴芳華は、野生の獣を感じさせる鋭い視線を真っ向から浴びて鳥肌が立つのを感じた。彼らが身にまとう鎧にも、実践で使い込まれた凄味がある。

よくよく見れば、傭兵達の半分以上が犬を思わせる風貌の亜人であった。
「いや、犬と言うよりは狼か」
特地にはこうした亜人がいることは資料で知っているつもりだったが、実際の印象は大きく違った。やはりどこか、遊園地などにいる着ぐるみを着た人間に過ぎない、という軽い感覚でいたのかも知れない。
だが目の当たりにすると、弾丸を装填し、撃鉄を起こした拳銃を肌に押しつけられているかのような、獰猛な空気で全身が痺れた。腹を空かせた野生の狼に見つけられた、その時の獲物の心境がこれに違いない。
彼らは臭いに敏感で、あちこちに散らばって隠れていた鈴の仲間を一人残らず見つけ出した。
「Koii moram mutta！　Mai fayuure humettaa?」
狼系の男は、鈴に繰り返し尋ねた。
おそらくは「お前達は何者だ?」と問いかけているのだろう。
もちろん、鈴は特地の言葉は解さない。ただ、物腰、雰囲気、そして自分が同様の状況下にあったらどうするかという想像から、自分達の素性を確かめようとしているのだと推測できたのである。
「……私たちは、その、あの」
鈴は、不安そうに見えるように仲間と顔を見合わせながら、日本語で答えた。
傭兵達もそれを聞いて気を抜いたのか、太くて短いため息を一つつく。『もう、いい。分かった

分かった』とでも言いたそうな投げやりな態度となった。
それを見た鈴は、どことなく不愉快な気分になった。この狼男を油断させるために弱々しさを演じたはずなのに、それとは全く違う次元で、自分は取るに足らない存在と見下されたように感じたのだ。
鈴は、そのような扱いを受けることが許せないと思った。だから、抜いていた剣をしまい、ついて来いと言うかの如く手を振った狼男を睨みつけてやることにした。

鈴芳華達が連れていかれたのは、どうやら街中の食堂のようであった。
そこは街中の住民達を掻き集めたのか、様々な種族の人間でごった返している。収まりきらず、周囲の道や広場にまで溢れかえっているほどだ。その周りを鎧や楯、槍、剣などで武装した兵士達が守るようにして立っていた。
「どうして現地の兵が？」
鈴は首を傾げた。
自衛官なら、騒ぎから住民達を守るために集められていると解釈できるが、彼らは自衛官でないのだから、街の外からやって来た軍によって占領されているようにも見える。
「どうする、鈴？」
「しばらく様子を見よう。何が起きているのか分からなければ対処のしようがない。それに、住民

達が一カ所に集められているなら、ディアボを見つけるにも都合がいい」
こうして鈴達は、言われるままに食堂の片隅の床に、身を寄せ合って腰を下ろすこととなった。
一方、鈴達を保護した傭兵は、その旨を報告するためにヤオを呼んだ。
「ヤオ、聞いてくれ」
「どうした、ウォルフ？　言っておくが此の身には大切に思う主がある。お前の誘いは嬉しく思うが遠慮しておく」
「違う違うって！　他人の顔を見るなりそういうこと言うなよ。それじゃあいつも俺が女を口説いてるみたいじゃないか？」
「みたい……ではないと思うのだが」
「今回は違うよ。多分ニホンから来た女だと思うんだが、街に隠れていたのを嗅ぎつけたので、連れて来たんだよ」
「ニホン人がなんで街中に隠れてるんだ？」
「さあ、ダーが怖かったんだろ？　とりあえず店の端っこに座らせておいた。こっちの言葉は片言も使えないみたいだ。でも身のこなしや肉の付き方からみると、前に来た『じゃーなりすと』とかいう連中とは違うな」
ヤオはウォルフの指さした方向を振り返り、鈴達の姿を認めた。
ほとんどの隊員が退去の準備とかで丘の上に引き籠もっているのに、どうして街まで降りて来た

のか。ダーに出くわしたから身を隠していたというウォルフの意見も、正直納得することは出来なかった。
「ウォルフ。ダーの姿を見たか？」
「いや。臭いは感じなかったぜ」
「ならば、彼女達は何から隠れていた？」
「さぁな。丘の上にいる連中には、俺達には分からない高尚な考えがあるんだろ？」
ウォルフは、親指を立てるとアルヌスの丘へと向けた。
「ところで凄い目で御身を睨んでいる女性がいるな。もしかして、彼女に何かしたのか？　まさかと思うが、いかがわしい行為などしてないだろうな？　もしそうなら、警務隊に御身を引き渡さねばならないが……」
「んなことしねぇよ！　熱い視線を俺に向けてるってなら、きっと俺の魅力に一目惚れしたんだろ？」
何を馬鹿なとヤオは鼻で笑った。だがウォルフは、鈴の肢体に視線をやって舌なめずりする。
「くそ、美味そうな女だぜ。言葉が通じれば口説けるのになぁ……」
「例え言葉が通じても、お前になびくような女はいないぞ」
「おやおや、焼きもちか？」
「一人で言ってろ。あとはこちらで引き受けるから、御身達は引き続き警戒を続けてくれ」

ウォルフはヤオから「とっとと行け」と追い立てられる。
帰りがけにふと足をとめたウォルフは、メイアに声をかけ「ちょっと通訳頼まれてくれない」と頼み込む。
「なんの用件だニャ？」
「彼女にこう伝えてくれよ。俺と良いことしない？」
メイアは呆れ顔で、「お前、頭は大丈夫かニャ」と呟いた。
だが現実というものを知らしめるには、言われるままにしてやるのが一番だと思ったメイアは「この狼男が、貴女とイヤらしいことをしたいって誘いをかけてるニャ。蹴り倒してやるか、ひっかいてやるのが適切な対応ニャ。傷ついたような顔をして、泣き出すのもよい方法ニャ」と解説付きで通訳してやった。
鈴は突然の声かけに目をぱちくりさせたが、すぐに微笑んで「良いよ。今度暇な時なら」という答えを返す。その笑みは、なんだかとっても満足げであった。
「ニャ!?　……この狼男は冗談が通じないニャ。そんなこと言ったら、あっという間に犯されて妊娠させられてしまうニャ」
「そんなに凄いの？」
「少しでも気のあるそぶりを見せたら、こいつは遠慮しないニャ。終わりだニャ」
「なんだか酷いこと言われているような気がするぞ」

日本語を解さないウォルフも、メイアが、少なくとも自分のことを褒めているわけではないくらいのことは理解できるのだ。だが、鈴は瞳を輝かせてメイアに答えた。
「実を言うと、私はそういう狼のような男が好きなのだ。私の前世か何かが反応するのかも知れないな」
メイアはこめかみから汗を垂らし「も、物好きだニャ」と呻きつつも、鈴の言葉をウォルフに伝えてやった。
「ホント！　マジ？　やったー！」
思わず両手を挙げて喜ぶウォルフ。しっぽをぶんぶん振って、衆人環視のこの状況で押し倒そうとするかの勢いで迫った。だが鈴は「後でと言ったはずだ。今はそういう状況ではないのでしょ？何でこんな騒ぎになっているか知らないけど、君には君の仕事があるはず。まずはそれを済ませて来なさい」と押し返した。
「そ、そうだな。ダーの野郎からみんなを守らないと。じゃ、本当に後でな。俺はウォルフ。お前の名は？」
「わたしは、芳華よ。親しい者はファファと呼ぶわ」
「ファファだな！　よし、約束だぞ！」
ウォルフは叫びながら「ほら行くぞ、この馬鹿」と仲間達に引きずられて行ってしまった。
唖然としたような視線が、周囲から鈴に注がれる。

ウォルフのナンパが成功したのを初めて見たという囁きが皆の間で流れていた。通訳をしてやったメイア自身すら、信じられないという視線を鈴に向けていた。

「ところで、ダーってなに？」

「ダーは普段は子供の形をしていて、集落に入り込んで突然大きくなって襲ってくる化物ニャ。出くわしたら喰われてしまうニャ。だからみんなここに集まってるニャ。ニホンのヒトなら、上に逃げるのが良いニャ」

「そういうわけにはいかないのよ。実はディアボという方に用があって、探しているの。貴女、どこにいるか知ってる？」

「ディアボ殿下を探しているニャ？　なら、あそこにいるお人だニャ」

メイアは、貴賓室から持ってきたソファーに腰掛けているメトメスを指さして彼をディアボだと説明した。

その傍らにはメトメスを名乗るディアボ本人がいて、街の住民達を相手に深刻そうな話をしている。

「あちらが侍従のメトメスさんニャ。女の人がパナシュ様ニャ」

「侍従？　あの男は何の話をしてるのだ？」

「『門』を閉めないようにニホンの人と交渉したいので、知恵を借りてるニャ。彼の言うように、ここまで来るとみんなで押しかけて、『門』を閉じないでって頼み込むしかないかも知れないニャ」

「なるほど……」

鈴は肯くと「通訳を頼みたいのだが引き受けてくれる？」とメイアに頼み、メトメスの元へと向かった。彼女の仲間もぞろぞろとその後ろに続く。

メイアは、鈴達を日本人だと思っているから全く警戒をしなかった。

ヤオや傭兵達は、店の外に気が向いている。

店内の皆は、ディアボの語るニホンとの交渉方針に意識を向けている。

そのため、ぽっかりとした注意の陥穽（かんせい）がそこに開いていた。そのため、メトメスとメイアの姿が見えなくなってしまったことにしばらくの間、誰も気付くことは出来なかったのである。

08

メトメスとメイアは、人気のない倉庫の片隅に放り出されるという乱暴な扱いに、目を白黒させた。どうして自分がこの様な扱いを受けるのか、理由の説明も、それと分かるような前触れもなかったため理解できないのだ。

「あ、貴女たちはいったい何ですか？」

メトメスは尋ねた。だが、彼の言葉は鈴達には通じない。

縋るような視線をメトメスから向けられたメイアは、恐怖におののきながらも自らも事情を知りたいと思う気持ちもあって、ディアボ殿下がこう言っている、あくまでも言ってるのは殿下で、自分は通訳しているだけだから気を悪くしないで欲しいと付け加えて、その言葉を通訳した。

「こう伝えなさい。私たちは殿下から『玉璧』を受け取るためにわざわざやって来たのってね」

「……ニャ？　ぎょくへき？」

「言ったとおりに伝えなさい」

だがメイアは情けなさそうな表情を返した。

毎日ＰＸで自衛官相手に会話して来ただけに、彼女の日本語は組合の従業員の中でもかなり達者な部類に入る。だがそれでも『玉璧』にあたるような語彙は持ってなかった。そしてそのことは鈴にも理解できた。彼女自身も北京語、広東語、少数民族の言語に加え、日本語や英語等の数カ国語を操る。その為にかなり苦労もした。それだけにメイアの心境が大いに理解できたのだ。

鈴は噛んで含めるように告げた。

「『玉璧』というのは、レレイという娘のことだ」

「ニャ!?　レレイさんニャ!?」

「いいから伝えなさい！」

メイアは意訳して鈴の言葉を伝えた。するとそれまで怯えていたメトメスも、事情を理解できて安心したのか大きく肯いた。

「ああ、貴女達が『ちゅうごく』の方々でしたか？　連絡が途絶えてしまい気を揉んでいたところです」
「それは我々の側のミスだから謝罪しよう。だがお前が約束を違えたおかげで、我々も相当の無理をしなければならなくなった」
「それは仕方のないことです。貴女方が約束を守るという保証はどこにもないんですから。我々としても慎重にならざるを得ません。しかし貴女方がこうして来て下さったのなら、殿下も取引をお進めになるでしょう。軍隊はどこまで来ていますか？」
「残念ながら軍隊は連れて来ていない」
「レレイさんの身柄は、軍の指揮権との引き替えだと殿下が要求されたはずです」
「レレイの身柄を、我々に引き渡すのが先だ」
理解の範疇を超えたやり取りに、メイアは困惑した。
軍とか、レレイの引き渡しとか、挙げ句の果てにディアボであるはずの男が、まるで自分が皇子ではないかのように語る口ぶりに驚いたメイアは、通訳としての役割を逸脱し自分自身の疑問を解消するための問いを発した。
「ちょっと待つニャ。レレイさんは、そっちで保護して貰うために、箱に詰めて送り出したはずニャ!?　どうなっているニャ？」
すると鈴は首を振りあっけなく答えた。

「箱の中には杖しか入ってなかったのだ。さあ、早くこっちの言葉を伝えろ」
「まさかそんなことがあるはずないニャ!?　どうなってるニャ!?」
メイアは説明を求めるためにメトメスを振り返った。鈴ばかりかメイアからも問い詰める視線を向けられたメトメスは、とりあえずはメイアに向けてこう答えた。
「これは貴女には関係のないことです。全ては殿下の深慮に基づくものでして」
「ウチも手伝ったのだから関係ある話ニャ！　そうすることがレレイさんを守ることになるからって言う言葉を信じて皇子様の企てを手伝ったニャ。なのに話が全然違うニャ！」
意味の分からない言葉が飛び交うことに苛立った鈴は、メイアの髪を握りしめるとぐいっと引っ張り、自分に顔を向けさせた。
「いい加減にしろ、口を利くメス猫。わたしはお前と話してるんじゃないんだ。わたしが話をしているのは、こっちの皇子様なんだ。通訳機としての役割を果たせないなら、ぶっ壊して捨てるぞ！　壊れたら新しいものを調達してくれば良いだけなんだからな」
だがメイアは、苦痛を堪えながら鈴をにらみ返した。
「誰が皇子様だニャ？　この男が、さっきから他人事の口ぶりで話しているのに気付かないニャ？　ウチは間違って訳してないニャ、この男の言葉を忠実に訳してるにすぎないニャ」
「それはどういうことだ？　つまり？」
「この男はきっとディアボ殿下の影武者ニャ」

「なんだと？」
鈴は怒ったようにメイアを投げ捨てると、今度はメトメスの襟首をねじり上げた。
「よくも騙したな？」
だがメトメスも、自分が責められるのは心外だとばかりに、渾身の力で鈴の手を振り払った。誰かが近づいてこないか見張りをしている鈴の仲間が、苛立たしげに言葉を投げてくる。
「どうする鈴？　戻ってディアボとかいう奴を探すのか？」
「私達の任務は、『玉璧』を手に入れることだ。尋問するなら別にディアボでなくても、『玉璧』のありかを知っているなら誰でも良いんだ」
鈴は再度メトメスに迫った。まず平手を一閃させて殴りつけておいて「おい、貴様」とドスの利いた言葉を怯える男の耳に流し込む。
「『玉璧』はどこにいる？　知っているならその場所に案内しろ。言っておくが知らないという返答をするなよ。何故なら私たちは『玉璧』のありかを知らない人間には、全く用がないからだ。用がないものは壊して捨てる。理解できるか？　壊して捨てる！」
さあ伝えろと脅されたメイアは、「どこにいるニャ？」と震える声で尋ねた。
「壊して捨てる」という言葉が、「殺す」という意味と繋がっていることを悟ったメトメスは、恐怖と忠誠心の板挟みとなった。
「た、確かに知ってます。けれどそれを言うわけには参りません」

だがそんな言葉は鈴達をかえって激高させるだけであった。
「少し痛めつけてやろう、そうすれば喋りたくなるはずだ」
皇子本人でなければ遠慮の必要もないと思うのか、それとも無駄手間をかけさせられた苛立ちからなのか、メトメスは女達から殴る蹴るの暴行を受けることとなった。
鈴達は徒手による格闘訓練を受けている。強い苦痛を感じつつも生命維持にあまり影響のない人体の部位を大変よくわきまえていた。帝国の第二皇子の侍従は、人間にどうすれば苦痛を味わわせることが出来るかといった研究の成果を、身をもって知ることとなったのである。
「さぁ答えろ……『玉璧』はどこだ？　言っておくが、お前が知らないとなると、殿下に直接尋ねることになるぞ」
通訳するメイアに向けて、メトメスは折れた奥歯が腫れ上がった頬の裏側を痛めないよう、慎重に、喉を絞るようにして答えた。
「そんなこと出来るはずかありません。人目の多いあの食堂から皆の注目を浴びている殿下をどうやって攫って来るのですか？　不可能に決まってるでしょう？」
「別に攫う必要はない。軍を連れて来たから話をしたいと告げれば、皇子様自らやって来る。なにしろ喉から手が出るほどに欲しがっている軍隊なんだからな」
「そんな嘘に騙される殿下ではありませんよ。まさかここにいる六人で軍隊だと言い張るつもりではありませんよね？」

「なら我々はその一部だとでも言うさ。日本の軍が厳しい防備態勢を固めている理由が、『門』を挟んで我が軍と対峙しているからだと説明すれば、せめて話をしてみようくらいには思うものだろう？　こうして人気のないところへ連れて来てしまえば、どうとでも出来る。ディアボはお前ほどに我慢強いか？　ん？」

この言葉にメトメスの心はぽっきりと折れた。

人間、自分の頑張りが無意味だと思わされてしまえば意地を張り続けることなど不可能だ。それを感じたのか鈴は、「ふふん」と勝ち誇ったように語りかけた。

「今、ここでお前に出来るのは、素直に『玉璧』のありかを教えて、我々の手間を省くことだ」

メトメスは、問われるままに肯いた。

だがメトメスの答えは、メイアによって封じられた。メトメスが本当のことを教えたらレレイが攫われてしまうと思った彼女は、鈴達の言葉のあとこう付け加えたのだ。

「レレイさんの居場所を教えようとしたら、ウチがお前を殺すニャ。それが嫌だったら黙っているニャ」

「ダ、ダメです。こうなったら本当のことを教えるしかありません。でなければ、次にこんな目に遭わされてしまうのは殿下なんですからね。あのお方は帝国の皇子なんです。こんな目に遭うなんて事が許されて良いはずがありません。しかもその尋問の時の通訳はきっと貴女ではありませんよ。この女性達は、本当にわたし達の命なんて、何とも思っていない。貴女の命もきっと同じです。分

かってるんでしょう？　お願いですからちゃんと伝えて下さい」

本当のことを言わなければ、自分達は此処で殺されてしまうだろう。メトメスはそう告げた。

だがメイアは、くっと唇を噛むと涙を流しながらも首を振った。

「殺されても、レレイさんをこんな奴らに渡すわけには行かないニャ。ウチがお前達に騙されなければ、こんなことにならなかったニャ」

「たかが亜人が何を立派なことを語ってるのです？　殿下が拷問されたり痛めつけられたりするよりはよっぽどマシでしょう？　さあ、早く私の言葉を伝えなさい。お前達の欲しがっているもののところに案内しますって」

だがメイアは、「この男は、レレイさんの居場所に案内するつもりはないって言ってるニャ」と通訳した。

すると、鈴はおもむろにメトメスを殴りつけた。

既に意気地を挫かれているメトメスは、予想もしていなかった暴力に情けない悲鳴を上げ無様に狼狽えた。そして襟首をねじり上げる鈴達に向けて、何度も何度も肯いて見せた。

それは自分の真意が、彼女の要求に応えようとしていることを伝えるもので、鈴達もそれを誤解なく理解した。

言葉と態度が乖離している。となればどちらかが間違っているのだ。そのことを悟った鈴はメイアを殴りつけた。

「貴様、嘘を言ったな！」
鈴の手が襟首から離れたために、支えを失ったメトメスが倒れ込む。
自分達を『玉璧』へと導く大切な案内人である。皆の視線がメトメスへと集中した。そしてその隙を衝いてメイアが高々と跳躍した。
躍動的にしなやかな肢体を動かして後転し、頭上にある倉庫の軒に両手両足を使って猫のごとくすとっと着地する。そして地を駆ける雌豹のような勢いで走り出した。
猫科亜人の俊敏さを見せつけられた鈴達は唖然とした。
ヒトがどれほど鍛えても到底できないような運動性能を、亜人たる彼女は産まれた時から有している。その俊敏さは獰猛な肉食野生動物を彷彿とさせた。いや、実際にキャットピープルとは、獰猛な猫科肉食獣を祖とする亜人種のことなのだ。
屋根伝いに走って、地に降りるメイア。
鈴達はその背中に向けてナイフを投擲した。そのほとんどが外れ、あるいは躱されたが、一本のナイフが彼女の背中に突き立った。だが、致命傷ではない。メイアはそのまま怯むことなく、鈴達の前から姿を消してしまった。
「ちっ！」
「くそ、あの雌猫！　我々のことを街の奴らに報せるつもりだぞ！　どうする鈴!?　あの猫を追うか？」

メイアの残した血痕は食堂に向かって点々と続いていた。今から追っても追いつけないだろう。
鈴は自分達の取るべき行動をリストアップし、その中で最も適切と思われるものを選んだ。
「いや、時間がない。我々は『玉璧』を回収するぞ」

その頃、食堂ではディアボが集まってきた街の住民に向けて、演説をしていた。
元老院で鍛え上げた弁舌の力で、アルヌスの住民達を自分の支持者にしようと訴えかけていたのである。
「みんな良く聞いてくれ。俺は、この街には『門』の存在は不可欠だと考える。何故なら『門』なくして今のような生活は望みえないからだ。この俺も少しの間だが、この街に隠れ住んでいた。この街は本当に良い街だ。皆が本当に、生き生きしている。この中で帝都で暮らしたことのある者はいるか？　あそこは本当に酷い。男達は上役の顔色ばかり見て一日中へこへこ媚びて、誇りも持てず惨めに暮らしている。女達は分厚い化粧を塗りたくって男に諂い、裏では友達を中傷しあう醜さだ。働いている奴隷達はいつも疲れ、やつれている。路上には物乞いと追い剥ぎが溢れて治安は最低だ。帝都ですらそうなのだ。帝国全土がどんな有様か見るまでもないだろう。なのに、ここにいる皆はどうして、こんなに明るい顔つきをしていられるんだろうか？　皆の顔が光り輝いている。楽しんで生活をしているのだ。そしてその理由に俺は気付いた。その理由は明日に、将来に希望を持っているからだ。その希望の基になっているのが『門』だ。ならば、それはどんな理由があろうとも捨

てはいけない。『門』を捨てるということは、惨めな苦痛に耐えるだけの生活に後戻りすることになってしまうからだ」

料理長が「そうだ！」と叫ぶと、皆はディアボの言葉を聞こうと耳を傾けはじめた。

「既に豊かな生活を送っている者には、きっとそのことは分からないのだ。何を隠そう、この俺とてその一人だった。帝都を追われ、命からがらこの街に隠れ住み、この街に守られて初めて気付かされたのだ。そう、彼らは大事なことが分かってない。既に満たされている連中は、簡単にこれは一時的なことだと口にする。だが、その一時の間に君達がどれほどの苦痛と絶望を味わうことになるかそれを知らないのだ！　もう黙って見ていることは出来ない。見ろ、ニホンの軍が引き揚げようとしただけで怪異が暴れ出した。きっとゾルザル派の仕業だろう。勘違いしてはいけない。これまで手厚く街を守ってきたニホンの軍のことだから、こんなに急ぐのにも相応の訳があるのだろう。君達を見捨てようとしている訳ではないと思いたい。だが、それでも急すぎる。ダメなのだこれでは！」

ディアボの演説は、聴衆の心を捉えて離さなかった。

理性的に見せつつも、実際には感情へと語りかけ、自尊心をくすぐりながら、エゴから発する利己心を巧みに正当化して見せた。

「だから俺は思う。君達は叫ばなくてはならないと。今こそ行動を起こすべきなのだ。『門』を閉じるのは待ってくれ、嫌だ、帰らないで欲しいと叫ぶべきなのだ。これは反逆とか、反抗ではない。

ただ知って欲しいと訴えかけるための行動だ。誰かを傷つけるのではなく、過ちを防ぐための行動だ。聞く耳を持ってない相手に、ほんの少し自分達の方を見て欲しいと訴える必要な行為なのだ！それくらいならば、神々も許されるだろう。もちろん、世界のことも考えなくてはならないだろう。確かに、いつかは『門』を閉めなくてはならない。だがそれは、今でなくても良いはずだ。そう、冬を迎えるのは、冬支度が済んでからなのだ！」

ディアボは『門』を閉めるべき時期を、先延ばしすることを皆に訴えかけた。

実りの秋のあいだに、たっぷりと食べ、蓄え、そして冬ごもりして、春を待つ。そんな原初の冬ごもりのイメージに訴えかけることで、アルヌスの住人が不安を感じる理由を、準備が足りていないからだと語った。

「準備の為にもう少し。もう少しだけ待って欲しい。そう頼むことの、願うことの何が悪だろうか？何が害だろうか？　そんなことはない。そう、我々が起こす行動は正しいのだ。過ちは誰かが止めなければならない。奴隷ですら、主人が間違った行動を起こしたら、それはしない方が良いと諫言する。ならば自由な君達にそれが許されないはずがない。俺の意見は、間違っているだろうか？」

アルヌスの住民達は、自分達の心境や、立場を巧みに代弁する男の言葉に聞き惚れた。

この男ならば、自分達を代表して思いを伝えてくれる。『門』を閉じようと動いているどうしようもない流れを、この人ならば止めてくれるという思いを抱いたのである。

「皆が信じて任せてくれるならば、俺が引き受けよう。君達の意志を代弁する。君達が俺の背中を

支えて後押ししてくれるならば相手が誰だろうと俺が交渉する。どうだろう、任せてくれるか!?」
従業員達は、ディアボに答えた。
「本当にお願いして良いのですか!?」
「でも、私たちのお願いなんて、聞き入れてくれるのかしら？」
「そもそも、交渉に応じてくれるのか？」
ディアボは不安を否定した。
「無論だ。何しろ俺の後ろにはディアボ殿下がついているのだ。ディアボ殿下は帝国の皇子だ。ならばニホン政府も無視は出来まい」
皆は「そうだ」と納得の表情で肯く。そして万雷の拍手が鳴り響き、ディアボはアルヌスで働く者達の代表という立場を手に入れることとなったのである。だが……。
「待つニャ！　その男は嘘をついてるニャ！」
血みどろになりながら、足を引きずって現れたメイアの叫びが皆の熱狂に水を差した。その血みどろの姿に皆は冷や水を浴びせられた心境になり、数名が彼女に駆け寄った。
「ど、どうしたんだ、メイア!?」
傭兵達が膝から崩れたメイアの背中に刺さっていたナイフを引き抜き、止血処置を手際よくしていった。
そんな手当を受けている間も、メイアはディアボを指さして叫んだ。

「みんな聞くニャ！　その男は、嘘つきだニャ。とんでもないことを企んでるニャ」
「何馬鹿なことを言っているんだ」
「そうよ。メトメスさんは信じられる方よ」
ディアボは内心焦りながらも、突然現れて何をいい加減なことを言うのかという態度で、メイアの言葉を一笑に付した。
「でも、レレイさんを、ちゅうごくという国に引き渡して、その代償として別の国の軍隊をこの世界に引き入れようとしてるニャ！　それは権力が欲しいからだニャ！」
「ちゅうごくってなんだ？」
「『門』の向こうにあるニホンとは別の国のことだニャ。その国から来た女達に、ディアボ殿下を名乗っていたヒトは酷い目に遭わされたニャ。レレイさんを引き渡せ、居場所はどこだって手ひどい拷問を受けたニャ。そのヒトも最後には拷問に負けて仕方ないから居場所を教えるって言ってたニャ。今頃レレイさんを隠している場所に向かってるニャ」
「なんだって！」
この言葉にはさすがのディアボも聞き捨てることが出来なかった。そして「どういうことだ、詳しく説明しろ」と迫った。
だがメイアは意地悪そうに微笑み返すと皆に聞こえるように大声で叫んだ。
「どうして慌てるニャ!?　ウチの言葉が一から十まで戯言だと言うなら、何も心配する必要はない

ニャ。聞き流して無視すれば良いだけニャ」
「だが、ディ、ディアボ殿下が拷問を受けたなど、そんな……パナシュ、殿下はどこにいった？」
周囲を探してもメトメスの姿は見えない。ディアボは陥穽に嵌まったような不安にとらわれた。
「メトメスさんは侍従なのに、主がいなくなっても気がつかないなんて変な話ニャ。侍従が主人の動向に気を払ってないなんてあり得るのかニャ？」
メイアに視線を向けられたパナシュのメイド達は、そんなことあり得ないと一様に首を振った。
「そ、そうだよな。それにこのヒト、なんだか侍従って言うわりには偉そうだよな」
「おいおい、なんか話がおかしくなって来たぞ」
皆が、いったいどうなってるんだと戸惑い、疑いを抱き始める。
「そんなことはない。みんな聞いてくれ」
ディアボは懸命に言い訳しようとしたが、急速に信頼感が高まっただけにその失墜の勢いも著しく速い。こうなると何を言っても皆が失望へと至るのを防ぐ手立てはない。
だが料理長が「ちょっと待て」と声を上げた。
「みんな、待てよ。つまりこの方はそれだけ俺達のことを熱心に考えていたってことだろ!?　それにメイアの言ったちゅうごく人の女達。それこそきっとゾルザルの配下だ！　メイア、お前の方こそ騙されてるんだ！　俺達を疑わせてディアボ殿下の信用を失墜させようとしてるんだ」
「そうかニャ？　ゾルザルの配下という割には、随分と流暢にニホンの言葉を操っていたニャ。ウ

チもこの街では古参だニャ。『門』のこちら側では、ニホン語を学ぶ事が出来るのはこのアルヌスくらいだニャ。でもウチは、あんな女達を見たことがないニャ」

「そ、そうかも知れん。だが、ないとも言い切れないだろう」

「きっとディアボ殿下は、レレイさんを箱詰めしたフリしてどこかに隠したニャ。しかもそれはレレイさんを守るためじゃなくて、取引に使うためニャ。それに怒ったちゅうごくの人が、約束が違うってやって来たニャ。なんでも、交換のための軍隊を『門』のすぐ向こうまで連れてきているって言ってたニャ！」

「軍が来ているのか！」

ディアボは、喜色を湛えた表情でメイアに尋ねた。

「ディアボ殿下……今行かないとレレイさんは奪われるニャ。そうなったら、軍隊は手に入らないニャ、それでも良いのかニャ？」

それはメイアの挑発だった。ここでレレイを奪われまいと走り出すことは自分が嘘をついていたことを認めることになるのだ。だが、このまま黙って見過ごすことも彼には出来ない。何故ならディアボにとってはレレイこそが唯一とも言える切り札だったからである。

「く、くそっ！」

レレイと交換で中国からの軍事支援を手に入れて帝位に就く。それがディアボの目論見であった。もちろんそんな簡単に中国が動いてくれるとは思っていない。帝位に就くことも難しいだろう。

彼女の身柄と引き替えに帝国が手に入るなどと思うのは、子供の見る夢のようなものでしかないのだ。だが、レレイの身柄を上手に利用すれば、形勢の定まりつつあるこの現状を覆すことも可能なのだ。

そのための方策は既に練ってある。自分には弁舌の才もある。これからこそがディアボの腕の見せ所と言える。なのに、今レレイの身柄を奪われると、そういった可能性の全てが失われてしまう。それはアルヌスの住民達の支持よりも重要なのである。

「どうかしたのかニャ？」

意地悪そうに、ディアボの顔を覗き込むメイア。

ディアボは、大きく舌打ちすると「行くぞ、パナシュ」と叫び、皆の視線を振り払うように食堂を飛び出した。

ディアボがどう振る舞うか見つめていた皆は、これに驚いた。

この振る舞いこそが、メイアの言葉が正しいことを証明するものだったからである。

「まさか！」

「本当にレレイさんを!?」

レレイの名は帝国でも特別のものとなっているが、このアルヌスではさらに格別の意味がある。組合の創設者にして責任者。自分達の雇い主。組合の今後を定める者でもある。『門』を閉める件で意見は対立してしまったが、それがあったとしてもレレイは大恩ある雇い主なのだ。それを、取

引の具にしようとするなど、彼らにとって到底許せることではない。
そんな男に、自分達は騙されかけた。
皆は唖然とした。衝撃、落胆、呆然……自失を生み出す様々な感情に支配され、身じろぎすることも出来なくなった。
「メトメスさん、どこに行くんですか!!」
誰も彼も動けずにいる中で、唯一料理長だけがディアボの背中を追った。

「つ、つまりは貴方様が、ディアボ様なので？」
すがるように追いついてきた料理長に、ディアボは面倒くさげに答えた。
「そうだ。俺がディアボだ」
「じゃぁ一緒にいたあの方はいったい？」
「あいつが、侍従のメトメスだ。騙したわけではないぞ、ゾルザルに狙われているからな、影武者を立てただけだ」
「そうでしたか……でも、レレイさんを安全なところに送り出すって話はどうなってたんです？」
「それも騙したわけではないぞ。中国に送るよりも、手元に置いておいた方がさらに安全だと思っただけだ。敵を騙すにはまず味方からと言うだろう？」
「やっぱり騙したんじゃないですか!?」

「くどい！　今はそれどころではないぞ。彼女を奪われるのを防がないと」
だがディアボの前に、追いすがってきたヤオの率いる傭兵部隊が立ちはだかった。装備の揃わない雑多な傭兵達を率いるダークエルフの女は、サーベルの鋭い切っ先をディアボへ向けた。
「お待ち賜りたい。御身には拉致監禁の容疑がかかっておられる」
「無礼者！　亜人の有象無象共が、よくぞ我が前に立ちはだかったな!?　俺は帝国皇帝モルトが第二皇子にして、帝国元老院議員だぞ！」
これが帝都なら、いや昔日の帝国ならばこの怒声一つで万人をひれ伏させることが出来たかも知れない。だがここはアルヌスであった。ディアボがどれほど声を張り上げようとも、ヤオや傭兵達は少しも畏怖の態度を見せなかった。
ヤオはそのまま、抜き身の剣をディアボに突きつけると尋ねた。
「そんなこと此の身は既に承知している。だが、そんな地位に何の意味がある？」
「おのれ、下郎！」
「待てっ、待って！」
パナシュが、短剣に手をかけたディアボにしがみついて叫んだ。
「殿下、ここはお下がり下さい。お前達も頼むからここは退いてくれ！　頼む、伏して頼む！」
もちろん、ヤオは退かない。
傭兵達も剣を抜き、周囲を取り囲むように動いていく。その無言の圧力にディアボはますます意

固地になり、短剣を抜こうとして、それを止めようと必死のパナシュとのつかみ合いになった。
ヤオの合図で傭兵達が、いよいよパナシュやディアボを捕らえようと手を伸ばす。
とその時、耳に凛と響く声が一触即発の空気を霧散させた。
「待ちなさぁい！　無理に尋ねなくても、その皇子様はぁレレイの居場所まで案内してくれるわぁ。そうでしょう？」
「ろ、ロゥリィ……聖下」
ロゥリィの登場に、ディアボは観念したように呻くと短剣から手を離した。
「お前がディアボねぇ？　レレイがどこにいるか知ってるならぁ、案内してくれると嬉しいわぁ……」
ズンと地面に食い込むハルバートの石突き。その巨大な斧刃の鋭い輝きを眼前に置かれたディアボは身をのけぞらせた。
「せ、聖下……こ、これにはいろいろと事情がありまして」
「いいのよぉ、分かっているからぁ。権力が欲しかったのよねぇ。どうぞ、頑張りなさぁい」
「へっ……？　あの、ゆ、許していただけるので？」
「許すも許さないもないわぁ……わたしぃ頑張る男は好きだものぉ。一国の皇子と生まれたからには玉座を目指す。それもまた当然のことよねぇ」
「あ、ありがとうございます」

自分のしようとしていることをどこか後ろめたく思っていたディアボは、ロウリィの言葉に救われたように微笑んだ。だが続くロウリィの言葉はやっぱり叱責で、ディアボは再度項垂れることとなる。

「でも王者を目指すならぁ、何をするにしてもぉ品格というものが必要よぉ。下衆な振る舞いはぁ、格を落とすことになるわぁ」

「は、はい。心しておきます」

「で、レレイはぁ丁重に扱っているんでしょうねぇ？」

「も、もちろん、ルルドの娘風情には……いやいや、導師号を有する賢者にして、炎龍討伐の英雄殿にはいささか手狭かと思われますが、彼女に相応しい待遇を心得ました。縛るにしても、私のような男が触らずにこちらに控えるパナシュが丁寧にいたしましたし、閉じ込めておくにしてもそれはそれなりに、それなりに……、それなりに環境には気を遣い……」

「で、どこ？」

「は……その、あの……物置に」

「物置ねぇ……。それがそれなりに気を遣った待遇なのぉ？」

ロウリィはポリと頬を掻いた。

「あ、いや」

さすがのディアボもこれには答えることは出来なかった。とは言えすぐに救出に向かわなければ

ならない。ディアボの案内で、皆はレレイが監禁されている物置へと向かった。
「ここです」
中には、王侯貴族が使うような寝台が置かれていて、ディアボが「それなり」に気を遣ったであろうことは証明された。だが中を覗き込むとそこには、手足を縛られ猿ぐつわをはめられたメトメスが「うう」と唸りながら転がっているだけであった。

＊　＊

狭間陸将は、足早に執務室へ戻ると部下達に状況の報告を求めた。
「街の状況はどうなってる⁉」
「新難民の負傷者は多数、犠牲者もかなりの数に上っています。今のところ救出だけで手一杯で、怪異の掃討まで手を回せません。組合の傭兵達が出動して街の住民達を守っているようですが、新難民まで手が回っていません」
「しかたない。第五戦闘団の待機命令を解除し、負傷者と犠牲者の収容をさせるように。診療施設も開いて負傷者の手当を急がせろ。街の住民達も駐屯地内に収容。全員を避難させる。で……各戦闘団はいつ頃戻る？」
「一番近いところにいる部隊でも、先頭集団がこちらに到着するのにあと三～四時間といったとこ

ろでしょう。全員が戻るのは一日ではおそらく……」
特地のあちこちに散っている隊員達が、一日で戻るのは不可能であると幕僚は語った。
「とにかく、デモ隊との交渉をつづけて時間を稼ごう。市ヶ谷との連絡は回復しそうか？」
「ムリです。回線が完全に断たれています」
「無線もか？」
「電波を通さない構造にしたのが悔やまれます」
狭間は、ドーム内の状況を映し出すモニターの画面に目をやった。
国際ＮＧＯを自称するデモ隊がドーム内に持ち込んだ大型のトラックは、そのフロントバンパーのあるべき部位に太い鉄骨が溶接されていた。攻城槌のように尖端を尖らせ、『門』に体当たりした時の破壊力を増そうとしているのだろう。それだけに『門』を破壊すると宣言した連中の本気度が窺われた。
狭間は、こんなことをする国際ＮＧＯを民間人とは思っていない。
その代表者の劉と名乗った男は確かに民間人かあるいは文官だろうが、その周囲にいるのは軍人然として背筋の伸びた男なのだ。しかも、交渉の仕方もリベラル型デモ隊のよくする一方的な要求を暴力的に突きつけるものでなく、交渉という形態の戦闘を強かに展開しようとする狡賢さをもっている。
おそらくは、どこかの国の工作機関か、それに類するものに所属しているのだ。

「いざとなったら連中を力尽くで排除してでも、隊員達を脱出させなければならん。『脱兎』発令時の序列を今のうちに徹底させてくれ。弾薬や燃料、それと薬品、食糧等は残しておくように」
「はい」
今の段階で、『門』の破壊を開始されたら、全員の帰還は困難である。
特地派遣部隊の大部分が異世界に取り残される。そうなれば再び『門』が開かれるまで、残った人員だけで物資をやりくりしながら生き延びなければならないのだ。
「いっそのこと、退去準備命令を撤回してゾルザル派の殲滅を優先させてはどうでしょう？　そうすれば帝国との講和条約が発効します。残余の部隊だけでもアルヌスの保持は可能です」
「いや、それは順番が逆だ。今はマニュアルに基づいた行動をとるように」
緊急時の対応マニュアルは、閣議で決定されたものでありそのまま総理大臣の命令としての効力を持っている。派遣部隊の長でしかない狭間が覆して良い性質の物ではないのだ。その完全な実行は不可能で、残された部隊のことを考えなくてはならないのも確かなのだが、そのために軍事行動を優先させるのは本末転倒だ。
「そろそろ時間だな」
狭間は、再び執務室を出るとドーム内に入り『門』のど真ん中に陣取る七四式戦車の前に出た。
そこには既に、国際ＮＧＯの代表を名乗る男が待ち構えていた。男は狭間が前に立つと、再び恫喝という名の交渉を再開した。

「我々の要求を受け容れて貰えるのでしょうか？」
ＮＧＯ側は男の言葉に合わせて二台の大型トラックのエンジンをかけ、チキンランに挑む暴走族のようにエンジンを吹き鳴らさせた。しかし狭間は一考もせず「断る」と返した。
「好きにすればいい。君達が何を企てようとも、我々はそれを防ぐだけである。その際は銃砲火器による対応もあり得ることは覚悟しておいてほしい」
狭間の合図で、七四式戦車の主砲が旋回し、トラックを指向した。
並び立つ隊員達も六四小銃の槓桿を引いて、銃剣のついた銃口を国際ＮＧＯを名乗る集団へと向ける。だが国際ＮＧＯ側も怯んだ様子は見せなかった。
男は「強がりは言わない方がいいですよ」とほくそ笑んで、続けた。
「君達は非武装の民間人に銃口を向け引き金をひくことなど出来ないでしょう。君達が良い人であることは皆が知っています。言っておきますがこれは褒め言葉ではありません。必要な時はどんな悪逆も非道も平然と出来るようでなければ、国家の威信も安全も守ることは出来ないからです。国家は愛されるより、恐れられる存在でなければならない。だが君達の国は決してそういう存在ではありません」
「何が言いたい？　我々は舐められているとでも言うのかね？」
「そうとも言えます。無論、それは君達の責任ではないとは思いますがね」
狭間には返す言葉がなかった。国のあり方は政治が決すべき領域であり、制服組たる自分が決す

べき性質のことではないからである。
「では我々の要求を述べます。特地への立ち入りを認めて下さい。現在、日本国政府に『門』と特地の管理を国連に譲るよう要求していますが、その交渉の進展具合によっては我々はこの『門』を破壊しなければなりません。そうなれば君達は異世界の漂流者となります。そうなる前に、君達が特地を我々に明け渡せば、君達は漂流者となることはありません。これは、よい交換条件だと思いますが、どう思いますか？」
「内容が不当な上に、不愉快だ。我々がそのような脅しに屈するとでも思っているのか？　我々は君達の特地への立ち入りを、絶対に拒む」
「ならば、日本に戻れなくなりますよ。万が一そうなったとしても、それは日本政府や、君達の責任で我々のせいではありません」
「それもまた覚悟の上だ。そもそも我々は君達の要求に対して返答できる立場にはない。その手の交渉は政府としたまえ」
「それは違います。孫子はこう言っています。『将、能ありて君、御せざる者は勝つ』。君も日本の将軍として独自の裁量権があるはずです。我々の特地への立ち入りを認めてしまいなさい。そうすれば我々も『門』までは破壊しません」
狭間は、劉の言葉を聞きながら違和感を覚えた。
自衛隊に成り代わってこの連中が武器を持たずに特地に入ったとして、そのまま特地を保持でき

るとは思わないからだ。この交渉は、いったい何を目的としているのか？　それが疑問に思えたのである。

狭間は、確かめるように問いかけた。

「政府の方針は、『門』を一旦閉鎖することにある。我々に成り代わって君達が特地に入ったとしても、我々は容赦なく『門』を閉じるだろう。今度は君達が異世界の放浪者となるぞ」

「もちろん『門』の閉鎖はなしです。特地に関わる今後の方針は、国連の常任理事国が決定することになりますから」

「なるほど、君達のあとに青いベレーをつけた軍が君の祖国から派遣されて来るということか。だが日本政府はきっと拒絶するぞ。それに『門』の存在があちこちに様々な異変を起こしつつあることは、すでに報されているはずだが……その異変が災害を引き起こしても良いと考えているのかね？」

「多くの国が、その情報に疑問を持っています。我々のこの平和的なデモが世界の主要な国々の一般市民で構成されているのはそのためです」

「平和的なデモとは片腹痛い。しかも、主要国の市民が集まっていると言う割に、この場には君達しかいないではないか？　欧米人はどこだ？」

「この場での交渉は、私に任されています。欧米の市民達は、ドームの外で警官隊との交渉を担当しています」

「君は、どこの国の工作機関の所属だ？」
「我々はＮＧＯです。どこかの特定の国家の利益のために活動しているわけではありません」
「それを信じろと？」
言論、結社、集会の自由のない中国では、共産党や政府の影響下にない団体は存在しない。内外のあらゆる団体が、政府の管理下にあってその指令を受ける立場にある。だからこそヨーロッパや北米に、尖閣諸島は中国領土だと主張して宣伝活動を行う華僑団体が現れたりするし、普段は善良な市民であるかのごとく振る舞っている在外中国人が、いざとなると諜報・工作活動を始めたりするのである。
近年、国際結婚した自衛官や、防衛産業に勤める職員の配偶者が工作員だったりする例が報告されるが、それらも最初から工作員として日本に来たわけではない。日本でごく普通に生活をしており、たまたま情報活動に便利な環境を得たがために、諜報活動をしろという指令が、本国に残っている家族や一族を人質にして送りつけられて来るのである。
狭間は、この男が様々な国の意思を装いながらも、一国の意思しか語っていないと感じた。
「なるほど、そういうことか。状況は理解した。では要求に対する最終的な回答を述べよう。我々はどのような状況にあっても政府の命令に従い、任務を遂行するだろう」
「勇敢ですね。ですが日本政府は君達ほど腰が据わってませんよ。君達を犠牲にすることに耐えられるでしょうか？」

「日本政府との連絡は君達のおかげで絶たれている。ならば我々は連絡を絶たれる前に受けた命令を引き続き続行するしかない」
「あくまでも任務に固執するのですか？」
「当然だ。それがシビリアンコントロールというものだ」
劉が狭間に身を寄せて言った。
「君達は、異世界の漂流者となる道を自ら選ぶと言うのですか？」
「それもまた覚悟の上だ」
狭間が突き放すと、代表の男は言った。
「てっきり、力ずくで日本に戻ると言い出すかと思いました……」
「それも選択肢の一つとして準備している」
「それをしてくれるとありがたいですね。六四天安門事件をここで君達が再現してくれることになりますから。国際社会はさぞ日本を批判するでしょう。銃剣と戦車で平和的なデモを踏みつぶした……きっといい絵が撮れます。何かにつけて人権後進国と批判される我が国ですが、これからは日本も同じことをやったと言い返せるようになります」
代表に立った男は、傍らでハンディカメラを手にしている男を指し示した。
「日本に帰る唯一の道を君達に塞がれて、押し通るしかなかったと主張すれば良い。これは緊急避難だと認められるだろう」

「それが可能ならですけれどね。日本のマスコミは君達の行動をどう報道するでしょう？　武力でデモ隊を虐殺して流血の惨事を引き起こしたあげく、『門』を壊した愚か者と批判するでしょうね」

この言葉には狭間も「なんだって!?」と心外そうに顔色を変えた。

「君の部下にも家族達がいますが、ご近所や周囲からさぞ白い目で見られるでしょうね」

狭間は、下唇を噛んだ。

残念ながら、日本のマスコミがそんなことするはずがないとは到底言えなかったからだ。

権力や社会の動向を監視し、警鐘を鳴らす木鐸の役目を果たすことがジャーナリズムの存在意義であるとマスコミ人は主張する。確かに徹頭徹尾、傍観者に徹し、自分達も含めて全てを批判する報道姿勢を貫くならば、社会にとって有益であると認めることも出来る。だが近年のマスコミは、何が良いことで何が悪いことかを自分勝手に判断してそれを大衆に押し付けようとしている。『批判』の範囲を超え、政治的な意図を含ませた偏向報道を行って、自分に都合が良いように国民の意識を誘導しようとする姿をあからさまにし始めたのだ。

このことは自分の意に反する主張をする立候補予定者の出自や近親者について、差別的とも言える報道を平然で行ったことから証明されるだろう。

総理となった者の権力行使の仕方ではなく、漢字の読み間違いや、余暇時間の過ごし方といった嗜好、人格の部分を批判し攻撃したこともその証左となる。

つまり、マスコミがしているのは報道ではなく自分にとって都合の良いムードを作り上げるため

の宣伝で、そしてその行動は不思議なことに日本を敵視し、批判する海外勢力や機関の活動とベクトルを一致させているのである。

日本におけるメディア掌握作戦の指揮をした劉は、自ら成し遂げた業績を誇るような表情で、狭間に告げた。

「言っておきますが、隊員の家族を悲しませるのは我々ではありません。君達です。君達の行動が全てを決めるのです」

今日では、マスメディアがどのような報道をするか、それをコントロールする力を持っている者が状況の主導権を有すると言っても過言ではない。これに抗する術が日本側にないことを知る狭間は窮した。だが窮したなりに反撃の糸口を探して言葉を返した。

「真実はいずれ報じられる。それに国際社会だって……」

「道義だの、正義だのは、金の力でどうにでもなるものです。例えば中国の反体制派を表彰するノーベル平和賞の授賞式にどのくらいの国が欠席しましたか？　正義とやらも皆が受け入れ尊重するものではないという証明です。正義などという言葉が通用する国の方が、この地球上では少ないのです。この日本はその中でも数少ない例外だと思った方が良いですね」

すると狭間は、深々と嘆息すると居住まいを正した。

「なるほど……理解した」

「おおっ、理解してくれましたか？」

「ああ、お前達が、交渉するように見せかけて時間稼ぎをしているということを理解した」
「……なんです？」
「お前達の要求はどれも、我々には実行不可能なものばかりだ。つまり、お前達は我々になにもして欲しくないというのが本音だろう」
「確かにそうです。ですが、気がつくのが少しばかり遅かったようですね」
ふふんとほくそ笑んだ劉は、狭間に後ろを見ろと顎をしゃくった。
すると、女達が縛り上げられたレレイを人質にして立っていた。
「あれは、保護した観光客？」
「そうです。君達の人の良さに乗じるのは心が痛みますが、誰にでも温情を与えるのは愚かしさ以外の何物でもないということを学ぶよい機会が与えられたと思うべきですね」
狭間の部下達は、レレイを人質にとられて、遠巻きにすることしか出来ないでいた。
あとを追うようにして、ヤオ率いる傭兵達やアルヌスの住民達もやって来たが、自衛官達と同様にレレイに刃物を突きつけられてしまうと、やはり遠巻きに見ていることしか出来ない。
「レレイさんを放せ！」
盛んに声を上げるアルヌスの住民達を尻目に、劉は要求した。
「さあ、彼女達を通す道をあけなさい。そうすれば人質に危害を加えないと約束します」
「絶対に通すな！　彼女の入手が連中の狙いだ。傷つけられるはずがない！」

狭間は隊員達に道をあけるなと厳命し、劉を振り返った。
「なるほど……全ては彼女を手に入れるためだった、というわけか」
「我々は一つの目的を果たすためだけに、一つの行動を起こすほど横着ではありません。正確にはこれもまた、目的の一つだったということですね」
劉は満足そうに微笑んだ。

＊　＊

「銀座上空まであと十分。支度をして下さい」
操縦士の合図で伊丹達は支度を始めた。
何度も何度もハーネスに不具合がないかをチェックする伊丹。その過剰な用心深さに彼の不安と押し隠した恐怖が表れていた。
伊丹と富田はそれぞれにテュカと栗林を抱きかかえてヘリコプターのドアを開き、ステップに脚をかけて腰掛けた。
眼下に広がる都市の夜景は、上空に広がる星空にどこか似ていて、宇宙空間に漂っているかのような錯覚すら感じられる。
「こ、こえええええ。さぶいいいいいい！」

機内に吹き込んで来る外気に、身体を震わせる伊丹。
栗林はその大声に迷惑そうな視線を向けた。自分の恐怖や不安感まで、伊丹の声によって掻き立てられるからである。
「た、隊長、ベテランだったんじゃないんですか！」
栗林は話が違うと伊丹を責めた。
ベテランなら、ベテランらしく初心者を安心させてくれるのが本当だろうと栗林は叫ぶ。
「馬〜鹿、怖さを知らない奴がいい空挺になれるか。恐いからこそ安全に気を配るんだろ!?」
すると突然、伊丹の膝の上で「くくくく」とテュカが身を震わせて笑い始めた。身体がぴったりと密着していることもあり、彼女には伊丹が震えていることも、強がりを言っていることもお見通しなのだ。
「な、なんだよ！」
「ううん、頼り甲斐があるわねって思ったの」
何がきっかけだったのか、栗林が突然思い出したように叫ぶ。
「そ、そうだ！　大変なことを忘れてた！　隊長、富田の奴、死亡フラグをおっ立てたんですよ」
「なんだって!?」
「この男、戦争が終わったら、ボーゼスと結婚するって言い放ったんですよ」
こんな時になるまで、どうしてそんな大切なことを黙ってたんだと伊丹は怒鳴った。

「まずいぞ。それは非常によくない！　これからかなり危ない大馬鹿をやろうとしているのに、どうすりゃいいんだ！」
「そうですよ。死亡フラグを立てた奴とどうしてあたし、こんなことしてるの⁉」
栗林は自分まで巻き込まれてしまうと再び不安を叫び、震えだした。
その瞬間、パイロットの河合が後ろを向いて「降下どうぞ！」と叫んだ。
「隊長！　いち、にぃ、さん、ＥＸＩＴで行きますよ」
富田の声に、伊丹は「ちょっと待て」と返す。
栗林も「止めて！　待って！　死亡フラグ立てたままスカイダイビングなんかすな！」ときゃーきゃー叫んでいる。
だがテュカが「大丈夫よシノ！　そのふらぐ、あたしが引き取るから」と告げ、富田はテュカにウィンクしながら合図した。
「いち、ＥＸＩＴ！」
「えっ⁉」
「あたし、この戦争が終わったらヨウジと結婚する！」
そんなことを叫びながら大空に向かって飛び出すテュカに引っ張られ、伊丹が我に返った時には空中に浮かんでいるという状態であった。
「おいテュカ！　今、さらっと何を言った⁉　ってぎゃあああああああああああああ」

そう叫びつつも、降下姿勢をとり速度を和らげるためのドローグだけはなんとか投げる。
すぐ後ろでは、二人を追うようにして富田が飛び出して来ていた。
富田は栗林の首に腕を回して顎をかるく上げるようにさせながら、空中で数回転するという曲芸を見せながら東京上空の夜景を飛んでいた。

時速二百キロで正面からぶつかる暴風は、空気に粘り気があるとすら思わせる勢いで、広げた腕、指の間を滑り抜けていく。
伊丹はすぐに開傘しようとリップコードのある腰に手を伸ばした。ぐいっと引っ張ると、背中からパラシュートが開く気配がして、ガクッと全身に衝撃を感じる。
だが、伊丹はすぐに違和感を覚えた。肌に感じる風の勢いが、無茶苦茶に速いのである。少しは減速したかも知れないが、これは落下傘がきちんと開いた時の降下速度ではない。
「減速してない!?」
夜間降下の難しさに、肉眼で落下傘がきちんと開いているかの確認が難しいことがあげられる。夜間暗視鏡を用いて確認する方法もあるにはあるが、そんな余裕はなく伊丹は反射的に主傘をカットウェイすることを選んでいた。
主傘が外れて、再び自由落下が始まる。
テュカを後ろから抱きしめた姿勢で、後ろ向きに回転しながら降下していく伊丹。

「くそおおおおおおおおおっ！　何千分の一って確率で起こることがどうして今なんだよ！　死亡フラグか、これが死亡フラグって奴なのか！」

伊丹は叫んだが、猛烈な風音に自分の声すら聞こえない。

ジェットコースターに乗った時のような内臓を突き上げる落下感がないのは、座った姿勢ではないからだろう。あるいは全身に浴びる空気抵抗がそうさせるのか。

「のうわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

周囲に見えるのは空を覆う星の海と、そして大地を彩る都市の灯り。

回転してしまっているせいか、どちらが天で、どちらが大地かを見失いそうになる。

落ちているというよりは最早飛んでいる。そんな錯覚すら覚えていた。

自らの感覚を信じられなくなった伊丹は、手首の高度計に目を向けた。高度計の針は時計の秒針とほぼ同じ速度で回転している。

「やばい！」

とにかくリザーブパラシュートのリップコードを引かなくてはならない。

だがその前に、何としても安定した降下姿勢を取り戻さないとならなかった。

現状で、開傘を強行すれば、身体にコードが絡みつく可能性が著しく高い。それはすなわち死を意味しているのだ。

「九千、八千、七千……」

だいたい五秒で千フィートを降下するという速さだった。
数秒ごとに耳が痛くなる。唾を飲み込んで耳抜きした直後に耳が痛くなる。おかげで常に耳抜きをし続けなくてはならない。
「やばいかも！」
このままではＡＡＤ（自動開傘装置）が働いてしまう。
伊丹は必死に両手を広げ、膝を折ってアーチと呼ばれる降下の姿勢を維持しつづけた。
腹を突き出すエビぞりの姿勢だ。さらに腕を懸命に開いて、顎をあげる。すると途端に、世界の回転がやんだ。
「五千、四千！」
伊丹はリップコードをぐいっと肘まで引く。
たちまち背負ったコンテナからリザーブのパラシュートがずりずりと引きずり出される感触がして、その直後、がつーんと吊り上げられる衝撃が身体を縛るハーネスを通じて響いた。
「ぐはっ！」
天を仰ぐと、自分の肩から伸びるコードと長方形のラムエアパラシュートが天を覆っている。
落下速度がゆるやかになった。今度は不自然な旋回もしてない。なんとか無事に開傘には成功したようだった。
「きゃっほううううう！　これよ、これ、これなのよ！」

不意に響き渡るテュカの歓喜の声。
「自殺するつもりかテュカ!?　死亡フラグなんか立てるから！　パラシュートが危なかったじゃないか！　そもそもなんであんな事を言った!?」
「恥ずかしいから二度は言わな～い！　死んでないからいいじゃない！」
「ったく。現在の高度は……」と手首の高度計を見る。すると針の先は三千フィートを切っていた。あと十秒も遅れたら地面に激突していたかと思うとぞっとする。発言の真意をテュカに問い詰めるのは後回しにして、伊丹はパラシュートを操るトグルをゆっくりと引いた。
巨大なブランコで振りまわされるような遠心力を感じつつ、ゆっくりとした旋回が始まった。
微妙な操作に自信が持てない伊丹は、テュカに「誘導頼むわ」と叫んだ。
先ほどまできゃーきゃーと嬉しそうに叫んでいたテュカも、「任せて！　おやすい御用よ！」と伊丹には理解できない言葉をまるで歌うように唱え始める。
するとどこからともなく流れて来た微風が、伊丹達を銀座の真ん中に作られた『門』を覆う通称、銀座ドームへと近づけていく。
右に流れれば右側から、左に流れ過ぎれば左からの風が吹く。
ゴーグルを外して、暗視鏡をかけてみると、銀座の街では機動隊が放水し、国際ＮＧＯのデモ隊が投石で対抗するという騒乱の情景が広がっていた。
誰も上空から近づく伊丹達には気がついてないようだ。

「あの丸い屋根が見えるか？　あのてっぺんに降りるぞ。そこに緊急時用の出入り口があるんだ」
微妙な操作だけど出来るか？　と問いかけても返事がない。
「聞こえている？　お～い！」
テュカは風を操っての空中散歩に夢中になっている。両手をトグルから放せない伊丹は、エルフ娘の笹穂耳を軽く噛ることにした。するとテュカは「ひゃん！」と首をすくめた。
「な、ななな、なに!?」
「あの丸い屋根のてっぺんだ。頼むぞ」
「も、もちろん任せておいて！」
するとエルフの精霊魔法使いが人差し指をたてて、空気を巻くように指を振った。
傘型のパラシュートと違い、ラムエアパラシュートは、前方に前進しながら高度を落としていく仕組みだ。そのために進路の変更が出来て、上達すると着地する場所も自在に選ぶことも出来る。だが着地の際は下に向けた落下ベクトルだけでなく、前進する速度も落とさなくてはならない。そのためのブレーキを働かせることをフレアと呼ぶ。ただ、やっかいなことはブレーキがかかるのはパラシュートであって、ブランコのようにぶら下がっている伊丹達ではないことだ。
伊丹は速度を落とすために、両方のトグルをゆっくりと、そして大きく引いた。
だが、これがまた余計なことであった。
折角テュカが苦心して風を操っているのに、パラシュートを減速させたため高度が高いままに急

停止してしまったのである。
「あ、あれ？」
おかげで、伊丹とテュカの二人は勢い余ってブランコのように前に向けて大きく振られた。
パラシュートはゆっくりであっても高度を下げ続けているから、振り子運動を終えて戻って来る時には地面に……この場合はドームの天井に激突することになる。
「あわわわわわ、こぼっ！　うげっ！」
伊丹はテュカを抱きかかえた姿で、尻餅落下をすることとなってしまった。
慌てたのはテュカだ。自分の体重分の衝撃もそっくり引き受けた伊丹を心配するが、ハーネスが繋がっている限り身動きがとれない。
「風よ！」
咄嗟の判断で、テュカは風を呼んだ。おかげで再び舞い上がったパラシュートに引きずられて、二人ともドームの外壁を滑り落ちそうになる。
伊丹は大急ぎで予備傘をカットウェイすると、外壁の出っ張りに手を伸ばした。
「きゃっ！」
「危ない」
どうにかぶら下がって、滑落を防ぐことには成功する。
切り離されたパラシュートは、風に飛ばされて近くのデパートまで飛んで外壁にひっかかった。

心拍数が跳ね上がり、寿命が相当の年数分縮んだことを、伊丹はこの時はっきりと感じた。
「これが死亡フラグの効能って奴か。早くなんとかせんと死んでしまう……テュカ、大丈夫か？」
テュカも「死ぬかと思った～」などと言いながら、二人分の体重を支えている伊丹の腕を眩しそうに見つめていた。
「おかげで寿命が縮んだぞ！」
伊丹はふんっと気合いを入れると両腕の力だけで身体を持ち上げた。
「寿命を分けてあげられるものなら、五百年分くらい分けてあげるわ」
「無理を言うなよ」
「冗談じゃなくて、本気で五百年ぐらいは長生きして欲しいんだけど」
「なんちゅう無茶振りを。そんな方法があったら、きっと世界中がひっくりかえるぞ」
そんな会話を交わしながら伊丹は、ドームの天頂までよじ登りテュカとの接続を切り離す。自由に動けるようになった二人は、てきぱきと仕事を始めた。
「テュカ。荷物からロープを出してくれ」
「どうするの？」
「中にロープを使って忍び込む」
嘉納の秘書から受け取った散弾銃を取り出し、弾丸を二発装填。テュカの差し出したロープの端を、ハッチの金具にカラビナを用いて固定して、そのままパラシュートのハーネスに八の字鎧に通す。

そして天頂のハッチを開くと、頭を突っ込んで中の様子を覗き込んだ。
ドームの中では、たくさんの人間が『門』を取り巻いていた。そしてその後ろには二台トラックがいてエンジンが唸りを上げている。ビルの解体現場のような破壊音まで轟いていた。
「なにが起きているの？」
「まずい事態になってる」
テュカの問いに伊丹が血相を変えて振り返った時である。
「どいてどいてどいて！」
パラシュート降下してきた富田と栗林のペアが、ドームの天頂部に真っ直ぐ突き進んで来た。
「な、何やってるんだ馬鹿！」
怒鳴りつけた伊丹だが、これは明らかに伊丹の方に非がある。半球形の構造物に降下しようと思えば狭い天頂部付近にしかその場所はないからだ。二人がまだ降りてきていないと思ったら、出来る限り場所を空けて待機しているべきだったのである。
まずい、衝突する！　そう思った伊丹は躊躇うことなくテュカを押しのけてかばった。その瞬間脚を上げて着地姿勢をとっていた栗林のつま先が伊丹の股間に直撃し、吹き飛ばされた伊丹はそのままハッチの内部へと転落してしまったのである。

＊　＊

「さて、彼女達を通して下さい！」
劉は、自衛官の人垣に阻まれて動けないでいる鈴達をこちらに通せと、狭間に告げた。だが狭間は即座に拒否した。
「断る。犯罪者との交渉には応じない」
「人質がいます。彼女を失ったらどうなりますか？　それこそ二度と、『門』を開くことは出来なくなりますよ。今まで、君達が強気の態度をとり続けることが出来たのも、彼女がいたからなのでしょう？」
隊内でも防秘の扱いを受け、一部の高級幹部しか知らないはずの情報が、簡単に漏洩している事実に、狭間は暗憺（あんたん）たる思いになっていた。
「なるほど。お前達がこんな大がかりなことを仕掛けてきたのは、彼女の身柄を手に入れる為だったか」
「目的の一つだと言ったはずです」
「だがそれならば、お前達は彼女を傷つけることなど出来ない。彼女は人質になり得ないぞ」
「そう思いますか？」
「もちろんだ。彼女に力を貸して欲しいと頼むのに、当の本人を傷つけて、怒らせてどうする？」
「確かにそうでしょう。ですが我々は彼女の外見に価値を見いだしているわけではありません。指

の一本や、脚の一本を切り取ったところで痛痒を感じることはありませんよ」
「そんなことをしたら、彼女は金輪際お前達の頼みを聞いてはくれないぞ！」
「確かにすぐには無理でしょう。ですが人間の意思なんてものは、置かれた環境によってどうにでもなる存在ですよ。薬物を用いる方法もありますしね」
「なんだと？　彼女を洗脳するつもりか？」
「方法はいくらでもあると申し上げただけです。皇帝であった男ですら、自らを共産主義者だと告白させることが可能になるんですよ。人間の意思なんてものはどうにでもなります」
こうした交渉では、より酷薄で残虐に振る舞える側が有利である。
何をするにしても手段を選び、他人の苦痛をあたかも自分の物のように感じる側は、どうしても不利な立場になってしまうのだ。
「狙撃手が配置につきました」
幕僚が続けた、「あの女を狙撃させましょう」という進言に狭間は「待て」と命じた。
レレイに危害を加える可能性を持つのは一人ではない。全員を一度に無力化できるのでなければ意味がないのだ。
「さあ、どうしますか？　言っておきますが、我々は君達の時間稼ぎにつき合うつもりはありませんよ」
劉の合図で、鈴はレレイの心臓付近にナイフの切っ先をあてた。

狭間は、「道をあけてやれ」と部下に命じるしかなかった。
悠然と、『門』を越えて仲間の元へと戻っていく鈴達。その勝ち誇ったような嘲笑を浴びた自衛官達は、腹の底から沸き上がる憤慨を押し殺すことが出来ず、歯がみしていた。
「どうだ、悔しいか!?」
鈴芳華は優越感を味わうためか、だめ押しにレレイを抱え胸に刃物を押し当てた姿で振り返った。目隠しされ、猿ぐつわをかけられ、腕と脚を縛られたレレイは意識があるのかないのか、人形のようにぐったりとしていた。その頬を鈴はぴたぴたとナイフの峰で叩き、この娘の、そして自衛官達の生殺与奪権を握るのは自分達であることを誇示した。
「くそっ！」
憤りのあまり飛び出そうとする自衛官もいた。だが、同僚達に「まて！」「我慢しろ！」とたちまち取り押さえられる。
その姿を見た鈴芳華はこれ以上ないと言う喜びの表情で、声高らかに嗤った。
「あはははははははははははは！　どうだ、悔しいだろう。あ～、気分がいい」
劉も勝ち誇ってほくそ笑むと、後方に止められていたトラックの運転手に合図した。
ドーム内に凄まじい轟音が上がる。エンジンを空ぶかしして、ドーム内に反響する騒音は耳を塞ぎたくなるほどだ。
「まさか、お前達！」

「そうです。君達には異世界の放浪者となってもらいます」
劉の合図で、二台の大型トラックが『門』を形作る外壁の一角目掛けて突進する。そこは構造的に脆弱な部分とされていた。
「あぶない！」
『門』の中にいた隊員達は慌てて後退した。
金属のひしゃげる轟音と共に、『門』の外壁に二台のトラックが突き刺さる。その衝撃によって『門』の外壁の一部が崩れ、大きく揺れた。
「下がれ、下がれ！」
頭上に降り注ぐ漆喰や瓦礫から逃れるため、狭間は部下達を『門』から離れさせる。彼の握りしめた拳は、敵にされるがままの状況を、指を咥えて見ているしかない屈辱に震えていた。
かなりの衝撃にもかかわらず『門』が形状を保っているのを見た劉は、呉少校を振り返る。
「意外と丈夫だな。一気に壊れると思ったのだが」
「もう一回か二回ぶつかれば、崩れるでしょう」
運転手がアクセルを踏むとエンジンが轟音を上げ、トラックが壁から離れた。
バリバリと歪んだボディが引き剥がされる音や、ライトのカバーが割れる音と共に、部品や破片が落下したりする。大型トラックの激突した『門』の外壁は大きく窪んで、その周囲には細かく砕かれた漆喰や、石のかけらが散乱していた。

充分に加速できるだけの距離を開いて、ギヤを入れ替える運転手。
それを見た幕僚達は、狭間に向かって叫んだ。
「陸将！　こうなれば力ずくで止めるしかありません。発砲の許可を！」
「いやダメだ！　民間人に発砲したなどと報道されたら我が国が苦境に陥る」
「こいつらが民間人のはずがないでしょう!?」
「我々がどう思うかじゃなくて、見ている側がどう思うかなんだ！　我々に民間人虐殺者の汚名を着せたくてうずうずしている連中が大勢いるんだぞ！　耐えろ、耐えるんだ！」
「くそっ！」
怒りの余り銃をトラックに向けようとする隊員達と、それを止める幹部達。それを尻目に、劉は前進を合図した。
トラックは短距離でどれほど加速できるかを競うかのような勢いで、もう一度『門』の外壁目掛けて激突した。
再度の衝撃で、『門』の天井や外壁から、漆喰や石の欠片がバラバラと雨のように降り注いだ。だがそれでもどうにか外形は保たれていた。
「惜しい。もう一度だ！」
トラックがもう一度下がっていく。大型トラックに装備されているバック時の警報音「バックします、ピーピー」という音声が死刑執行の秒読みのように皆の耳に響いた。

だが、「お前達、何を打ち合わせにないことをしている!?」という声が、第三者の介入を告げた。

劉は面倒くさそうに振り返り、呉は部下達を指示して、外からドームへ入ってこようとしている第三勢力の前に立ち塞がらせた。

だが、その第三勢力は、劉達も無視できないような凶器を携行しており、その銃口をそろえてドーム内へと押し入ってきた。

カメラを向けていれば撃つのを躊躇すると分かっている自衛官と違い、素手の民間人だろうと誰だろうと撃ちかねない第三勢力の登場は、劉の部下達を狼狽させた。

「劉局長。君のしていることは事前協議になかったことばかりだ」

銃を手に入ってきたのは、覆面をした男達だった。代表者だけが素顔を晒している。

おそらくは、アメリカやイギリス、フランスの工作員連合部隊であろうと思われた。

「ジェイキンズ。君達こそ打ち合わせにない行動をとられては困ります。ここは我々の受け持ちだったはずです。勝手に入って貰っては困ります」

「我々としても役割の分担は尊重したい。だが、君達の行動は、黙って見過ごすことが出来る範囲を既に超えた。我々の目的は日本政府に圧力をかけて譲歩を強いることだったはずだ。なのにどうしてこんな直接的な行動を起こす?」

「自衛隊が我々の要求に応えようとしないからです。我々は断固とした態度を示したに過ぎません」

「それにしては、やることが度を過ぎているように見える。実際に『門』を壊してしまっては交渉もへったくれもなくなるだろう？」
「これも交渉戦術の一つです。日本に嫌われる役をやりたくないからと、我々に全てを押しつけた癖に、やり方には文句を言うつもりですか？」
「しらばっくれるのはよせ。お前達が強攻策に打って出たのは『玉璧』なる娘を入手したからだろう？」
劉は一瞬気圧された表情となったがすぐに精神的に立て直し、一歩前に出た。
「お前達の方こそ、我々からそれを横取りするつもりでいたくせに」
「なんだ気がついていたのか？」
「世界の憲兵を気取るアメリカ人が、主導権を我々にゆずったままでいると考える方がどうかしているんですよ。何か裏があると勘ぐって当然です」
「あのー、つまりどういうことです？　誰か分かります？」
狭間の幕僚が、状況説明を誰かに求め、狭間がため息と共に語り聞かせた。
「要するに、アメリカは当初から中国の目論見に気付いていたが、騙されていたフリをしていた。中国が彼女を確保したら横からかっさらうつもりでな」
すると劉は正解だと大きく肯いた。
「そういうことです。そして我々もまた、アメリカが最初からそのつもりでいることを知っていま

した」

劉は隠し持っていた拳銃を抜くと、ジェイキンズに向けた。

呉達もその合図で隠し持っていた武器を取り出す。工作員同士が互いに銃口を突きつけ合う、緊迫した沈黙がドーム内に立ち込めた。

だが、その直後……。

「うわあああああああああああああああああああああああああっ！」

空中ブランコのような勢いで何かが降って来て、レレイを抱いた鈴を後ろから、特地側に並ぶ自衛官の頭上を飛び越えるほどの勢いで突き飛ばしたのである。

＊　＊

時間は少しばかり戻って二十三時頃。

夜の赤坂を、黒塗りのベンツが街に煌めくネオン光をボディで反射させながら、車列の間をすり抜け高級ホテルの玄関前に停まった。

後部座席はスモークガラスで見えないようにされているが、ホテルの窓からそれを見下ろす駒門には、ターゲットの存在をはっきりと思い浮かべることが出来た。

彼の隣には、証拠の映像を残すべくカメラを構えた課員がシャッターを切っている。

ホテルのドアマンがドアを開き、紳士然とした七十代の男性と、ドレスをまとった十代中盤とおぼしき美貌の少女が降り立つ。不自然なまでに近い距離で並び歩く二人はどう見てもおじいさんと孫という関係には見えない。

「くそぉ！　あの子、トューレン・ホゥナだ！」

突然、カメラを覗き込んでいた課員が叫び、皆が一斉に注目した。

「トューレン……誰それ？」

「トューレン・ホゥナ。東アジアのスーパースターですよ。確か十六歳になったばかり！」

課員は少女が最近出演したドラマから好きな食べ物に至るまで、文字にしたら十数行にもなる詳しいプロフィールをそらんじて見せた。

「もしかして……お前、ファンなのか？」

「ファンクラブ会員ナンバー一桁の０００３号です」

警察手帳の如くファンクラブの会員証を見せる課員を見て、駒門達は慰めて良いやら、呆れて良いやらどっちともつかない、ある種情けない気持ちになった。

「なぁ、お前。そのホゥナとかがお前が言うほど凄いスターなら、どうしてお前なんかがファンクラブの０００３番なんていう若い数字をとれるんだ」

「へっ？　そりゃ、僕がいち早く彼女の魅力に気付いたからですよ。見た瞬間にピピンて来たんですよね……」

会員ナンバー０００３番はしばらくの間、彼女の姿を初めて見た瞬間、いかに素晴らしいときめきを体験したか、そして彼女の歌がどれほど素晴らしいかを語った。
「だがな……お前は彼女のことをどこで知った？　彼女の母国でか？」
「いいえ」
「つまりだ。お前が彼女を知る以前の段階で、彼女のファンは二人しかいなかったってことだな？」
「え！　違いますよ。そんな訳ないじゃないですか……でも、いや、あれ？」
「お前、テレビの宣伝に騙されているよ」
駒門は、ホウナなんて名前、聞いたことがないと告げた。
「きっと彼女の歌とかの販売権がテレビ局にあるんだろ？　だからテレビは彼女のことを盛んに宣伝する。で、お前みたいなミーハーな奴が、それに騙されて彼女を有名なスターだと錯覚するってわけだ」
「ええっ!?」
「でなきゃ、どうしてスターが枕営業なんてするんだ？」
会員ナンバー０００３は、この世の終わりを報されたとでも言うべき表情で固まった。さすがに気の毒に思ってか駒門もかける言葉がないようである。
別の課員達も、ナンバー０００３のことを気の毒そうにちらちらと見た。
「か、課長。全員、配置に付きましたけど……どうします？」

「れ、令状はとれたか？」
「はい、すぐに届きます。でも、いいんですか？　肥田木社長は森田総理との関係も深いので、圧力がかかって来るかも知れませんよ」
「永田町の方の心配はいらない。今夜のウチに大きな動きがあるからな」
「何かご存知なんですか？」
「内緒だ。よし、お前達、頃合いまで待機するぞ」
駒門の指示に、彼の部下達は緊張を解きそれぞれにコーヒーに手を伸ばしたり、携帯電話に入るテレビの映像に目を落としたりし始めた。だが、打ち拉がれたようにずっとうつむいていた会員ナンバー０００３が、突然立ち上がって叫びはじめた。
「トューレンが枕営業だなんて許せるかよ！　今すぐにでも踏み込んで！」
「だ、誰かその馬鹿を止めろ！」
課員達は総出でナンバー０００３を止めにかかった。この男、格技に秀でているらしく、六人がかりでなければ止めることは難しかった。床に抑え込まれ、動けなくなったナンバー０００３は、今度は情けない声で泣き始めた。
「泣くな！　うっとうしい！」
「だって。僕は、僕は……」
「分かった、分かった。お前に彼奴の取り調べを任せてやるから」

「くうううう、こんちくしょう。吐かせてやる、きっと吐かせてやる。ホウナちゃんとどんなことをしたのか、全部吐かせてやるっ！　彼女に枕営業を強制した組織の実態を、必ず暴き立ててやるぞ!!」

暗い情念の籠もった呪いの言葉を呟く課員を見てられないとばかりに顔を背けた駒門は、「そうしろそうしろ」と呟きながら椅子に身体を埋め、懐のたばこに手を伸ばした。

たばこをくゆらせ、天井に霞にも似た煙を漂わせる。

やがて時計の針が深夜の二時に近づいた頃、ドアがノックされた。

入ってきたのは、彼の部下である。足早に入ってきた部下は、駒門を見つけると茶色の封筒を鞄から取り出して差し出した。

「これが逮捕令状です。それとこちらは部屋のカードキー。午前二時きっかりに、都内全十二カ所で、組織の名簿にあった顧客を一斉に確保します」

駒門は、封筒の中身を確認するとニヤリと相好を崩した。

「よし。では令状を執行するとしよう。とは言っても、容疑者はお偉い人だ。みな、丁重に振る舞うように心がけろよ」

絨毯が敷き詰められたホテルの廊下を足早にスーツ姿の男達が、群れを為して進む。

その光景は異様なものであり、他の客達は驚いて脇に避けてこの集団をやり過ごそうとした。その先頭のど真ん中をステッキを付きながら悠然と歩むのが駒門であった。

男達はドアの前に立つと、周囲を固めた。
課員の一人が、駒門の合図を受けてカードキーを素早くスリットに差し入れる。
「時間です」
駒門が肯くと、ドアは抵抗もなく開いた。
警視庁の公安部の警官達は流れるようにして部屋の中に入っていった。
カメラを持った駒門の部下が、現場の様子を証拠として残すために、フラッシュを焚きながらシャッターを連写する。
「き、貴様ら！　何者だ!?」
駒門は令状を指し示しながらその執行を通告した。
「肥田木社長。貴方を児童福祉法違反の疑いで逮捕させていただきます。ちなみに、こちらのお嬢さんは十六歳とかで……現行犯もつきますね」
ベッド上の光景が次々と撮影されていく。それはベッドに裸体の老人が仰向けになって、その腰に跨がった少女が腰を揺すっているというものであった。
床頭台には、ミネラルウォーターのペットボトルとED薬の錠剤が転がっている。さらには白い粉末とストローも確認。
しかし少女は、この期に及んでもまだ腰を振り続けていた。
というより、周りで起きている異変には気づいていないようである。焦点の合わない視線が宙を

漂っているところを見ると、ある種の薬物を服用してるのだろう。
駒門は、ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、少女の裸体に舐めるような視線を巡らせた。
「なんだガキのくせにもう立派な女やってるじゃねぇか。ちっ、これが初めての仕事じゃねぇってことか……」
そして肥田木に死神のごとき笑みを向ける。
「テレビ局の社長ともなると、随分とまあ良い思いが出来るようじゃないか？　だけど少しばかりおいたが過ぎちまったようだな。言っておくけどウチの取り調べは過酷だよ。特に若い奴がこの子のファンとかでな、怒りが頂点に達してる。あんたのテレビ局でやってる刑事ドラマなんかじゃ比較にならないくらい締め上げてくれるぜきっと……」
「べ、べ、弁護士を呼べ」
肥田木がようやく口にしたセリフがこれであった。
「当然の権利だから、もちろんそこのところは尊重するぜ。けどな、弁護士とやらの手続きが済むまでの間は、あんたの身柄は俺たち公安のもんだ。よっく弁えておけよ」
「こ、こ、公安か貴様ら!?　俺は森田と親しいんだ。お前達なんぞ……」
「その森田総理も、あと少しで『前』という言葉をつけて呼ばれるようになりますよ」
「な、なんだと!?」
「とにかく、ゆっくりとお話を聞かせて貰います。某国との関わりのこととかもじっくりと、あん

たが音を上げるまで締め上げてやる。もちろん可視化の為に全部、撮影する必要があるよな？　お前が年端もいかない少女相手に何をしてきたか、カメラに向けてじっくり語ってもらうぜ。法廷で傍聴人が赤面するような内容の奴をな」

女性課員が呼ばれ、タオルを被せられた少女が別室へと連れ去られていく。

それに続いて、肥田木も服に袖を通すことも許されずに、バスローブ一枚を纏っただけの姿で、手錠と腰縄をかけられた姿のまま、ホテルの裏口から連行されていったのである。

駒門は一仕事を終えた部下達に告げた。

「さあて、紳士淑女共。我が国に巣くったウジ虫を徹底的に駆除するぞ。ペイバックタイムだ!!」

＊　＊

首相公邸では、森田が深夜の来訪者達と向かい合っていた。

他人の家を訪問するには既に非常識な時間帯である。だが森田はまだ床には入っておらず、閣僚達がそろってやってきて緊急の用件だと告げられれば断るわけにもいかない。

「応接間で待たせて下さい」と秘書に告げて、客を迎え入れることにしたのである。

「こんな時間に、いったい何ですか皆さん？」

とは言え、さすがに森田の服装はスーツというわけにはいかなかった。寝間着の上にカーディガ

ンという出で立ちの森田に、隙なくスーツを着込んだ閣僚達の代表である嘉納が口を開いた。
「こんな時間に悪かったな……だが急いでたんだ」
「総理ですからね。緊急の用件があれば仕方のないことで。で、何かあったのですか？」
「実は、お前さんに、総理の椅子から降りて貰おうと思ってな」
嘉納は前置きもおかずにさらっと告げた。森田は何かの聞き間違いと思ったのか、眼鏡のズレを直して問い返した。
「い、今、なんておっしゃいました？」
嘉納は同じ言葉を繰り返すつもりはなかった。その代わりに「こいつを見ろ」と辞職願の束を突きつけた。森田と官房長官の木檜を除いた閣僚全員が辞意を表明していた。
「何故ですか!?」
森田は机を叩いた。
「『門』の件だ。お前は判断を誤った。『門』の管理を、国連の常任理事国の管理下に置くなどということは断じて認められんからな」
「しかし皆さんがお辞めになっても、別の大臣を任命すれば済むことですよ」
「引き受ける者がいるならな。俺達全員がここにいるという意味を少しばかり考えて見ろ」
森田は派閥均衡策をとって、保守党の各派閥からまんべんなく閣僚を任命していた。その全員がここに揃っているということは、それぞれの派閥がこの事態を了承しているということなのだ。

「だ、誰が首相になったって、すぐに任期は終わりますよ。衆院選までの選挙管理内閣になるだけです。そんな損な役回りを誰がやるって言うんですか？」
「俺がやるさ。この国をお前に滅茶滅茶にされるより遥かにマシだからな」
「私は、どうすればよかったって言うんですか!?」
「部下を信じれば良かったんだ。現場で頑張っている連中を見棄てて『門』の件で譲歩を決めるとはお前はいったい何様だ!?　レレイ嬢の確保も含めて、現場を信じて待てばよかった。お前にはそれが出来なかった。しかもそのあげくに国の安全保障すら、他国に委ねようとした！」
「し、しかし、それ以外にどんな方法が……失敗したら誰が責任をとることになると思ってるんですか!?」
「だから、お前をその責任から解放してやるのさ。俺が全てを引き継いでやる……」
「嫌だ。総理は私だ、私が総理大臣なんだ！」
森田は立ち上がると、机の上の受話器をとり自分の属する派閥の領袖にかけた。
深夜なのに数度の呼び出し音で相手が出る。まるで電話の前で待機していたかのような早さだった。だが追い詰められていた森田はそれを不思議と思うことが出来なかった。
「あ、高津さん、大変です。嘉納が、嘉納達が私に総理を辞めろと言って……！」
『森田君。君はこの国の総理として相応しくない』
「はい!?」

『じたばたせず潔く、総理の座から身を退きたまえ。自ら降りるなら体裁も整うぞ』
「で、でも、選挙は？」
『誰がやっても負けるなら、少しの間、嘉納にでもやらせてやるさ。国を危うくする君の決断は、支持できないからね』
電話を切った森田は、震える手で次の電話番号をおした。
「い、岩原幹事長！」
『我々は既に嘉納さんを支持することに決めています。申し訳ありませんが、貴方を支持する勢力は国内のどこにもいませんよ。前総理』
「ああ、あああ……」
森田は受話器を投げ捨てると頭を抱えた。

＊　＊

「えっ、なんて言ったの!?　うちの社長が逮捕された!?　うそ！」
電源を落とされ、真っ暗になった銀座でカメラマンを引っ張り回しながら、立て籠もりを続ける国際ＮＧＯの取材を続ける菜々美に、同僚から突然の報せが舞い込んだ。
「児童買春!?　無茶苦茶ヤバイじゃない。そんな容疑じゃ言い訳が全然できないわよ」

これが脱税だの汚職の類なら、まだ法廷で争いようがある。
弁護士を大量に動員して証人に鼻薬をかがせ、枝葉末節をついて黒を白と言いくるめる法廷戦術を展開すればいい。だが買春、しかも未成年と同衾しているところを逮捕されたとなれば、言い逃れが出来ない。迂闊な法廷戦術を展開すると、被害者にさらなる精神的な危害を加える行為だと批判されかねず、社会的に死んだも同然となってしまうからである。
「相手がトゥーレン・ホウナだって!?　うわっあの子って十六歳だから、ヤバすぎでしょう！」
『しかも、社長だけじゃないんだ。売春組織の顧客名簿に報道局長の名前もあったとかで、参考人としてたった今、連れて行かれたよ……』
「え、報道局長も!?」
『捜査の対象は財界はおろか、与野党の政治家にまで広がっていて、有力政治家は国策捜査だって騒いでるよ！　公安部の青年将校化だって叫んでる！』
それはテレビ局のスタッフが全員呆然となる報せであった。
下手をするとこれはテレビ局のトップが総入れ替えになりかねない事態であった。そうなれば、これまでと局の方針ががらっと変わる可能性もある。上の顔色を見ながら仕事をしていた連中は、これからどんな事態になっていくのか分からずに思考停止してしまったのだ。
だが、菜々美はニヤとほくそ笑んだ。
「チャンスよ！　今すぐ、今まで送った銀座の絵をニュースに突っ込んで……許可？　誰の許可？

警察にひっぱられた人にそんな権限有るわけないでしょう!?　今は、現場の判断でいくしかないのよ！」

『でも、こんな時間に誰も見る人なんていないよ。今は夜の二十七時だぜ』

「いいの！　とにかくテレビで報道したってことが大切なんだから！　きっと深夜枠のアニメを見ている人達が目にするわよ。それに一回流せば、そのまんま朝の情報番組に突っ込んでいけるわ！朝のお茶の間に直撃できるわ！」

深夜アニメを予約録画している人が大激怒するようなことを、菜々美は易々と言い放った。

『でも後で責任問題になったら』

「あたしに無理強いされたって言えば良いでしょ！　文句を言う人には、報道局長が逮捕されてぺらぺら喋っているけど、逃げなくて大丈夫かって囁いてあげて！」

菜々美はカメラマンを振り返った。

「砂川君、一蓮托生だからね！　酷い目に遭ったらごめんね。見返りはたいしたことしてあげられないけど、出来る限り要望には応えるから勘弁してね！」

「んな約束はいらねぇよ、菜々美！　俺だって報道マンの端くれだぜ。だから一本、エロいのを撮らせるってのはどう？」

カメラマンは菜々美の肢体に舐めるようにレンズを近づけた。

「ちょっとぉ！　それって言うこととやってることが違ってない!?」

菜々美はカメラのレンズを軽く叩いた。カメラの接眼レンズがカメラマンの顔面にぶち当たって、「ぐはっ」という呻き声が上がる。カメラマンが尻餅をついたのだ。

「さぁ、行くから立って！　そしてこの場所の、三百六十度全景を一旦映して！　今、日本で起きている事実をありのままに伝えるのよ！　何も足さない、何も削らない。意見もつけない。ただ見聞きしたことをそのままに伝えるの。事の善悪、正否は見た人が判断するわ。私たちはそのための材料を提供するの。視聴者は、それを材料にして好きなように議論すればいいのよ。それが、あたしの報道のあり方よ！」

菜々美は「いくわよ」と声をかけると、カメラマンを引き連れて銀座駐屯地へ向かって突き進んでいったのである。

09

「ううっ！　し、死ぬ！　死ぬ！　死ぬ！」

伊丹は、『門』の漆喰や瓦礫が転がる間で、股間を押さえながら盛大にのたうち回っていた。

「だ、大丈夫ですか！　隊長！」

するすると懸垂降下して来た富田と栗林、そしてテュカの三人は、周囲の状況に目もくれずのた

うち回る伊丹へと駆け寄った。周囲を取り囲む各国の工作員達は、唖然というか呆然とした面持ちで、事態を見守るばかりであった。

武器を突きつけ合う殺すか殺されるかという張り詰めた空気が突然の乱入者によって霧散してしまったことに、当事者達は順応しきれなかったのである。

「な、何てことするのよシノ！　これが大丈夫なわけないでしょ!?」

テュカは伊丹を心配して駆け寄ると、その背中を支えるようにして身体を起こさせた。

「た、頼むテュカ。揺すらないでくれ。まだ痛い」

自分の行為の重大さを理解している栗林は、その罪の重さに耐えかねてか「い、言っておきますけど、突然前に出て来る隊長が悪いんですからね」と責任の回避に走った。

だがその態度は、テュカの逆鱗に触れた。

「じょ、冗談じゃないわよ！　使えなくなったらどうするのよ」

「いいじゃない、誰が困るのよ!?」

「あたしが困るのよ！」

「じゃあどうすればよかったのよ!?」

テュカは栗林の胸部を指さして「蹴ったりなんかしないで正面からぶつかればよかったのよ！　そんだけ分厚いクッションを自前で持ってるんだから、こんなことにはならなかったはずよ！」と言い放った。

「た、隊長なんかに抱きつけって言うの!?」
言い争う二人の傍らでは、富田が「落とせ、落とせ、落とすんだ」と、脂汗を流して悶絶している伊丹の腰を一生懸命に叩いている。
「な、何をしているんだお前達？」
事態を見守る観衆のなかで、我に返るのが一番早かったのが狭間であった。乱入者の正体を知っていたことが、彼をいち早く現実に立ち戻らせたのだ。
「あ、陸将！」
報告しようと立ち上がる富田。だが、劉の部下を呼ぶ鋭い声がそれを遮った。
「鈴！　鈴！　何をしている!?　早く目を覚ませ！」
振り返って見ればレレイを人質として抱えていた鈴は、吹き飛ばされた時に頭でも撃ったのか目を回して伸びていた。
そのため、ウォルフ達によって抵抗することも出来ずに取り押さえられた。
「よっしゃ、捕虜だ捕虜！」
レレイもアルヌスの住民達によって取り戻され、その身柄は料理長によって確保された。
それを見た狭間は安心したように、劉とジェイキンズに告げる。
「どうやら、形勢は逆転したようだ。君達が欲している彼女は我々の手に戻ったぞ」
「くそっ！　その娘をこっちに渡せ！」

だがジェイキンズの銃口が、劉を牽制した。
「今更抵抗して何の意味がある。お前達は失敗したんだ！　さあ、諦めて降伏しろ！」
「誰が降伏なんてするか！　だいたいアメリカは、日本が『門』の権益を独占することを許すのか!?」
「我が国は日本とは同盟関係にある。求める物がそこにあることが確認できたのだ。ならば正式な外交交渉をもって引き渡しを要求すればいい。我々は元から『玉璧』とやらが日本の手を離れて、お前達が入手した時にだけ、武力行使をするつもりだったのだ。さあ、武器を捨てろ！」
劉は呉と視線をチラと合わせた。
アメリカの工作員部隊と自衛隊。一度に二つの敵を相手にしては勝てない。
しかも人質も奪い返されてしまった。素手の相手に発砲することを躊躇う自衛隊も、劉達が武装しているなら遠慮なく攻撃するだろう。万が一戦闘が始まれば、ドームの中央に七四式戦車を置いている自衛隊に敵うはずがないのだ。
「劉局長!?」
「ざ、残念だ」
劉は、ジェイキンズや狭間を睨みつけると銃を地面において手を上げた。
「局長、我々は、生きて捕らわれるわけにはいきません」
「分かっている、そのための用意は出来ているな？」

だが、またしても状況に介入する声がそれを止めた。
「ダメだ！　降伏の必要などない！」
特地側から突然あがる悲鳴。
いったいどこの誰だという思いで皆は振り返った。
すると今度は、料理長とディアボがレレイに包丁を突きつけていたのである。

「こうなれば、もう誰でも良い。誰か俺を皇帝にしろ！　その代わり傀儡でもなんでもやってやる！　どうだ、そこのニホンの将軍！　俺を使ってみようとは思わんか⁉　ピニャよりうまくやってやるぞ。帝国をニホンの属国にしてやる。どうだ、他に誰でもいい。俺を使ってみようと思う奴はいないか！」
切羽詰まっているのか、ディアボはそんなことを叫んだ。
パナシュもこれには顔色を変えてディアボを窘めた。
「殿下！　情けないっ！　ご自身が何をおっしゃっているのかお分かりか⁉」
だがディアボは、それがどうしたと開き直った。
「分かってる。俺は分かっているぞパナシュ。だが、このままでは俺は何者にもなれぬのだ！　ならば、どんなに無様であろうとも俺は世に出たい。それがどんな形になろうとも、ディアボ……誰それ？　と後の世の者に言われるくらいなら、顔を顰められた方がまだマシなのだ！」

「ですが、それでは帝国が」
「それがどうした！　俺にとっては俺こそが全てだ。俺のいない世界など、あっても無意味だ。俺を不当に扱い、俺を認めない世界など滅んでしまえばいい！　さあ、俺を使おうとする奴はいないか。今ならなんでもしてやるぞ」
「で、殿下！」
パナシュは、崩れるように膝をついた。最早、自分では説得できないことを思い知ったのだ。
「その魂魄の強さ！　気に入ったわぁ、ディアボ！」
だが、そんなディアボを肯定する声が投げかけられた。
「誰だ、この俺を使おうというのは？」
ディアボは、自分を使おうという声の主を探した。
「ここよぉ」
姿を現したのはロウリィであった。ハルバートを片手に人垣を割って前に出てくる彼女に皆の視線が集まる。
「ろ、ロゥリィ・マーキュリー……聖下」
さすがのディアボも、絶句した。基本的に皇帝とか政治から距離を置いている亜神からお前を皇帝にしてやると言われるとは思わなかったからである。
「勘違いしないでねぇ。わたしぃがお前に与えるのは機会だけよぉ」

「き、機会とおっしゃるか？」
「そう……前からこのアルヌスの『政』をする人間が欲しかったのよぉ。お前はこのアルヌスでアルヌスに住む人間の傀儡としてその意を汲んだ『政』をするのぉ。お前が何をするかはぁ、皆で決めるわぁ。この地が発展し豊かになった暁にはぁ、皇帝の如き豪奢な生活をさせてあげましょう……でも、もし失敗したりしたらぁ」
ロウリィはディアボの首にハルバートを当てた。
「とりあえず四年と区切って任せるわぁ。それで良いようならぁ、さらに四年。皆がお前に任せる限り更新しましょう。やってみようと思う？」
「ですが、この地はニホンのものとなるはず。そもそもこの地をどうやって発展させればいいのか。資金は？　人材は？」
「やり方は、その娘が知っているわよぉ」
ロウリィは料理長が抱えるレレイを指さした。
「そ、そういえば、この地に開拓民を募り、このアルヌスのような街をいくつも造っていくという話をしていたな……」
料理長は「そんなこと出来るはずがない！」と叫んだ。
だがディアボは「煩い！　黙れ。やるのはお前ではない。お前の物差しでものを見るな！」と料理長を制すると、再び考え込んだ。

ディアボも、レレイの計画を検討に値すると認めていたのだ。
「きっと苦労するでしょうねぇ。嫌だったらやらなくていいのよぉ」
「確かに。だが、しかし……」
迷うディアボにパナシュが囁いた。
「殿下、やりましょう。こんなところで不可能なことを望んで身を滅ぼすより遥かにマシです。聖下の下さった試練を乗り越えて、地に落ちた名誉を回復しましょう。うまくやれば栄達もまた可能なのですよ」
「しかし、皆が俺を認めてくれるのか？」
ディアボは周囲で自分を取り囲むアルヌスの住人達を見渡した。
「そうねぇ。一度、皆を騙したのだからぁ、きっと誰もお前を信じてないわぁ。その状態から皆の信頼を得るのはさぞ大変でしょう。けどぉ、このまま消えていくくらいなら、死んだ方がマシなんでしょぉ？　なら、やれるはずよぉ」
「そ、そうだ。確かにその通りだ」
ディアボはぐびりと唾を飲み下して肯いた。
ロウリィはディアボの首に、ハルバートの刃を突きつけたまま語りかけた。
「お前は、これまで蔑んできた亜人や、貧しい者の下僕としてその傀儡となって『政』に携わるのよぉ。『門』を再度ひらくことが出来てぇ、この地はニホンの領地となるけれどぉ、皆がお前を認

めるならぁ……確か『チジ』とかいったわねぇ？」
ロゥリィは狭間に視線を送って確認を求め、狭間は肯いた。
「チジというこのアルヌスを仕切る執政官となることが認められるでしょう……」
ディアボは、「チジというのは、要するに地方長官のような職だな。うまくすれば、ニホンの政界に進出する足がかりにもなるか……ならばやろう。是非、俺にやらせてほしい」と肯いた。
ここで露と消えていくよりは、将来に雄飛するための足がかりにしようと決めたのである。

＊　＊

「砂川君、こっちこっち！」
菜々美はカメラマンを連れて、国際ＮＧＯが占拠する銀座駐屯地内へ潜入すると取材を開始した。
銀座駐屯地の敷地内で取材していて気がついたのは、国際色豊かな国際ＮＧＯのメンバー達は、とりあえず銀座駐屯地を占拠したものの、その後をどうするかという方針をもってないということである。
「誰に聞けば分かります？」
「知らないよ。運営部の誰かが知っているだろ？」
そんな答えが返ってくるばかりであった。

銀座駐屯地を占拠するという予定のない行動に戸惑っている者も少なくない。その様子を見ていた菜々美は、これはお祭り騒ぎに疲れたら霧散していくなと思った。実際、警察に対して激しく抵抗するものの、その背後では人目を避けるようにして離れて行く者も少なくないのだ。

「運営部の人たちにインタヴューしたいんですけど、どこにいます？」

銀座事件の外国人犠牲者への補償を求めるプラカードを掲げる黒人男性に声をかけてみると、

「ああ。特地のニホン軍と交渉するためにドームの中にいるよ。でも、近づかない方がいい。特地のニホン軍は、こちら側と違ってすぐに撃ってくるっていうからね……」という答えが返って来た。

自衛隊がすぐに撃ってくるという話を皆が信じているのか、ドームの近くには誰もいないのだ。だがそこにこそ、このデモの核心があると思った菜々美は、危険を承知でドームに近づいてみることにした。

＊　＊

「さて、こっちは決まったわよぉ」

一連の出来事を見ていた狭間は、ホッと胸をなで下ろすと、「こういう事になったが、君たちはどうする？」と劉に問いかけた。

「ば、ば、馬鹿な！　ディアボ、お前は騙されている。その娘をこっちによこせ。そうすればお前

を本当の皇帝にしてやるぞ」
パナシュの通訳を受けたディアボは言い返した。
「最早その言葉は信用できない。俺が皇帝になるには、多くの軍事力が必要だが、お前達はそれを持って来なかった。しかも、お前達は『門』を破壊しようとすらした。俺は、聖下の言に従ってこのアルヌスに住まう者の傀儡になることに決めた。この地の地方長官になるだろう。その方がよっぽど現実的だ」
「くそっ」
全ての手立てを失った劉は、呉少校を振り返った。
「こうなれば……少校、分かっているな？」
「はい。我々は捕虜になるわけにはいきません」
これだけのことをしておいて、生きて捕らえられてしまえば、本国は外交上の苦境に陥る。それを防ぐために工作員は逃げるか死ぬしかない。とは言え自決は最後の手段。幸いにして自分達は取り囲まれているわけではない。ドームから逃げることも不可能ではないのだ。
そう思って呉少校は、部下に総員退却の合図となるサインを送った。
彼の部下達は、攻撃手榴弾や発煙手榴弾を抜くと一斉に転がした。
ドーム内で始まった戦闘の映像は、長時間電車に揺られ通勤する人々が、家で身支度や食事を始

める頃合いにテレビに流され、寝ぼけ眼でテレビをつけた者の眼気を一気に引き剥がすこととなった。

「な、なんだ!?」

ふくれあがる煙幕の白い煙、飛び交う銃弾と、炸裂音。

アクション映画と見まがうばかりの映像によって、お茶の間のサラリーマンは、箸を咥えた姿でしばし凍り付いた。

「いま、銀座駐屯地のドーム内で、武装勢力と自衛隊との激しい戦闘が始まりました！」

煙幕の中で銃を撃ちまくっている劉達の姿は、砂川のカメラによってばっちりと映されていた。

菜々美は、砂川に武装勢力の持つ武器をアップで撮影させた。

「いったい、銀座で何が起きているのでしょうか!?　平和的なデモであったはずなのに、どうして参加者達は武器などを持ち出して撃ち合いをしてるのでしょうか!?」

菜々美の叫び声が、スピーカーを破ろうとするほどの音量で流されたのである。

銃弾が飛び交うようになった『門』の下では、テュカと富田と栗林が、伊丹を安全なところに移動させようとしていた。

「隊長、早く立って下さいよ！」

「む、ムリを言うなよ。かなり痛いんだぞ」

だが安全な場所に移動しなければならないことは伊丹も分かるので、発煙手榴弾の煙と、七四式戦車の黒い排気煙とが周囲の視界を覆い尽くそうとしているなかで必死に立ち上がった。

そこに戦車の車体にあたった跳弾や弾丸の破片が伊丹やテュカをかすめる。

「きゃ！」

「伏せろ！　伏せるんだ」

さらに飛んできた銃弾は、壊れかけた『門』を深々と抉った。そして、その衝撃によってこぶし大の石がぽろりと落ちた。

先ほども述べたように、石を積み上げた建物は、構成する部品が適切な場所にあることによって支えられている。従ってその一部が失われただけでも、一気に全部が崩れるおそれがあった。ましてや、『門』はダンプカーの突撃を受けて半壊状態。まだ崩れていないのが不思議なくらいであり、数個の小さな石が要となることで、なんとか支えていたのだ。それが今、落ちた。

つまり、この一撃が最後のとどめとなったのである。

＊　＊

フォルマル伯爵家城館内での戦いも混戦の様相に陥っていた。

ボウロの放ったハリョ族の戦士達は、ただひたすらに、ひたむきに皇帝の寝室たる深奥部へと進

もうとしていた。
　これを防ぐために伯爵家の私兵や戦闘メイド達が立ちはだかり、先へと進む賊を追った。だが仲間を先へと進めるために居残ったハリョの戦士達が、生還を全く考えない戦いぶりを見せたため、血みどろの乱闘が各所で繰り広げられたのである。
「ふぅ……」
　兵士達の遺体が散乱する廊下で、ハリョの戦士が膝を支えるようにして腰を上げた。
「コルメ、ネルヤ……誰でもいい、生き残ってないのか!?」
　彼の呼びかけに応える者はいない。
　見渡せば、彼の仲間達は亜人の戦闘メイド達の死体の間に、挟まれるようにして倒れ伏していた。最後まで戦い続け、力尽きて倒れたのだろう。
「くそっ……ボウロの奴めっ！」
　ウクシはその名を口にするのも汚らわしいと唾棄した。そして壁に身体をあずけながら片足を引きずって進んだ。
「こんな糞みたいな仕事を押しつけやがって、俺達を利用して自分だけ出世する気か、あいつは！」
　帝国の暗部に食い込み、浸透、蚕食していく。
　その方針自体は悪くないと思えた。だが現時点で良い思いをしているのはボウロだけで、自分達はこんな血みどろの、割を食うような働きばかりさせられて来たのである。

「くそったれめ」
罵倒したのは、ボウロに対してだろうか、それともこんな命令に従って命を賭けて戦うことを強いられている自分に対してだろうか。ウクシ自身にもよく分かっていない。とにかく何もかも、全てが気にくわないのだ。
廊下を進むと、向こう側から腕を押さえながらやってくる猫耳メイドと目が合う。
「くそっ、……また敵かよ」
メイド服と呼ぶのが難しいほどにスカートを短くした姿に、ウクシは別のところで会いたかったと思った。「あの脚はいい」と素直にそう思ったのだ。
「ニャ？　こんなところまで入り込んで来たのかニャ？」
予想した以上に館の深奥部に入り込んでいる敵を排除すべく、ペルシアは内股に手を這わせた。だがダークの持ち合わせはもうない。
「しまった、ダークを切らしているニャ」
「なんだ。手ぶらか？　なら俺の前に立ちはだかるな。見逃してやるから、とっとと下がれ」
「そういうわけにはいかないニャ。この館は、ウチらの館ニャんだから」
「お前達のだと？　貴族の館を亜人のメイド風情が自分達のと口にするとは……」
「そうニャ。ここはウチらの城ニャ。それをウチらのと口にして何が悪いニャ？」
そういってペルシアは腰の後ろからするっと短刀を抜いて逆手に構えた。

「クラタさんのくれた刀があるニャ」

日本刀は現在、美術品としてのみ生産が許可されている。だが一部の刀工は、やはり美術品としての価値よりも、あくまでも武器として使用されることを前提にした刀を打ち続けている。

刻まれた銘は「人斬り包丁」。鉈に似て肉厚で、重く、そして頑丈だ。

柄にはパラシュートコードを巻いて、ざらっとした表面を持つ刃は鋭い切れ味を感じさせる妖しい輝きを放っていた。

倉田は営内生活でため込んだ二年分の給料をはたいてこれを買い求め、ペルシアに贈った。

女性に贈るのが短刀かよ？　と思うところである。だが、戦闘メイドたるペルシアにとっては武器は命を預ける道具。良い物を贈られて嬉しくないはずがなく、これに心を打たれた彼女は、倉田を拒み続けることが出来なくなって、最終的に想いを受け容れる決意を固めたのである。

「これは切れるニャよ～」

その洗練された剣刃の輝きを前にして、ウクシも一瞬たじろいだ。

「貴族に仕えてその館を自分達のと言えるのか。だからここのメイド達はこんなに手強いのか。だが、俺も負けるわけにはいかんのだ！」

二人の放つ裂帛（れっぱく）の気合いが戦いの合図となった。

「はぁ、はぁ、はぁ」

皇帝の寝所の最後の門番たる任を与えられたシャンディーは、一人、また一人とやってくるハリョの戦士達を相手に戦いを続けていた。

サーベルを片手に俊敏な動作で、手足を狙う。その動作には派手さはなく、理にかなった最小限の動きで敵の急所を切り刻んでいった。だが、最後の関門を突破しようと遮二無二向かってくる敵は、急所を突き刺されながらもシャンディーに両腕を伸ばしてしがみつき、あるいは噛みつこうと牙を剥いてくる。

自分がここでシャンディーをわずかでも傷つけ苦しめれば、それを足がかりに後続の同志が最終的にシャンディーという壁を突き崩してくれるだろうと信じているかの如き一途さだった。そして、それは事実としてその通りになりつつあった。

すでにスィッセスは、相打ち覚悟の突撃を受け、敵と向かい合って互いに刺しあった姿で果てていた。

残されたシャンディー自身もまた、すでにあちこちに傷を負って血を流している。

「はっ！」

わずかな幸運が彼女を救い、フェイントに続けた刺突が敵の胸に深々と突き刺さる。

剣に相手の体重がかかって持って行かれそうになった。肉の巻き付いた剣は抜くことも難しい。

渾身の力で引き抜いて、勢い余って尻餅をついた。

「はぁ、はぁ、はぁ！」

サーベルの刃はこぼれ、血糊でその切れ味も鈍っている。あちこちの傷が、痛いと言うよりはもはや熱かった。腕の傷のせいか、左手の指がうまく動かせない感じがしていた。敵の剣に毒が塗られていたのかも知れない。

手が震え、脚が震え、声が震えている。

「はぁ、はぁ、はぁ……これじゃあ、もう、お嫁にいけないかも……知れませんね」

体中が傷だらけだ。臥所で素肌を見せる相手にはそれでも良いという奇特な男を探さないといけないかも知れない。

「あ、そうだ」

毒が剣に塗られていたなら放置しておくわけにはいかない。口の届く範囲で傷口から毒を血液もろとも吸い出し、手巾をつかって止血する。

即効性の、致死性の猛毒だったら意味が無いかも知れないが、それでもやらないでいるよりはマシという気持ちで処置していた。

「はぁ……」

改めてあたりに転がっている遺体を数えると十人。いくらなんでも、もう来ないだろうと思いたい。だが、さらに二人ほどの気配を感じていた。

「もう勘弁してよぉ。死にたくないよぉ」

シャンディーは泣き出したい気持ちを抑えながら膝に腕をあて、よいしょと立ち上がる。

そしてサーベルを構えて「何者か!?　ここを皇帝陛下のご寝所と承知の上での狼藉か!?」と誰何した。

問いつつもここに皇帝陛下が居ますよって教えてどうするんだろうと思ったりもする。だが、これこそが宮廷警備の様式美というものなのだ。

シャンディーは丸めたくなる背中をぴんと伸ばして、まっすぐ前を見る。

そして荒い息を強引に抑えつけ余裕に見えるよう微笑むと、もう一度誰何した。

「何者か!?」

すると暗がりから姿を現したのは男と、そして女だった。男は初老でヒト種に見えるがどこか他の種族が混ざっているようである。問題は女である。シャンディーは、目の前に現れた女の顔に見覚えがあった。

「まさか、お前達？」

シャンディーの前に立っていたのは、忘れもしないノッラであった。ノッラの方もシャンディーのことを覚えていたのか「ああ、あんたかい？」といった態度だ。

「もうだめかな」

自分に勝てる要素が見付からない現実に、シャンディーは唇を噛んだ。

＊　＊

古田は、テューレの手を握るとゾルザル軍の陣を抜け出した。
ボルホスが見逃してくれたのである。
「つまり、お前は補助兵などではなく、ゾルザル様の料理人で、この女を連れ出すためにわざわざ陣中に紛れ込んでいたというのだな？」
「ええ、まあ、そういうことになります」
「どうやって？　ここに来るための道のりは厳重に秘匿されていたはずだ」
「ゾルザル様の荷物に紛れ込んでましたので」
どのような道のりを通ろうとも、ゾルザルの荷物は最終的にはゾルザルの元へと届くのだ。
ボルホスも、ゾルザルの料理人だったら宮廷内を歩き回れるし、荷物に紛れ込むぐらいのことは難しくないかと認めた。
その上で、古田の背中に隠れ、恥じらっているテューレをまじまじと見つめた。
「なるほどな……確かにこの女は、お前に特別な感情を抱いているようだな」
だが古田は訝しげに「そうなんですか？」と問い返した。テューレが自分に特別な感情を持っているなどとはついぞ思っていない様子である。
「じゃなかったら、ついさっきまで堂々としていた女傑が、どうして小娘みたいになっちまうんだ？　お前が前に出て来たからだろう。これで惚れられてなくていったい何だと言うんだ？　もしかして

お前は、はっきりと口にされないと女の気持ちが分からない奴か？　それでも男か、あん？」
「い、いや、済みません。本当に全然気がつきませんでして」
何という朴念仁だこいつは、とボルホスはテューレに同情のまなざしを向けた。
「よく分かった。理由はどうあれお前はこの女を助けに来たんだ。それぞれが相手をどう思っているかは後でゆっくりと話し合えばいいだけだ」
「ええ、そうします」
「よし、分かった。ならばお前はその女を連れて逃げろ！　誰にも捕まるなよ！　もし捕まっても決して俺の名を出すなよ！」
「でも……後で大変なことになりません？」
「最初から員数に入ってない補助兵が一人消えたぐらいでどうにかなるものか。この女について責任を問われるのは、ボウロとか言う奴で俺ではないからな」
そして古田はテューレを連れてゾルザルの陣を抜け出したのである。向かう先は、救援ヘリの到着地点であった。
自分の貫頭衣をテューレに譲った古田は、肩に担いだ袋から地図とコンパスを取り出すと周囲の地形を見渡して自分の進むべき方向を割り出した。
「あの山が、３２３、こちらの沼が５３」
「はあ、はあ……フルタさん……どこへ行くの？」

「アルヌスに帰ります。退去の準備命令が出たので、迎えが来ることになっています。あそこまで行けば絶対に大丈夫ですからね。頑張って下さい」
「本当に、わたしを連れてってくれるの？」
テューレは、未だに疑わしそうな目を古田へと向けていた。
まさか誰かが自分を迎えに来て連れ出してくれるなんて。……あり得ない、絶対に起こりえないと否定して来たことだっただけにどうしても信じられないのだ。
「攫っていくぐらいの気概を見せろって言ったのはテューレさんじゃないですか！　俺は貴女を連れて帰りますよ。店を開くので手伝ってくださいよ」
「貴方のお店を？　ムリよわたしなんか……見たでしょう！　わたしは男達と……」
だが古田はそれ以上のことは口にするなとばかりに言葉を被せた。
「とにかくっ！　とにかく付いて来て下さい。あんなとこにいたって、良いことなんてないんだから！　さあ、立って、あの森を抜ければすぐですよ」
「信じられない。信じられない」
「信じろって」
古田はコンパスを仕舞うと、再びテューレの手を取って走り出した。
やがて遠方からエンジン音が聞こえてくる。
森に入り、木々の間を抜けて、再び開かれた場所に出ると、そこにはＵＨ－１Ｊヘリが駐機して

いた。既にエンジンをかけて古田を待っている。
「お、やっと来やがった」
見ると柳田やその部下達もすでに待ち構えている。
「おおい、こっちだ！　早く来い！」
銃を構えて周囲を警戒している隊員達は、古田がようやく姿を現したことに安堵して、こっちだぞと手を振っていた。
「よかった、間に合った」
「何言ってやがる。待たせやがって、だいぶ遅刻だぞ！」
「これでも急いだんですよ。ただ手間取っちゃって」
柳田や隊員達が次々と乗り込んでいく。そして古田もまた乗り込もうとした。
すると機内には先客がいた。大荷物を抱えた中学生くらいにしか見えない少女だ。
「柳田さん。この子は？」
「その娘はニホンに派遣される帝国の大使だ。細かい話は後だ。とっとと乗れ」
「あ、はい」
古田は、振り返るとテューレへと手を伸ばした。
「さ、テューレさん、はやく」
だが、古田の手を掴もうとしたテューレに、突如として機内にいたデリラが飛びかかった。

「この裏切り者！　ここで会ったが百年目だよ！」
デリラの金切り声に続いて鮮血が舞った。
「待て、何すんだデリラ！」
止めようとする古田にデリラは叫んだ。
「フルタの旦那。後生だから堪忍しておくれよ。此奴だけは生かしておけないのさ！　あたいらヴォーリアバニーは此奴のせいで、此奴のせいで！」
古田と柳田が後ろから羽交い締めにして止めたが、デリラの勢いは二人の男をそのまま引きずってしまうほどであった。
一方のテューレは、左肩にナイフをうけたまま、素早く後ずさった。
「止めないかデリラ！」
「ヤナギダの旦那、許しておくれよ。こいつだけは生かしておけないんだ！　この裏切り者のせいであたい達は！」
「今は、そんなことしている場合じゃないだろう！」
デリラを柳田に任せた古田はテューレに走り寄った。
「大丈夫ですか！」
「同情なんてすることないよ、そんな奴！　その女のせいでみんなが苦しんだんだ！　殺されて、奴隷にされて、辱められて、売られて、苦しんで……」

「わたしの話を聞いて！　それは誤解よ。陰謀だったの！」
「何が誤解なのさ！　みんなが苦しんだんだよ！　今更そんなの、誰が信じるかってんだ！　お前が悪い。全てはお前が諸悪の根源なんだ！　あたい達が死ぬような思いをしていた時にぬくぬくと敵の愛玩奴隷なんかに成り下がってた癖に、ちょっと旗向きが変わったら、今度は人の良いフルタの旦那に取り入るつもりかい!?」
柳田に羽交い締めにされたデリラが、身をよじらせながら叫び続けた。
「ヤナギダの旦那！　後生だから、後生だから、こいつを殺させておくれよ！」
だが柳田はデリラの兎耳を鷲づかみにすると自分に顔を向かせ、冷たく言い放った。
「うるさい。言うことを聞かないのなら、ここに捨てて行くぞ！」
「あっ、嫌だ！　嫌だよぉ！」
「だったら言うことを聞け」
柳田はデリラに大人しくヘリに戻るよう命じた。
「早く乗れ」
「お願いだから、捨てないでよぉ」
「だから、乗れって言ってるだろ」
「分かったよ。良い子にしてるからさ。お願いだよ」
これで落ち着いたと見た古田は、テューレを立たせてヘリへと誘った。

「痛いでしょう。今、モルヒネ撃ちますからね。だから肩に刺さったナイフは、いじらないでください。今抜くと出血が大きくなってしまうかもしれませんからね。アルヌスに着いたら医者に診て貰えますから頑張って下さい」

そう言いながら古田は救急セットから使い捨ての注射器を取り出して、テューレの二の腕に刺した。そしてテューレをヘリに乗せようとした。

だが、テューレは古田の顔を見て複雑そうな表情を横に振った。

「いいえ……わたし行かない。行きたくない」

「柳田二尉。そろそろ行きませんと時間が」

急かすパイロットの声に、古田が「ちょっと待って下さい。すぐに乗りますから」と叫ぶ。

だが、テューレは古田の伸ばそうとした手から逃れるように、さっと後ろに下がると、憎々しいとすら思えるほどの笑顔を形作った。

「馬鹿じゃないの貴方。どうして、わたしが貴方なんかと行くと思ったのかしら？　ちょっと優しくされたからって、もしかして誤解しちゃった？　ならごめんなさいね。貴方みたいなの全然趣味じゃないのよ」

気の弱い男ならそれだけで打ち拉がれてしまいそうな冷たい舌鋒であった。だが古田はきつい打擲に堪えるように歯を食いしばり、そして反論した。

「そんなこと分かってますよ。テューレさんはヴォーリアバニーの女王で、帝国の皇太子の愛玩奴

隷。それが食堂の女将なんかになるはずないですよね。でもね、身の程知らずで結構。俺はあんたを攫っていく。そう決めたんだ」

テューレは殴り返されたようにポカンとした表情となった。

「馬鹿。馬鹿な男。ホントに馬鹿な男。どうしてわたしがお前なんかに攫われてやらなきゃならないの？　身の程を知りなさい。さあ、帰りなさい自分の国に。そして、自分に相応しい女をみつけて、ほそぼそと小さな、くだらない店をやっていきなさい」

チラとテューレの目配せが、この場を仕切っているであろう男へと向かった。その視線の意味を誤解無く受け取った柳田は、部下に古田を押さえるように指示した。

背後から押さえ込まれながら「ちょっと待て！　放してくれ！」と叫ぶ古田。

「離陸します！」

「ああ、行ってくれ」

柳田の指示で、離陸を開始するヘリ。見る見るうちに高度を上げて地面が遠ざかった。

テューレは、自分に手を伸ばす古田をじっと見上げていた。

「ダメだ。テューレを置いていくな！」

その古田の声に、テューレは初めて幸せを感じた。古田ならば必ず夢をかなえると信じたからである。もしここで、自分がそれについて行くという決心をすれば、自分も古田の夢の一員となってきっと幸せになれるだろう。いや、なる。それは希望でも予測でもなく確信であった。

そう、絶望と破滅しかないと思われた自分にも、幸せになれる選択肢がある。テューレはそれだけで幸せの絶頂を感じてしまった。それは大逆転の最高のエンディングとも言える。

テューレは、古田の語った夢に自分を登場させた未来を想像した。

壁紙の色に悩む古田に、薄桃色がよいとアドバイスし、人気のなくなった店内で二人で静かに食事をして、一日の仕事に疲れた心と体を互いに癒やし合う。それは夢想でも幻想でもなく、実際の選択肢の先にある確実な未来なのだ。

「すっごく最高の気分！」

こうして、期せずしてテューレの幸せは実現した。

ならばもう、あとはやり残したことをしに行くしかない。もう一つのエンディングもどうなるか確かめておかなければならない。それもまた自分の一つの運命で、決意だからだ。これをしないで幸せばかりを味わってしまっては心残りというものだ。

「痛っ、くっ！」テューレは壮絶な表情で左肩に刺さったナイフを引き抜くと部族の恨みが込められたそれを握りしめ、古田についていったら、どんな幸せを味わえたかを想像しながら全力でゾルザルの下へと走り出したのである。

「ヴィフィータ隊長の姿が見えません！」

「まさか!?」

その報告が届いた時、ピニャは思わず立ち上がってしまった。従卒の少女達が悲痛な悲鳴を上げ、中には泣き出す娘もいた。ヴィフィータは気さくで、些細なことにはこだわらず鷹揚で、そんな彼女を女性騎士達は慕い、熟練兵達はそのおてんばな様をとても可愛がっていたのだ。

だが乱戦の中で白薔薇の軍旗もすでに見えなくなっている。それどころかその中から敵の一群が抜け出てくるようになった。

「あの女が易々とやられるはずがない、確かめさせよ！」

紅い髪をむしるように掴みながら命じたピニャは、ハミルトンに呼びかけた。

「まだか!?」

「まだです」

味方の援軍を待っているのだ。

そう、ゾルザルによるイタリカ襲撃は、最初から想定された状況の一つだった。

いや、逆に襲撃しやすいように状況を整えて見せたと言っても過言ではない。だからこそ、ゾルザルが、戦場を放棄して逃げ出したりしないように、こうして野戦に応じたのである。

だがまだ来ない。健軍が、自衛隊が、そして正統政府軍の主力がまだ戻って来ないのだ。

待てども待てどもまだ来ない。一瞬、寸刻、四半時。わずかな時間が流れていくうちに、兵達の命が、知る者達の命がどんどん失われていくのに。

ピニャは親指の爪を噛んだ。深く噛みすぎて爪の間から血が出たが、それすら苦痛と感じないほ

どの苛立ちを感じていた。
歩兵達を指揮するグレイ・コ・アルドがそんなピニャを心配そうに振り返りながらも、配下の兵達に号令した。
「来るぞ！　小官が合図するまで、動くな！」
混戦から抜け出した敵のケンタウロス隊と騎兵の混成集団が、いよいよピニャの本陣めがけて馬蹄の音を轟かせながら向かって来る。
歩兵達と激突する。グレイの合図で、長槍が一斉に突き上げられ騎馬隊を正面から迎え撃った。剣山のごとく立ち並ぶ長槍を飛び越えようとしたケンタウロスが、歩兵達の頭上にのしかかるように落下する。だが、周囲から突き出された無数の槍を受けてたちまち全身を貫かれて倒れた。それでも馬体の重さと重量が人垣をくずし、そこを隙と見た敵が続々と突入して来る。
迎え撃つために突き出された槍が、馬や、騎兵、そしてケンタウロスへと刺さる。
騎馬の突撃を支えきれず槍がしなり、音を立ててへし折れていった。
人馬の死骸を踏み越えて、さらに騎兵が進んで来る。槍に傷つけられた馬が悶え、暴れ、周囲の歩兵達を巻き込んでいく。馬の蹄に蹴られ、踏まれ押しつぶされた歩兵が絶命の悲鳴を上げた。
激しい肉弾のぶつかり合いによって瞬く間に、死骸の山が築かれた。
その最前列で、遺骸の山を城壁にして戦うグレイ。彼も、身体のあちこちに矢を受けて、体中の各所から血を流していた。

「いまだ、押し返せ！」
剣を振りかざし、指揮をするグレイに勇気づけられて兵達は前へと進む。
その勢いは、敵の襲撃波が途絶えた隙をつき、戦線を五十ユンも押し返したほどであった。それでも不利な形勢をひっくり返すまでにはならない。混戦から抜け出してピニャの本陣へと押し寄せる敵はさらに増えつつあり、戦線で戦い続ける味方の数は、目に見えて分かるほどに減っていた。
グレイ率いる歩兵隊も、前と左右とに敵を迎えて半包囲され、稼いだ五十ユンをたちまち失ってしまった。態勢を立て直すためにさらに後退したいところである。だが彼に下がる後方はない。何故なら彼の背後にはピニャがいたからだ。
グレイは、叩き斬った敵の返り血が、ピニャの頬にかかるほどの距離で戦っているのである。
「殿下。小官はイタリカ城内へそろそろ退かれるよう、お勧めしますぞ」
「ならん。妾はこの場から動かぬ」
「しかし、このままでは！」
「なんとかしてみせよ」
なんとかしろと言われても……予備の戦力があるわけでもなく、罠や秘策が用意してあるわけでもない。グレイに出来ることは兵達を督励して力戦することだけであった。
いや、力戦ならば既にしている。やたらと長く続くこの戦いの中で、兵達は一人残らず戦い続け、体力も気力も尽き果てつつある。奮闘しようにもその力が出ないところまで既に来ていたのである。

だが……。

「らららららっ！」

風のように戻ってきた騎馬隊が喊声を発しながら、グレイと戦う敵の後背を痛撃した。

出撃していった時の半数にまでその数を減じていたが、千切れかけた白薔薇の隊旗が先頭に掲げられて翻っている。

「白薔薇の旗！　ヴィフィータ隊長です！」

「やはり、生きてたか！」

「誤報だったんですね!?」

従卒の少女達が喜びの声をあげた。

兵士達までもがその名を叫んだ時、ボーゼスの黄薔薇隊も戻ってきた。

彼女たちが戻ってきたのは危機に陥ったピニャの本陣を救うためであった。しかしそれは、最前線で戦い続ける兵達を見捨てるにも等しい行動である。辛うじて維持されていた戦線は、その支柱となっていた彼女達の離脱によって瞬く間に崩壊したのである。

ヘルムは、手を打って叫んだ。

「よしっ、勝った！」

度重なる突撃の波に、堤防が決壊するがごとく、ついにピニャ率いる正統政府軍の戦線が音を立

て崩壊を始めた。
「殿下！　ゾルザル殿下、今です！」
「う、うむ」
ゾルザルも今、自らの手で勝利を掴むことが出来ると思ったのか、馬の頭を乗り越えるほど身を乗り出していた。彼がどれほど勝利を渇望していたかが一目で分かる姿である。
周囲から一身に浴びせられる視線を感じたのか、ゾルザルは身体を起こし、容儀を正すと咳払いをひとつして、片手をあげ、そして振り下ろした。
「全軍、突撃せよ！」
ヘルムは思った。ゾルザルにしては落ち着いた、そして冷静な号令だなと。
だが、ゾルザルらしからぬ落ち着いたこの振る舞いこそが、ゾルザルが興奮の極みにあることを示していた。そう、この時のゾルザルは完璧に舞い上がっていたのである。
とは言え、彼の兵士達にとってそんなことは関係がない。誰の号令だろうと、勝利に向かっての前進ならば大歓迎なのだから。
兵士達は命令を受けると、半身を地平から覗かせようとしている赤銅色（しゃくどういろ）の太陽が大地を照らしはじめる中で、ピニャ率いる正統政府軍を踏み潰さんと進み始めた。イタリカの門前に陣取るピニャの軍は既に陣形を失って、悶えるように蠢いている。
馬蹄の音を轟かせながら突き進むゾルザルは、疾駆する馬の一蹴りに、自らの栄光を感じた。

兵士や臣民の歓呼を浴びる皇帝としての明日に向かって、ひた走っているかのような喜びのなかにいたのである。

だが、突如として太陽が、閃光に覆われたかと思うと暗転した。

東の空は暗黒に覆われる。

東から襲ってきた突風が、森の木々をなぎ倒すほどの勢いで強烈になびかせ、分厚い砂嵐が視界を瞬く間に覆い尽くした。

さらに、馬蹄の音をはるかに凌駕する大地の大鳴動が、地揺れの到来をゾルザルに宣告した。

「地揺れだ！」

大地が激しく左右に揺すられた。四つ足で歩む馬すら、驚愕で転倒してしまうこの揺れの中では、兵士達などは立ち続けようもなく、皆が大地に這いつくばった。

「た、助けてくれ！」

勝利に向かう喜びの歓声が、たちまち恐怖の叫びと救いを求める悲鳴にとってかわる。

震度にして、およそ五弱。

かつて帝都を襲った地揺れを遥かに超える大地震は、兵士達にこの世の終わりの到来を告げるかのごとく強い衝撃を、このイタリカの地にもたらしたのである。

この地震は、アルヌスにむかって走り続けている各戦闘団にも襲いかかった。

「あと、少しでアルヌスです」
「きっとアルヌスに近づくと大混雑しているだろうな。……うまく、交通整理できていればいいんだが」
第一戦闘団長の加茂一等陸佐が、柘植二等陸佐を振り返った。
「落伍車両、でてないだろうな？」
「はい、車間距離は開いてますが、全車両、問題なく続いています。ただ、帝都に最も近づいていた我々が一番最後となる予定です。そのため道が塞がっていて先に進めなくなるおそれがあります」
「そんな状態で『脱兎』が発令されたら目も当てられないことになるな。……とにかく隊員達だけでも返さにゃならん。車両を置き捨てて隊員達を走らせることも考えておけ。その旨、隊員達に徹底させて、どうしても持ち帰らなければならない物資については、手分けして隊員達に携行させろ」
「了解です。では置き捨てる車両は残留希望者に扱わせましょう」
「緊急時対応マニュアルでは、『脱兎』が発令されたら一人残らず全員の帰還を目指すことになっている。残留希望者であろうと置いていくことなどあり得ん。そのつもりでいろ」
「分かりました」
だが、突如として進行方向から襲ってきた砂嵐に、視界を遮られてしまう。白濁した闇が瞬く間に車窓の外を覆い尽くした。
「全軍停止！　停止だ！　止まれ！」

事故を防ぐために加茂が全隊に停止を命じた直後、それは襲ってきた。
「地震か!?」
「そのようですね。これは、結構強い！」
日本人にとっても震度五の揺れは、なじみ深いとは言えない。
とは言え世界がどうにかなると恐れるほどのものでもなかった。隊員達はしばらくすれば収まるであろうと、じっとしていることが出来た。彼らにとっての問題とは大地が揺れることよりも、それに伴って発生する様々なトラブルなのだ。
「全周囲を警戒！　地割れや、地滑り、土砂崩れに注意しろ！」
幹部達が叫ぶ中で、外の様子を見ようとトラックの幌の隙間から顔を出していた隊員が、顔を埃だらけにして振り返った。
「視界が全くありません！」
「くそっ！　しばらくこのまま待機！」
地震の前触れのようにやってきた砂嵐は、揺れがおさまるのとほぼ同時に去って行った。
後に残るのはあらゆる物が砂に覆われた光景である。運転席にいた隊員は、車を降りてフロントガラスに積もった砂や埃を手で掻いて、視界を確保していた。
「どうだ……進めそうか？」
加茂は運転手に身を乗り出して尋ねた。

「はい……少し、ゆっくり目に進めば大丈夫でしょう」
「うむ。ならばよし、全車の無事を確認したら出発だ」
だが、進行方向を見ると、その方角の空は暗くよどんでいた。
アルヌスに向け、龍に似た黒い雲が渦を巻いて引き寄せられていて、何かの異変が起きていることを本能的に予感させた。

アルヌスの丘の頂では、世界が捩(ねじ)れていた。
『門』が崩壊したかと思うと突然大地が鳴動し、本来ドームの天井のあるべき景色は一瞬にして塗りつぶされ、暗黒の太陽が出現した。その姿は紅と黒紫が渦巻いて禍々しい。平坦だったはずのドームの床も、何故か漏斗状の巨大な窪みとなっていた。形状は、ブラックホールの平面モデルのように中心に近づくほど急激に落ち窪んでいて、しかもその中心にはどこまで続いているか分からない深い穴が口を開けていた。
「い、いったい何が起きたんだ！」
その黒い太陽の真下で互いに銃を向け合っていた呉少校やジェイキンズも、撃ち合うのを止め、自分が体験している異変を理解しようと試みていた。
しかし、突然形状を変えた床によって、平衡感覚に狂いが生じたのか、二人とも立つことすら出来ない。

彼らの部下の生き残りも、とにかく地の底に開いたような黒い穴から遠ざかろうと、あたふたと床を這っていた。

「大変……」

縛めを解かれ、猿ぐつわを外されたレレイは無表情のまま異常事態を告げた。

「な、何が起きたんだ」

「『門』が壊れれば、二つの世界は切り離されるはず。だけど、『門』以外の何かが働いて、二つどころか、いろんな世界が絡み合ってしまっていると思われる！」

「そ、それって!?」

伊丹はレレイに、もう少し詳しく話してくれと迫った。

「要するに数多の世界に一気に『門』が開いてしまったんじゃよ。それがアレじゃ……」

レレイにかわって説明したのはカトー老師だった。本来は『門』の銀座側にいたはずの劉やジェイキンズ達までこの特地側のドームにいることが、事態の異常性を示しているのだ。

「何が原因なんですか？」

「黒い太陽とでもいうべきもののまわりに、六芒星が見えるじゃろ？　あれは魔方陣じゃ……」

カトーの指さした暗黒の太陽の周りに、巨大な六芒星が額縁のように浮かんでいた。

「誰があんな巨大な魔方陣を!?」

滅多に感情を表さないレレイが、怯えたような声で呻く。

それに答えたのは狭間だった。
「あれはもしかして……そうだ、魔方陣などではない！」
「いったいあれはなんなんじゃ？」
「アルヌスの防御陣地そのものです先生。あの独特の構造は間違いない」
「しかし、地面に作ったものがなんで空に浮かんでるんです？　ドームはどうなったんです？」
大きく変形した床の歪みの中でテュカに支えられた、伊丹が空を指差す。
「きっとあれは鏡像じゃ。実体は地面にある。空に浮かんで見える黒い太陽は鏡像で、実体はこのドームやアルヌスそのものなんじゃ！」
「とにかく、あちこちの世界がしっちゃかめっちゃかに繋がってるって言うなら、はやくなんとかしないと大変なことになるぞ」
伊丹は、自分が垣間見たとある世界の光景を思い出した。何かの卵が無数に生み付けられた荒野。もし、あの卵が全て孵(かえ)っていたとしたら。そして、それがこちらに溢れてきたとしたら。だが、伊丹の警告に反論する声が上がった。ジェイキンズである。
「何が大変だというんだ！　たくさんの世界と繋がったことの何が悪い!?　これで人類は、多くの世界を手に入れることが出来るじゃないか！　世界が狭いから、我々は醜い奪い合いをしなければならなくなる。だが数多の世界との行き来が自由になれば、我々は互いを妬み、牽制し、奪い合う必要はなくなるんだぞ！　これは神が我々人類に与えてくれた祝福なのだ！　我々は狭い世界の中

で息苦しい思いを強いられてきたが、もうその心配はいらない。無限に広がるフロンティアの存在が、イデオロギーや宗教上の対立といったあらゆる問題から我々を解放してくれるだろう。何しろ、嫌な奴のいない世界に行けば良いんだからな。互いに穏当に縄張りを決めて、引きこもれば良い。これは良いことだ！　これをなんとかしようとする必要はない！」

だがレレイは反論した。

「そうとは限らない！　数多の世界には、その世界で生まれ育った生き物がいる。不用意な接触は、良くないことを引き起こす」

「原住民など押しのければいい！　そのためにこれがあるんだろう？」

銃を掲げて力を誇示するジェイキンズ。

その意見に同意なのか、劉も立ち上がると大きく肯いた。

「その通りだ。我々人類の生活圏が無限にひろがるなら、太平洋の西を我々、東をアメリカと縄張り分けするようなせせこましい真似は必要なくなる」

そう叫んだ劉は黒い暗黒の深淵に這いながら近づいていった。

「この向こうが、別の世界なのか？　どんな世界があるんだ？」

恐怖心よりも好奇心が勝ったのか、黒い深淵の底を覗き込もうと顔をつっこむ劉。似たような好奇心で恐ろしい思いをしたことのある伊丹は、「待て。待つんだ！」と叫んだ。だが、止めることは出来なかった。

首をつっこんだ劉はそのまま、全身を硬直させ、痙攣。そして力尽きて突っ伏した。

「局長！」

慌てて駆け寄る呉少校や彼の部下達。近づいた瞬間、深淵の向こうから無数の触手が現れて彼らを絡め取り、深淵に引き込み、あるいはその胴を貫いていく。絶叫と怒号、そして相手を定めない銃声があたりに響き渡る。

ジェイキンズは思い違いを悟らされることになった。

『門』の向こうが常に人間にとって優しく、豊かな世界とは限らない。相手が我が方より常に劣っているとは限らないのだ。藪をつついて蛇を出すという例えのように、人類にとって最悪の敵との遭遇を引き起こす可能性もありうるのだ。

見ていると深淵の底から『何か』がぞろぞろと這い出てくる。

「来た、来た来た来た！　やっぱりアレだ！」

這い出てきたのは、伊丹の思い描いた通りの生き物である。虫と呼ぶには大き過ぎる生き物。人間の背丈ほどもある蟲獣（ちゅうじゅう）だった。

おそらく伊丹が孵化を促し、そして劉がこの特地世界へ引き込んだのだろう。

溢れ出た蟲獣は、まず手近なところにいた劉やジェイキンズの部下達に襲いかかって空腹を満たしにかかった。

「これ、洒落にならないくらぁい、まずいわよぉ！」

ロゥリィはハルバートを振りかざしながら突き進み、蟲獣の脚を振り払った。鋭い前足による攻撃をかいくぐり、振り返りざまに蟹の甲羅に似た胴体を斧刃で叩き割る。

吹き出した紫色の体液があたりにまき散らされ、ロゥリィはその臭いに顔を顰めた。

「いやぁ！　何これぇ！」

蟲獣の体液に辟易としたのか、跳躍して後方に逃れようとする。だが空に舞った途端に、空中から急降下してきた羽蟲の群れに襲いかかられてしまう。その一匹の顎が、ロゥリィの細い胴に食いつく。

「ロゥリィ！」

テュカが弓弦を鳴らして矢を放ち、羽蟲の胴を射貫いた。

ロゥリィに食いついていた羽蟲はそのままドームの外壁に激突した。

ロゥリィは苦痛に堪えながら立ち上がろうとする。だが、そんなロゥリィに無数の羽蟲が上空から群がるように襲いかかった。

栗林と富田が腰だめに構えたＰＤＷを撃ちまくってロゥリィを援護する。

「くっ……一匹一匹はそれほどじゃないけどぉ、数が多すぎっ！」

伊丹は、ロゥリィの表情に愕然とした。この蟲獣は戦いの亜神ですら血相を変える相手なのだ。

ロゥリィの背中に襲いかかろうとした羽蟲に散弾銃の弾丸を浴びせて叩き落とした伊丹は、身体についた体液の臭いに耐えられないとばかりに鼻を摘むと、似たように体液まみれのロゥリィの手

を取って立ち上がらせた。
「やばい！　陸将、あれは無茶苦茶やばいです！　入って来るのを何としても防がないと！」
漫画やアニメ、映画に出てくるこの手の生き物にろくな物があったためしがない。
世界が腐海に覆われて住めなくなるか、それとも人間が寄生されて餌となるか、それとも太陽や星が喰らわれるか……いずれにせよその世界の人類に未来はない。
「撃ちたまえ！」
伊丹の危機感に煽られたのか、狭間も即座に攻撃の命令を発した。
傍観していた隊員達が、銃口を並べ蟲の大軍に向けて銃撃を開始し、巨大な昆虫の死骸が瞬く間に床に散らばっていく。
だが、蟲獣は噴水のごとく溢れ出てくる。しかも大型の蟲獣には六四小銃の弾丸でも通用しないほどの個体もあり、蟲獣を堰き止めることは難しかった。
「くそ、戦車だ！」
七四式戦車の主砲が火を放ち、その爆風が蟲獣の群れをなぎ払った。だがそれはハンマーで蚤（のみ）を潰そうとするに等しく、あまりに効率がよくない。しかも、蟲が特地世界に飛び散ることを防いでいるドームの外壁まで傷つけてしまうことを考えると、多用は出来なかった。
「もうっ！」
ロゥリィは顔を顰めながらも、弾幕をものともせずに溢れてきた中型の蟲獣を踏みつけ、そのま

まハルバートを振って、踊るように周囲の蟲を切り裂き、叩き割り、潰していった。
富田と栗林がロゥリィを守り、伊丹が散弾銃で頭上の羽蟲を叩き落とす。
それでも、圧倒的に優位なのは蟲の側であった。数の暴力が、ロゥリィの破壊力を、自衛隊の火力すらも飲み尽くそうとしていた。
その時、レレイが飛び出した。
こぶしにまいた髪の束を額にあてて、小さく呪文を唱え、伊丹の故郷たる世界への通路を大きく押し広げる。
すると大きく窪んでいたドームの床が元の平坦な姿に戻り、黒い太陽もその姿を消してドームの天井が姿を現す。瓦礫の積もる『門』のあった場所には、無色透明な水たまりを立てかけたような物体が姿を現した。
一時はドーム内を制圧してしまうかと思われた蟲獣も、流入が止まれば数の優位を失う。
銃火を浴び瞬く間に数を減らされ、ドームの床にその死骸を積み上げていった。
「ヨウジ！　ギンザへの道を広げた。こうしておけば、他の世界に繋がる『門』は押しつぶされて蟲獣は入ってこれない。今の内に魔方陣を！」
「この状態をなんとかするにはぁ、あの魔方陣を破壊するしかないわぁ」
「ここは、あたし達に任せて先に行って！」
レレイ、ロゥリィ、テュカの言葉に、伊丹は戸惑うように狭間を振り返った。

「伊丹二等陸尉、必要と思われるありとあらゆる行動を許可する！」
「えっ……でも」
伊丹もどうすれば魔方陣を破壊できるのか分からないのだ。
「カトー先生、どうすれば壊せますか!?」
狭間の問いに、カトー老師はう～んと唸りながらその推測したところを語った。
「強力な働きをする魔方陣は、正確かつ緻密に作られねばならぬ。ほんの一角、わずか一部分でも壊せば働きを失うんじゃ。魔方陣が城塞の城壁や壕で出来ていると言うなら、城壁を崩して、壕は土砂なりで埋めたててしまえばよい！」
「なるほど……ならば爆破だな」
再び周囲の視線が伊丹に集まった。どうすればいいかを理解したならとっとと動けという圧力が、その皆の眼差しに込められていた。
「でも、なんで俺？」
「お前しかいないだろう？」
爆薬を設置する作業にはどう頑張っても数時間は必要となる。『門』を開いているレレイの表情からして、彼女が銀座への道を開いていられる時間がそれより短くなるのは間違いない。
「それだと多分、俺って日本に戻れなくなりません？」
「きっとそうなるだろうな」

狭間は、あっさりと肯いた。
「なのに俺？」
「他に、誰がこの役目を引き受けるのに相応しい？」
「でも俺、今度の同じん……」
その言葉を口にした途端、伊丹に向けられていたレレイとロゥリィ、そしてテュカの視線に切実な気持ちが強く含まれだした。それに気圧されたように伊丹は後ずさり、ロゥリィ、レレイ、テュカの順に視線を移す。
それぞれの想いが、そして三人との間に紡がれた何かが、伊丹を絡め取るように捕らえる。
「しょ、しょうがねぇなぁ」
伊丹は富田に付いて来いと声をかけて走り出した。「あ、わたしも」と続こうとする栗林を、伊丹が「お前は、ここにいろ」と止める。
「どうして!?」
「お前はこっちに残っても良いと思えるような理由があるのか？」
伊丹は、わけが分かんないよと首を傾げた。
「あ、でも、だって……その」
富田をチラチラと見ながら、理由を口籠もる栗林。
だが富田は「栗林。お前は日本に帰れ」と宣告した。

「えっ！」
「お前の気持ちはありがたいんだが、もう俺はボーゼスに決めてるんだ。悪いな！」
富田はそう言うと栗林の背中を押した。
「うっ……」
じわっと涙をこぼしながらとぼとぼと歩いて行く栗林。彼女もそれなりに本気だったのかも知れない。
だが、伊丹と富田は栗林に背を向けて走りだした。
「なんだ。栗ボーの奴、本気でお前に惚れてたのか？」
「きっと吊り橋効果って奴ですよ。それより隊長の方こそ、やっと観念したみたいですね？」
「そりゃ、三人にあんな目をさせちまったらな。もう、しょうがないだろ？」
ドームを出たところで傭兵達を指揮しているヤオを見つけた伊丹は、「みんなを頼むぞ」と声をかける。
「此の身の命に代えても」
「特に、テュカの奴を頼む。あいつ何を考えているんだか、死亡フラグを立てまくってたからな」
すると富田が事の真相をあかした。
「彼女は死亡フラグを立てた人間の前で別の者が死亡フラグを立てると、厄は後に立てた方へと移ると考えているんですよ」

「最初は御身に死亡ふらぐを立てさせるつもりだったのだ。誤解されるな、別に御身をどうこうしようとしたわけではないぞ。御身が病院にいて戦場に出ないから大丈夫だと思っていたまでだ。だがこうなってしまってはそうもいくまい。だからテュカは自分に厄を引き寄せることにしたのだろう」

「あの馬鹿……」

伊丹は、呆れたように舌打ちする。そしてドームを振りかえるとテュカ達に向けて叫んだ。

「おい、テュカ。これが終わったら……紅茶とケーキでパーティでもしようぜ！」

「……」

伊丹の突然の振る舞いに富田と、ヤオは目を丸くした。

「これで、俺に死亡フラグが移るんだな？　身体が軽い、とか言っておく必要あるか？」

「さあ、このネタがどこから出てるのか分からんので何とも……でも、良いんですか隊長？」

「どうせ、爆薬を仕掛けてふっとばすだけだ。何かと戦うわけじゃなし、あっちよりは安全だ。爆薬だってちゃんと気を配ってれば、死ぬようなことにはならねぇよ！」

伊丹はそう言って、きっと大丈夫だと付け加えた。

狭間は、背後の部下達を振り返ると告げた。

「よし！　総員退去！『脱兎』を発令」

「『脱兎』だ！　『脱兎』！」
狭間の号令が隊員達の口伝てで瞬く間に広がっていく。そしてドームの外で待ち構えていた隊員達が隊伍を組んだまま足早にレレイの作った『門』を越えていった。
その後ろではロウリィが、ヤオを手招いて街の住民や、傭兵達を使って防御の態勢をつくるよう指示していた。
「ヨウジぃが、魔方陣をどうにかするまでの間ぁ、あの蟲の侵入を何としても防ぐわよぉ！」
栗林は、狭間に敬礼して伊丹から押しつけられた茶封筒を差し出した。
「なんだこれは？」
「嘉納大臣からお預かりした書類です」
狭間は「ご苦労だった」と茶封筒を受け取ると、中身をささっと斜め読みした。日本の置かれている状況、そして直近の森田首相の言動の資料。そして、防衛大臣の命令書が入っていた。
「なんだと？」
狭間の様子を見て、何が届いたのかと幕僚達が集まってくる。
「どうしたんですか？」
「防衛大臣の命令書だ。よし、これで政府との連絡が回復した。レレイ嬢の無事も確認できたから総員退去命令は一部変更！　残留希望者を残すぞ！」
「しかし、こんな物が有効と言えるんでしょうか？」

狭間は、幕僚にそれ以上喋らせなかった。
「いや。市ヶ谷と連絡が絶たれているなかで、これは唯一の政府からの指示だ。我々としては、これに従うしかない」
「あの。『門』をちろっと越えて、無線かなんかで指示を仰いでくるというのはダメなんですか？」
すると狭間は冷たく言い放った。
「今、『門』は一方通行だ」
「……あ、はい」
「我々としては、この命令にしたがっちゃうしかない。分かるな、お前達」
「……」
狭間に言い含められて幕僚達は一斉にニヤリと微笑んだ。
「陸将！　蟲獣への備えはどうしましょうか!?」
「確かに、残された者があの蟲の襲撃を受けるようなことがあってはならないな」
「ドームの内外に防御態勢を整えさせましょう」
「よし、蟲の侵入を防ぐ態勢をつくる！　残る者以外は、銀座へ退去、急がせろよ！」

10

陸上自衛隊特地派遣部隊の撤収が始まった。
アルヌスに残留していた部隊の過半が渡り終えたところで、各地に派遣されていた部隊もようやく戻ってきた。
「第二戦闘団が戻って来ました」
「うむ。そのまま銀座に向かわせろ。負傷者の搬送や重要な物資の輸送に使う以外は、車両や武器弾薬は可能な限り置いて行かせろ」
「はい」
隊員達が続々と『門』を抜け銀座へと渡っていく中で、狭間らは残留希望者達を組織し、アルヌスの住民達と協同してドームの内外に土嚢を積み、鉄条網の敷設作業を進めていった。レレイが力尽きて、再び『門』から蟲獣が溢れ出てきた時の備えである。
「この隊で残留を希望する者はこっちに集まれ！」
「帰る者は、食糧や弾薬等は置いていってくれ！」
「負傷者を優先的に運べ。急げよ！」

各偵察隊の面々の姿も、帰還者の列にあった。
負傷した檜垣の担架を戸津と東にかつがせた桑原陸曹長は、陣地構築の作業をしている隊員の中に私服姿の栗林の姿を見つけた。
「おい栗林。何やってるんだ!?　お前、残るのか？」
「わたし、あきらめが悪いんです」
「そういうのってうざったがれるんじゃないのか？」
「別に、帰ったって面白いこともなさそうですし。もう少し、こっちで暴れていきますよ」
「自衛隊無双を楽しみたいってか？　怪我するなよ」
「おやっさんもお元気で」
檜垣は担架に寝そべりながら、鼻歌なんか歌っていた。きっとモルヒネが効いているのだろう。
仁科、勝本、笹川……第三偵察隊の面々は、栗林を残して『門』の向こうへと消えていった。
居残った栗林は、階級が下の者を集めて臨時の部下として、鉄条網の設置作業をしていく。すると背後から狭間に声をかけられた。
「その蛇腹鉄条網だが、三重に出来ないか!?」
陣頭指揮をとっているのは特地方面派遣部隊の長たる狭間である。栗林は敬礼して答えた。
「了解しました。三重にします……でも、昆虫の化け物相手に効果有りますか？」
「一応やっておこうじゃないか。ドームの壁だけをアテにしては、蟲の侵入を防ぎきれない可能性

が高いからな。ドームは最後の守りだ。後で悔やみたくないだろう？」
「了解です」
「それと、こっちに残るつもりなら、装備を調えろよ。その格好で戦うつもりか？」
栗林が着替えるために走り去ると、狭間の指揮を手伝ってきた幹部達が持ち帰る大量の荷物を抱えた姿でやって来た。
「陸将は……お帰りにならなくてよいのですか？」
「私は指揮官としての責任を果たさなければならない。進む時は先頭を、退く時は最後尾。それが指揮官としてのあるべき姿であると、私は思っている」
「しかし、ご家族には？」
「息子ももう頼りになる歳になったからな。家内のことは心配しとらんよ。それよりは君達だ、向こうに帰ってから後始末に苦労をかけることになるが、よろしく頼むよ」
「はっ！　では、我々はこれにて失礼致します」
幹部達はそういって狭間に敬礼し、『門』の向こうへと消えていった。

＊　＊

その頃、柳田や古田を乗せたヘリはアルヌスに向かって驀進していた。

パイロットは、アルヌスの丘を視認。機首を真っ直ぐに向けた。
航空無線が「残留希望者は名乗り出ろ」と叫んでいる。居残りを希望するパイロットを掻き集めようとしているのだ。
無線の声を聞く限りでは、その呼びかけに応える者は意外にも多そうだ。
「物好きが結構いるな」
「こっちだと、自由に飛べるのが魅力ですからね。変な制限もないから気分がいいんですよ。でも自分は向こうに家族が居るんで……」
「家族を呼び寄せられたらよかったのにな？」
「本当なら、そうする予定でした。くそっ、こんな急な話じゃなきゃな……」
「柳田二等陸尉、自分は特地に残留することを希望します。アルヌスで降ろして下さい」
皆に抑え込まれ動けない古田は、口だけを動かして残留の希望を申し出た。だがそんな古田に、これまで黙っていたシェリーがだだっ子を言い聞かせるような口調で語りかけた。
「それはテューレ様がフルタ様に望まれたことなのでしょうか？　きっと違うと思いますわ」
「子供に何が分かる？」
でも、わたくしも女ですから、とシェリーは言葉を続けた。
「ですからフルタ様もお国に戻られて、ご自身の夢を叶えて下さいまし」
「嫌だ」

するとデリラが、苛立ちを感じさせる声色で口を挟んだ。
「やっぱりあそこでぶっ殺しておきゃよかったのさ。そうすりゃ、フルタの旦那もこんな後ろ髪をひかれる思いしないで済んだんだろうに」
「とにかく、俺はここに残る」
「ダメですわ。フルタ様には夢を実現する義務がおありです！」
「義務だって⁉」
「テューレ様は貴方が夢を叶えることを確信してらしたんですわ。だからこそ、あんなに嬉しそうにしてらしたんです」
「テューレが嬉しそうだった？　どこが⁉」
古田の目には、テューレの表情は様々な感情の入り交じった複雑なものとしか映らなかった。
だが、シェリーははっきりと肯いた。
「ええ、とても幸せそうな顔をしてらっしゃいましたよ。きっと、フルタ様が夢を叶えることがご自身の幸せだと感じておいでだったのです」
「どうしてそうなる⁉　テューレさんは全然幸せじゃないじゃないか！」
「そうおっしゃられても、どう説明したものかと困ってしまうのですけれど」
「……俺には分からない。そんなの絶対おかしいよ」
するとデリラが、「あたいには、あの女の気持ちが、ちょっと分かるかな？」と漏らした。

外の景色を見やりながらデリラは続けた。
「絶望の中に長くいるとね、幸せになれるかも知れないって思っただけで、もう満足しちまうことがあるのさ。あの女はフルタの旦那に思われて、来いって言って貰えた。しかもフルタの旦那なら成功は間違いないだろ？　だから、自分の幸せももう確実だって思えたのさ」
「だったら、幸せになりゃいいじゃないか！　それって、料理を見ただけで、美味かった、満腹だって言うのと同じだよ」
「幸せになるのが恐いって気持ち、分からないかい？　そこに扉があってさ、それをくぐれば幸せになれるって思っても、自分は幸せになれっこないって思ってると、どうしても疑っちまうのさ。扉を開けてみたら何もないかも知れない。逆に、絶望がぐわって襲いかかってきちまうかも知れないってね。だったらさ、扉を開けないで耳をあてて向こうの気配を探ったり、向こう側を思い浮かべていた方がよっぽど幸せな気分になれるんだよ」
「そんなの、ありかよ」
古田は、デリラの言葉を受け容れたくなかった。余りにも悲しすぎるからだ。だが、彼女の言わんとしていることも分からなくもない。
古田が黙り込んでしまうと、柳田はパイロットに「よし、着陸している暇はない。このまま『門』をつっきれ！」と叫んだ。
航空無線が『もう時間がないぞ、急げ！』とがなり立てているのだ。もう、一旦着陸して機体か

ら降りてなどと悠長なことをしていたら帰れなくなってしまう。
「了解！」
パイロットはピッチレバーと、操縦桿を巧みに操り、ドームの開口部目掛けて突き進む。
「危ない！　突っ込んでくるぞ！」
『門』の周辺やドームの中にいた者達は、地面を擦るような高度で突き進んでくるヘリを見て、慌てて逃げ走った。左右によけられず、地面に伏せる者もいた。その背中を擦るようにして、柳田達の乗るヘリは『門』に強行突入したのである。

『門』に突入し白濁した世界を突き抜けると、そこには銀座の風景が広がっていた。
「銀座だ！」
『門』を越えた直後、特地から帰還した隊員達の列に突っ込みそうになったヘリは、機首を上げて高度を上げた。だが今度はドームの天井にぶつかりそうになる。そのため、パイロットは操縦桿を押し倒して、高度を強引に落とす。
ジェットコースターのように上下に乱舞したヘリは、ドームを飛び出して、駐屯地の外へ出たところで地面を擦った。
アスファルトを削り、回転するローターブレードを大地に叩きつけ、そのことごとくをへし折る。そして火花をあげながら、デパートや商店の谷間を滑っていった。

もし、銀座駐屯地がデモ隊に占拠されず、その周辺から車の交通が絶えていなければ、おそらく大惨事となっていただろう。だが自動車などの往来は完全に途絶えていて、機動隊が見守る中を、ヘリは運動エネルギーが尽きるまで滑走することが出来たのである。

ヘリは、ウェディングドレスを飾るデパートのショーウィンドウに鼻先を突っ込むようにして停止した。

「おい、大丈夫か!?」

鉄の焦げた臭いと航空燃料の臭いが混ざってあたりに立ちこめる。そんな中で、機動隊の警官達が駆け寄って来た。

追いかけるようにしてやって来た消防車が、火災を防ぐためかヘリに向かって消火液を浴びせかけはじめた。

突っ伏していた柳田は、全身に水を浴びながら「ぷはっ」と顔を上げた。

「死ぬかと思ったぜ」

「は、はい。お父様とお母様に、まだ早いから来るなと言われてしまいましたわ」

小柄なシェリーは、柳田とデリラの間で逆さまに転がっていた。

「みんな生きているか?」

「うぃ〜す」

「とりあえずなんとか」

「自分も無事です」
部下達も返事を返してくる。パイロットは無言で右腕をあげていた。
柳田達は無事に銀座へと戻ることに成功した。

＊　＊

「く……」
額に滝のような汗をながすレレイが、身体を大きく傾かせた。
数時間にわたって『門』を開き続けたレレイの気力が、もはや尽きようとしていた。特に強行突破をはかってきた柳田の乗ったヘリを通すために、一瞬だけ『門』を大きくしたのが、彼女の力を消耗させた。その後の『門』のサイズはかなり小さくなってしまい、隊員達も一列で、しかも頭をかがめなければ通れないくらいに小さくなってしまったのである。
「大丈夫、レレイ？」
テュカの問いに、レレイは小さく肯くことで返事に代えた。
歯を食いしばって渾身の力を込めているため、口を利くことが出来ないのだ。
「あとどのくらい保つ？」
狭間陸将の問いに、カトーが代わって答えた。

「保ってあと、十分ってところじゃな！」
「カトー先生が代わると言うことは出来ないのですか？」
「儂にはムリじゃ！」
狭間は振り返ると隊員の列を見渡した。とても十分では渡り切れそうもない数の隊員が残っているのだ。
狭間は急ぐようにと腕を振った。
「どうしても帰らなければならないという理由のある者以外は、列から離れろ！」
「俺には、身重の女房が！」
「よし、お前は先に行け」
「自分は独り身だからな、あとでいい！」
帰らなければならない理由のある者の背中が叩かれ、先へと押し出されていく。
こうしている間にも、『門』は土管ほどの狭い穴へと狭まっていた。くぐり抜けようとする隊員も、匍匐前進でなければ抜けることが出来なくなっている。
「速く！　速く！」
もう、荷物を抱えていては通れない。
多くの隊員が荷物を投げ捨てて両手を伸ばして頭をつっこみ、向こう側から引っぱってもらって抜けていった。

「レレイちゃん、頑張れ！」
「頑張れ！　もう少しだけ、頑張ってくれよ！」
皆の声援に応えるようにレレイが、汗に濡れた髪を掻き上げて肯く。
「お前達、いそげ！」
だが、『門』はさらに小さくなっていく。
「まずい！」
そして、レレイがついに気を失い倒れた。
最後に通り抜けようとしていた隊員の戦闘靴が、閉じる穴によって切断され、後には爪先部分が転がった。
「ああっ、くそっ！」
直後、小さな地震が起こる。だが地面に拳を打ち付けて悔しがっていた隊員達は、それに気付かなかった。
「なんとかならないのかよ」と皆がレレイを振り返ったが、カトーらに抱えられて介抱される彼女の姿を見ると何も言えなくなってしまう。彼女が限界を超えて頑張ったことは、誰もが理解できたからだ。
『門』のあった場所に残された戦闘靴のつま先をおそるおそるのぞき見た隊員達は、足の指が中にないのを見て安堵のため息をついた。きっと向こう側では「危なかった、危なかった！」と、むき

出しとなったつま先を抱えて大騒ぎしているだろう。
やがて、ドームの天井に黒い太陽が姿を現し始める。世界が再び歪み始め、平らな床が大きく落ち窪んでいく。
「よし、蟲が来るぞ。全員配置に就け。ドームの扉を閉じろ」
狭間の命令で、鉄の扉が重々しい音と共に閉じられ隊員達は配置へとついた。
家族持ちの多くが帰還を選んだため、残った隊員は若い者が多い。狭間の側に残った幹部も、単身者の初級幹部が中心となっていた。
「で、何人残った？」
「概算で、四～五千ってところです」
「物好きと帰れなかったのが合わせて五千か。よし、残った者で部隊を編成し直せ。とりあえず大雑把で良い。それをドーム外に配備して、壁を破られた場合に備えさせろ」
「アルヌスの傭兵達はどうします？」
「接近戦では彼らの方があてになる。一緒に防いで貰おう」
「了解です」
隊員達はそれぞれに銃を構え、機関銃の銃口を、深く落ちくぼんだ地の底に開いた黒い穴へと向けた。
ロゥリィがハルバートを水平に引き寄せて構え、つま先をぐりぐりと地面にすりつけて踵を踏み

しめる。引き絞られた弓のようなエネルギーに満ちた気配を全身に漂わせていた。
その隣には、着剣した六四小銃を手にした栗林が立った。完全装備に身を固め、背には予備の小銃を担いでるという周到さだ。
「また一緒に戦えるわねぇ」
「腕が鳴るわ」
二人の女は互いを見合って微笑んだ。
また、ドームの鉄扉には傭兵達が楯を連ねて壁をつくっていた。その隙間からは、自衛官達が銃口を突き出して、敵の出現に備えている。
狭間は隊員達の配置状況を見渡すと、通信機をとりあげて呼びかけた。
「こちらは狭間だ。伊丹、聞こえるか？　そちらの様子はどうだ？」
『実に、はらはらする展開です』
「どうした！　支援が必要な状況か？　爆薬の設置は済んだのか？」
『設置は終わりました。後は点火栓を繋ぐだけですけど……』
「なら、十分で何とかし……ろ」
狭間はそこまで告げると、絶句して通信機を取り落とした。深淵から、象サイズの蟲獣が出てこようとしていたのだ。

「支援を下さい。こちら伊丹。非常に大急ぎで、援軍が必要です」
だが、肝心の要求を伝える前に、無線機は沈黙してしまい返事がない。
「なんかあったかな？」
「かも知れませんね」
「あと、十分でなんとかしろ……か。簡単に言ってくれるぜ」
「そりゃ、こちらの事情を説明しなきゃそう言われますよ」
伊丹がぼやき、ロープにぶら下がって壁の中腹あたりで爆薬の設置作業をしている富田がそれを宥めた。
「で、なんとかなるんですか？　こっちは道具がなきゃ、お手上げなんですからね」
壁面の中程にロープでぶら下がっている富田は、あちこちに繋いだ爆薬のケーブルをまとめた姿で動けなくなっている。ここで手を離せば、ケーブルがばらばらになり、再度集めるのに余計な時間がかかってしまう。この作業を終わらせるには、伊丹が発破母線用のケーブルを下ろしてくれるのを待たなくてはならないのだ。
「まあ、なるとかするしかないだろう？　富田はそのままで待機、いいな」
だが、伊丹の前には一頭のダーがいた。おそらくは街で暴れていた内の生き残りだろう。ダーは、牙を剥いて伊丹達を睨みつけて今にも襲いかかりそうに身構えている。
「とにかく。こいつを何とかしないと」

点火栓やケーブルといった道具は全て、ダーの背後においてあるのだ。
問題は伊丹の武器である散弾銃の弾丸が、キジ撃ちに使う十二番六号散弾（散弾の粒の経が2・75ミリ）ということである。しかも一度に装弾できるのは二発まで。これでは、ダーのような怪異を相手するには心許ない。
「せめて、スラッグ弾とかだったらなぁ」
「んなもん、普通の人が持ってるわけないじゃないですか」
「参ったなあ。こんなことなら死亡フラグなんて引き取らなきゃよかった」
伊丹は、散弾銃に弾丸を挿入すると、中程で折れている銃をカチリと伸ばした。

ロゥリィと栗林は蜘蛛に似た巨大な蟲獣と向かい合った。
蟲獣はその巨体に似合わず非常に俊敏で、その触手や尖った脚肢を武器にして次々と鋭い刺突を繰り出してくる。自分よりも大きな存在の繰り出す刺突の連打は、頭上から降り注ぐ必殺の豪雨だ。
それをロゥリィは軽やかなステップで紙一重で躱していった。
だが、凄まじい力で振り下ろされる剣肢は、わずかに擦っただけでも強烈な破壊をもたらす。
ゴスロリ神官服が裂かれ、肌の露出部位がたちまち増えていく様に、さしもの亜神も不快そうに舌打ちした。
「あんた達はぁ、この世界にお呼びじゃないのよっ！」

ロゥリィは、肌を飾る玉のような汗を散らして跳躍した。
落下の勢いと合わせて両手で掲げあげたハルバートを叩きつけるように振り下ろす。
勢いのついた戦斧が蟲獣の頭部を襲ったが、蟲獣も大きく飛び退いてこれを躱す。
はずれたハルバートが、コンクリートの床を叩き割り爆発にも似た勢いで粉塵を舞い上がらせ、視界が一瞬にして閉ざされる。だがロゥリィは無造作に地に埋まったハルバートをひっこぬき、一歩を踏み込んで、「ここっ！」と石突きを突き出し蟲獣の胴を突いた。
手応えとともに、重い金属同士がぶつかるような音が鳴り響く。
外骨格の分厚い甲羅をまとった蟲獣は、その打撃で貫かれこそしなかったが、はじき飛ばされるように転がった。ロゥリィはすかさず追い討ちの連続攻撃を放った。
「ほらほらほらぁ、壊れちゃいなさいっ！」
無造作に放たれた乱打は、そのひとつひとつが防ぐことすら難しい暴風となった。蟲獣はその圧倒的な破壊力に怯えたように巨体を震わせ、生存本能に従って、仲間の蟲獣の群れの中へと逃げ込んだ。
栗林が引き金を引きっぱなしにして、ロゥリィの前に立ちはだかる小型の蟲獣をなぎ払う。こうして開かれた道を突き進んでロゥリィは突撃をかけた。
「怯えなさいっ！　竦みなさいっ！」
ロゥリィは蟲の群れに踏み込むとくるりと振り向き、回転の勢いで蟲獣の群れをなぎ払った。

まき散らされるように吹き飛ぶ蟲獣。蜘蛛型蟲獣の巨体があらわとなっていく。
「いまだ！　ってぇ！」
狭間の号令で、ロゥリィを援護する曳光弾の弾雨が突き刺さる。
「撃て、撃て！」
重機関銃と戦車砲の砲弾が動けなくなった蟲の甲羅を穴だらけにしていった。
爆発から逃れるように後退するロゥリィと栗林。
彼女達を追って翼を拡げたのはカマキリ型の蟲獣。栗林の銃弾を浴びても致命打にならず、そのままの勢いで迫ってくる。
食いつかれそうになるのを身をよじって躱したロゥリィは、地に降り立ちそのまま迎え撃つ体勢をとる。
「ふうん、連携するくらいの知恵はあるってことねぇ。たかが蟲とは侮れないのねぇ」
ロゥリィは、ハルバートを腰溜めに大きく振りかぶった。カマキリ型蟲獣が飛びかかって来ると、頃合いよしと見てハルバートを叩きつけた。
だが、カマキリ型の蟲獣は翼を拡げて突然、勢いを止める。
タイミングをずらされたロゥリィは姿勢を崩し、ハルバートも空を切るかに見えた。黒ゴス神官服のスカートが回旋力で大きく花開き、ダンスステップのような華麗な脚さばきが床を打つ。
ハルバートの重量に振り回されているように見せかけて一回転、さらにもう一歩踏み込んでさら

なる加速を加える。ぎゅっと締まった足首からのびるつま先がしっかりと体の重心軸を支え、二回転の運動エネルギーを得て、倍加した破壊力がカマキリの鎌とかちあう。

「でも甘いっ！」

金属の塊同士がぶつかるような鈍い音とともに、その衝撃はカマキリが防御のために突き出した鎌そのものを断ち切った。

会心の一撃。狭間達はロゥリィの勝利を確信した。

だが、空中から弾丸にも似た勢いで降り注いだ乱入者が、ロゥリィの身体を擦めた。

辛うじて躱したものの、その一撃はロゥリィにダメージを残した。

「左腕が!?　ふんっ、いいわぁ」

ロゥリィはぶらぶらと垂れ下がるだけの腕を意識から棄てる。亜神とは言えダメージの治癒には相応の時間が必要となる。それを待っていては戦えない。ロゥリィは左腕を最初からないものと考え、右腕一本での戦術に、頭も技も切り替えた。

「さあ！　来なさ……い？」

新たに現れた敵は、台所で蠢く主婦の敵に大変よく似たフォルムをもっていた。「ひっ！」

ロゥリィと栗林はその姿を見た途端、顔色を変えた。全身の肌にぷつぷつと鳥肌が立ち、突如として冷や汗をダラダラ流し始める。

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

悲鳴を上げて互いに抱き合うロゥリィと栗林。生理的な嫌悪感にはさすがに抗しきれなかったのだ。

そんな二人目掛けて台所の害虫型蟲獣が襲いかかる。

その時、どこからともなく飛来した火矢が蟲獣の眼に突き刺さった。

油分の多い蟲獣はたちまち炎に包まれた。

「ロゥリィ、シノ、ここはあたしに任せて下がって！」

そこには次の矢を番えて、グラスファイバー製のコンパウンド・ボウ（滑車式機械弓）を引き絞っているエルフ娘テュカの姿があった。三人娘の中で最も家事能力に優れた彼女は、台所の害虫退治に躊躇いはなく、果断に責め立てる。

「Acute-hno unjhy Oslash-dfi jopo-auml yuml-uya whqolgn!　炎よ、害虫は消毒よ！」

滑車を用いて射出された矢の初速は、時速にして二百七十キロを超える。風の精霊の助力を得てさらに加速し、閃光のような勢いで害虫型蟲獣へと突き刺さった。

それはテュカにとって亡き父が得意とした神技の再現であった。そこに加味された炎熱の精霊魔法が敵を火だるまにした。

蟲獣の悲鳴がアルヌスの丘に響き渡る。

テュカをあらたな敵と認識したのか、蟲獣達は群れをなしてテュカに襲いかかる。

だがテュカは体操選手のような身のこなしで距離をとった。

小型の蟲獣が地を這いながら押し寄せる。
「防御態勢！」
すると、ヤオの号令で左右から形の揃わない楯を並べた傭兵達が飛び出し、テュカの前に並んで蟲獣を防ぐ。
迫り来る蟲獣に剣を突き出し、その隙間からは、陸自隊員達が銃火を浴びせかけ蟲の群れを払いのけた。
その隙に呪文を紡ぎ終えたテュカの放つ青白い雷鳴が、小型の蟲獣を瞬時にして焼け焦げた死骸へと変える。大型の蟲獣には大きなダメージは与えられなかったが、手の空いた隊員達は手にした銃の狙いを生き残った数匹の大型蟲獣へと集中させることが出来た。
テュカの奮闘ぶりを見れば、ロゥリィも怖れてばかりはいられない。
台所の害虫型蟲獣が目の前に現れると、ハルバートを拾い上げ「あ、あとで、ヨウジぃに洗わせよぉっと」と叫びながら「えいっ！」と叩きつけた。
ぶちゅという嫌な音と手応えに、ロゥリィは美しい眉根をぎゅっと寄せて目を閉じる。案の定と言うべきか、おそるおそる目を開けると蟲の体液によってハルバートの刃は嫌な色に染まっていた。
散弾銃の銃口から放たれた散弾が、ダーの身体を掠める。
小粒の玉が数粒、怪異の肌に食い込む。だが分厚い毛皮で全身を覆う怪異は、その程度では痛が

るそぶりさえ見せずに、伊丹から距離をとりつつ、爪を立て牙を露わにして伊丹を恫喝した。
「まさか、こんなところで世紀末物の映画みたいなことやるはめになるとは……」
ポケットから弾を取り出し、散弾銃に込めていく伊丹。だが、プラスチックのケースの中に包まれた小さなつぶつぶを見て嘆いた。
「鳥打ち用の散弾で、どないせいっちゅうんだよ！」
銃身を短く切った散弾銃はその昔、過激派テロリストが多用した。
隠しやすい上に、多少狙いがいい加減でもダメージを与えられるので、接近戦に優れているのだ。だが、その分だけ射程は短いしパンチ力も小さくなる。人間相手ならまだしも、大型の怪異が相手では力不足なのだ。
ぐわっという咆哮とともにダーが伊丹に飛びかかった。
「わわっ！」
伊丹は、その爪を避けながらも、怪異に銃口を向けて引き金を絞った。
二発の発砲音。
ダーの肌が弾け、血液があたりに飛び散った。
だがこの怪異、ちょっと殴られたという程度にしか感じないようであった。
ドーム内での戦闘はさらに激しさを増している。

溢れ出た蟲獣はその数や種類をさらに増やし、飛び回る羽蟲が川の流れの如く見えるほどになっていた。

手間暇かけて敷設した鉄条網は外骨格の蟲獣にはほとんど用を為していない。弾丸を浴びせる隊員達も、もはや一匹一匹を狙っていられず、群れに向けた大雑把な狙いで引き金を引いていた。それでも弾は無駄になることはなく、何匹かの羽蟲を落とし、小型の蟲獣を潰した。狙わなくても撃てば当たる。それほどの数の蟲が彼らの前に蠢(うごめ)いていたのだ。

傭兵達は楯を並べて弾丸の如く降り注ぐ甲蟲を防ぐ。しかし蟲獣の鋭い槍のような尖脚がこれに突き刺さり、楯を貫いて、兵士達の胸部を抉った。

「ぐはっ！」

ドームの床は、巨大な蟲の死骸が無数に積み上がっていく。だがそれを踏み越えてくる蟲獣に襲われた傭兵達は次々と倒れていった。

陸自の隊員達にも傭兵以上の被害が出ていた。

「わわっ、わぁぁあ」

「誰かとって、誰かこれとってくれ！」

無数の蟲獣にまとわりつかれた隊員が、血相を変えて走りまわり、全身に針を刺されて泡を吹いて倒れる。最早、黒い穴を包囲して水際で防ぐどころの騒ぎではなく、隊員達の方こそドーム内に溢れる蟲獣に取り囲まれていた。

テュカは、弾丸のごとき勢いで飛来する甲蟲の群れを見事な矢のつるべ打ちで射落としていった。
しかし、最後の一匹を射落とす寸前に矢が尽きる。
「あ、まずっ……」と箙をまさぐり呟いた時には、テュカの身体を貫こうと羽蟲が迫っていた。
「危ない！」
テュカを、ヤオが突き倒して庇う。そしてヤオが、羽蟲の一撃を胸の中央に受けた。
「ヤ、ヤオ！」
仰向けに倒れるヤオに、テュカはすがりついた。
「傷は浅いわ！　しっかり！」
だが、ヤオはテュカの呼びかけに答えなかった。

方陣を作って全方位に守りを固める傭兵達。その方陣に自衛官達も参加して周囲から襲いかかる蟲獣の襲撃に抗い続けている。だが外側の隊員や傭兵が次々と倒れていき、方陣のサイズは少しずつ小さくなっていた。
一方、ドーム内に充満した蟲獣は、いよいよドームの外壁に取りついた。
鋭い尖脚をコンクリートの壁に突き刺し、削岩機のように砕いていく。ドームを破って、特地への道を開こうとしているのだ。
小さな穴が開いて、特地の空の下へ蟲が溢れ出る。

「火炎放射！　なぎ払え！」
外で待ち構えていた化学科の隊員が、火炎放射器の炎を長い舌のように伸ばして、穴から溢れ出てくる蟲獣を焼き払っていく。だが蟲獣は昆虫としての本能か、自ら炎に向かって飛び、炎をまとったまま化学科の隊員にしがみついた。
「うわっ、誰か、助け……！」
燃え上がった蟲にまとわりつかれ、火炎放射器を構えた隊員が、自らの炎に焼かれていった。
傭兵達と作り上げる亀甲隊形の傘の下で、狭間は無線機のマイクをとりあげて怒鳴った。
「伊丹、急げ。もう防ぎきれないぞ！」

電柱のように太い腕を、ぶんまわす怪異。
その鋭い爪が空気を切る度に、伊丹は転がるように逃げ回った。
「くそっ……紙一重って、どうすりゃ出来るんだ!?」
安全な距離をとっていては、この散弾銃で怪異を倒しきれない。そう判断した伊丹にとれる手段は、怪異をぎりぎりまで引き寄せることだけだった。だが、伊丹は格闘についてはお茶を濁す程度にしか訓練を積んでいない。決して素人ではないが、怪異を相手に戦い抜くには全くの力不足なのである。
「肉を切らせて骨を断つ！　……って無理だよ！　おわっ！」

伊丹としては敵をよく見て、肉を切らせたつもりだった。だが、微妙な距離感がつかめずに、ダーの爪が目前まで迫る。

腕でガードしてかばったものの、その凄まじい衝撃に吹き飛ばされて地面を転がった。折角至近距離まで引き寄せて放った散弾も、怪異の肌にわずかに食い込んだだけだ。

「ごほっ！　腕はまだ繋がってるか」

腕が千切れたと思うほどの痛みである。だが不思議と怪我は負っていなかった。

「くそっ！」

立ち上がろうとする身体のあちこちで、ミシミシと悲鳴が上がる。だが、それも耐えられないほどではなかった。

激痛に堪えながら、伊丹は自分の身体に何が起きているのかと調べようとした。

すると突然、二の腕に爪でひっかいたような切り傷が出来て血がにじみ出した。何かと思ってみれば文字だ。切り傷が文字の形となって皮膚に浮かんできたのだ。

『ヨウジぃの流す血はわたしぃのものぉ。ヨウジぃの負った傷もわたしぃのものぉ』

「げっロゥリィ？　まじかよ……」

伊丹は病院で採血された時、注射針を刺されたのと同じ部位をロゥリィが押さえていたことを思い出した。

『傷を負わないようになさぁい。乙女の柔肌にこれ以上の傷を刻んでくれたらぁ、あとで酷い目に

あわせてやるんだからぁ』

伊丹には、ロゥリィがどうしてこんなことをしたのかが分かった。

「これじゃぁ怪我したり死んだり出来ねぇじゃんか。くそっ……自分自身を人質にとりやがってあの女め！」

『追伸。引き受けるのは傷だけよぉ。首がもげたら死ぬから』

怪我するな、死ぬな、という一種の脅迫なのだ。

次の弾丸を散弾銃に装填し、怪異と向かい合う伊丹。ダーも再び立ち上がった伊丹に「しつこい野郎だ」とでも言いたげな視線を向けていた。

「もっと近くに。もう少しだけ、もう少しだけ近づくんだ」

こうなれば銃口を怪異に押しつけて、引き金を引くしかない。

肩で息をする伊丹は、ダーが自分目掛けて渾身の力でその鋭い爪を振り下ろすのを、睨みつけて待った。

だが、目に見えない速さで振り下ろされた一撃は伊丹の胸部をすぱっと切り裂いた。

「やばっ！　ごめんロゥリィ！」

胸を押さえながら膝を衝く伊丹。

ダーは伊丹が戦闘不能となるダメージを負ったと思ったのか、その頭を噛ろうと巨大な顎を大きく開く。

「それを待ってました！」
伊丹は、怪異の喉奥に散弾銃を突きたてた。そしてそのままゼロ距離での発砲。
十二番六号の散弾が二発分、ダーの喉を抉り頸椎を破壊して呼吸中枢たる延髄にまで達する。
そのまま硬直してしまった怪異に、伊丹は「てい！」と叫んで前蹴りを繰り出して、地面に口を開いた割れ目へと蹴落とした。
ダーは、ロープにぶら下がっている富田を掠めるようにして、転落していった。
巻き込まれそうになった富田は叫んだ。
「隊長！　あんた俺を殺す気ですか!?」
「あっ、悪い！　大丈夫か!?」
「危なかったですよ。これからは何か落とす時はあらかじめ言って下さいよ」
伊丹はよろよろとした足取りで、発破母線のリールを、富田がぶら下がる外壁へとつり下ろす。
それを受け取った富田は集約したケーブルを要領よく繋いでいった。

ドームの壁に外界に通じる小さな穴が穿たれると、そこに無数の蟲が群がってたちまち押し広げていく。
外で待ち構えていた隊員達が、火炎放射や銃撃で蟲獣の流出を防いだが、穴の数が増えていくと、防ぎきることも出来なくなっていった。どんどん外へ出て行く蟲獣を見てロウリィは叫んだ。

「いけなぁい！」
外に出ようとする蟲獣の流れを止めようと、壁に向かって走るロゥリィ。だがロゥリィは突然、胸から出血して血を吐いた。まるで見えない敵に胸を抉られたかのような傷を負っては、さしもの亜神も膝をつく。
「くっ！　誰か防いでっ！」
だがロゥリィの叫びに応えられる者はいなかった。
誰もが、我が身を守るだけで精一杯なのだ。
ドームに開いた穴から、蟲獣が凄まじい勢いで流れ出ていく。無数の羽蟲が、甲蟲が、地を這う蟲獣が続々と外へと溢れていった。
だがその直後、壁の外から凄まじい轟音が鳴り響いた。
第四戦闘団のヘリが姿を現し、ドームから溢れ出た蟲達に銃撃を浴びせかけたのだ。
「とにかく、一匹残らず退治だ！」
健軍の命令で、飛び出した甲蟲や羽蟲が、ＵＨ－１Ｊに追い回されて、羽や、甲羅を穴だらけにされてたちまち撃ち落とされていった。
さらに、アルヌスの空を覆い尽くすような膨大な数の翼竜が、姿を現した。
「何の恨みもねぇが、お前達はこの世界にはちぃっと剣呑なんでな、皆殺しにさせてもらうぜ。野郎共、かかれ！」

ジゼルの指揮で、翼竜達が急降下を開始した。
そしてドームから飛び出した蟲獣達に一斉に襲いかかり、ガリ、コリっと咀嚼嚥下を始める。蟲獣は瞬く間にその数を減じていった。
「一匹も逃すなよ！」
ドーム外の掃討を命じながら、穴から中へ攻め入るジゼル。
ジゼルの眷属たる翼竜達はドーム内に侵入すると、蟲獣に襲いかかった。
形勢が逆転し、ロゥリィはほっとした表情でハルバートを杖にして息をついた。
そんな彼女にジゼルが歩み寄る。
「姉様。これで借金はチャラにしてくれよな」
「ええ、いいわよぉ」
色よい返事を貰ったジゼルは「やたっ！」と手を打つ。そして再びロゥリィに話しかけた。
「あと、その、あの……少しぐらい喜捨を分けて貰えると、嬉しいんだけどなあ。そうすりゃ姉様に手を貸したことについて、主上さんからお小言を言われずに済みそうなんだけど」
「分かったわぁ。ベルナーゴに戻ってもぉ、あんたの顔を立つようにしてあげるわぁ」
それを聞いてジゼルは再び手を打って喜んだ。
「やったぜ！　なら、なら、姉様が主上さんの嫁になるってのは！」
「それはダメぇ」

「ちっ。なら、食堂で食い放題飲み放題ってのは？」
「これは、亜神の勤めでしょぉ！　当たり前のことをしたくらいでぇ、欲張ってはだめよぉ！　この数の翼竜を集めていた理由を問わないであげるのだからぁ、少しは自重なさぁい」
「あ、やぶ蛇だったか。分かった、このあたりで手を打つよ！」
ジゼルはロウリィの疑惑の視線から逃げるように、再び蟲獣の群れ目掛けて挑みかかった。

一方、倒れた部下を助け起こしていた狭間は、無線から流れる音声に「もう一度、繰り返せ」と叫んだ。
「なに!?　十秒後だな！　分かった！」
無線機をおいて、周りにいる部下達に向けて叫ぶ。
「十秒後に点火だ。黒い穴が消失する際の衝撃に備えろ！」
狭間の警告に、隊員達は黒い穴から可能な限り離れた。とは言え、まだ蟲獣との戦いは続いている。翼竜達の参入によって状況は拮抗しているが、決して終わったわけではないのだ。

テュカは、倒れて動かなくなったヤオを黒い穴から引き離すため、ずりずりと引きずっていた。
「すぐに、すぐにお医者に診て貰えるからね。頑張ってヤオ」
すると、ヤオのボンテージ鎧の裾から、ぱらぱらとこぼれるようにして砕けた五百円玉が転がる。

「何これ……五百円玉？」
　すると答える声があった。
「五円玉より五十円、五十円より五百円。一個より沢山ということで、鍛冶屋で数十個を溶接してもらってな。メダリオン型の護符にしておいたんだ。おかげで助かった」
　ヤオが、テュカを見上げていたのだ。
「心配させないでよぉ。死んだかと思っちゃったでしょ！」
　力が抜けたように座り込んだテュカは、ヤオの豊かな胸の谷間を力一杯叩いた。するとヤオは「うっ」と呻きながら、心臓震盪で再び意識を失った。
「し、しっかり！　傷は浅いわ！」
　テュカの声を耳にしたのか衛生科の隊員たちが駆けつけてくる。
「心臓が……まずい！　誰かパドルをよこせ！」
　ヤオを助けようと、心臓マッサージの応急処置を始める。
「何があったんです？　テュカさん」
「分かりきったこと聞くな！　蟲の野郎に決まってるじゃないか！」
「あ、いや、その……」
　正直には言えないテュカであった。

「五秒前からカウント始め！」
安全距離まで退避した伊丹は、富田と共に時計を見ながら点火栓を握りしめた。
富田は伊丹をからかった。
「隊長、胸のそれ。よくぞ助かりましたね」
「ああ。これか？」
伊丹は胸元を切り裂かれた上衣を摘んでぷらぷらと振った。
「呪われてるんだ」
「呪い？　女神の加護の間違いでしょ？」
「五」
「ここまで来ると呪いだよ。もう俺の自由意思なんてないも同然なんだ。あいつらのせいで、夏の同人誌即売会、冬の同人誌即売会も……畜生め。だが俺はあきらめん、必ず帰る。アキバ、同人誌即売会に俺はきっと行ってやる」
「四」
「そこまで想われたら、普通は幸せを感じるべきだと思うんですけどね？」
「三」
「そういうものなのか、これってそういうものなのか？」
「二」

「そうですよ。贅沢なこと言ってるとバチがあたりますよ」
「そうかな？」
「一」
「だって、まんざらでもないでしょ？」
「そりゃ、まぁな。確かに……」
伊丹は「ゼロ」の合図で点火栓をひねった。

11

二本のゴム紐を細い糸で繋ぐ。ゴム紐をぎりぎりまで引っ張っておいて、糸を切れば何が起こるだろうか？
『門』の消失は糸を突然切るに等しいものであった。そして、切り離された世界は『門』が出来てから、消失するまでの間に溜め込んだ歪みエネルギーを一気に解放した。
ただ、この時の地震は極めて特殊な物となった。
普通の地震ならば、震源地から離れるほどに揺れは小さくなっていく。しかしそれとは全く異なる原理によって発生したこの地震は、地球の規模では減衰することなく、世界全体がほぼ均質に揺

れてしまったのである。
その震度は、日本の尺度で五強。マグニチュードは計測不能。
そもそもこの地震の強さを、被害の程度で定める等級分で語るのは不適切だったのだ。
特に、地震の滅多にない地域は建物の構造が柔に出来ている。
日本人が「結構揺れたね。びっくりした」程度に受け止める揺れでも多くの家屋が倒壊し、大規模な被害が発生してしまったのである。

――フォルマル伯爵領　イタリカ――

二度にわたって起きた地揺れは、戦っている兵士達の戦意に深刻な打撃を与えた。
突如として地面が上下左右にうねれば、血みどろの戦いとは別種の恐怖感に襲われてしまう。
そもそも戦いの恐怖は敵がもたらすものだ。勇戦し、敵を打倒すれば乗り越えることが出来る。
だが地揺れなどの自然災害は、人間の力ではどうにもならないが故に、個々の勇気では克服できない。そのため兵士達は戦いに集中出来なくなってしまったのである。
燃え上がっていた戦意も勇気も、大量の水をかけたように消え果て、後には虚ろな精神が残るだけである。

一旦冷えて竦み上がった精神は容易には昂ぶらず、戦いの熱狂の中にいた時には意識しなかった疲労と苦痛が、まるで思い出したように襲って来る。すると兵士達は戦いをやめて、負傷者を起こしあるいは支えて、それぞれに陣営へと戻り始めたのである。

ピニャのまわりにも、味方の騎士達が戻りつつあった。

「殿下！」

「おお、ボーゼス。ご苦労だった」

ヴィフィータなどは戻って来るなり「疲れた！　誰か水くれ、水」とピニャの前で盛大に寝転がる。

「はい、ヴィフィータ様」

従卒の少女達が、水筒を抱きかかえて駆け寄っていく。地揺れが恐かったのか、少女達は青い顔をしてがくがくと唇を震わせている。

「恐かったか？」

「はい。恐かったです、ヴィフィータ様！」

抱きついてくる少女達を慰め、頭を撫でてやりながら、ヴィフィータは周囲の様子を見渡した。

騎士団の騎士、兵士、亜人部族の兵達が帰ってくる。だが無傷の者は一人としておらず、もう陣形もなく、隊伍も組まず、烏合の衆同然だった。

「こりゃもう、戦うのはムリかな」

「そんなことはないぞっ！」

だが、ヴィフィータの弱気な発言は、ピニャの鋭い声で吹き飛ばされた。
皆の視線が、馬に跨がり、右手に剣を、そして左手で堂々と軍旗を掲げるピニャへと向けられる。
兵士達は、大きな地揺れがあっても動揺せず、自信に満ちた振る舞いを見せるピニャの姿に勇気づけられていた。
「殿下！」
「者共、うろたえるな！　この程度の地揺れ、恐れるに足らぬ」
もちろん、これはピニャのやせ我慢である。
突如襲ってきた地揺れと圧倒的に不利とも言えるこの戦況に、ピニャも冷や汗を掻き、脚はガクガクと震えて、歯の根はかみ合わずに音を立てている。
もし許されるなら逃げ出して、ベッドに頭を突っ込んでしまいたいところである。それほどにピニャの心は竦みあがっていたのだ。
だが、ピニャは学んだ。経験を積んでいた。
帝都で地揺れに遭遇した時、少しも動揺する様子を見せず、笑いすらしていた伊丹の姿を見た時に、ピニャがどれほど心強く思ったか。どれほど安心できたか。
「あれこそが、このような状況における将帥の為すべき態度なのだ」
将帥が小揺るぎもしなければ、兵士達は安心する。
あの時に与えられた安堵の心境を、今度は自分が兵士達に与える番であると、ピニャは歯を食い

しばったのだ。そして恐怖で引きつろうとする頬と唇を、ピニャは一生懸命に弓形に整えていた。

一方、ゾルザルも懸命に努力していた。

「お前達、戦え、戦わんか！」

ただし努力の方向がピニャとは違っていた。ゾルザルは将軍達を怒鳴り、戦え戦えとがなり立てることで、散じてしまった戦意を掻き立たせようとしていたのである。

「お前達、どうして戦わない⁉」

「ゾルザル様。今すぐはムリです。今は、兵士達に休息を取らせるべきです」

「そうです。怯えている兵を戦場に向かわせても、戦えるはずがありません」

ヘルムやミュドラは、兵士達が不安に怯えている、今はとても戦える状況ではないから、少し時間をおくようにと進言した。

だが、ゾルザルにしてみれば、それは論外な申し出であった。自分がこんなにも我慢して、耐えているのだから、兵士達も奮い立って戦うのは当然だと思っているからである。

「恐怖に竦んでいるのは、ピニャの兵士達も同じであろう！　同じ条件なら、兵の数が多い方が有利なはずではないか！　ならば今進んでも勝てるわ！」

「確かに理屈の上ではそうです。しかし、兵士が動揺している時は、些細なことで総崩れということになってもおかしくないのです」

兵士達が恐怖に駆られたために、一気に全軍が崩壊したという事例は、古今の戦史にも見られる。動揺した兵士は、水鳥の羽ばたきの音だけで逃亡したり、日食などの自然現象を目撃しただけで戦えなくなってしまうのである。そうなれば数が多い方が勝てるという常識も危うくなる。ならば、兵達を休ませて心を落ち着かせてから戦った方がよいと考えるのが、常識的な判断と言えるのだ。

だがゾルザルにはそれが理解できなかった。

「じゃあ何か！　お前達はみすみすこの好機を見過ごせとでも言うのか!?　このまま時が過ぎれば、正統政府軍の主力が戻って来るかも知れぬと言うのに！」

ゾルザルはこの時、あと少しで完璧な勝利を得られる。ここで時間をおけば、それが出来なくなってしまうという焦りに駆られていたのだ。いや、渇望した勝利が目と鼻の先にあるという思いで、地揺れの恐怖から目を反らしていたのかも知れない。ここで少しでも間を置けば、地揺れの恐怖に絡め取られて動けなくなってしまうという不安が、彼を決戦へと駆り立てていたのである。

「ですが……」

「くどい！　誰がなんと言おうと決戦だ！　直ちに兵達に隊伍を整えさせよ！　軍旗を立てて、全軍に前進を命じろ！」

何を言っても聞き入れる様子のないゾルザルに、ヘルム達は互いに目配せしながら首をふった。ダメだこりゃという、決して言葉にされない嘆息が三将軍達の間で飛び交った。

カラスタ将軍が、一歩進み出た。

「殿下。では、せめて、ピニャ様に降伏の勧告を」
「何だと？」
「殿下は勇猛果敢でおいでゆえにお気付きにならないかも知れませんが、兵達がここまで竦んでいるとなれば、敵方の女性達はどうでしょうか？　きっと、地揺れの恐怖で、腰を抜かしていることでしょう。今、降伏を勧告なされば、もう戦うのはイヤだと素直に応じられるかもしれません」
この言葉にゾルザルも心を動かされたようであった。
降伏してくれた方が、戦うより楽なのはゾルザルとて理解できるからだ。
「……う、む。だが、ピニャが降伏するか？」
ヘルムもカラスタの意見に賛成した。
「充分にありえることかと」
ミュドラがもう一押しとばかりに言葉を継いだ。
「そ、そうですとも。ピニャ殿下に降伏を勧告して、それでも応じないようであれば、その時こそ、改めて攻めかかればよいのです。それまでには兵達も少しは落ち着きを取り戻しているでしょう」
ゾルザルは納得したように肯いた。
「なるほどな。ならば、ヘルム。お前が降伏の使節としてピニャのところに行って来るがいい。その間に、ミュドラ達は兵士達を再度戦えるように陣容を整え直すのだ。いいな」
ゾルザルの指示でヘルムが自ら使者となってピニャの陣営に向かうこととなった。

馬を進めていくと、やがてピニャの兵士達が見えて来る。
きっと兵士達は怯えて竦み上がっているだろうと思ったのだが、意外なことにピニャの兵士達は必死の覚悟を固めて、戦意で溢れかえっていた。これほど不利な状況にあって、兵士に高い士気を維持させるピニャの将才に、ヘルムは圧倒される気分となった。
「なんと見事な」
数の暴力でもってすれば確かに勝てるだろう。だが、多数の損害が出ることは間違いないと兵士達が動揺したまま攻めかかったりしたら、逆転をされてもおかしくないほどに正統政府軍には戦意が満ちていた。
これを相手に完勝するには、兵士達に決死の覚悟を抱かせる必要がある。そのためにはどうしたらいいものか。ヘルムにはすぐには思いつかなかった。
「やはりピニャ殿下には、降伏をしてもらうしかないな」
ヘルムは、とりあえずの時間稼ぎのつもりであったこの交渉に、本腰を入れることにした。
ピニャの軍旗が見えるところまで近づいたヘルムは、ピニャに声をかけた。
「ピニャ殿下、よく戦われました。もうこれで充分でしょう？　ここまで死力を尽くして戦われたのですから殿下を臆病者とか惰弱であると言う者はきっとおりませぬ。殿下の勲(いさお)しはきっと末永く語り続けられることでしょう。今こそ剣を置くべき時です。どうぞ降伏して下さい」
兵士達がしんと静まりかえる中で、ピニャは答えた。

「嫌だ。妾はお前達のような者と共に天を戴くつもりはない」
「いったい、どうしてそこまで頑なのですか？　貴女は部下達の命を惜しいと思われないのですか？　みな優秀で、美しく、将来のある者達ばかりだ。そうした者達を助けたいと思われないのですか？」
「助けたいに決まっている」
「だったら」
「助けたいからこそ、今ここで退くわけにはいかぬのだ」
「どういうことですか？　待っているのは確実な死なのですぞ」
「ここで兄様を逃せば、兄様はいずれまた兵を集め、乱を起こすであろう。その都度兵が死ぬ。ここで勝敗を決めてしまわねば、犠牲はこれからも出続けることになるのだ」
「何をおっしゃっているのです？　状況が見えていないのですか？　ピニャ殿下が皆と生き残れるかどうかの話をしているのに、どうしてゾルザル殿下が逃げ出すことを考えねばならないのです？　これからはゾルザル殿下を陛下と仰ぎ、皆で新たな帝国を築き上げていくのです。そんな時に誰が乱を起こすと仰るのですか？　なんと的外れな心配をなされているのか。最早それらは意味の無い気遣いです。ピニャ殿下さえ降伏なされば、帝国の内乱はこれにて終わりなのです」
「そしてニホンとの戦いは続くのだな？　そしてさらに多くの兵を死地に追いやるのであろう？」
「そんなことは……」

ヘルムもこれには違うとは答えられなかった。ゾルザルが勝てばニホンとの戦争は続くだろう。ピニャの言う犠牲が出続けるという言葉の意味も、ニホンとの戦いを指揮していたヘルムにもよく理解できた。

「そして多くの民を戦禍に巻き込む。勝てもしない戦いのために」

「殿下。いいえ、それは勝つためです。帝国の勝利のためには必要な犠牲なのです」

「そうだ。勝つためだ。妾は勝つために今ここにいる。妾は勝つために皆をこうして死の淵に立たせ、戦いへと駆り立てている。それは勝つためだ」

「殿下は勝てると信じておられるのですか？」

「無論だ」

ピニャへの降伏勧告が空振りに終わったヘルムは、皇族二人の、自分には理解できない振る舞いに頭を抱えながらゾルザルの陣営へ戻った。

「ヘルム。ピニャはなんと申していた？」

「ピニャ殿下は、妄想に駆られているようです。このまま戦っても勝てると考えているようです」

「なんだと!?　ピニャの奴、軍学上の常識すら忘れたか？」

「そのような方ではなかったはずなのですが」

「きっと地揺れの恐怖に動揺して、冷静に物事を考えられなくなっているのだろう。ヘルム……ピ

ニャに引導を渡してやれ」
「しかし、我が方も……」
「大丈夫だ。兵士達の準備も出来ている」
「なんと？」
「付いて参れ」
ゾルザルに従って天幕を出ると、兵士達がすでに隊伍を組んでいた。みんな、青い顔をしてまるで人形のように無表情であった。周りを見渡せば、何人もの兵士の骸が転がっている。
「な、何を為さったのです？」
「なあにアブサンに命じて、兵士達を厳しく取り締まらせたのだ。戦う気力のない者は処刑せよとな」
コボルトの兜を被った者達が、走り回っている。
「お前！　目の輝きがたりん！」
「お前、背筋が曲がっている！」
本人の意思でもどうにもならないような些細なことを理由にして、帝権擁護委員達は兵士達を刺し殺している。そして「臆病者、怠け者、敗北主義者はこうなるぞ」と声を上げて脅していた。
ゾルザル派の兵士達は瞬きすら出来ず、凍り付いたようにたたずむばかりであった。
「どうだ。兵士達は既に戦いの準備は出来ているぞ。さぁヘルム。行ってピニャに現実というものを見せてくるが良い」

ヘルムは愕然とする思いだった。
だがこのままにしておけば、コボルト頭の馬鹿共によって兵士達がどんどん殺されてしまう。ならばもう兵達を、戦いに出してやった方がいい。
ヘルムはヤケになった気分で振りかえると、馬に跨がり剣を抜いた。
「全軍！　前進！」
号令を受けたゾルザル派の兵士達は、一糸の乱れもなく、まるでマスゲームにも似た正確な隊形を維持したまま前進を始めた。

敵の前進が始まったのを見て、ピニャは息を呑んだ。
「いよいよ、来るか」
「で、殿下」
「安心せよ。妾はお前達と一緒だ」
ピニャの周りには従卒の少女達が集まってそれぞれに短剣を抜いている。それは敵と戦うためというより、虜囚となって辱められる前に自決するためのものであったが、ピニャはそれで自らの命を絶つよりも敵と戦えと少女達に命じた。
「エムロイの神は戦いで倒れた者の魂を拾って下さる。決して自らを殺めてはならぬぞ」
少女達は短剣を手放さないように、その右手に短剣を縛り付けていた。

彼女達の周りには、騎士団の騎士達が、そしてそれぞれの部族の兵士達が集まってゾルザル派の兵を待ち構えている。

「お前達。妾に従ってよくぞ戦ってくれた。感謝するぞ」

するとグレイが大笑した。

「もう終わったかのような物言いは心外ですぞ、殿下。小官達の実力をお目にかけるのはこれからではありませんか。小官としては、そのような言葉では足りませぬ。殿下が一晩かかって感謝の言葉を述べてもなお感謝しきれぬほどの戦いをしてみせましょうぞ！」

「うむ。この際だ、やって見せるがよい」

そうしている間にも、ゾルザル軍の兵がその顔を見分けられるほど近づいてきた。

ピニャは前進を命じようと剣を高らかに掲げる。

「全軍！　……」

だが命令の後半部は誰の耳にも入ることはなかった。

不意の轟音と共に、二機のＦ４ファントムが大空を切り裂くようにピニャの頭上を通過したからである。

投下されたナパーム弾の劫火がゾルザル軍を頭上から押しつぶす。

密集態勢で前進していたゾルザルの兵士達に、大空から降り注ぐ炎を避ける余裕は全くなかった。

その凄まじい炎熱によって天を覆われたことに気付いた瞬間、彼らは当人も気付かないままに、命

を失っていたのである。

「待たせたな、未来の恋人達よ！」

神子田が「いゃっほー」と叫びながらＦ４ファントムの機体を急上昇させる。

天を衝くほどの勢いで駆け上がっていく戦闘爆撃機の衝撃波は、大地と兵士達の鼓膜を激しく叩いた。

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

「Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!　Ho-jo to-ho!」

さらに東の遠方から、ワルキューレの嘲笑が、空気を叩くヘリコプターの爆音とともに押し寄せてくる。あまりのことに、敵味方双方の兵士達は愕然として凍り付いていたが、ピニャだけは正気を失わずにいた。

「いまだ！　全軍突撃せよ！　兄様を決して逃がすな！」

ピニャの命令の声が轟く。彼女の指揮下にある兵達は一斉に、茫然自失となったゾルザル派の兵に襲いかかった。

「Ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha!
Ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha! ha!」

UH－1Jヘリコプターの大編隊がドアガンをゾルザル軍に向かって乱射する。
機内の自衛官達もそれぞれ手にした銃を撃ち続けていた。
すでにゾルザル派の兵士達に戦意はなかったが、着陸したヘリからは、デュランが配下の兵士と共に降り立ってゾルザル軍の掃討のため散開していった。
兵士の一人が、放れ駒の一頭を捕らえると、「陛下、拾いものですが馬にお乗り下さい」と手綱を差し出した。片足の不自由なデュランにとっては、これが何よりの贈り物であった。
「うむ、気が利くな」
「いえ」
デュランは馬に跨がると、周辺に居る兵士達に呼びかけた。
「うむ。お前達も主を失った馬を集めよ。即席の騎馬隊をつくれ」
エルベ藩王国の騎士達が戦場に散らばっている馬を掻き集めて、集合しつつある。
その一方でピニャは、ボーゼスとヴィフィータにあちこちに逃げ去っていくゾルザル軍の中からもっとも大きな集団を選んで追跡するよう命じた。

「兄様を捕らえよ！　みな、妾に続け！」
すると、ピニャの騎馬隊の頭スレスレにＵＨ－１Ｊが一機、高度を下げて併行した。
ピニャの後ろで、猛烈なダウンウォッシュに黄金の髪を吹き乱されながらも馬を巧みに操っていたボーゼスは、頭上に浮かぶヘリの中に健軍と富田の顔を見つけ、傍らのヴィフィータに空を見ろと促した。
「ケングン！」
ヴィフィータが両手をぶんぶん振り回す。
その後ろでボーゼスが「お父さんが助けに来てくれたわよ」と自分の下腹部を軽く撫でた。

＊　＊

寝台に横たわる皇帝と、それを囲む内相マルクスとメイド長は、扉の外から聞こえる剣戟の音に耳を澄ませていた。
大きな地揺れによって、室内の調度品や装飾が床に落ちて滅茶苦茶になっていたが、今はそれどころではない。戸の外まで訪れた死神を防ごうとする騎士達の戦いの帰趨こそが、自分達の運命を決するのだ。
やがて、重苦しい音を立てながら扉が開かれる。

入って来たのは、初老の男と女の二人であった。
初老の男は扉を閉じずにそのまま室内へと踏み込んでくる。床を覆い尽くす家具や調度品に戸惑いながらも、一歩一歩確実な足取りで皇帝との距離を縮めようとした。
迎え討とうとアウレアが前へ出る。だが、あまりにも無造作に近づいたため、ジヴォージョニーの女は邪魔だと言わんばかりに剣を振ってその首をはねてしまった。
「アウレア！」
ミュイが叫ぶ。首を失った小さな身体は、糸の切れた操り人形のように、あっけなくその場に倒れ伏した。
開放されている戸の隙間から、シャンディーがうつぶせに倒れているのが見える。メイド長は瞑目するとフォルマル家の幼い当主の名を呼んだ。
「ミュイ様。こちらへ」
ミュイは人形を抱えるとメイド長の背中に隠れた。
「何者ですか？　ここは陛下の寝所です。礼儀知らずと罵られたくなくば、せめて名乗りなさい」
すると初老の男は「これは失礼」と片膝をつくと、女と共に恭しく頭を垂れた。
「お初にお目もじいたす。我らはハリョ族の戦士。此度は皇帝陛下に用件ありて参上申し上げた次第」
「ハリョとは聞かぬ名だな。それが余に用件とは、何か？」
皇帝は上半身だけ起こすと、大儀そうに尋ねた。

「我らはゾルザル様より、いくつかのご命令を賜っております。まずは、陛下をゾルザル様の下にお迎えすること」
「それは無理だな、余はもはや床を離れることは難しい」
「では、二つ目の用件を果たさなくてはなりません」
「二つ目とはなにか？」
「恐れ多き事ながら、陛下のお命を頂戴奉ることでございます」
するとマルクス伯が、皇帝とハリョ男との間に割って入り、短刀を構えた。
「慮外者め。この場から立ち去るが良い」
「そういうわけには参りません。我らハリョも多くの犠牲をはらいました。ここで使命を果たすことが出来ねば倒れていった仲間に申し訳がたちませぬ」
「ふん。ハリョとは確か、様々な種族の血が入り混じった者達のこと。拗ね者が徒党を組んだだけであろう」
「よくご存じで」
ハリョの戦士はそう言うとマルクス伯爵に手袋を投げつけた。
マルクス伯は首をひねってそれを躱す。
「何のつもりか、今更決闘の申し入れか？」
「いいえ。力ずくで陛下の寝室に押し入っておきながら堂々たる決闘などどうして行いましょう。

我らはハリョ。あくまでも卑怯に、かつ効果的に戦います。幸いにしてこの場におわす方々は戦いは苦手なご様子。我らが使命を遂げるのも、さしたる手間はかからぬでしょう」

するとマルクス伯は額から脂汗を流しはじめた。めまいを感じているようで何度も目をこする。ふらふらとしてまっすぐに立っていることも難しそうであった。

「そろそろ薬が効いてきたようですな」

「薬だと？」

ハリョはもう片方の手袋を脱ぐと軽くはらった。すると白い埃が舞い上がる。

「これは埃ではありません。特殊な薬物です。これを相手に吸わせますと大方の者は頭の働きが鈍ります。配合を変えますと人の言うことを信じやすくなったりもします。さらに、幻覚を見たり、身体がしびれたり動けなくなったりもいたします」

男は麦に生えたカビを用いてつくったと解説した。

そうしている間にもマルクス伯は膝をついてしまう。

「さて……あとは年老いたメイドと、外国からの使節と、幼い少女が一人。皆様、手を煩わせないようお願いいたしますよ。手向かいさえしなければ、我々も子供まで害そうとは思っておりませんので」

初老の男はそうメイド長に警告すると、女に顎をしゃくって「ノッラ。行きなさい」と命じた。

だが、ノッラが一歩踏み出したところで突然の銃声に倒れる。

「な……」
壁際に立っている菅原の手の中には拳銃があった。
初老の男は突然のことに驚いたのか、自分に向けられた拳銃に意識を集中させてしまった。その瞬間、天井から緋色の塊が男の頭上に覆い被さる。
「なに!?」
それはメデュサの頭部だった。男は頭に被さった何かを引き剥がそうと懸命に腕を動かしたが、アウレアの触手髪はその手足を次第に絡め取っていった。
「なんだこれは!?」
瞬く間に、男の身体が乾涸らびていく。
そして男の精魂を養分にしてメデュサの頭部から肢体が伸び育っていった。
全身を駆け巡る悦楽に、男は喜色の混じった声を上げる。
それを見て皇帝は残念そうに首を振った。
「男が悶える声は聞くに堪えんな。気色が悪い」
するとアウレアは吸精をとめた。
「やめないでくれ!」
げんなりした空気が流れるなか、「ドウスル?」という視線で問いかけてくるアウレアに、メイド長が応えた。

「アウレア。手早く片付けなさい」
「ハイ」
やがてミイラ化した男が倒れ、代わりに十三〜四歳くらいの肢体をもったアウレアがそこに残った。アウレアは自分の裸身を見ながら言った。
「……育ッタ」
ミュイは、アウレアの姿を見て「ずるい」と呟いた。今し方まで自分と同じぐらいだったのに、いきなり成長したのを見て羨望を感じたのだ。
「アウレア。何か身にまといなさい」
皇帝の視線に気づいたメイド長が服を着ろと注意する。
その種族的な性格もあってかアウレアに一般的な意味での羞恥心はない。それだけに周りが指示しなければ、ずっと裸のままでいたりすることもあった。彼女が普段メイド服を着ているのは、そうしなければならないと指示されているからである。
「キルモノガナイ」
かつての服はもうサイズが合わない。周りを見渡して袖を通せそうな服がないためアウレアは、仕方なくジヴォージョニーの女の死骸に手を伸ばして、服を引きはがそうとした。
だが、皇帝がアウレアを呼び止めた。
「余は別にそのままでもかまわぬのだぞ。美しい娘の肌は目の保養になるからな。とは言え、余人

にそなたの裸体を見せびらかすのもいささか惜しいものだ。よって余のガウンを被ける。褒美の一つとして受け取るが良い」

皇帝が手ずからアウレアに、羅紗のガウンを差し出した。

地揺れによって天井が落ち壁が崩れた館の中で、ハリョの戦士ウクシは、バスタードソードを狂ったように叩きつけた。

だが、戦闘メイドのペルシアの守りは堅く、どうしても彼女を倒すことは出来なかった。

何度かの打ち合いの果てに、足払いを放ってペルシアを転倒させることに成功したが、馬乗りになって首を掻ききろうとしても、そこから先が上手く行かなかったのである。

切っ先で刺そうとすれば躱され、剣を叩きつけようとすれば短刀にはじかれる。

そればかりか刃と刃が撃ち合った時、火花を散らして刀身が欠けるのはウクシのバスタードソードの方なのだ。

「くそっ！　なんていう頑丈な剣だ！」

ペルシアは頬や肩、首にかすり傷を負いつつも、紙一重で剣刃を躱す。もしくは短刀一本で受け止めるのだ。

「ええいっ！」

いっそのこと、力比べだ。

何度叩きつけても受け止められてしまうことに苛立ったウクシは、剣を両手で支えるとそのまま体重を預けてのし掛かった。

上から防御ごと押しつぶし、剣刃を押しつけて致命傷を与えようというのだ。

ペルシアもウクシの意図を悟ったのか歯を食い縛り、唸り声を上げながらのし掛かってくる男の体重を支える。

金属と金属の擦れ合う、歯が痛くなりそうな不快音があたりに響いた。

「とっとと諦めろ！」

「諦めたりニャんかしないニャ！」

ペルシアは懸命に腕を突き返した。だが次第にウクシの体重を支えきれなくなってくる。じわりじわりとバスタードソードの刃が、ペルシアの喉元に近づいていった。

「死んで楽になれ！　楽になれ！　死んでしまって楽になれ！」

「嫌だニャ！　くうううう！」

汗と涙を流しながらはペルシアは懸命に耐えた。少し前までだったら、ここで諦めてしまったかも知れない。だが今のペルシアには死ぬわけにはいかない理由があるのだ。

だが、ウクシの刃はいよいよペルシアの喉元に触れた。

「くそぉぉぉぉ！」

ペルシアが気合いを入れ直してこれを跳ね返そうとする。しかしウクシも、力任せに何度も何度

も反動をつけて体重を掛けた。
「ああっ！」
ウクシの刀身がいよいよペルシアの首筋に食い込んだ。さくりという皮膚の切れる熱い感触が、ペルシアに絶望を、そしてウクシに勝利の予感をもたらした。
「さぁ、死ね！」
剣刃がさらにペルシアの喉に潜り込もうとする。
「ひっぃぃ！」
ペルシアが悲鳴を上げた。
その瞬間、小気味よい発砲音と共に、ウクシの頭部が砕かれた水瓜のごとく炸裂した。
卵の殻のように割れた頭蓋から脳腑がまき散らされる。中身を失ったウクシの頭部は、ペルシアに白と赤の混ざったミンチ状の物体を浴びせながら、倒れ伏した。
ペルシアは顔にかかったピンク色の物体に、驚愕と恐怖のない交ぜとなった感情を抱き、震える手で顔をぬぐった。
「ペルシア！　大丈夫か!?」
駆け寄ってきたのは、倉田だった。数人の隊員たちが彼に続いている。
倉田はペルシアにのし掛かっていたウクシの遺体を押しのけると、その下からペルシアを抱き起こした。

「俺だ！　分かるか？　怪我はないか？」
「い、い、い、生きてるニャ……ウチは無事ニャ！」
「よかった！」
倉田はペルシアの無事を確かめると、その身体を抱き潰そうとする勢いで抱きしめた。

＊　＊

頭上を乱舞する鉄のトンボが、次々と敵兵を下ろしてくる。
ただちに兵を掌握して整然と退却させなければならない。ヘルムは自らの陣営にとって返すと、混乱の真っ直中にいる部下達を叱咤し、混乱する兵を速やかに掌握して動揺を鎮めさせるように命じた。
「すぐに退却するぞ。パドバカーレまで下がって態勢を整えよう」
だがカラスタは沈鬱な表情で首を振った。
「ヘルム！　もうやめよう。勝敗は付いた」
「まだだ。軍さえ無事ならば再起は可能だ！　このまま逆転を許してどの面下げてピニャ殿下に見(まみ)えろと言うんだ？」
「ピニャ殿下？　ゾルザル殿下ではないのか？」

「そうだった。ゾルザル殿下はご無事か？　ご無事に退かれたか？」
だが、これに答えられる者は一人としていなかった。すでに本陣からは幕僚や伝令は姿を消し、旗手に至っては軍旗を投げ捨てて逃げてしまったのである。
「だ、誰かいるか？　殿下はどこだ？」
答える者は一人としていない。いつの間にかヘルムの周囲からも部下の姿が消えていた。
「殿下！　ゾルザル殿下！」
慌ててゾルザルの天幕を開いても、そこにあるはずの皇太子の姿は見えず、倒れた椅子や投げ捨てられた軍令関係の書類が散らばっていた。とてもヘルムが期待していた整然とした退却とは思えない惨状である。これでは軍は組織として崩壊してしまう。
「な、何故だ。どうしてですか殿下!?　整然と退いてこそ軍の再建も可能になると言うのに！　軍を失って、貴方はこれからどうするつもりなんだ!?」
次第にナパームの炎が消え、くすぶる煙の向こう側から隊伍を整えた兵士達の靴音が聞こえてくる。それに心が励まされたのかヘルムは喜色を浮かべた。
「まだ軍律を保った味方がいたか！　よし、ただちに退却するぞ！　指揮官は誰だ？」
だが煙の向こうから姿を現したのは、亜人の部族兵達であった。ホビットの隣に、ダークエルフ、六肢族、竜人族、ドワーフ……様々な部族が混在する部隊であった。
その兵の後ろには、血で染めたかのような紅い薔薇の軍旗が続いていた。

背後を見れば、エルベ藩王国のデュラン率いる部隊が近づいてきている。
ヘルムは、亜人の部族兵達に向けて叫んだ。
「なんだ貴様ら!?　帝国の大将軍たるこの俺に挑もうと言うのか!?」
ヘルムは剣を抜いて、近づいてくる兵士達を威嚇した。だが周囲は完全に囲まれてしまい、投網を手繰るようにして包囲が狭められていく。
「くそ、こうなったらピニャ殿下！　俺と戦え！　俺と戦ってくれ！」
ヘルムは叫びながら亜人兵に剣を振り下ろした。
剣を叩きつけ、楯を蹴り、体当たりする。だが多勢に無勢、あっという間に剣を取り上げられ、手足を押さえつけられてしまう。
「ピニャ！　俺は、俺は貴女にっ！」
ドワーフの戦士の楯がヘルムの顔面に叩きつけられた瞬間、彼の視界は暗転した。
そのままエルベ藩王国の兵とピニャの軍勢が正面から向かい合う。味方同士とは思えない一触即発の雰囲気が立ちこめ、互いに睨み合う。
「ピニャ殿下。間に合いましたようで何より」
デュランが軽く会釈してピニャが応える。
「うむ。デュラン陛下のおかげで助かった」
途端に緊張がほぐれ、兵士達は腕を取り合い肩を叩いて勝利を喜び合った。

森の中を足早に戦場から離れつつあるゾルザル軍の一隊があった。
騎馬が十数騎に歩兵が十人程度の小部隊。さらに馬車と、それを操るボウロを伴っていた。
「……くそっ！　どうして、どうしてこんなことに！」
その中心には、頭をかきむしるゾルザルの姿があった。
ゾルザルは馬上で「ヘルムが悪い！」あるいは「ピニャの奴さえいなければ」と歯がみしながら罵倒し続けていた。そして、常に最後には「売国奴どもめ。敵に媚びを売って、正々堂々と戦おうとしなかったからだ」という結論へと向かった。そして再び「ああ、こんなことになるなんて。どうしてこうなった？」と元に戻ってやり直す。まさに繰り言であった。
そんなゾルザルを兵士達はずうっと見つめていた。別に批判するつもりはない。ただゾルザルが、この後をどうしようとしているのか、そして自分達をどこに連れて行こうとしているのか見守っていたのである。
だが、色彩のない視線は向けられる者にとっては己の心を映す鏡となる。
ゾルザルの挫けた心は、兵士達の視線に劣等感と後悔とを重ねてしまい、自らをさらに追い詰めていったのである。
「お前ら何を見ている!?　俺を馬鹿にしているのか？」
「いえ、そんなことは」

「嘘をつけ。お前は本音では俺を馬鹿にしているのだろう！」
ぐるりと取り囲む兵士達をゾルザルは恐れるかのように威嚇した。
「殿下。我々は殿下を尊敬申し上げております！」
コボルトの兜をかぶったアブサンがゾルザルに馬を寄せてきて、お心を鎮めて下さいと宥めた。
テューレがいない今、ゾルザルを立ち直らせるのは自分達をおいてほかにないという使命感がそうさせたのかも知れない。
だがゾルザルが求めているのは言葉ではなく、ぬくもりであった。自分を赦し、その失敗の責任を巧みに第三者に転嫁し、励まし、全面的に肯定してくれる存在である。だが、それを与えられる者はもういない。だからゾルザルは自らの惨めさに憤り、周囲に醜く当たり散らすという醜態を晒した。
兵士達はゾルザルから目を背けた。あえて見ないように顔を逸らす。
それはゾルザルが求めたことであったがゾルザルの存在を否定するのと同義の行為でもある。
沈黙する兵士達の間に、何とも言えない嫌な雰囲気が漂い始める。その嫌悪とも憎悪とも異なった色調の情緒を言語化すると、「もう勘弁してくれ」だろう。
代わりに兵士達が視線を浴びせたのが、首席百人隊長のボルホスである。こいつはもう駄目だとゾルザルを見限った兵士達に頼れるのは、彼しかなかったのだ。
ボルホスは兵士達に「お前達、行くぞ」と命じた。

そんな状態で、敗残の小集団は戦場から離れる道を進んでいったのである。
「殿下。こんなところで、どうされたのですか？」
突然かけられた声に、驚愕したように足を止めるゾルザル。道の傍らに立っていた女性に驚き、大声を上げてしまった。
「なんだ、テューレではないか!?　何処に行っていた！　探していたのだぞ！」
脱走したはずのテューレが、どうしてこんなところにいるのか。そしてどうして今頃になって姿を現したのかとボウロもアブサンも戸惑う。そんな中、ボルホスはテューレの前に立ちふさがると周りに聞こえないように囁いた。
「何しに戻ってきた。料理人と逃げたんじゃなかったのか？」
「わたくしがどうして、料理人なんかと逃げなくてはならないのですか？」
「なんだと、いったい何をたくらんでる!?」
だが、テューレはボルホスの問いに答えなかった。待ちきれないとばかりに馬からおりたゾルザルがテューレに駆け寄って、ボルホスを脇に追いやってしまったからである。
「ああ、テューレ、無事だったのか？」
ゾルザルは自らが何をしたかも忘れて、テューレを抱き寄せた。
「どこに行ってたんだ？　お前の姿が見えなくて、心配したんだぞ」
「わたくしも殿下をお探ししておりました」

テューレの手で優しく顔を包まれたゾルザルは、不思議そうに見慣れているはずのヴォーリアバニーを見返した。
「なんだ？　何か知らないが、妙に優しいな？　それにいつにもまして美しく見える」
「嫌ですわ、殿下。それじゃあ普段は美しくないみたいではありませんか⁉」
「いや、済まぬ！　普段のお前も充分に美しいが、今日のお前はより美しいのだ。女がいつもより輝いて見えるのは何か良いことがあったり、嬉しいことがあったりした時だと聞くぞ。何かいいことでもあったか？」
「あったかと問われれば確かにございましたけれど、それは殿下とは関係のないことですわ」
「ちっ、なんだか妬けて来るな。いったい何がお前を輝かせた？　ん？」
「内緒ですわ。それより、殿下。いったい何があったのですか？　どうしてこのような敗残兵のごとき有様となっておられるのですか？」
　するとゾルザルは憎々しげに言い放った。
「ヘルムの奴が負けたのだ。あれほどすぐに攻めかかれ、戦えと命じたのに、降伏を勧告するだの、なんだのと時間を無駄にしよってからに。おかげでこの始末だ」
「きっと、殿下にご運がなかったのですわ」
　テューレにとっての笑劇は、ゾルザルが自分に取りすがって胸に顔を埋めたことで最高潮に達した。

「そうか？　運が悪かっただけか？　なら、俺は悪くないよな。俺は悪くない」
テューレは返事代わりに慈愛心に満ちた笑顔をゾルザルへ向けた。
「殿下、一時の負けは負けではないのではなかったのですか？」
「負けを取り戻すと言っても、それは軍があればこそだ。ここまで兵を失ってはもう、駄目かも知れぬ」
「そうでしょうか？　わたくしはそうは思いませんわ」
「そうか？　俺は再起することが出来るか？」
「はい。ただそのためにはどうしてこのようなことになったかきちんと考える必要がございます。運の他に何が悪かったのでしょう？　それは殿下がお側に置いた人材に問題があったからですわ。悪い人材を取り除いて良い人材を探すのです」
するとボウロが前に出てテューレの言葉に合わせるように言った。
「そうでございまする殿下。まだ負けと決まったわけではござりませぬ。殿下がおわすかぎり、軍などいくらでも集めることが出来まする」
すると、アブサンも言った。
「我ら帝権擁護委員も帝国全土に配置されており、地方長官らを殿下に従わせる指導力を保っています。お望みとあればいかようにでも兵力を掻き集めて見せましょう。再起はいくらでも可能です」
だがテューレは「あらそうかしら」と首を傾げた。

「殿下、このような者達に傅かれていて、果たして勝利を手にすることは可能なのでしょうか？」
「どういうことだ？」
「殿下。敗戦の原因はすべてこの者達のせいだと思いませんか？」
「俺が負けた原因は、アブサンとボウロにあるだと？」
「はい。殿下は常に勝利と共にあった方。どうして殿下に敗北の原因がございましょうか？　あるとすれば普段とは異なることがあったから。そう、今回の戦いには普段とは異なる点がたった一つ」
「それはいったいなんだ？」
取りすがって見上げるゾルザルに、テューレは瞳から思念を注ぎ込むかのように見つめて告げた。
「それは、わたくしが殿下のお側にいなかったことですわ」
ゾルザルは頷いた。「そ、そうだ。確かにそうだ」と、頷いた。
ボウロとアブサンは息が詰まった。いくらゾルザルでも、そんな非常識で根拠のない言葉を信じるとは思いたくなかったからだ。そんな理屈が通るなら、勝利のための努力の一切が意味を成さないことになってしまう。
だが、ゾルザルはテューレがその口から注ぎ込む言葉の毒を、渇きを潤す美酒のように呑み続けていった。
「そうだ、お前の言う通りだ」
「殿下が必死になって戦っておられたとき、わたくしは殿下の側に侍ることがかないませんでした。

それはいったい何故、いったいどうしてだったのですか？　それをなしたのはいったい誰でしょうか？　ここにいるアブサンとボウロではありませんか？」

それも嘘だ。主犯はゾルザルだった。だが当の本人に向けてそれを言うわけにはいかない。ボウロは懸命に抗弁の糸口を探した。

「馬鹿を言うなでございまする！　それはお前の自業自得というものでござりまする！　敵と通じて情報を漏らそうとしていたから……」

「そうだ、裏切り者のくせに。自分は悪くないと言い張るか！」

激高するボウロとアブサンを無視してテューレは言葉を続けた。

「殿下、二人がわたくしを虐めます。助けて下さい」

テューレはゾルザルの頭をまるで赤子のように抱き包んだ。

そして優しくゾルザルの頭を撫でる。

甘く優しい言葉で慰め、そして元気づける。その麻薬のような快楽に浸ったゾルザルは、目を細めると厳しい現実を思い起こさせる全ての言葉を耳から排除するよう試みた。

「殿下、この者達がわたくしを裏切り者と責めるのです。でも、この者らが言うように、わたくしが殿下を裏切っていたと言うのなら、わたくしが側にいなかった殿下はきっと勝利なされておりました。でも、残念なことに結果は違いました。全ての原因は、わたくしを裏切り者などといって、虐めた者達のせいです。違いますか？」

「ああ、確かにそうだ。テューレお前の言うとおりだ」
ゾルザルは顔を上げると振り返り、どこにそんな気力が残っていたのかと言いたくなるほどに鋭い視線をアブサンらに浴びせた。
「お前達、テューレに謝罪しろ！　そして敗北の責任をとれ！」
それを受けたアブサンとボウロらは心外だと抗議した。
「で、殿下！　そんな兎女の言葉に耳を貸してはなりません！」
「そうですとも。現実をよく見るでござりまする！」
「殿下。この者達が、こんなことを申しておりますわ」
「豚犬共。その耳障りな口を二度と開くな！　縊り殺してやるぞ」
「ぞ、ぞ、ぞる……ざる、さま」
ぱくぱくと口を開くだけで、言葉を発することの出来ない者達を前にして、テューレはゾルザルに問いかけた。
「殿下。そもそも、どうしてこのような下賤な豚犬を、お側に侍らされたりしたのです？」
ゾルザルは「済まない、若気の至りだった」と告白した。
「若い時分に淫売宿にはまってしまってな。俺は高慢ちきな貴族の娘より、奴隷や亜人の女と交わる方が具合がよくてな……それで人目を忍んで通い詰めたのが、こいつの淫売宿だったというわけだ。だが、信じてくれ。お前が俺の側に来てからは、淫売宿に通うのも止めたぞ」

「本当に？」
「まぁ、時には……つきあいもあるからな」
「わたくしの故郷を襲うことにしたのも唆されたからですか？」
「ああ、そうだ。こいつがな、ヴォーリアバニーの味はまた格別だぞと唆してきてな。それで、その、なんだ……お前の部族を襲うことにしたというわけだ」
心が弱った者特有の嗅覚が働いたのか、ゾルザルはテューレの心と体が若干硬くなったことを敏感に感じ取った。何かが彼女の感情に障ったのだ。
「ああ、許してくれテューレ！　若気の至りだったのだ。純真無垢だったあの頃の俺はこいつに騙され、上手く乗せられてしまったのだ。それにそんなことがあったからこそ、俺はお前と出会うことが出来た。そう思えば悪いことではないと思わないか？」
「悪いことではないと？」
「ああ。お前という女が欲しかったばかりに、戦争を起こしてしまった。だがそんなことは太古の昔から起きてきたことではないか。それというのもお前が美しいのが悪い」
「わたくしが欲しかったばかりに、殿下はわたくしの部族を襲ったと言うのですね？」
どうもゾルザルの中では、そういうことになっているらしい。
「そもそも悪い奴はこいつだ。こいつが俺を唆したのは、俺のような純粋な恋心からでなく、兎共を奴隷にするためでもない。もっと深い陰謀を巡らせていたからなんだ。兎はハリョを産み出さぬ

ばかりか、純血種を王族と仰ぐ。その有り様はハリョの思想とは相容れぬ。不倶戴天の敵。そうした反動勢力は数を増さないうちに早々に摘み取ってしまうのが最良なのでござりまする……とか申しておってな」

「すると、わたくしを部族の裏切り者に仕立て上げたのは？」

「そうだテューレ。お前を中心に兎共をまとまらせないようにするための、こいつの巡らせた陰謀だったのだ」

何もかも暴露してしまうゾルザルに、ボウロは全身から脂汗を流して後ずさった。

後ずさりすぎて御者台から転げ落ちてしまう。だが地面に落ちても、尻を擦りつけるようにしてあたふたと手足を振りながら、少しでも遠ざかろうと後ずさりを続けた。

「殿下……この悪人共をどうしたら宜しいでしょうか？」

テューレの微笑み含みの視線の意味を、ゾルザルは誤解なく理解した。

テューレが目配せすると、ゾルザルが彼女の意思をあたかも自分の脳髄から溢れたアイデアであるかのように口にするのはいつものことである。

「決まってるな。悪人は退治されるべきだ。それは古来からの鉄則だ」

この言葉にアブサンとボウロは血相を変えた。

「お、お待ち下さい殿下。我らが、我らなくしてどうやって再起を図られるのですか！」

だがゾルザルは兵士達に語りかけた。

「兵士共よ、このたびの敗北の責任はこの者らにある。もちろん、このような者達を側においたこと自体が俺の不明を意味する。過ちだ。それについては謝罪したい。だから頼む、過ちの修正のために今一度俺に手を貸してくれ！」

百人隊長のボルホスは無言のまま剣を抜くと、兵士達と共にボウロとアブサンとを取り囲んだ。そして命令を待つ。

「テューレ。お前の好きなようにするがいい」

「では、その者達を八つ裂きになさい」

兵士達は間髪入れずに命令を実行した。

「殿下、お待ち下さい！　助けて！」

ボウロ達は手を伸ばし慈悲を求めたが、袋だたきにされるようにして全身に剣を何度も何度も突き刺された。そして救いを求める手を伸ばした姿のまま地面に倒れ伏した。

ボルホスは、ゾルザルに顔を向けて復命した。

「殿下。ご命令を遂行しました。この後、どうしますか？」

「好きにしていい。長く世話になった……」

するとボルホスはその場で兜を脱ぐと放り投げた。義理はもう果たしたと言わんばかりのふてぶてしい無礼な態度である。だがそれをとがめる者はここにはいなかった。

彼に従う兵士達も旗を捨て、兜を捨てる。もう兵士なんかやめだという態度である。そしてテュー

レの胸にすがったままのゾルザルを一瞥して立ち去って行った。
「……みな、行ったか？」
残されたゾルザルはテューレの心音を聞くかのように彼女の胸に耳をあてていた。そうすることで安らぎを得られるかのようである。
「はい。行ってしまいましたわ」
ゾルザルは顔を伏せたまま呟くように言った。
「お前は……お前の復讐はきっと……まだ果たされていないのだろ？　取り除かなくてはならない悪い人材がまだいるのだな？」
「はい。最後の一人が残っています」
「た、頼みがある。いや、頼めた立場ではないことは重々承知している。だが、お前が俺に向けてくれた笑顔にわずかでも実があったなら、頼む。俺をお前の胸の中で……頼む」
するとテューレは「はい」と告げてゾルザルと口づけをかわした。
むさぼるようにテューレを抱きしめるゾルザル。だが突如「ううっ！」と腹の底からくぐもった悲鳴を上げ、口を押さえながらテューレから離れた。ゾルザルの腹部にはデリラのナイフが柄の根元まで突き刺さっていた。
「うごふっ！」
うめき声なのか、それとも口内に溢れかえる血に噎せたのか、あるいは腹部を刺されたことで胃

腑から血を吐いたのか。どれともつかない苦悶の表情で、ゾルザルはテューレにしがみついた。
「テューレ」
口元を血液で真っ赤にしつつ、テューレの首に自らの腕を巻き付ける。
「い、一緒に死んでくれ。俺はお前を、本当にお前だけを……」
「いや。絶対に嫌！　わたしは、お前なんかと一緒には逝かない！　逝ってたまるものですか！」
「駄目だ。お前は、俺と……」
テューレの腕力ではゾルザルにかなうはずがない。抵抗しきれないことを悟ったテューレは、目に映る現実世界を拒絶するため、ぎゅっと目をつむった。そして、確実に得られていたであろうもう一つの将来に思いを馳せる。
やがて彼女の細い首から、枯れ木をねじり折るような音がする。その瞬間、世界は白い光に包まれ、その中から伸びてきた手がテューレの前に差し出された。
「迎えに来ましたよ、テューレさん」
「フ、フルタさん？」
「頼みますから、店を手伝って下さい。まずは壁紙の色からです。何色がいいですかね？」
「薄い桃色がいいわ」
「よかった。なかなか決められなかったんですよ」
厨房で客の注文に応えて次から次へと料理を作っていく古田。テューレの役目は客を迎え入れ、

席に案内し、そして帰って行くのを見送ることだ。皿や小鉢を片付けて、また次の客を迎え入れることが出来るように整える。

忙しい毎日。そして、幸せな日々。そんなテューレにとっての幸せの日々が白濁し、やがて消えていった。

そして永久の沈黙が訪れる。テューレの表情は幸せの中にあるように笑顔で、そして美しかった。

「テューレは俺を愛していたんじゃないのか？　俺は、俺は！」

ゾルザルはテューレの身体を投げ出すと後ろ向きに倒れた。

「ちくしょう！　俺は、いったい、いったい何の為に、何のた、め、に……」

＊　＊

「狭間陸将！　健軍団長から報告です。我、ゾルザル軍を殲滅す、以上です」

幕僚の報告に、狭間とそれを取り囲む隊員達は、歓声を上げた。

「いい報せだ」

「これで終わりましたね」

「ああ。確かに終わった。だが、正直言ってこれからが大変だぞ」

狭間は振り返った。

そこから見える光景は、破壊されて崩れ落ちたドーム。そして、その周囲に運ばれてくる負傷者達。麓に広がっていたアルヌスの街も、すっかり荒れ果てていた。

アルヌスの住民達は、瓦礫の山と化した街並の前で呆然と立ち尽くしていた。

建物の倒壊に巻き込まれた者がいないのが不幸中の幸いと言えるだろう。怪異が暴れたため全員でアルヌスの駐屯地に避難していたからだ。だが、破壊された街を前にして、これから何をどうしたら良いかが分からない。今夜はどこで寝れば良いのか。食べ物は？　仕事は？　全ては一瞬にして失われてしまったのだ。

「……なんにもなくなっちまったな」

「ウチら、これからどうしたらいいニャ？」

「い、今すぐ被害状況を確かめよう。情報を集めるんだ。とにかく崩れた建物を調査して、現場を視察して、再建のために必要な予算を捻出して……何が必要で、何を出来るかを検討する会議を立ち上げて……」

ディアボが、やるべき事を指折り数えながら皆に示していった。

だが折られていく指の数が三本を超えたところで、皆はディアボから目を背けた。皆が欲しているのはそんなことではなかったからだ。

本当に欲しいのは希望なのだ。確かにディアボが示したのは現実的な手順である。だが、しなけ

ればならないことの羅列は、そのハードルの高さを人々に実感させてしまう。その途方もない高さを前にして、傷ついた人々は立ち尽くすしかなくなるのだ。

どうやってこれを飛び越えろと？

無理だ。出来っこない。そんな気持ちにさせられてしまうのだ。

「おおっ、みんなここにいたか？　無事か？　怪我はないか？」

そこに声をかけながら現れる伊丹と富田。

皆からの無言の視線が伊丹へと集まった。

「な、なんだよ。どうしたんだ？」

「みんなぁ、途方に暮れてるのよぉ」

ロウリィは意地悪そうに笑みを浮かべる。

テュカがわざとらしくも伊丹に腕にすがって尋ねた。

「ね、お父さん。どうしよう。困っちゃった、どうしたらいい？」

ふらふらと起き出したレレイが、無言のままで伊丹にしがみつく。

「おっと大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。もう疲れた」

伊丹はレレイの頭を軽く撫でる。そして、この子はまだ十六だということを思い出すと、皆を見渡した。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるって。すぐに前みたいに生活できるようになるから。あ、でも手伝ってくれなきゃ困るぞ。俺一人じゃ何も出来ないんだからな。頼むから手伝ってくれよ！」

この言葉に、ようやく皆の不安げな表情が和らいだ。

「とりあえず瓦礫を整理して掘っ立て小屋でも良いから住める場所を作ろうぜ。食い物とかも掘り起こそう」

すると街の住民達も、やるべき事を思い出したように働き始めた。

伊丹はその姿にほっと息をつくと振り返ってロゥリィ、テュカ、レレイの三人に尋ねた。

「ところでさ、ふと気になったんだけど……『門』ってさ、もう一度開く時に、無数にある世界から一つを見つけ出すために、向こう側に目印を設置することになっていたんだよな？　その作業っていつやったんだ？」

「えっ？」

首をかしげるロゥリィとテュカ。そんな準備を施した記憶が彼女達にはないのだ。

必然的にレレイへと皆の視線が集まる。だが、伊丹の胸に顔を埋めているレレイは全く顔を上げようとしなかった。というか伊丹にぎゅっと顔を埋めて、絶対に顔を上げないとばかりに力を込めていた。

「おい、レレイ。どうしたんだ？」

レレイは答えない。だが、彼女の後頭部に張り付いている、大きな汗マークが焦りというか心情

を表しているようであった。

――四年後――

「こんばんは、０９ＰＭニュースです。訪米中の長倉総理は、日本時間本日未明、ホワイトハウスで大統領との会談を行いました。会談の内容は主に沖縄の基地問題についてです。長倉総理は大統領に対し、東アジア安定確保のためには両国間の円滑な協力態勢と沖縄県民の負担軽減が必要であるとして、基地移転に理解を求めました。会談内容の一部始終は、データ画面でご覧になることが出来ます……」

新しく設立されたネット放送局のニュースキャスターとなった栗林菜々美は、続いての経済ニュースを読み終え画面が録画へと移り変わった瞬間、ほっと緊張を解いて表情を綻ばせた。

まだカメラワークが悪いのか、あるいはカメラマンの砂川がわざとそうしているのか、そんな一瞬の気の緩んだ姿が中継されてしまう。だが、そんな彼女の自然な表情こそ魅力だと言って賞賛する視聴者のコメントが、画面下側を流れていった。

けれどそれをきっぱりと無視した菜々美は、すぐさま艶めいた唇をキュと引き締めるとカメラに真っ直ぐな視線を向けて、次のニュースを淡々と読み上げた。

得た情報の全てを、何も加えず、何も減らさずに報じる。何が良いことで、何が悪いかを判断するのは視聴者。自分はそのための情報を提供する、という姿勢に徹している菜々美のニュースは、多くの視聴者から信頼されていた。

それが出来るのも、ネットでの放送だからだろう。菜々美は自分の下に集まってくる情報全てを、匿名掲示板形式で公開しているのだ。それには誰もがアクセスできて、誰でも論評、反論することが可能となっている。情報が偏っている場合も、すぐさま訂正され、菜々美は直ちに報道内容に反映させるのだ。

「さて、本日の特集は、銀座事件板のうち、特にコメントの多いその後の展開予想スレッドから。銀座事件から四年、再開通が期待されている『門』ですが、未だにその気配はありません。一部では、『門』の再開通を絶望視する説も出ています」

菜々美がそこまで原稿を読み上げると、『東大の教授が、二つの世界を繋ぐには、目印となる単結晶を双方に設置する必要があった。だけど『門』が閉じられる時のゴタゴタでそれが出来なかったと言っている』というコメントが、そのニュースソースを示すアドレスとともに画面の下を流れていった。

「そうですね。なので今夜は銀座事件、そして銀座騒乱事件に関わった人々の証言をまとめながら、今後の可能性を検証して参りたいと思います。そのために本日はスタジオに、今コメントでも紹介されました東大教授である漆畑名誉教授。それと養鳴教授、白位教授にお越しいただきました」

菜々美の向かい側には、ゲストとして招かれた三人の男達が座っていた。
たちまち「教授！　お久しぶりです」とか、「今度は乱闘するなよ」と揶揄するコメントが画面を流れていった。
「さらに、望月紀子さん。そして特別ゲストとして、駐日帝国大使のシェリー伯爵夫人においでいただきました」
すると美しく成長したシェリーが、ぺこりと頭を下げた。
画面には彼女のファンらしき人々によるコメントが大量に寄せられて画面がほとんど見えなくなってしまう。すると、お約束の「お前達の愛で、彼女の姿が見えない」などというコメントがつけられた。
有機ＥＬの画面を見上げていた戸津が言った。
「栗林の妹さん、相変わらず凛々しいですねぇ」
小さな店のカウンター席は、すし詰めだった。
テーブル席の幾つかは空いているが、それにも予約の札が置かれて今夜は、満員御礼状態である。
「勝本！　お前、彼女に告って玉砕したんだって？」
秘めておきたい出来事を、おやっさんこと桑原に暴露され、「どっからそんな噂が」と返す言葉もない勝本。
カウンターの内側で小鉢に料理を盛りつけていた古田が代わりに答える。

「そう聞いてますよ。柳田一尉から」
勝本の刺すような視線を浴びた柳田は「おいおい、内緒だって言ったろ」と肩をすくめた。
「けどよ、駄目だったのは残念だけど、がんばったって聞いてるぜ」
取りなすように言ったのは、和服を綺麗に着こなしたデリラである。
勝本の前に湯気を上げるお茶碗を置く手はなかなか堂に入っている。こうした仕事もアルヌスの食堂での経験があるデリラにとっては、慣れたものである。古田の店で働き出してすぐに馴染むことが出来た。
「勝本さんとしちゃ勇気を振り絞ったってところだろうけど、ニュース番組の看板キャスターと、教育隊の助教とじゃ釣り合わないってことでしょうね？」
「そう言うお前はどうなんだ戸津？　恋人と同棲中なら、そろそろ結婚って話も出るだろ？」
そんなことを言う桑原は、自衛隊を退職し、現在は警備会社で勤務しつつ孫の面倒を見る毎日である。柳田はそんな桑原に「まぁ、一杯」とビール瓶を差し出した。
「こんばんは」
ガラッと開けられた扉に皆の視線が集まる。すると制服姿の仁科が立っていた。
「おお、仁科。良く来た、良く来た」
桑原はそう言って、ビールの入ったグラスを掲げた。
「北海道土産です」

そう言って、仁科は古田に一抱えもある発泡スチロールの箱を差し出した。食べ物だから、皆に振る舞ってくれという意味であろう。磯の香りがして来るので海産物かも知れない。

仁科陸曹長は上衣を脱ぐと、デリラに預けた。デリラは仁科の制服をハンガーに掛けると丁寧に皺を伸ばして壁へとぶら下げる。壁には皆の制服がぶら下がっていた。

座った仁科の前にもお茶が運ばれた。

「いらっしゃい。仁科の旦那はいまどこ？」

「倶知安（くっちゃん）だ。北海道の」

「北海道ってのは、寒いところなんだってね」

「ああ。極寒の地だ。古田……デリラも随分と慣れたみたいだな」

「ええ、もう三年ですからね」

古田はそんな事を言って笑った。

「おい仁科、東二曹は、幹部学校へ進んだって噂だが本当か？」

「ええ、今は久留米です。なかなかみんな都合が合わなくて、一同がそろうってのも無理かも知れませんね」

「笹川は退職して金沢だっけか？」

「あいつは親父さんが職人だとかで、その仕事を手伝うって言ってましたよ」

「黒川は自衛隊病院勤務だったよな。看護師長になったって聞いているぞ」

「隊長達、今頃どうしてるんだろうなぁ」
おやっさんは、ビールを注ぎ足しながら言った。
少し暗くなった雰囲気を払うかのように、古田が、「仁科陸曹長のお土産ですよ」と言いながら、デンっと皆の前に刺身の舟盛りを置いた。その豪勢さに皆、「おおっ」と歓声をあげた。

＊　＊

「随分と警戒厳重じゃないか？　殺し屋にでも狙われているのか？」
政界を引退した嘉納は、保守党の党首となった夏目の公用車に乗り込むと挨拶代わりに警護の多さを揶揄した。
「今じゃこれが通常の体制ですよ。長倉総理の支持率が急降下してますからね。解散総選挙も近いので警察も神経質になっているみたいです。それで物々しく感じるんでしょう」
「それで、今日は何の用だ」
「約束を果たしておこうと思いまして」
「約束って言ってもいろいろとあるんだが、まずはどこに行く？」
「まずは銀座です」
銀座と、特地を結ぶ『門』が消失したその瞬間、日本側もまた震度五の地震に見舞われていた。

震度五の地震は、日本ではそうたいした影響はない。だが、日本の外ではこれが深刻な事態を引き起こした。

何しろ、世界にはこれまで地震など起きたことがないという地域もある。しかも国によっては耐震構造、何それ？　と言わんばかりに、石だの日干しレンガだのを積み上げただけの建物で生活していたり、鉄筋の代わりに竹を骨組みにしたコンクリートで高層建築物を作ったりしている。そのため、震度五の揺れでも多くの被害が出てしまったのである。

国際社会は思い知った。

『門』は危険である。

『門』が開いていたわずかな期間だけでも、これだけの地震エネルギー……歪みが溜まったのである。ならば、もし閉じないでいたらどうなっていたか、と。

「あの時、日本にほとんど被害がなかったというのが世界を邪推させてしまいました」

「それでか……国連大使が苦労してるって聞いているぜ。中、露は『門』がもう一度開いたら今度こそ共同管理ってうるさいらしいぜ」

銀座の街並みの中、ドーム型の建物が見えてきた。

「危険な蟲獣の侵入に備えて、コンクリートの厚さを以前の倍にしてあります」

「ほう、すげぇ」

銀座駐屯地に乗用車が滑り込み、そのままドーム内へと車が入った。

鉄扉が閉められて、ライトがつく。
するとドームの中央には、半分にたたき割られた金剛石の片割れが保存されていた。ガラスケースの中に収められた白い物体に嘉納は顔を近づけた。
「伊丹の奴がお袋さんの管財人に送りつけてた奴だな」
「はい。一時はどうなるかと思いましたが、一つの元素からなる純粋な結晶……これで、目印になってくれるはずです。後見人ががめつくてレンタル料が高いんですけどね」
「そうか。なら、あいつらが帰って来るのを待つだけだな」
「ええ。待つだけです。では次に参りましょう」

夏目と嘉納を乗せた車は今度は秋葉原に向かった。
「もしかして、あそこか？」
「はい。明日が初日ですから、視察するなら今日のうちに行っておきませんと、落ち着いて見ることは出来ません」
嘉納と夏目は秋葉原に新築された建物の裏口へまわった。表玄関は、明日の開場を待つ徹夜組が並んでいるからである。
「徹夜は禁止だってのに……しょうがない奴らだ」
「マスコミから国立のマンガ喫茶って散々揶揄されましたが、ようやく完成です」

その中は、これまで発行された同人誌の数々が収められた図書館となっていた。一応国立国会図書館の分館という扱いになっているが、他にもアニメなどの映像作品や、そのセル画、脚本、各種貴重な資料等を収蔵するマンガ文化の博物館なのである。

しかも明日からの三日間は落成記念の行事として、なんとこの建物で同人誌即売会が開かれることになっている。玄関前の行列もそのためであった。

「ありがてぇ。あいつが帰ってきたら、これで嘘つき呼ばわりされずに済むな」

広い会場のなかに所狭しと並べられたブースを見て、嘉納は唸った。

すでに明日の開館に備え、各サークル参加者が荷物を搬入し、飾り付け作業をしている。仕事を終えた者は、他のサークル参加者に挨拶したり、新刊を見せて貰ったりと騒がしい。

「おほっ……やってるな」

「私はこういうところ初めてですが、活気がありますね」

夏目は、目の前に置かれていた薄手の本に手をかけ、表紙をめくった。

「あ、それは……」

気がついた嘉納が止めようとしたがわずかに間に合わず、夏目は凍り付く。夏目がめくったのは男性同士の愛情を女性視点で、ねっとりと描いた作品だったのである。

「なかなか凄ぇだろ」

「いや、そのなんて言うか……ちょっと理解したくないって感じですね」

「ま、そうだろうな」
「伊丹の奴が好きそうなのは、あの壁際のあたりにあるのだな」
そんな嘉納と夏目のやり取りを、サークルの売り子は聞き逃さなかった。
「あん、おたくもしかして伊丹さんの知り合い？」
「ああ、そうだ。そういうあんたは伊丹の知り合いか？」
「ええそうですよ。もしかして太郎閣下？　すると、そちらは夏目閣下!?」
「俺達を知っているのか？」
「噂はかねがね。だけど困っちゃったな」
「なにがだい？」
「折角来て貰ったのに、今日は配布しちゃいけないことになってますからね。何かしらゲットしていって欲しかったんだけど。どうしようかな？」
「ありがとうよ。だけどいいさ。また明日来る」
「明日ですか。閣下達にはきついと思いますよ。すごい競争になるはずですから。まあ、伊丹さんに預けておきますよ」
「伊丹にだって!?」
話の流れがよく分からなくなった嘉納は、話題となっている伊丹が、自分の知る伊丹と同一人物であるかを疑った。

「元女房が、梨紗って子の伊丹のことだよな」
「そうですよ。伊丹耀司、久しぶりだったけど間違いありません。そういえば梨紗さん、カンカンに怒っちゃってましたよ。伊丹さんを見たよって話したら、帰って来たならどうして連絡しない!?何処にいる、出てこいっ！　なんて叫んで走りだしちゃって」
「なんだそれ？　つまりってぇと伊丹耀司がここにいるってことなのか？」
この口ぶりではまるで伊丹が帰っているかのようである。
「もちろんですよ。他に伊丹耀司がいるって言うんなら……ってあそこにいたよ。ほら、お～い伊丹さ～ん！」
売り子は前を指さして手を振った。
もちろん喧噪のなかで声を張り上げても、目標の人物の耳に届くわけではない。だが、売り子が盛んに呼びかけてくれたおかげで、嘉納にも伊丹を見つけることが出来た。
そう、確かに伊丹はそこにいたのだ。
しかも黒ゴス、エルフ、ダークエルフ、魔法使いの杖を持った銀髪少女、そして紅髪のお姫様などを引き連れている。
「あっ……」
すると伊丹も嘉納を見つけたようである。
「お、おま、お前はっ!?」

そこで何をしているという嘉納の問いに、伊丹はまるで悪戯を見とがめられた子供のように言い訳をした。

「あっ、いや、ほら、この世界を見つける方法をいろいろ試行錯誤してたら、俺の記憶というか、一念というか、情念みたいなものが使えるってことが分かりまして。そしたら何故かここに開いちゃったんですよ。きっと、その、あの、アキバに行きたい、同人誌即売会に行きたいって念じてたせいなんでしょうかね？　二つの条件が満たされてうれしいなあってことで。……でもここが元の世界によく似た別の世界だったりする可能性もあるんで、とりあえず偵察してたんです」

夏目は頭を抱え「ああっ、四年もかけた準備が、予算が……」と呻いている。

嘉納は、久しぶりに顔を見た伊丹が全く変わらないのを見て安堵した。

「そうか、試行錯誤してたら『ここ』に開いちまったってわけか……そうか、なるほど確かにその二つの条件が同時にかなうのは今日のこの場所だろうよ。それでなにか、偵察をしていたと。この会場をうろつくのが偵察ねぇ……」

「どれだけ好きなんだよ、お前ぇはよ」嘉納はそう呟いてしまった。

＊　＊

これで、特地での彼らの戦いの物語は、一つの結びを迎える。

もちろん、彼らの戦いはこれで終わりではない。歴史の教科書にあるように、平和とは次の戦いまでの一時の平穏でしかないからだ。

だから彼らは今日も、嵐に備え続けている。とは言え、特地での彼らの活動を報告する記録の末尾は、こう記されて終わっている。

「自衛隊は、彼の地にて、斯くのごとく戦った」と。

［完］

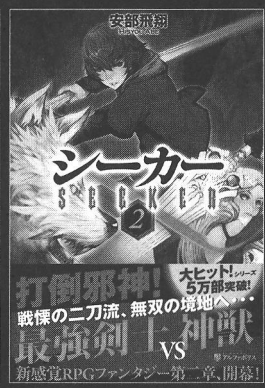
新感覚RPGファンタジー、待望の書籍化！



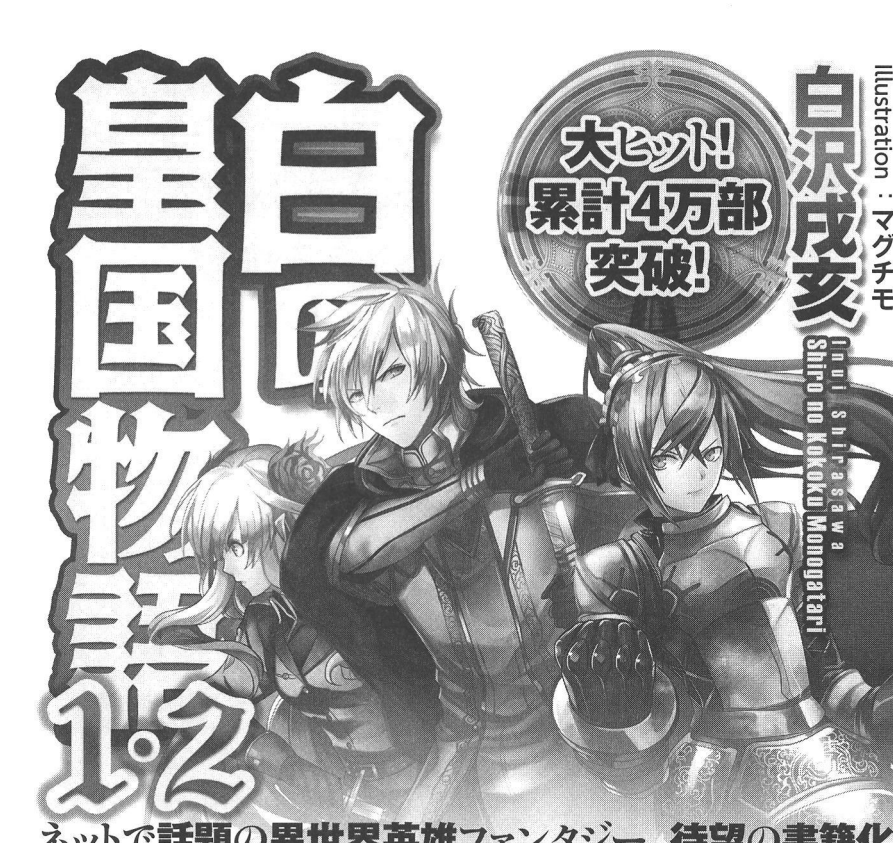
最強剣士見参！

幼馴染を救えなかった己の非力さを憎み、『迷宮探索者（カ）』となって、ひたすらに強さを求める孤高の剣士スレイ。鮮やかな二刀流と音速を超える敏捷性。圧倒的な戦闘センスを開花させたスレイは、迷宮のモンスター達を次々と薙ぎ倒していく。そんなスレイの前に、かつて神々によって封印されたはずの凶悪な邪神の影が迫る……
最強へと突き進む青年が、己の宿命に立ち向かう――！





各定価：1200円+税

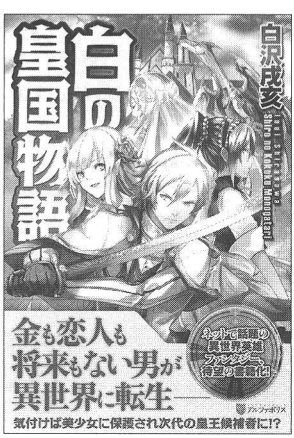


ネットで話題の異世界英雄ファンタジー、待望の書籍化

金も恋人も将来もない男が異世界に転生？

何事にも諦めがちな性格の男は、一度命を落とした後、異世界にあるアルトデステニア皇国で生き返る。行き場のない彼を助けたのは、大貴族の令嬢メリエラだった。彼女の話によれば、皇国に崩壊の危機が迫っており、それを救えるのは“皇王になる資格を持つ”彼しかいないという……

各定価：1200円＋税





ALPHAPOLIS
アルファポリス 作家 出版原稿 募集!

アルファポリスでは才能ある作家 魅力ある出版原稿を募集しています!

- ◉既存の賞の傾向や審査員の嗜好の枠からはみ出た小説
- ◉これまで知られてこなかった仕事の裏側事情
- ◉目からうろこの生活・情報ノウハウ ……などなど

アルファポリスではWebコンテンツ大賞など
出版化にチャレンジできる
様々な企画・コーナーを用意しています。

まずはアクセスして下さい!

▶ アルファポリスからデビューした作家たち



恋愛小説

市川拓司
『Separation』
『VOICE』



ファンタジー

吉野匠
『レイン』シリーズ



児童書

川口雅幸
『虹色ほたる』
『からくり夢時計』



ホラーミステリー

椙本孝思
『THE CHAT』
『THE QUIZ』

*次の方は直接編集部までメール下さい。

- ◉既に出版経験のある方（自費出版除く）
- ◉特定の専門分野で著名、有識の方

詳しくはサイトをご覧下さい。

アルファポリスでは出版にあたって
著者から費用を頂くことは一切ありません。



フォトエッセイ

吉井春樹
『しあわせが、しあわせを、みつけてきた。』
『ふたいち。』



心理エッセイ

本多時生
『イヤな人がいる!』
『幸せになる考え方』

電網浮遊都市

ALPHAPOLIS

アルファポリス

http://www.alphapolis.co.jp



アルファポリス　検索

モバイル専用ページも充実!!

携帯はこちらから
アクセス!
http://www.alphapolis.co.jp/m/

Webコンテンツが読み放題

登録コンテンツ11000超!（2011年12月現在）

アルファポリスに登録された小説・映像・ブログなど個人のWebコンテンツをジャンル別、ランキング順などで掲載!　無料でお楽しみいただけます!

Webコンテンツ大賞　毎月開催

投票ユーザにも賞金プレゼント!

恋愛小説、ミステリー小説、旅行記、エッセイ・ブログなど、各月でジャンルを変えてWebコンテンツ大賞を開催!　投票したユーザにも抽選で10名様に1万円が当たります!（2011年12月現在）

その他、メールマガジン、掲示板など様々なコーナーでお楽しみ頂けます。もちろんアルファポリスの本の情報も満載です!

柳内（やない）たくみ

東京都在住。自衛官を経験した後、2006年に自営業を開業。本業に従事する傍ら、インターネット上で精力的に執筆活動を展開し、人気を博す。2010年4月、「ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　1.接触編」で出版デビューを果たし、一躍注目を浴びる。

イラスト：Daisuke Izuka
http://www.kcc.zaq.ne.jp/d-trench/

ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　— 5. 冥門編 —

柳内（やない）たくみ

2012年1月5日初版発行

編集－太田鉄平・宮本剛
発行者－梶本雄介
発行所－株式会社アルファポリス
〒153-0063東京都目黒区目黒1-6-17目黒プレイスタワー4F
TEL 03-6421-7248
URL http://www.alphapolis.co.jp/
発売元－株式会社星雲社
〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
TEL 03-3947-1021
装丁イラスト－Daisuke Izuka
装丁デザイン－ansyyq design
印刷－大日本印刷株式会社

価格はカバーに表示されてあります。
落丁乱丁の場合はアルファポリスまでご連絡ください。
送料は小社負担でお取り替えします。
©Takumi Yanai 2012.Printed in Japan
ISBN978-4-434-16238-1 C0093

9784434162381

ISBN978-4-434-16238-1

C0093 ¥1700E

1920093017008

定価：本体1700円+税
発行 アルファポリス
ALPHAPOLIS
http://www.alphapolis.co.jp/
発売 星雲社

